

戦姫絶唱シンフォギア 輝ける星の聖剣

茶久良丸

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死して転生したその者はシンフォギアの世界で騎士王ことアルトリア・ペンドラゴンとなった。

彼女は戦う、歌の戦士達と共に…

(いや私ただの元オタクOL何ですけどお!?)

目次

オリジナル宝具解説	1
オリ主紹介（随時更新）	4
無印編	
噂は結局噂以上ではない	9
出会った瞬間無理ゲーと察したよ	11
戦う系の女の子は格好がハレンチ	19
覚悟を決めた瞬間は誰しも強い	23
未来（明日）は現在（今）の自分の行動で決まる	31
互いが信じ合ってこそ信頼が生まれる	35
知らず心とは通じ会うモノ	40
後悔の後は必ず成長するもの	46
手を繋ぐ事の意味	52
預けられた夢	59
運命の夜明け	67
其は輝ける星の聖剣	77
彼女の願い	89
絶唱しない小話集 無印編	94
G編	
星が造りし聖剣と神が造りし神槍	102
偽善と邪悪	109
絶唱しない小話集 G途中編	120
疑惑のフィーネ	125
忿怒（ふんぬ）の王	134

蛮勇たる若者達	146
掴み続けた手と離れた手	157
再会は唐突に残酷に	163
疾走するは現代の騎兵馬	172
その銘(な)は：	183
六つの音楽と星の光	190
絶唱しない小話集 G 終了編	208
幕間の物語：セイバーさんのお泊まり	214
絶唱しない小話集 GXのちよっと前(まえ)編	223
幕間の物語：セイバーさんとクリスとカレー	232
GX編	
月より帰還する救世主	237
絶唱しない小話集 シヤトル救出から数週間後(ご)編	244
平穩の崩落と戦いの狼煙	255
逡巡(しゅんじゅん)の拳	265
再起そして破砕	279
剣舞い銃踊る懺悔の時	289
抜剣 そして	302
漆黒の緋王(ひおう)	313
水面下の自分	322

オリジナル宝具解説

ゲート・オブ・キヤメロット
「騎士王の宝財」

ランク：E〜A+

種別：対人宝具

レンジ：―

最大補足：―

状態：完全聖遺物

オリ主が使用する本来のセイバーには無い宝具。

簡単にまとめてしまえば英雄王の「王の財宝」のアーサー王専用

簡易版。

アーサー王時代の宝物庫に保管されていたとされる宝と円卓の騎士達が使用していた武器を取り出し、自ら使用する事が出来る。武器を手にする事で本来の持ち主のスキルも自由に使用する事が可能
(例：「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」なら「聖者の数字」使用可能)。

ただし、円卓の騎士達の武器は本来の持ち主ではないのでランクは一つ低くなっている。

例外としてモードレッドの「ククラレン燦然と輝く王剣」は元々の持ち主がアーサー王であったのでむしろランクは上がっている。

宝具以外の物は入れられない模様。

また未だに宝物庫に無い宝具も多数あり、謎の多い宝具である。

元ネタ：無し

宝物庫内に無い宝具例

- ・「アヴァ全て遠き理想郷」
- ・「ロンドン最果てにて輝ける槍」
- ・「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣」
- ・「ひみつみにあど無銘星雲剣」

- ・円卓第十三席に座していた騎士の十字盾

ハイド・オブ・ギネヴィア
「ギネヴィアの隠れ布」

ランク：？

種別：？

レンジ：？

最大補足：？

状態：完全聖遺物

アーサー王の妃ギネヴィアが纏っていたとされる布。被ることで自身を隠匿することができ、透明化・消音・気配遮断等高いステルス性を誇る。これを見破るには「直感」スキル：A以上か高い気配感知能力が必要。また被っている本人は布越しに相手を見る事が出来る。

ランスロットとの不倫が判明しフランスに逃亡していた際、ランスロットが追っ手を迎え撃つ為彼女を一人深い森の中に潜ませていた時、彼女の前にマーリンが現れる。彼女は完璧なる王の汚点を作ってしまった事を後悔しマーリンに介錯を求めるが、マーリンは「一生をかけてその罪を贖罪すべき」と答え彼女の纏っていた布に魔術的加工を施しそのままフランスに逃げ延びさせた。その後、マーリンの魔術によりギネヴィアの死が偽装され、歴史的にギネヴィアは死亡した事となった。

ランスロットの死後、フランスに渡った彼女は人知れぬ教会で名も無き修道女として過ごし、罪の懺悔を生涯終わるまで続けたとされる。

元ネタ：「グエン／スエン」

「従順たる魔猪を狩りし猟犬」

ランク：D+

種別：対人宝具

レンジ：1

最大補足：1〜10

アーサー王が最も気に入っていたとされる猟犬。呼び出す事で自立行動をし、セイバーの命令を第一優先として行動するが、自ら考えて優先度を変更するなど人並みに知能が高い。セイバーとの意志疎通は完璧の一言である。

性格は純然で人懐っこく、セイバーに奉仕する事を何よりの喜びにしている。

宝具であるため魔力を糧とし、Dランクの「単独行動」スキルを用いて行動をする。

白くモフモフとした毛が特徴であり、一日モフっついても全く飽きないほど。

性別はオス。犬種は不明。中型犬ほどの大きさ。

また生前カヴァスには子孫がない筈だったが何故か名前に一世と付いている。

元ネタ：「カヴァル／カヴァス」

オリ主紹介（随時更新）

筆竜 ひがみ あると
光音

年齢：肉体年齢：十五〜六歳前後

精神年齢：推定二十歳前半

真名：アルトリア・ペンドラゴン

職業：フリーター↓二課調査部所属エージエント兼

「風鳴翼」 専属マネージャー見習い兼

特異災害時緊急対応エージエント

↓S・O・N・G 所属エージエント兼

「マリア・カデンツァヴナ・イヴ」

専属マネージャー兼

「RN式回天特機装束」 適合エージエント

ステータス：筋力：B 耐久：B 敏捷：B

魔力：A 幸運：A+ 宝具：A++

保有スキル：騎乗：B 対魔力：A

カリスマ：B 直感：A 魔力放出：A

宝具：約束された勝利の剣、

ゲイト・オブ・キヤメロット
騎士王の宝財、

ゲイト・オブ・キヤメロット
騎士王の宝財内に保管されている

宝具類の数々

《概要》

事故により死亡した後、何の因果か「理想郷」に到達しとある人物によって別世界の厄災を静めるためアルトリア・ペンドラゴンの肉体にその魂を入れられた女性。死の直前とある人物と出会った時の記憶が飛んでいるため何故自分がこんな目にあっているかさっぱり状態。

しかしながらも何かしら理由があることを考えそれを模索しつつ響達と共にノイズの撃退に全力を尽くす。

大学時代から独り暮らしをしているため一通り家事ができる。料理に関してはある日を境に急激に上達し和洋中何でも絶品の一品を

作れる程に。

基本仕事以外では小心で自己評価が低く面倒事から出来るだけ逃げようとするが、戦闘時は率先して指揮を取ったり頼りがいのある人物へと様変わりする。また責任感が強いため結果的にそうやってしまった事も自分の所為に捉えがち。

中学時代に暇潰しでサブカルチャーに手を出し、気付けば全方位オタク化していた。

また本人は無自覚であるがかなりの世話焼きで健康オタク。特に年頃の子の食生活に関してとは並々ならぬ意思がある。

《セイバーから見た各人の関係》

響：頼もしい仲間。

時間が合うと一緒にご飯を食べに行く仲。

毎度響が食い倒れるのでその都度介抱してる。

翼：仕事を一緒にしていた事もあり関係は

極めて良好。ツーリング仲間。

ただ出撃の度にバイクを潰しているのはどうかと思っている。

クリス：健康管理の為に料理を作りに行く。

なんやかんや言っても出したモノは

完食してくれているので嬉しい。

最近は肩を並べて料理を作るのが

密かな楽しみ。弟子一号。

マリア：専属マネージャーであるため必然的に

一緒にいる時間が多い。

目線だけで意思疎通出来るほど

信頼している。

ただケータリングの時にタツパーを

持ち出すのはやめて欲しい。

調・切歌：時折料理を作りに行く。

課題やレポートなども教えている。

調には嫌われていると思っっているが

改善していきたいと考えている。
弟子二号。

未来：いろいろあったのでメンタルケアの
建前の元、一緒に料理をする日を作ってる。
割りと話が合う。

弦十郎：上司。たまにストレス発散の鍛練に
付き合うが出来れば勘弁してほしい。

映画の知識を当てにした修行で
はっちゃけを仕出かすので
その都度お説教をしている。

緒川：先輩マネージャー。

色々とお世話になっっているので
とても信頼している。

一番気がねなく話せる存在。

藤堯・友里：仕事仲間。縁の下の力持ちとして
とても感謝している。

たまに飲みに行く。

《各人から見たセイバーの関係》

響：頼もしいお姉さんの様な存在。

オススメのお店などを紹介しては

一緒に食へに行くがこの度に

フードファイト化してその全てに負けている。

時折、お母さんと言いつつ間違える。

翼：仕事面では緒川の次に信頼している。

唯一のバイク仲間であるため

ツーリングの時は毎回ワクワクして

眠れなかつたりする。

クリス：頼んでもないのに料理しに来るヤツ。

でも食材が勿体ないから必ず完食する。

お礼もちゃんと言う。

料理に関しても前向きに習う。

マリア：専属マネージャー。

目線だけで意思疎通出来るほど信頼している。

ケータリングの時にタッパーの持ち出しを悉く阻止されている。

それはそうと私服が無さ過ぎるから仕立てるために服屋に

一日連れ回したいと思ってる。

切歌：日本にいるときは必ず

料理しに来てくれる人。

誉めてくれる時に頭を撫でられるのが

とっても嬉しい。

調：日本にいるときは必ず

料理しに来てくれる人。

色々と迷惑をかけてしまった

申し訳ない気持ちが強いため

一步引いた位置にいるが

少しずつ改善していきたいと思っている。

料理に関してはちよつと師弟関係で弟子二号。

未来：料理友達。時間が合う時に

響が好みそうな料理の創作を

手伝ってくれる。

弦十郎：優秀な部下。

たまに鍛練に付き合ってくれが良い歳で

説教されるのは勘弁してほしい。

緒川：先輩として芸能界のいろはを教える。

優秀で色々と仕事を任せられるので

とても信頼している。

藤堯・友里：仕事仲間。

たまに飲みに連れてってもらい

愚痴も聴いてくれるので

とても頼もしく思っている。

無印編

噂は結局噂以上ではない

「ノイズ」

国連総会にて認定された特異災害。その素性は全くもって不明なもの、突如として現れては人間を襲い触れた者を灰にする人類の敵。出現から一定時間後に自滅する以外を除いての対抗手段が無く、人々は何時やって来るかも分からないおぞましい存在に日々恐怖していた。

たがある時こんな都市伝説が出回るようになった。

『ノイズが出てくると鎌鼬かまいたちがやって来て、ノイズを皆殺しにする』
もちろん誰しもがそれを信じなかった。触れただけで人を殺せるような存在に鎌鼬かまいたち何て自然現象で説明できるものが対抗出来るわけがないと。たがこの都市伝説を信じる人は日々増えていった。

やれ、『現れたノイズが瞬きの間に真つ二つになった』『ノイズに襲われそうになったとき風が吹いてノイズを切り裂いた』『群れとなったノイズがあつという間に塵となった』など多くの救われた声がS N Sなどを通して爆発的に増加していったのだ。

そして今日もまたノイズの発生と共に風が騒がしく荒れ始める。

見渡しのいい野原を一台の車が止まる。運転席からえらくガタイの良い男が出てくる。

彼の名は「風鳴弦十郎」、「特異災害対策機動部二課」と呼ばれるノイズに対抗するため政府機関。その司令官である。彼は日々噂されている都市伝説「鎌鼬かまいたち」について己の目で真相を確かめるためノイズの出現報告があつた現場に急行していた。

降り立った野原には既にノイズの姿は無いものの、激しく盛り返った地面や倒れ落ちた木々、そして灰になったノイズの残骸などから既に鎌鼬かまいたちがノイズを撃退したのがうかがえた。弦十郎は無言のまま現場を歩き始め周りの様子を伺う。

すると彼の直感が何かを捉えた。

「…っ！そこか！」

弦十郎は目の前に倒れていた木を直感の赴く方角に蹴り飛ばす。およそ人間の力で蹴りあげられたとは考えられないほどの速さで飛んでいく木。それが突然として空中で真つ二つに斬れる。

「そこにいるのは分かってる！姿を表せ！」

弦十郎が体術の構えをとりながら虚空に向け声を荒げる。

「驚きました…。そちらからは私の姿は見えてないはずなのですが？」

何処からか声が響く。大人びているようで何処か落ち着いた女性の声だ。やがて空間が透明な布状の何かによつて歪み人影が現れる。

その者は蒼い衣の上に白銀の鎧を纏いその上から黄色いレインコートの様な物を着た少女であった。顔はフードで半分以上を覆い口元ほどしか見えない。右手には風を纏った何かを握っている。

「やはり鎌鼬かまいたちの正体は自然現象ではなく人為的なものだったか。貴様は何者だ！」

「そうですね…。名乗るほどの名は持ち合わせていませんが問われるのであれば仮にセイバーと名乗っておきましょうか」

彼女は僅かに微笑みながらそう名乗った。

出会った瞬間無理ゲーと察したよ

転生主人公ものと言う作品をご存じだろうか？

ざっくり言うとなんかの理由で死んだ一般人が生前の記憶を持った状態で魔法とかあるファンタジーな世界に転生するものだ。

最近だと人間じゃない生き物に転生することが多いらしくやれくモだのシロクマだの挙げ句の果てには剣になったりするらしい。剣ってなんだよもはや生き物ですらない。

とまあここまで説明して分かる通り私は転生者だ。死んだ直前の記憶が飛んでてなんで死んだかは分からない。だけど死んだと自覚は出来る。

なぜに？分からん。

で、今の状況を説明すると目が覚めたら見知らぬ部屋の見知らぬ天井を見ていて思わず「あ、これ知ってる！知らない天井だ！」何てアホみたいな事を言っている。我に帰った私は状況確認をするためとりあえず洗面所で顔を洗おうとしたら鏡に写る自分の顔にビックリ。そこには生前大好きだった作品、f a t eシリーズのセイバーことアルトリアがいた。

へ？何これ。あれか、よく神様の不手際で死んだ主人公が特典で貰ったチート的な？よくよく見てみると体も生前のではなく見事な少女の体になってる。あ、でも胸は小さくなった…。

そこで私は理解した。私は死んでアルトリアの体に転生したのだと。

いや、本当意味不明だよね。

まあ、そんなこんなでアルトリアに転生してから1ヶ月ぐらい経過した。あの後身分証明やらこの世界の事とかいろいろ調べてみたら、どうやら今の私は「筆竜^{ひがみあると}光音」と言う名前の女性らしく定職にはついていないフリーターになっていた。

てか何だよ光音^{あると}って完全にDQNネームじゃないか。あとブリテン治めていた騎士王がフリーターって大丈夫なの…。あ、でも原作だ

と自宅警備員だし大丈夫か。

それとこの世界のことだけどある一点を除いて生前いた普通の世界とそんなに変わらないことがわかった。で、そのある一点なんだけど「ノイズ」とか言う認定特異災害が今人類を脅かしてるらしい。何でも「ノイズ」に触れられると人間はことごとく灰になるのにこっちの物理攻撃はまるで役にたたないとゆうチート仕様で人類に多大な迷惑をかけている。

ま、そんなことは私と関係無いのでどうでもいい。こちとら単にセイバー似の誰かに転生しただけの一般人である。

：そう思っていた時期がありました。

今現在ノイズに囲まれている状況である。

バイトの帰り突然警報が鳴り一斉に逃げ出す周りの人たち、そして「何のこっちゃ」とその場に棒立ちの私。気づいたら人がいなくなつて町中に只一人。そしてノイズが私に向かって突っ込んでくる。

ああ、せつかく美少女に転生したのに高々一月程度でオジヤンか。もうほとんど諦めてせめて死ぬときは怖くないよう目をつむる。だけど一向に痛いとかそういう感覚が無い。

ん、どゆこと？

とりま目を開ける私。そして目の前の光景を一言で説明しよう。

辺り灰だらけ。

：わっつけ分からん。

気付いたらノイズいなくなってるし、何か右手に透明でよくわからない物持つてるし。え、もしかして私がやったの？そういえばこの灰よく見るとノイズに似てるような…。

すると体よく新手のノイズが。

とりまやってみよう。

右手に持つてる何かを適当に振ってみる。

ぶざあん!!

スツゴい強風が出てノイズを丸々灰にした。

いっつつみわからん。

ふと右手に持つてる何かを見ると、透明な何かが剥がれて外観

が出てきた。

うん、これあれだ。「エクス約束された勝利の剣」だ。

どうやら私はマジ者のアルトリアに転生してたようだ。

いや、意味不明過ぎて笑えてきた。

そんなこんなで更に1ヶ月ぐらい経過した。

あの後自分の事についてもっと詳しく調べた。

分かったのは大体こんな感じ。

・自分がサーヴァントスペック（FGOマスター時）でのアルトリアであること。

・転生した影響か喋り口調がセイバーぽくなる

（心の声は私のまま）。

・サーヴァントみたく魔力で存命しているのではなく受肉していること

（その為か霊体化出来ない）。

・「エクス約束された勝利の剣」は何時でも出し戻し可能

（何か感覚的に出そうとしたら出せた。ついでに

第二霊基にもなれた）。

・他にもアーサー王の伝承で語られる宝（たぶん宝具に分類される）とかが何処からか取り出せる空間の様な物が展開できる

（名前無いと不便だから「ゲイト・オブ・キャメロット騎士王の宝財」て勝手に命名してる）。

・→のやつ日に日に（宝具の）数が増えてる。

てな感じかな。いや、分かるよ私も言つてて意味不明だもん。でも事実何だからしょうがないじゃん。ポル○レフのことも考えて。

そして変わった事は私自身もだ。私は日夜ノイズ狩りをしている。別にどっかの無銘みたいに正義の味方に目覚めた訳ではない。でもアルトリアのたぶん「直感」スキルがノイズの出現場所とその被害、それとそこにいる人達の助けを求める声とかをひっきりなしに拾ってくるのである。私はそんな声を聞いて無視できるほど薄情ではなかったので仕方なくノイズ退治に出ることに。

だがここで問題が発生する。この世界だとノイズに対抗出来る手段がないらしい。もしそこにノイズやつつけられる剣持った女の子が現れたらどうなるだろう？

間違いなく騒ぎになるよね。

この世界、文明メチャクチャ進んでるから絶対写真撮られて拡散されるよね。そのあとは考えなくても分かる。絶対厄介事になる。そんな事態は避けたい。何か良いのなかなくと青ダヌキの如くゲート・オブ・キヤメロット

「騎士王の宝財」の中を手探りで探していると良い物があつた。
ハイド・オブ・ギネヴィア

「ギネヴィアの隠れ布」

簡単に言うとロビンフッドの「顔のない王」ノーフェイス・メイキングだ。被るとこつちは見えるのに相手からは見えない今の私にはベストマッチな宝具だ。

へ？ノイズ倒す時に剣とか見えないかって？

お忘れですか？「約束された勝利の剣」エックス・スカーには「全て遠き理想郷」インヘジブル・エアの他にもう一つ鞘がある事を。そう「風王結界」だ。これのおかげで全身透明人間の出来上がり。実際これでノイズ退治に出掛けたら全く気付かれずネットだと鎌鼬かまいたちがやっているってことになってる。

うん実に良い。こうやって間違つた情報が広がれば私の正体がバレることはまず無くなるからね。

そんなこんなで今夜もノイズを退治して帰ろうとしたときこと。
一台の車がやってきた。

おかしいな？ノイズの出現で避難警報が出てるから近づいて来る人なんていないはず。

そして車から降りてくるガチムチの男の人。

へ、何者？

何か周りキョロキョロしてるし絶対関わっちゃいけない気がする。現に「直感」スキルがさつきから「逃げろ」エスケープって言ってるし。うん、触らぬ神に祟り無しって言うし無視しよう。

私はそのままソロリとその場を後にしようとした時…

「…っ！そこか！」

男の人が目の前に足元にあつた折れた木をこつちに蹴り飛ばして

来た。

え、嘘!? 気付かr、てか木一本蹴り上げるって!?! てか目の前に木があ!?! あーもう、斬るしかない!!

パニックった私は目の前に飛んできた木を「約束エされた勝利カの剣バ」で真つ二つにする。

あつぶな! 何してくれるんだあの人!

おつとと、いやいやまあまあ待て落ち着け私。確かに木を蹴り飛ばしてきたのは驚いた。だけどそれだけだ。もしかしたら単なる気のせいにn…

「そこにいるのは分かっている! 姿を表せ!」

ヤベーイ、完全にバレてる。そりやそうだよね、だって端から見たら空中で木が真つ二つになってるもん。そりやーバレるよねチクシヨウ。

とにかくこの状況をどうかしないと…。とりあえず何か言っとく?

あまり無言なものも不自然だし、あの男の人の警戒を更に上げたくもない。よし、出来るだけ余裕のある感じで言おう。

「驚きました…。そちらからは私の姿は見えてないはずなのですが?」

うーん、この美少女ボイス。何時聴いても惚れちやいそうだね。何て言うのは置いといて。

さてこれで完全に私の存在がバレちゃった訳だけど、まだ慌てるよ
うな時間じゃないから大丈夫。こうなると透明ギネヴィアの隠れ布マントの意味も無い。
あの男の人には効果無いっぽいし脱いじやえ。一応変装用に着とい
たレインコートが役に立つとはね。

バザアと左手で「ギネヴィアの隠れ布」を脱ぎ捨て「騎士王の宝財」
の中に戻す私。

「やはり鎌鼬かまいたちの正体は自然現象ではなく人為的なものだったか。貴様は何者だ!」

何者かく…。「通りすがりのアーサー王だ。覚えておけ!」なんて
言えるわけないしどうしたもんか…。何か良いアイディアは…。あ、良

いのあるじゃん。

「そうですね…。名乗るほどの名は持ち合わせていませんが問われるのであれば仮にセイバーと名乗っておきましょうか」

軽く微笑みなが名乗る私。

「ではセイバー、貴様の目的は何だ？何故ノイズ倒す？」

「それを貴方に話す道理が無い」

道理が無いってゆーか話しても信じて貰えないよね。「直感です」なんて言えるわけないし。

「…なら、拳で語り合うだけだ!!」

男の人がまるで沖田さんの「縮地」みたいに一瞬で間合いを詰めてくる。そのまま左足を踏みしめ体を捻りながらの右ストレート。私は「直感」スキルを頼りに僅かに体を反らしてそれを避ける。もちろんそれで終わりの訳がない、左右交互に振るわれる拳が何度も私に迫ってくる。

てか何なのあの拳！「直感」スキルでギリギリかわせてるけど当たったら絶対ヤバイよね！現に私の後ろにあった木がものの見事に粉碎してるし！

てな事考えていた為か男の人の右回し蹴りの反応が遅れてしまった私。狙いは頭、避けられる？「直感」スキルは「無理」と答えてる。仕方なく左腕を頭の横に置きガードの態勢を取る。

ドガシャアンツ!!!

男の人の蹴りを何とかガード出来た。出来ただけど…

痛った!!?マジで何者この人!!こっちは耐久Bのステータスなのに骨折れそうになったし!!てか「魔力放出」で体支えてなかったら絶対体が吹っ飛んでたよ!!

とりあえずバックステップで男の人と距離を取る。向こうは拳を構え直している。まるで「当方に迎撃の用意あり」とでも言っているかのようだ。

不味い…、誰だか分からないどこそのまま戦ったら絶対私の方が消耗するのが目に見えてる…。

よし、逃げよう。

勝ち目が無かったら速攻で逃げる。ジョ○フもそうやって生き残ってきたんだししよう。ただあの男の人が簡単に逃がしてくれそうにないのが問題だ。何とか隙を作れないかな？

と言つてもあの男の人の事だから生半可なヤツじゃ隙なんて見せないよね…。

逆に私が「騎士王の宝財」ゲート・オブ・キヤメロットから何かしら取り出そうと隙を見せたら確実にやられるだろうし。今持つてる物と言え「約束された勝利の剣」エックス・カバリ ぐらいしか…ん!?

そうであるじゃん！ちよつと強引だけど何とかできそうな方法が！一か八かの勝負になるけどこれしか打開策思い付かないしやるだけやってみよう！

私は「約束された勝利の剣」エックス・カバリを地面に突き刺し魔力を右腕に集中する。「約束された勝利の剣」エックス・カバリには無い。その鞘にだ。

「風よ、 荒れ狂え!!」
「約束された勝利の剣」エックス・カバリを刺した周りの地面が渦を巻きながら決めるように舞う。

「風王鉄槌」ストライク・エア
インヒジブル・エア
「風王結界」インヒジブル・エアによって纏っている風を一気に解放することで一度だけ使用できる技だ。

あの人は？よし！地面がいきなり抉れたから咄嗚にガードの態勢になった！土煙で上手く煙幕も出来てるし今の内に！

私は足の裏に魔力を送り「魔力放出」でジェット噴射の要領でその場から一気に離脱する。途中で「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアを取り出して完全に透明人間になる。

さらば見知らぬ人！
ただ今後は別の戦い方を考えないといけないよね…。二度と会いたくないし…。

「…逃げられたか」

突如として地面に異変が発生し、咄嗚にガードの態勢になったため

弦十郎は直ぐに行動を起こせなかった。そのためセイバーと名乗る少女がその場から離脱するのを止められなかった。

「セイバー、お前は何のために…」

一人取り残された弦十郎は夜空に広がる星を見ながらそうつぶやくのだった。

戦う系の女の子は格好がハレンチ

あの男の人と遭遇してから随分経った。あれ以来私とあの男の人が鉢会わせすることは無かった。いや会わないように私が工夫した。あの日からどうにか二度と会わないようにする方法考えていたらあの人の声が頭に響いた。

逆に考えるんだ。あげちやっても良いさと思えるんだ。

その声によって私は閃いた。

ノイズの発生現場にいなければ会わないのでは？

私はすぐに「騎士王の宝財」ゲイト・オブ・キヤメロットからある物を取り出した。

「痛哭の幻奏」フェイルノート

かつてアーサー王に仕えていた円卓の騎士の一人「トリスタン」が使っていたハープ楽器に似た弓だ。何故か翌朝「騎士王の宝財」ゲイト・オブ・キヤメロットの中確認したら入っていた。これを使って遠くからノイズを狙撃すれば鉢会うことはけしてない。

実際にノイズが出た時に痛哭の幻奏これを使ってみたら効果覷面。「直感」スキルの赴くまま適当に弦を弾いたらノイズがバンバン切れる。だけど自分はそこら辺のビルの屋上にいるからあの男の人がやって来ても空振りと勘違いして去って行った。

いや本当ありがとうジョー○ター卿。

でもあの男の人たまにこつちをジツと見ていた時があっただけそんなわけないよね？「痛哭の幻奏」フェイルノート使ってる時も「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアで透明人間になってたし、ここノイズの発生現場からそこそこ距離のあるビルの屋上にだよ？

そんな不安を全部気のせいにして私はノイズ狩りを続けた。その後あの男の人がノイズの発生現場に来ることは無くなっただけ今度は別の人物が現れる様になった。バイクに乗って颯爽と現れる青いピチピチスーツの女の子。

最初はビツクリした。新手のプリ○ユアかセーラー○ーンかと思っただし。

(でも青い格好で控えめな胸だからか何となく親近感が沸いたのは内

緒)

でも似通った存在であるのは確かだった。その女の子は歌を歌いながらノイズを刀の様な物で斬り倒してるのだ。なるほど超時○要塞の方だったか。しかも新しめの。

にしてもおかしい、現代兵器じゃノイズに対抗できないはずなのに？そしてノイズとの戦闘が終わると辺りをキョロキョロとする。まるで何かを探してるように。それを見た後私の「直感」スキルがこう告げた。

あれ絶対あの時の男の人と関わりある子だと。

なら絶対関わりを持つちやダメだよ。見る感じあの子も何かそれとなくあの男の人と似てる様な気がするし。

てな訳で私はノイズ狩りが終わったら気付かれない内にそこから離れて行くのであった。

にしてもあの子どつかで見たことあるような…？

『翼さん、どうですか？そちらから何か見えますか？』

「いえ。ノイズが全滅していることを除けば特に不可解な点はありません」

「特異災害対策機動部二課」のオペレーター「友里あおい」と「FG式回天特機装束 シンフォギアシステム第1号 天羽々斬」を纏う装者「風鳴翼」の二人が通信越しでそのような会話をする。

『「天羽々斬」以外のフォニックゲイン感知されず。ステルス並びにジャミングの類いも確認できません』

同じく「特異災害対策機動部二課」のオペレーター「藤堯朔也」がそう続ける。

『うーん、完全に警戒されちゃったわね。弦十郎君ちよつとやり過ぎちゃったんじゃない？』

『あの状況では仕方ない。真相を確かめる為にも接触は必要だったからな』

『だからって初対面でいきなり殴りかかるかしらね』

呆れた様子で弦十郎に語るの「櫻井了子」。シンフォギアシステ

ムの開発者であり「櫻井理論」の提唱者である。

彼ら「特異災害対策機動部二課（通称：二課）」が追っているのは先日、弦十郎が接触した「セイバー」と名乗る少女であった。これまでの戦闘結果からセイバーが何らかの聖遺物を用いてノイズを撃退しているのは解っているが肝心の聖遺物その物は何なのか特定に至っていないかった。聖遺物には「フォニックゲイン」と呼ばれる特殊な波形がある。その波形は聖遺物それぞれに異なったパターンがありそのパターンを解析することで聖遺物を特定することが出来るのだ。

『数週間前、市街地で過去観測されたことのない「フォニックゲイン」が出現。そしてそれを皮切りに都市伝説「鎌鼬」かまいたちが出回るようになった』

『当時の現場は既にノイズによって制圧されており監視カメラも全て破壊されていました』

『フォニックゲインもほんの一瞬だけ観測されましたが情報量の少なさからか解析することが困難な状況です』

弦十郎の言葉にオペレーターの二人が悔しそうに答える。

『ともかくだ。無い物ねだりをしてしても仕方がない。翼、調査隊が現場に到着するまでその場で待機だ』

「了解しました」

通信を切った翼は辺りをもう一度確認する。戦闘によって倒され残骸となったノイズの灰が春の微風によって舞い散る。人類の脅威とも言われた存在をこうもあっさりと葬ってしまう存在に翼はある感情を募らせる。

（これほどの力がありながら…。何故今になって現れた…！何故あの時来てくれなかった…！）

それは嫉妬だ。

二年前、唯一無二の親友であり戦友であった存在が命と引き換えに守り抜いたあの惨劇。二度と繰り返すものと防人として、一本の剣として猛進してきた日々を送った。それを嘲笑うかのよう^{セイバー}に彼女が現れた。

「セイバー…、剣の名を有する者。いずれ貴女のそれが本物かどうか

確かめさせてもらう」

だがその数日後、翼の前にもう一つ運命^{Fate}が差し迫っていることをこの時の翼は今だ知らない。

覚悟を決めた瞬間は誰しも強い

数日後の事、状況にまた変化が出た。

以前青いピチピチスーツの女の子がいたけど今度はオレンジ色のピチピチスーツの女の子が出てきた。初めは工場地帯に群がっていたノイズの中にその子ともう一人小さい女の子が居て助けようとして「痛哭の幻奏」に手を掛けるようとした時、その子がさっき言ったピチピチスーツに変身してぎこちないながらもノイズを倒していたそこに青いピチピチスーツの女の子もやって来てその場の事態は終息した。

その後もノイズが出るたびに二人が戦いに来てるんだけどオレンジ色の子はたどたどしくて見てられない。多分だけど戦う覚悟つてヤツが未だに出来て無いんじゃないかと思う。ノイズに襲われそうになった時、何度か「痛哭の幻奏」で援護射撃してあげたりもした。

しかもオレンジ色の子と青色の子はどうやら仲が悪いらしく二人は全く共闘しようとしてない。いやちよつと言い方が悪かった。どちらかと言うと青色の子が一方的に嫌ってる感じがある。現に一回だけオレンジ色の子にライダーキックの感じでドデカイ剣を叩きつけようとしてたし。その時はあの男の人が止めてくれたから難を逃れてたけど。てかあんなデカイ剣を素手で止めるって本当に人間あの人？最早サ○ヤ人にしか見えないんだけど!?

そして本日も「直感」スキルがノイズの出現を知らせてくれる。嫌だなく：他人同士の仲違いを端から見続けなさいといけないなんてどんな罰ゲーム？外道麻婆神父みたいに「愉悦」とか思えないよ。

と思いつつ現場に到着。今回はあっちの子達の方が速かったみたいだね。これなら私の仕事は無いか？

：なんてフラグを建てたのがいけなかったのかな？

ノイズを倒した後、白色の鎧を身に纏った女の子が出てきた。（オレンジ色の子と同年位なのに胸デカ：とかちよつと考えた）

何か喋ってるけどここからじゃ聴こえなかった。だけど青色の子が何やら驚愕って顔をしている。そして白色の鎧の子と青色の子が

戦闘を始める。オレンジ色の子は白色の子が持っていた杖みたいな物から出したノイズに拘束されている。

てか何あの白くてベタつくナニか。事案？事案なの!?

てかあれ？ノイズって自然現象じゃなかったの？いやいや今そんなこと考えるのは後回しだ！ノイズを出したって事はあの子が元凶かもしれないなら青色の子達に加勢しよう。ただ「痛哭の幻奏」で援護しようにもあんなに動き回ってたら誤射しかねないよね。仕方ない。

私は「痛哭の幻奏」を「騎士王の宝財」にしまい、代わりに「約束された勝利の剣」を取り出し「魔力放出」で一気に現場に急行する。

「出て！出て来い！アームドギア!!」

「立花響」は叫ぶ。ノイズに拘束された彼女は打開策として自身のアームドギアを呼び出そうとする。しかしその叫びも虚しく彼女の身にはなにも起こらない。

情けなさど無力感で涙を浮かべる響。その間にも翼とネフシユタンの鎧を身に纏った少女は熾烈を極める。

「鎧に振り回されるわけではない、この強さは!」

「ここでふんわり考え事たあ度し難えっ!」

一見して互角に見える攻防だが徐々に押され始める翼。戦況は最悪と言って差し支えない。

だがそこに特異な風が舞い込む。

ザシユンツ!

風はまず響を拘束していたノイズを横一線に倒す。

「え……」

突然拘束が外れたことにより困惑し放心状態となる響。そして状態の変化に真っ先に気づいたのはネフシユタンの鎧を纏った少女だった。

「っ!?なんだ!!」

捕獲を命じられた対象の拘束が突如無くなったことにより驚愕す

る少女。だがここから更に不可解な現象発生する。

「ゴハッ!?」

右横からの突然の衝撃に体をくの字にさせられ顔を歪ませる少女。衝撃を例えるなら猛スピードのダンブカーが真横に突っ込んで来たと思うほどだ。少女は吹っ飛ばされながらも態勢を立て直し状況を確認しようとする。だがそれは叶わない。

「ガッ!グッ!グハッ!」

吹っ飛ばされ状態から立て直し静止した瞬間、四方八方から斬撃を喰らう。

「いったい何が!」

翼も突然のことに動揺し動きを止めている。だが冷静に状況を確認するとある事を思い出す。

「鎌鼬かまいたちの正体は「セイバー」と名乗った少女だった。彼女は何らかの聖遺物もしくはそれに類似した物を使用して己の姿を隠蔽していた」それは弦十郎がセイバーと接触し交戦した後、弦十郎の口から直接報告を受けた時だ。

「まさか!?そこにいるのか!」

弦十郎の報告通り、セイバーが自身の姿を隠蔽出来るなら今ネフシユタンの鎧を纏う少女が一方的にやられているのにも説明がつく。そして翼が思考を巡らせている間も斬撃が止まることなく少女を襲っていた。

「グッ!ガバッ!この、いい加減にしやがれ!!」

少女はその場から跳躍しネフシユタンの鎧一部である鞭を回転させエネルギー弾を作り出しそれを自身の真下に投げ込む。

【NIRVANA GEDON】

投げ込まれたエネルギー弾は地面に当たると同時に爆発、土煙が広範囲に広がる。

少女は着地し周囲を警戒する。すると一部の土煙の気流が乱れるのが見えた。

「っ!そこ!」

少女は両手で二本の鞭を持ち気流が乱れた箇所に向かって鞭を振

るう。一直線に伸びた鞭は一度何かに衝突しその勢いのままソレに絡み付く。

やがて土煙が晴れ巻き付いたモノの正体が露になる。そこには「風王結界」^{インレシブル・エア}によって隠された「約束された勝利の剣」^{エックスマスカリバー}に鞭が巻き付き動きを止められたセイバーの姿があった。どうやら先程の爆発で被っていた「ギネヴィアの隠れ布」^{ハイド・オブ・ギネヴィア}が脱げてしまったらしい。

「テメエが噂の都市伝説様ってヤツか！姿隠してネチネチと斬り付けてきやがって姑かってんだ！」

独特のニユアンスを発しながらセイバーを睨み付ける少女。この時少女は自身の雇い主から融合症例である響と同じくセイバーの捕獲も命じられていた。獲物がわざわざ自分から来てくれたことに内心では笑みを浮かべる少女。だがその笑みは直ぐに消え失せる事になる。

少女はこのまま力の引っぱり合いなるだろうと鞭に力をいれていたが、セイバーは逆に「魔力放出」によって一気に少女に接近してきた。

「なっ!?!」

想定と違う行動によって思考が停止し動きを止めてしまった少女。だがセイバーはそんなことはお構い無しと間合いに入った瞬間、左腕にも同じく「魔力放出」を行いアッパーカット状のみぞおち砕きを少女に叩き込む。

「ゴっ!?!」

接近してきた際の全身の「魔力放出」による速力に加え、アッパーカットを行うため初速として使われた左腕の「魔力放出」、更に筋力：Bによるステータスによる補正が合わさった攻撃により少女の体は宙を浮く。そのまま後方へ飛んで行き地面を数回バウンドして止まる。

「ガッ——ゲッホ、ガッホ、ガハッ!!」

殴られた衝撃で肺の中の酸素を一気に外に出された少女は過呼吸気味に咳き込む。

そんな少女にゆっくり接近するセイバー。だがその歩みは強引に

止められる。

彼女の顔前を縦一文字のエネルギー弾が通り抜ける。セイバーはエネルギー弾が放たれた方向に首を向ける。そこには身の丈以上に刀身が大きく変化した「天羽々斬」を持つ翼の姿があった。

【蒼ノ一閃】

「生まれ！セイバーと名乗るもの！」

翼は「天羽々斬」を元の刀身の大きさに変化させながら切っ先をセイバーへと向ける。

「この場は防人の戦場なり！故に手出し無用!!」

翼とセイバーの間に静寂が生まれる。だがお互いにその瞳を反らさず、その奥にあるモノを見極める。やがてセイバーは大きく後方へ飛びその場で棒立ち状態であった響の隣に降り立つ。そして手にしていた「約束された勝利の剣」を地面に突き立てその柄頭に両手を重ねて置く。それはまるで獅子が他の動物達の前に立ち威風堂々する様のような姿だ。

翼はそれを見届けた後少女の前へと歩み寄る。

「私は出来損ないだ…」

翼は語る。己の不甲斐なさを。

「この身を一振りの剣と鍛えてきたはずなのに、あの日、無様に生き残った…」

翼は語る。己の後悔を。

「出来損ないの剣とし、恥を晒してきた…！」

翼は語る。己の生き恥を。

「だがそれも今日までの事だ。奪われたネフシユタンの鎧を取り戻して、汚名を灌がせてもらう…！」

翼は語る。己の覚悟を。

「て、テメエ何を——ゴホッ！ゲホッ！」

「月が覗いているうちに、決着を付けましょう」

少女の顔前にまで近づいた翼は雲の隙間から射し込んだ満月の光と言う名のスポットライトに照らされていた。少女はネフシユタンの鎧により傷自体は再生しているが今だに呼吸が整わずその場から

動けずいた。

そして翼は大きく息を吸い込み…

「Gatrandis babel ziggurat edena
1
Emustolronzen fine elbaral z
izzl」

「絶唱」を歌い始めた。

「その歌…!?駄目です翼さんその歌は!!」

今まで状況についていけずにはぼ放心状態であった響が「絶唱」を歌い始めた翼に気付き、ようやく再起する。止めようと翼に向かって走り出そうとする。

が、それを止める者がいた。響の隣に立っていたセイバーが左手を響の前に出し制止を促していた。

「ど、退いてください!このままじゃ翼さんが!!」

響はセイバーに訴える。するとセイバーは首を動かし響の顔を見る。レインコートのフードから除いたライトグリーンの瞳が響を射抜く。

「っ!?!」

その瞳を見た瞬間、響は押し黙ってしまふ。喉元まで出かかっていた言葉がどうしても出てこない。響は知る由も無いがこの時、セイバーの持つスキルの一つである「カリスマ」スキルが発動していた。そのランクはB、一国を率いるに十分な度量と言われ、逆に言えば一国を率いる程の卓越した資質である。つい最近まで一般人であった響が王に具申しようなど滑稽でしかなかった。

響は何もできずただ翼の「絶唱」を聴くしかなかった。

そして…

「防人の生き様、覚悟を見るがいい!!」

翼は「絶唱」を歌いきった。

「私とて…人類守護の務めを果たす防人…です。こんな所で…折れる、剣…じゃ…ありま…せん…」

翼さんがそう答える。全身のあらゆる場所から血を流して今にも倒れそうなのに。翼さんは笑っている。

そして糸の切れた人形の様に翼さんが倒れる。

「翼!!」

そこに先程の駆けつけてくれた弦十郎さんが翼さんを抱き止める。

何も出来なかった。私はただ見ているだけで、ただ翼さんが二年前の奏さんと同じように「絶唱」を歌いきるのをただ見ているだけしか。

すると私の隣にいたセイバーさんが踵を返して去ろうとしているのが見えた。

「待て、セイバー!」

すると弦十郎さんがセイバーさん呼び止める。セイバーは足を止めて首だけを弦十郎さんの方に向けている。

「何故翼を止めなかった! お前ならアレが絶唱がどんなものか分かっていたんじゃないのか!」

弦十郎さんがそう叫ぶ。大切な家族がこんなことになったんだから当然だと思った。

「…覚悟を感じました。その少女の瞳に」

セイバーさんが静かに、だけどはつきりとそう答えた。

「例え自分の命を散らしてでも誇りと意地は突き通す。そんな覚悟を私は見ました」

そしてセイバーさんが私に振り向く。あの綺麗な緑色の瞳がまた私を貫く。

「貴女にその様な覚悟はありますか?」

答えられない。私はただ人助けがしたくて。でも人と戦うなんてしたくなくて。そんな色んな感情がごちゃ混ぜになって私を困惑させる。

「無いのなら、貴女はここにいないべきではない。元いた場所に戻るべきだ」

その言葉で私の中の何が崩れた。

セイバーさんはそのまま何処かに去っていった。私はその場で座り込んでしまう。私がしていた覚悟なんて到底甘かった事に。翼さ

んのように命をかけるほどの覚悟が必要だった事に。
月明かりが照らし出す中、私は一頻り泣いた。

未来（明日）は現在（今）の自分の行動で決まる

昨日事だけど正直色々やらかしちゃった。

まず初めのやらかしとしてあの白い鎧の子。本当はある程度攻撃して戦意喪失させてから色々話を聞いたかったんだけど加減間違えておもつきし無言の腹パンしちゃった。まさか過呼吸するほど深めに入るなんて想像してなかった。

続いて青色の子。白い鎧の子を殴った後、心配になって近づこうとしたらいきなり月牙○衝ぽいのブツパしてきてマジでビビった。「直感」スキルで何とか踏み止まったけどそのまま進んでいたら確実に当たってたよね？そんで手出し無用とか言ってきてメツチャ睨んできただけど何か目の奥に覚悟の様なモノを感じてもしかしたらこの状況を何とかしてくれるかもなんて希望的観測して離れたけどまさかあんな自爆技するなんて…。

そして一番のやらかしはオレンジ色の子に対してだ。正直あんな言い方するつもりは無かった。単に

「もし戦うのが怖くなったなら私がやるから戦うのを止めてもいい」って言おうとしただけに私の口下手とセイバー口調のお陰でかなり厳しい言い方になっちゃった。

てか何が「貴女にその様な覚悟はありますか？」だよ…。

なんで上から目線？覚悟うんぬん言う前に私が覚悟あるかどうかだよ。あの青色の子は文字通り命懸けの覚悟をしてたつてのに、あのオレンジ色の子だって少なからず覚悟みたいなのはしてたはずなのに。

対して私はどうだ？日夜「直感」スキルが教えてくれるノイズの出現とその被害、そこに住む人達の助けを呼ぶ声に脅迫概念を覚えて仕方なくって建前で戦っていた様なものだ。覚悟も何もないやれるからやってたそれだけだ。私なんかより彼女達の方がよっぽど立派だ。大層に説教なんて出来る訳が無い。

あーヤバイ自己嫌悪でマジで消えて無くなりたくない。チーズ蒸しパンになりたい。

だがそんな私の思いとは裏腹に時間は前にしか進まないのである。
「…そろそろバイトですね」

ふて寝を決め込んでいたベッドから起き上がり玄関に向かう私。
この時間は他の事は考えず仕事の事だけ考えられるから気楽だ。
そんなことを考えた私は自分を卑怯者と罵った。

それからしばらく、不気味な程ノイズの出現はなかった。アレだけ連日連夜出てたのに急に静かになるなんてやっぱりあの白い鎧の子がノイズを操ってたからなのかな？今は多分青色の子の自爆技でのダメージが残ってるから回復するまで動けないとか？それとも嵐の前の静けさとか？いずれにしても出てこないならそれに越したことはない。店長に言ってバイトの時間もうちよつと長くして貰おうかな？

で、やっぱり回収されるフラグ。

何日かぶりに「直感」スキルがノイズの出現を予感させた。うゝん、やっぱり行動前に説明口調しているとフラグは回収されるのか？

んなくだらない事を考えながら私は第二霊基になりその上にレインコートを着込み、「騎士王の宝財」ゲート・オブ・キヤメロットから「約束された勝利の剣」エクス・カリアバールと「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアを取り出し現場に向かう。ただ今回ちよつと現場が遠いらしい…。今までサーヴァントの身体能力を使ってビルからビルに飛んで渡ってたけどこれ見た目以上にキツイ。やっぱり何かしら移動手段が必要なのかな？

フィーネから完全聖遺物「デュランダル」の強奪を指示されたアタシは移送中を狙って「ソロモンの杖」でノイズを呼び出し襲撃させることに成功する。

その後、例の融合症例が迎撃に出てきたので相手をしていたら「デュランダル」が起動状態になっていた。どうやら融合症例の歌で起動したらしい。アタシですら「ソロモンの杖」を起動するのに相当苦労したつてのに…。そんな劣等感を感じながらも目標の奪取すべく手を伸ばしたのだがそれを融合症例に邪魔され逆に「デュランダ

互いが信じ合ってこそ信頼が生まれる

ノイズ退治に出向いたらオレンジ色の子がアンリマユになった件。

へ、何故？

「直感」スキルの感じ的にはあの持っている金色の剣が原因なのが分かった。そして何かとてつもない力を感じる。あれは一人が扱えるような代物じゃない…、そんな感じが。

ともかく何とかしたい一心でまずライオーソードぽいのを食らいそうな白色の鎧の子を助けるために間に割って入って「約束された勝利の剣」で受け止める。

やっぱりだ。何か「神性」ぽいを感じる。そしてライオーソードを弾き飛ばし白色の鎧の子に下がるように言う。多分「カリスマ」スキルのお陰で言う事聞いてくれた。そして「魔力放出」で一気に接近して落ち着かせようとしたけど、何か理性無いっぽいから説得しようにもバーサーカーっぽい台詞しか叫ばないし…。仕方なく気絶させることにした。

まず「約束された勝利の剣」でお腹に

フルスイング。もちろん傷つける訳にはいかないのだから「約束された勝利の剣」の表面を使ってだ。ちよつと人間の体から出ちゃいけない系の音がしたけど許して。そして「約束された勝利の剣」を右肩に担いでそのまま左の首筋に再びフルスイング。もちろん「約束された勝利の剣」の表面で。確実に人間の体から出ちゃいけない系の音がしたけど本当許して。

で、何とかオレンジ色の子を止める事に成功したけどまだ白色の鎧の子がいるから来るかな…って思ってたらどうやら逃げてくれてみたいだ。正直助かった。その後黒い服の人達（多分オレンジ色の子の仲間だと思う）がやって来たので仕方なくその場を離れることにした。

そして数日後、ここ最近ではノイズが出てこなかったのですとバイ

ト三昧だった。

ここで余談だけどセイバーの愛称をご存知だろうか？通称「腹ペコ王」。「約束された勝利の剣」やその他の宝具を使うには魔力が必要となる為、その回復手段として食事がある。そしてセイバーはかなりの高燃費であるためメチャクチャ食う食いしん坊キャラからこの愛称が付いた。

そして私にもそれが受け継がれた。

もうメチャクチャ食う。炊飯器で六合炊いたお米が10分程度で無くなつてまだ余力があつた時は絶望した。そしてその分オカズも必要なわけで…、要するに食費がメツチャかかるのである。特にノイズ退治で「魔力放出」とか使うとその分消費されて余分にお腹が空く。しかもこの体のせい^{セイバー}か盛り付けとか汚いと空腹なのに食欲が沸かないと言うよくわからない謎現象が起きて盛り付け直す必要がある。いいじゃん一人飯なんだから盛り付けなんて！どうせ食べる時に崩れるんだから！

てなわけ私は今日も食費のためにバイトしてその帰り道である。ちよつとでもお腹空いてると日常生活に支障が出るレベルなのだ。

正直やってなんね〜…。

すると目の前に小さい兄妹、それと胸が凄く大きい白髪の女の子がいた。

ちよつと気になつたので話を聞くことにした。

「どうかしましたか？」

私が話しかけたら凄く驚かれた。そりやそうだね。自分で言うのもなんだけどこんな金髪の外人が急に話しかけられたら誰だつて戸惑うよ。私だつたら絶対ビビるよ。

「あ…あの…、え〜と…ハロー？」

「ああ、大丈夫ですよ。日本語は分かります。それよりもそちらの子が泣いているようですか？」

事情を聞くと、どうやら父親とはぐれて迷子になってしまい探し歩いてきたものの妹の方が歩き疲れてしまい駄々を捏ね始めたらしい。それを見つけた白髪の女の子が私と同じように事情を聞いてたらし

い。

「分かりました。私も共に父親を探しましょう」

「本当に！いいの？」

「ええ。困っている人がいたら助けるのが人として当然です」

「ありがとう！」

「ありがとう外国のお姉ちゃん！」

「貴女も付き合ってくださいますね？」

「あ…お、おう」

てなわけで迷子の兄妹達のお父さん探し開始だ。妹ちゃんの方は歩き疲れているので私がおんぶしてあげてる。途中白髪の子が鼻歌を歌ってくれたりして子供達を安心させてたりしてくれて助かった。

「ねえ、こつちに父ちゃんいるの？」

「ええ。実は私運がとても良いのです。きっと父親がいますよ」

「本当かよ…？」

白髪の子がメツチャ疑いの目してる。うくん、実際私は「直感」スキルが示す方角に勘で歩いてるだけだからあんまり胸張って言えないんだけどね。

…胸って言っても白髪の子よりぜんぜんないけどね。くっ！

「あ、父ちゃん！」

「父ちゃん！」

「マジでいやがったよ…」

さすが未来予知レベルの「直感」。兄妹達がお父さんを見つけたようだ。妹ちゃんを下ろしてあげると兄と一緒にパタパタとお父さんの所に走って行く。お父さんも涙ながらに無事を確認し兄妹達を抱き締めている。

「すみませんでした。息子達がご迷惑を」

「いや、別に成り行きだから…その…」

「私も大したことはしていません。それよりお子さんと再会出来て良かったですね」

「はい！ほら、お姉さん達にちゃんとお礼は言ったのか？」

「ありがとうお姉ちゃん達！」

「ありがとう！」

うんうん。やっぱり子供は笑顔でないかね。見てるとこっちまで笑顔になる。

「仲良いんだな…」

白髪の子がボソツとそんなことを言った。

「…そうだ。そんな風に仲良くするにはどうすればいいのか教えてくれよ?」

ん、白髪の子誰かと喧嘩中なの？

「そんなの分らないよ。いつもケンカしちゃうし」

「でもケンカするけど、仲直りするから仲良しだよ！」

まあ喧嘩なんてそんなもんだよね。いつの間にか喧嘩の事なんて忘れて一緒にいる時もあればどっちかが謝ると向こうも謝ってそれで明日には普段どうりだったり。でも白髪の子は複雑そうな顔をする。何か事情がある喧嘩なのかな?よし、ちよっとお節介かもだけど私からもアドバイスを送ろう。

「喧嘩の原因は考えのすれ違いです。まずは自分の考えと相手の考えを相関させて食い違いを解消させるところから始めてはどうですか?」

「考えのすれ違い…喧嘩ってそんなもんか…?」

「そんなもんです」

経験談だけだね。そして白髪の子はどこか合点がいかない顔をしながら去っていった。その背中を見送った後、私も親子に別れを告げて帰路についた。

そして翌日。「直感」スキルがノイズの出現を感知する。来ないと思ったら来たり、来るかなって思ったら来なかったりノイズが出るの不定期過ぎない?ラム○・ドライバだつてもうちよつと融通利くよ?

てな不満を漏らしつつも何時もの装備(第二霊基+レインコート+「勝利すべき黄金の剣」+「ギネヴィアの隠れ布」)で現場に一直線。

ん、どうやら既に戦闘が始まつてるって事はあの二人かな?なら「痛哭の幻奏」で援護射撃だけにしようとした時。

あれ？あの二人じゃない赤いピチピチスーツがいる。新キャラ？
てか戦い方スゴッ！両手にガトリングに腰からミサイルつて何！？
あれ、レオ○ルド？いや色的にデス○ロイ、もしくははへビー○ームズ？

いやいやそれよりも重要な事がある。あの子昨日の白髪の子やんけ！？え、あの子もあのピチピチスーツ来てるん？年頃の女の子があんな体のラインくつきりの格好なんてするんじゃないやしません！…いや私も人の事言えないわ。同い年位の時、ノーブラのタンクトップとホットパンツの時あったわ私。今だと絶対出来ないけど…。

だから話を脱線させすぎだろ私！何か極力戦うのを避けて逃げる所を見ると追われてる感じた！とにかく助けないと！

とりあえず「魔力放出」で一気に接近。そして白髪の子改めて赤色の子の周りに群がってるノイズを「風王結界」インベンション・エテの風を利用してまとめて風ぎ払う。ある程度処理が完了したら「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアを脱いで姿をさらす。

「お、お前!!」

「理由は聴きませんが追われているのなら逃げなさい！早く！」

「っ…：礼は言わねえからな！」

おお、リアルなツンデレ。てか今気付いたけどあの喋り方でと声、白色の鎧の子だよ。なんで昨日の気付かなかったんだろう？肝心な時に「直感」スキルも働かなかったし…。何なの、定期的に休みが欲しいの？それ普通のサラリーマンに言ってみろ…どやされるわ！

そんな私のOL時代の記憶黒歴史を蘇らせていたら赤色の子はそのまま戦線離脱。ノイズはその後を追おうとするけどそうは問屋が卸さない。

「アナタ達の相手は私です…！」

私は何で「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアを脱いだと思ってる？元々あの子赤色の子を逃がすための囿になるためだ。

そして程なくしてノイズ退治を終えたので私は赤色の子の無事を願いつつ、その場を後にした。

知らず心とは通じ会うモノ

赤色の子を逃がした後、心配になって町を探してみたけどそれらしい姿は見つからなかった。

あのノイズ、確かに赤色の子を狙ってた。何で言うか制御されるって感じだった。でもノイズは自然現象だから…待てよ、たしか赤色の子が白色の鎧を着てた時に杖みたいなからノイズが出てたよね？もしかしてアレってノイズを出すだけじゃなくて制御出来たりもするのかな？だとしたら今までのノイズ被害も杖の所有者が意図的に出してたと考えられるかも…。でも赤色の子はノイズに追われてたし杖を持ってなかった…。

てことは、赤色の子は誰かに利用されて杖を持たされてたってこと？そして用済みとなって口封じされそうになってた。なら赤色の子に指示を出していた黒幕がい

「筆竜ひがみさくん、四番テーブルにこのコーヒーお願いにや〜」

はっ!?!いけない、いけない。仕事バイト中に関係無いこと考えて気が散ってた。

「はい、分かりました」

私はトレーにコーヒーを乗せて四番テーブルに向かう。

「お待たせしました。コーヒーでございます」

トレーの上に置いていたコーヒーを音を立てないようにそっと机に置き、コーヒーの横にミルクとガムシロップをそれぞれ一つ置いておく。

「ごゆっくりどうぞ」

そして営業スマイルと同時に45度位にお辞儀をする。

今居るここはバイト先だ。日夜食費に悩まされている私の唯一の収入源。で、その仕事内容は…

「いや〜、筆竜ひがみさんがメイドの求人受けて助かったにや〜」

「いえ、こちらこそ私のような者を雇って下さってありがとうございます」

そうメイドだ。ただしメイド喫茶店の様な受け狙いのアレではな

く普通のカフェの給仕役のメイドだ。最初は抵抗があった。支給されたメイド服もミニスカで背中なんてほぼ丸見え。だがなんだかんだ慣れてしまえば楽しくもなっていた。店長もいい人で働きやすく助かった。助かったんだけど…

「もうね、最近ドイツとかボイスだかのせいでバイト子みくんな辞めちやつてね、ダメ元で英霊の座に求人出してみたら筆^{ひがみ}竜さんが受けてくれ本当に助かったにや〜」

：喋り方で気付いた方もいるだろう。そう、店長はネコなのだ。しかも二足歩行して服も着て、日本語もペラペラ。なのに体のサイズがほぼ三頭身くらいの謎の生命体。

いっつつつつつみわからん!!!

今までのずっと（意図的に）気にせずにしたけどやっぱりおかしいよね!?何か存在自体がこの世界にいちやいけないような…人?…だよね!?なのに入ってくるお客さんは皆なんか「別に?」みたいな感じでスルーしてるし!しかもこんななのにコーヒー淹れるのうまいし、賄い飯も美味しいし何なの?

てか今さらつとんでもないこと言った気がする!

「フツ。若者よ、迷いとはけして慚^{ざん}愧^きな事ではない。時として迷いは己を見つめ直し心身を洗練するもの。そしていずれ来る選択の時、どれほど磨きあげられたか…それによつて世界は終焉への時を刻むのだ」

なんか無駄に意味深な事を無駄に渋い良い声で言っているのはこの店の常連である「カオス」さん。常連つて言ってもコーヒー一杯頼んでタバコ吸いながら閉店まで入り浸っているただの迷惑な客である。ちなみに店長と同じ3頭身のネコである。

「良いわよね〜迷いって。私が若い頃もたくさん迷ったわ〜。ねえ〜知ってる?女つてね、迷えば迷うだけ良い女になるのよ。ああ〜私もあの頃に戻りたいわ〜」

これまた無駄に意味深な事を無駄に色っぽい声で言っているのは同じくこのお店の常連である「デステイニー」さん。たまにお店のヘルプでレジやつてくれる。ただしツケがあるので時給はでないらしい

い。そして三頭身のネコ。

「うんうんうんっ！」

隣で私と同じく料理を運んびながら（たぶん）肯定の意味で頷いてるのは「バブルス」さん。私の同僚（の様な人物？）だ。喋れないのかこうして頷く事しかしない。店長から聞いた話近々リストラする予定らしい（理由は一番の下っ端がどうのこうのって言ってたが覚えてない）。で、三頭身のネコ。

「あっあっああのさ、こっこここのオムライス、ケチャップではっハートつ作って、萌え萌えky」

「すみませんお客様。当店ではそのようなサービスは行っていません」

なんか挙動不審にそんなサービスを求めるのは常連の「エボリューション」さん。見るからにザ・オタクって感じのバンダナ+1眼レフカメラ+1リユック格メイド喫茶のアレ好をししている三頭身のネコだ。何かにつけて私にサービスを求めてくるので二〜三回店の裏で説教をしたのだが懲りずにまた頼んできたらしい。

：もうボコつていいかな？

はっ!?いかにいかに!私としたことが冷静になれ!

てな訳でこれが私のバイト先の実態だ。：うん分かるよ。訳分からんモノのオンパレードだよ。でも転生したあと調べたらここがバイト先だった訳で：、他のところバイト先行こうにも見た目がこれセイバーじゃなかなか見つからないのも事実で、なによりここの時給割と良いのでここで働き続けている。

「さくて、そろそろお昼のラッシュの時間になるから気を引き締めていくにや〜」

おっともうそんな時間か。やっぱりカフェと言えど昼時は混む。目が回る忙しさとは正にこの事だ。気合い入れて行くぞ!

と、思ってた所で「直感」スキル。

「すみません店長。今から休憩に入ります」

「フア!?いやいや、ひがみ筆竜さん!さっき言った通り今からラッシュの時間だから抜けられると困r」

「休憩に入ります…！」

「は、はいいゝ!!」

私は「カリスマ」スキルを使って店長を黙らせて休憩ノイズ退治に行く。ごめんね店長、こんな時間に抜けちゃって。だけど文句はノイズに言ってくれ。

アタシが生き倒れて「小日向未来」ってヤツに匿われた後、ノイズが現れた。

バカだアタシは…。戦争を、火種を無くしたい、その思いでフィーネに協力していた。なのに今ではアタシそのものがノイズを呼ぶ火種になってやがる。アタシが原因で関係ねえヤツか戦禍に巻き込まれる…。アタシが大人達の捕虜になったあの時と同じように。

「アタシのしたかったのはこんな事じゃない！ けど…。いつだってアタシのやる事は…。いつも、いつも…。」

畜生…。畜生…。こんな本末転倒があつてたまるか…！

悔しさと不甲斐なさ、そして自分の軽率さに涙が出てくる。

その間にも迫ってくるノイズども。アタシには自分を戒飭かいちよくする時間すらねえのか…。

迎撃するため聖詠を歌おうとした時…

「っ！——ゲッホ、ガッホ！」

生き倒れてからの疲れが抜けきっておらず途中で咳き込んでしまう。隙が出来たアタシに上空にいたノイズが強襲をかけてくる。

間に合わない！っと思つたその時。

「どおりいゃあ!!」

目の前に赤髪のおっさんが現れた。コイツ…。フィーネに渡された特機部とつきぶつ二の資料で見た気がする。たしか特機部とつきぶつ二の最高司令官「風鳴弦十郎」だったか？

おっさんは地面を踏みしめるとコンクリートがせり上がり即席の壁が出来上がった。ノイズはそれに突き刺さり、おっさんはそれを殴りノイズを撃退する。続いて右から突撃してきたノイズを迎撃しようとしたところでその動きが止まった。何事かと思つたがすぐに疑

問はなくなった。

ザバァン!!

突如発生した激しい突風がノイズを粉微塵にした。この風をアタシは知っている。

「セイバーか?」

おっさんそう言うど何も無い所から布状の何かを取り払われ、その場に都市伝説野郎が現れる。

「ここは私が。彼女の事をお願いします」

「すまん、助かる」

おっさんはアタシを抱き寄せその場で跳躍、雑貨ビルの屋上に降り立つ。

「大丈夫か?」

アタシは答ええない。あれだけ毛嫌いしていた大人に助けられたからだ。たがら返答の代わりに聖詠を歌う。

「K i l l e r I c h a i v a l t r o n ——」

シンフォギアを纏い、両手に武器を構える。

「ご覧の通りさ! アタシのことはいいから他の奴らの救助に向かいな!」

おっさんにそう叫び、ビルから飛び降りるアタシ。下では都市伝説野郎がノイズと戦っていた。

「コイツらはアタシが狙いだ! エサになって誘導してやっからテメエもスツコンでな!」

「いえ、それなら尚の事人手がいるでしょう。誘導しつつ飛行型の処理をお願いします。私は歩行型のを食い止めます」

都市伝説野郎にそう指示される。やっぱりだ…。コイツに命令されるど心地良く承諾しちまう自分がある。だけど今はそれを考えてる暇がねえ。

都市伝説野郎の指示に従って出来るだけ開けた場所にノイズを誘導しつつ、空中にいるノイズも倒していく。地上のヤツも気にしたが都市伝説野郎がコツチに突撃してくるノイズを完璧にブロックしてくれたお陰で邪魔されることなく川辺に誘導できた。

後はコツチのもんだ。ノイズに対してありつたけの弾とミサイルを制圧射撃で叩き込む。撃ち漏らしは都市伝説野郎が勝手に除去してくれるので遠慮なく撃ち続けた。

やがてノイズがいなくなりその場から離れようとした時、アタシは都市伝説野郎を見た。アツチもアタシの視線に気付いたのかコツチを向く。会話はなかった。だがアイツの視線がこう言ってるようだった。

今のうちに行きなさい。

アタシの思い込みかもしれない。たがけどアタシはそれに従ってその場を離れた。

その後アタシの中に残ったのはアイツの命令に従った時にある謎の心地よさと貸しをまた作つたばつの悪さだった。

後悔の後は必ず成長するもの

ノイズの出現した現場に行ったら範馬○次郎がいた件。

：いやあの、何言ってるんだコイツ？と想うかもしれないけど目の前にある事実を述べただけだからね？以前会ったあの男の人（名前知らないから今後赤髪の人って言う）が白髪の子を助けているのは何となく分かったけど…、道路を即席の壁にしてノイズを蹴散らすってどゆこと？自分で言うのもなんだけど私かなりチートな能力持つてるけどあの人に勝てる想像が全く出来ないんだけど…。

てかそんなこと考えてる場合か私！あんなんでも生身の人間なんだからノイズにかすただけでも死んじゃうだから（本当は関わりたくないけど）助けないと！

私は魔力放出で一気に二人の側まで急行する。「フエイルノート痛哭の幻奏」での迎撃も考えたけど如何せん数が多くてチマチマ倒すのは得策じゃ無いから止めておいた。

二人の側まで接近した瞬間、ノイズが突撃してきたので魔力放出とインビジュアル・エア「風王結界」を使ってまとめて倒す。

「セイバーか？」

赤髪の人がコツチに話しかけてきた。だから何で分かるの？エスパ？それともニュー○イプ？

隠れたまままだと不信感に繋がるから仕方なくハイド・オブ・ギネヴィア「ギネヴィアの隠れ布」を脱ぐ。最近着たり脱いだり激しいなコレ…。

「ここは私が。彼女の事をお願いします」
「すまん、助かる」

とりあえず白髪の子がなんか疲れてる様子だったので退避させることを赤髪の人にお願ひした。そしたら赤髪の人が白髪の子を抱えてその場でジャンプして雑貨ビルの屋上に降り立った。

なんだそのジャンプ力!?ツエ○リ男爵もビックリだよ！などと余計なことを考えつつ周りのノイズをバッサバッサと斬りながら戦っている上から歌が聞こえきた。白髪の子がああ赤い格好になって降りて来た。

その後、白髪の子と協力して川辺にノイズを誘導してガトリングとミサイルでまとめ一掃。私は端で撃ち漏らしたノイズを地道に処理していく。

そしてノイズを討伐した後、白髪の子がコツチを見ていた。うん、なんか表情的に何か事情がありそうな感じ……。とりあえずノイズも倒したし逃げるなら今のうちだよ。てきな目線を送ってみる。

白髪の子はその意図を理解してくれたのかそのまま何処かへ去っていった。私もバイトから抜け出して来た身なのでとつと戻ることにした。

：本当は赤髪の人に会うのが嫌だったただけなんだけどね。

その後バイト先に戻ったら戦お昼のラッシュ時間禍の真っ只中でヤベーくらいに忙しかった。店長の文句は「カリスマ」スキルで黙らせた。

それから数日後、私はあることに気付いた。以前の青色の子だけど、あの子アーティストの「風鳴 翼」だ。新聞読んでたらまんま同じ顔だった。え、マジでマク○スなの？歌は剣つるぎなの？

まあそんなくっだらな事はどうでもいいや。新聞を読み進めていくとどうやら彼女、今まで怪我で入院していたらしく今日復帰ライブをドームで開催するらしい。まあ怪我って十中八九あの時の自爆技絶唱のせいだよ。ああヤバイ……。再びの自己嫌悪が私を蝕む。

いかんいかん別の事考えよう。お、ライブってテレビ中継もあるの？なら視聴確定かな。私この体セイバーになってから趣味と言えるものが毎日自分の為に作り続けている料理くらいだからタマにはこう言った正しく趣味って感じのに餓うえてるんだよね。：まあお腹は常に飢えてるんだけどね。

あーもーそんなことはどうでもいい！とにかく私は今からゼン○ラーデイ（へ？この場合メル○ランデイじゃないかって？いいんだよ別に！テレビ版か劇場版かの違いでしょ！）になって「風鳴 翼」の歌を聞きながら「ヤック○カルチャー……」て言うんじゃない！

そうして私はテレビのリモコンに手を伸ばす。

そしてそれを阻害する「直感」スキル。

ちくしよく、ちくしよく…。またお前ノイズらなのか。なんでこうよくわからんタイミングで来るのかな…。これから文化に触れてカルチャーショックを受けようと思ってた矢先にこれだ。おのれノイズゆるぎん！お前ら倒したら出てくる灰を使ってアク抜きして鍋料理してやるからな！

私は第二霊基になりつつ窓から飛び降りるのであった。

「貸し借りは無しだ！」

クリスちゃんが私の後ろにいたノイズをやっつけながらそう言ってくれた。嬉しかった。まだ望んでた形じゃないけどちよつとだけ分かり合えたと思えたからだ。

だけど今度はクリスちゃんが危なくなつた。あの黄色くて大きいノイズの大砲がクリスちゃんを狙つてたからだ。

「クリスちゃん！」

「っ!？」

クリスちゃんも気付いたけど大砲が発射された後だった。クリスちゃんは両手に持っていた大きな銃ガトリングでガードしようとしてる。

「だけど…」

「ガコンツ！」

ノイズの攻撃がクリスちゃんの目の前で弾け飛んだ。

「…お前か？」

クリスちゃんが誰もいない目の前に話しかける。すると何も無いところからセイバーさんが出てきた。あれが師匠の言つてた透明になる聖遺物つてやつかな？

「無事ですか？」

「ちっ…まあな」

セイバーさんがクリスちゃんの安否を確かめてクリスちゃんはまだか面白く無いって顔をしてる。私もクリスちゃんが心配なので隣まで駆け寄る。

「クリスちゃん！」

「…」

私が駆け寄るとセイバーさんが私を見てきた。あの時と同じレイ
ンコートのフードから綺麗な緑色の目が見える。セイバーさんは
ただじつと私を見つめるだけだ。でもあの時のような圧迫感はない。
「戦えますか?」

「…はい!!」

私が強く頷くとセイバーさんは少しだけ微笑んだけどすぐに真剣
な顔つきに戻って、視線をノイズに向け直す。

「私が地上のノイズを相手します。貴女は空中のノイズをお願いしま
す。貴女は大型ノイズを叩いてください」

「分かりました!」

「な!?命令するんじゃない!!」

セイバーさんの指示に従って私は腕に付いてるハンマーパーツを
引っ張りエネルギーを溜める。クリスちゃんも口では否定してたけ
どセイバーさんの指示道理に空にいるノイズを倒してくれてる。

エネルギーが十分に溜め終わると同時に腰に付いてるブースター
で一気に大きいノイズに突っ込む。

「どりゃああああ!!」

途中他のノイズに邪魔されそうになっただけどセイバーさんが手に
持った透明な何かでバツバツサと倒して道を開いてくれる。そし
て大きいノイズの懐まで近づいた私は師匠直伝の正拳突きを構えを
取る。

「雷を握りつぶすようにいいいい!!」

私の拳がノイズの表面にめり込むと同時に腕のハンマーパーツが
作動し衝撃波で大きいノイズが粉々に吹き飛ぶ。

その後、残りのノイズはセイバーさんとクリスちゃんがまとめて
やっつけてくれたんだけどクリスちゃんはいつの間にか何処かに
行っていた。セイバーさんも私の無事を確認したらそのまま踵を返
そうとしていた。

「待ってください!」

私はセイバーさん呼び止めた。セイバーさんは足を止めて首だ
けコツチに向けてくれる。ちよつと迷惑だったかな?でも伝えな

きやいけない事がある。

「あの、ありがとうございます！」

私は深々と頭を下げてお礼を言った。

「目的は違えどノイズを倒す事は同じです。お礼などふや」

「違いますー！そっちの事じゃありません！あいや、そっちの事も凄く感謝してるんですよ!?!」

慌てて修正する私をセイバーさんは不思議そうに見る。

「私あの時、全然覚悟なんて出来てなかったんです。偶然シンフォギアを纏えてこの力で人助けが出来ると思ってました。でもクリスちゃんが現れて、翼さんがボロボロになって、セイバーさんに言われて気付いたんです。誰かと分かり合うにも命懸けの覚悟がいるし、ぶつかり合わなかったら分かり合えない事もあるって。たがらそれを気付かせてくれたセイバーさんには凄く感謝してるんです！

だから、本当にありがとうございます!!」

私は再び深々と頭を下げた。

「顔を上げなさい」

するとセイバーさんが私の目の前までやって来た。頭を上げてセイバーさんの顔を見るとさっきの戦闘でも見せてくれた微笑みをしていた。

「貴女は自らの所業を反省しここに立っています。それは私の助力ではなく貴女自身で掴み取ったものです。あの時の忠告は撤回し謝罪します。誇りなさい自分自身を。貴女は立派な戦士です」

胸が熱くなる。セイバーさんの言葉に嬉しさが胸の奥からどんどん溢れてくる。

「はいーあ、でも一つだけいいですか?」

「はい、何ですか?」

「貴女じゃなくて、私の名前は「立花 響」です!」

ずっと言えずにいた事をセイバーさんに言う。セイバーさんは少しだけ驚いた顔をしたけど直ぐに微笑みに戻って。

「ええ、そうですね。では改めて。

ヒビキ、貴女は立派な戦士です。」

「はい!!」

それを言い終わるとセイバーさんは透明な何かを被ってそのまま去っていった。

あの時と同じ月明かりが照らし出す夜、私は胸の熱を感じ続けた。

手を繋ぐ事の意味

昨日は何か色々わかった事がある。あのオレンジ色の子と赤色の子が響ちゃんとクリスちゃんって言う名前である事。あのピチピチスーツがシンフォギアって事。響ちゃんが確固たる覚悟を決めて戦っている事。とにかく色々わかった。

そして本日も私はバイト先でメイドをしている。なんだかなく…。普段メイドのフリーターでノイズが出ると騎士王ってどんな二足わらじ？最近のラノベでもこんな無いと思うよ？

「筆^{ひがみ}竜さくくん」

おっと、店長からの呼び出しだ。

「はい、なんででしょう？」

「今さっき賄い作ったからお客様いない内に食べちゃってくださいにや〜」

今の時間は平日の午前中。これから正午から2時くらいまで忙しくなる前にご飯食べとけと言うことか。

「はい、頂きます」

私はカウンター席に座り店長が作ってくれた賄い飯を食べる。

うん、このスタミナどんぶり美味しい。相変わらずなんでネコなのにこんなにご飯作るの上手いんだろう…？

「それにしても最近のダイスだかマウスだか頻繁に出るようになってお客さんも大分少なくなつたにや〜」

確かに。ここ最近ノイズが連日出るようになって大分お客さんがいなくなった。ただでさえお昼以外だどお客さん少ないこの店も今はガラガラだ。まあそのおかげでカウンターでご飯食べられるだけだね。

「フツ、この世の静寂とは厄災の前触れだ。だが多くの人はそれを知らず、常に同じ毎日が来ることを信じて疑わない。故に人は試されている。訪れた厄災にどの様にして生き残るかをだ」

えーと、つまり何？嵐の前の静けさって言いたいのカオスさん？よくわからん言い回しだな…。あといい加減コーヒー一杯で閉店まで

いるの止めて貰えませんか？

「誰が言ったのかしらね、沈黙は肯定って。何も言わないって肯定も否定もしてないって事なのに。そうよ、あの時彼は何も言わずに私から離れたわ！何も言わずに私からああ!!」

デステイニーさんが何かを思い出して泣き始めた。正直関わりたくなかったので無視する。

「うんうんうん!」

バブルスさんは裏で皿洗いしながら頷いてきた。たまにだけバブルスさん取り敢えず頷いておけばいいか思っていない？関係無いところで頷かれても意図を解釈出来ないんだけど。

「ああの、あのさあ、ここここのコーヒーマップが書いてあるんだけど、こここれって俺にき気があるってk」

「当店のサービスです。冷めない内にとつと飲んでください」

エボリユーションさんは相変わらず挙動不審だし。ただのラテアートで何故気があると思えるのか。エボリユーションさん以外の人の注文でも書いてるし。

ちなみに客^{ネコ}いるのにカウンターでご飯食べて大丈夫って思うかもしれないけど全然気にしない。だってこの人^{ネコ}(?)^コ達だし。

「ああ〜正直暇だにや〜。ここいらでイベントの一つでも起きにやいかにや〜」

おいおい店長、そんな事言ったりすると本当にフラグが立t

ブー、ブー、ブー!!

そして回収されるフラグ。これってノイズが出現したときになる警報だよね。

「うええ!?回収早くにやい!」

「フツ、そして嵐は突如としてやって来る」

「私は今でも待つてるのよ!なのにどうして来てくれないのお!」
「うんうんうん!」

「ちよおまやめろ、今コーヒーマップ飲むかr熱うっ!」

そして慌て始める三頭身のネコども。私はどんぶりに残っていた賄い飯を掻き込んでお腹に入れ一足先に避難^{ノイズ退治}に行く。

「すみません店長。着替えて先に避難します」

「ウエ!? いやいや筆^{ひがみ}竜さん! こう言う時一人で行動するキャラって大
体ろくな目に遭わないって相場がk」

「先に避難します…!」

「は、はひいゝ…」

店長が何か言ってきたけど何時も道理「カリスマ」スキルで黙らせる。でも確かに何か嫌な予感がする。「直感」スキルからじゃなくて私自身の勘からだ。今回の襲撃、何か違うのかな?

なんてフラグめいた事を考えつつ私は店を出て行った。

「コイツがピーチクパーチク喧しいからちよつと出張つてみただけ! それに勘違いするなよ、お前たちの助っ人になったつもりはねえ!」
『助っ人だ。到着が遅くなったかもしれないがな』

クリスが弦十郎から渡された通信機を片手にそう言い訳すがその渡した張本人が通信機越しにそれを否定する。

「助っ人?」

『そうだ! 第2号聖遺物「イチイバル」を纏うシンフォギア奏者、「雪音 クリス」だ!』

「クリスちゃん! ありがとう、絶対分かり会えるって信じてた!」

弦十郎の言葉に響が感極まりクリスに抱きつく。

「このバカ! アタシの話聞いてねえのかよ!」

「とにかく今は連携してノイズを!」

そう答えた翼の後ろにノイズが迫る。翼は迎撃をするため振り向き様に構えるが…

ザシユンツ!

それはある人物によって撃退された。

『それともう一人助っ人と呼べる者がいたな』

クリスの通信機から弦十郎の声が響く。

『正体も使用している聖遺物も不明。だがノイズ撃退に間接的に協力してくれている存在。都市伝説「鎌鼬^{かまいたち}」こと「セイバー」!』

弦十郎はそう答えた人物が翼の目の前にいた。彼女は何時もの蒼

い衣と白銀の鎧、その上に黄色いレインコートのフードを纏って立っていた。

「…でしゃばりましたか?」

「いいえ、助かったわ」

質素な受け答えをする翼とセイバー。

「お互い事情も素性も知らない間柄ですが、今は目の前の脅威の為、協力をしましょう」

「はい!」

「ええ!」

セイバーの共闘に賛成する響と翼。だがクリスだけは何処か不満げな顔をする。

「アタシは勝手にやらせてもらう! 邪魔だけはすんなよな!」

クリスがそう答えると手元にボウガン状のアームドギアを出現させ空にいるノイズを迎撃する。

「空中のノイズはあの子に任せて、私達は地上のノイズを!」

「は、はい!」

「分かりました」

四人は各々分散し各個にノイズを撃退していく。その途中、翼とクリスの背中がお互いにぶつかり振り替える。

「何しやがる! スツコンでな!」

「貴女こそいい加減にして! 一人だけで戦ってるつもり!」

戦闘中にも関わらず足を止め互いに文句を言い合う二人。

「アタシは何時でも一人だ! こちとら仲間と馴れ合ったつもりはこれっぽっちもねえよ! 確かにアタシ達が争う理由なんて無いのかもな。だからって、争わない理由もあるものかよ! こないだまでアタシらとお前らは殺り合ってたんだぞ! そんなに簡単に人と人が…」

「出来るよ。誰とだって仲良くなれる」

クリスの言葉を遮り響がそう答える。響はクリスの右手を左手で握り、右手を翼の左手に伸ばし握る。突然の行動に翼とクリスは呆然としてしまう。

「どうして私にはアームドギアが無いんだろうとずっと思ってた。

いつまでも半人前はイヤだなーって」

響は語る。以前自分の弱さからアームドギアが出現しないと思いついていた時の事を思い出しながら。

「でも、今は思わない。何も手に握ってないから…。二人とこうして手を握り合える、仲良くなれるからね」

だが今は違う。何も握ってないからこそ手を伸ばし繋ぐことが出来る。分かり合える。彼女が捨てなかったその気持ちにシンフォギアが答えたからこそ彼女はそれを誇りに思うのだ。

響の言葉に心打たれた翼は手にしていた剣つるぎを地面に刺し、空いた右手をクリスに向かって伸ばす。

クリスは顔を逸らす。先程言った言葉は本音で間違いない。たがそれでもその手を繋ぎたい自分がいるのも事実だ。その証拠に手が震えている。ためらっているからだ、手を伸ばす事に。

だがその手を優しく握る者がいた。クリスは逸らしていた顔を前に向け手を握った人物を見る。

「もし貴女が貴女の為に伸ばされた手を握る事に躊躇ちゅうちよがあるなら貴女の代わりに私がその手を握りましょう。そして伸ばせなかった貴女の手を私が握ってあげましょう。そうすれば貴女も縁えんの中に入れます」

そこにはセイバーがいた。セイバーは自分の右手をクリスに、左手を翼に伸ばしその手を握っていた。クリスは突然胸の内から来た羞恥心からセイバーの手を振り払う。

「このバカに当てられたか!？」

「そうだと思う。そして貴女もきつと…」

「冗談だろ…!」

「しかし、一瞬でも握られたその手が暖かいモノだったのは揺るぎない事実です」

翼とセイバーの言葉に顔を赤らめるクリス。だが繋がれた右手は振り払わなかった。

その時、頭上から巨大な影が四人を覆い尽くした。超大型の飛行型ノイズが頭上にまで接近していた。

「親玉を倒さないとキリがない」

「だったらアタシに考えがある。アタシじゃなきや出来ないことだ」

クリスが超大型ノイズの対抗策を提示する。

「イチイバルの特性は長射程広域攻撃。派手にブツ放してやる！」

「まさか絶唱を？」

「バーカ、アタシの命は安物じゃねえ！」

「ならばどうやって？」

「ギアの出力を引き上げつつも放出を抑える。行き場の無くなったエネルギーを臨界まで貯め込み、一気に解き放つてやる！」

「だがチャージ中は丸裸も同然。これだけの数を相手にする状況では危険すぎる」

「そこは私達でカバーすればいいでしょう」

「はい！私と翼さんとセイバーさんでクリスちゃんを守りましょう！」

具体的な作戦の算段がつくと同時に三響・翼・セイバー人は散り散りになりノイズを迎撃していく。

（頼まれてもいないことを……！ あたしも引き下がれないじゃねえか）

その場に残ったクリスは作戦道理エネルギーのチャージに入る。やがて臨界に達したクリスのアームドギアが形を変え巨大なミサイルが四つ出現する。クリスは照準を超大型ノイズに定め迷い無くそれを発車する。

【MEGA DEATH QUARTET】

さらに腰のパーツから小型のミサイルと両手のガトリングを一斉射し空中に存在するノイズを全て撃ち落とす。

「やった……のか？」

「たりめーだ！」

翼の疑問にクリスが堂々とした顔で言う。そこに感極まった響が再びクリスに抱きつく。

「やったやったー！あははー！」

「やめろバカ！何しやがるんだ！」

「勝てたのはクリスちゃんのおかげだよー！」

「だからやめろと言ってるだろうが！」

クリスは無理矢理響を引き離すが響も負けず劣らずクリスに引付く。そこにセイバーがやってくる。

「やりましたね」

「ふん！トーゼンだろ」

素っ気ない返事だがその顔は少々赤った。その場にいる戦士達が勝利の余韻を肌で感じ、結束を深めていた。

だが…

ピリリリ！ピリリリ！

不吉とは突然やってくるものである。

『響っ!? 学校が…、リディアンがノイズに襲われt』

鳴り響くのは電話の通話終了音。その音に四人は深く息を飲み込んだ。

預けられた夢

セイバー達は走る。目指す場所は私立リディアン音楽院。響と翼の案内で着いたそこは学園と言うには程遠い廃墟と介していた。

「未来ー！みんなー！」

響が友人達の名を叫ぶ。だが返ってくるのは廃墟の間をすり抜ける冷たい風のみ。

「っ！アレは！」

セイバーが何かに気づく。校舎の上、何者かが立っている。遅れて響達もそれに気づく。そして彼女達はその人物をよく知っていた。

「櫻井女史!？」

「フィーネ、お前の仕業か！」

翼とクリスが別々の名を口にする。

「…フフフフ、ハハハハハ！」

女性が笑う。まるで全てが滑稽だとも言うかのように。

「そうなのか…!?! その笑いが答えなのか、 櫻井女史！」

「あいつこそ、あたし達が決着を着けなきゃいけないクソツタレ！フィーネだ！」

クリスの叫びとは裏腹に眼鏡を投げ捨て、まとめ上げていた髪をほどく女性。するとまばゆい光が女性を包み込む。やがて光が収まりその女性の本来の姿が現れる。

黄金の「ネフシユタンの鎧」を身に纏ったフィーネがそこにはいた。

「…嘘ですよね、そんなの嘘ですよ？だつて了子さん、私を守ってくれました」

目の前の現実を理解ができずわなわなとフィーネに問いかける響。フィーネは響に鬱陶しそうな目を向けながらその問いに答える。

「あれはデュランダルを守っただけのこと。希少な完全状態の聖遺物だからね」

「嘘ですよ…。了子さんがフィーネと言うのなら、じゃあ本当の了子さんは…?」

「櫻井了子の肉体は、先だつて食い尽くされた。いえ、意識は12年前

に死んだと言っている」

まるで自分では無い他人の話をするかの様にファイネはゆつくりと語る。

「先史文明期の巫女ファイネは、遺伝子に己が意識を刻印し、自身の血を引く者が「アフバツヘン波形」に接触した際、その身にファイネとしての記憶・能力が再起動する機能を施していたのだ。12年前、「風鳴 翼」が偶然引き起こした「天羽々斬」の覚醒は、同時に実験に立ち会った「櫻井 了子」の内に眠る意識を目覚めさせた。その目覚めし意識こそがこの私」

「貴女が了子さんを塗りつぶして…」

「まるで過去から蘇る亡霊！」

ファイネの語りに驚愕と怒りを露にする響と翼。それを無視し語り続けるファイネ。

「ファイネとして覚醒したのは私一人ではない。歴史に記される偉人・英雄、世界中に散った私たちは「パラダイムシフト」と呼ばれる技術の大きな転換期にいつも立ち会ってきた」

「シンフォギアシステム…！」

翼が転換期の切っ掛けとなった存在物の名を言う。だがファイネは的外れと笑うのみであった。この時、響達はファイネに視線が集中していたために気づかなかった。隣にいたセイバーの眉間が僅にだが寄っていた事に。

「そのような玩具、為政者からコストを捻出するための福受品に過ぎぬ」

「お前の戯れに、奏は命を散らせたのか！」

「アタシを拾ったり、アメリカの連中とつるんでいたのもソイツが理由かよ！」

ファイネが頬を吊り上げ愉快そうに笑う。

「そう…、全てはカ・ディングルのため！」

大地が揺れる。ファイネの後ろから神々しく輝く巨大な塔が現れる。ファイネはそれを愛おしそうな目で見つめる。

「これこそが、地より屹立きつりつし天にも届く一撃を放つ…。荷電粒子砲

「カ・デインギル！」

天高くそびえ立つそれを響カ・デインギル達は見上げる。

「カ・デインギル！コイツでバラバラになった世界が1つになると？」

「ああ！今宵の月を穿うつことによつてな！」

フィーネは空に浮かぶ暁あかつきを指さしながらそう答える。

「月を!？」

「穿つと言ったのか!？」

「なんでさ!？」

疑問でしかなかった。月を穿つ事で何故世界が1つになるのか。

「私はただ、あの御方と並びたかった…。その為にあの御方へと届く塔をシンアルの野に建てようとした…」

フィーネが再び語る。だが先程までとは雰囲気違った。フィーネの表情はどこかしおらしく感じられた。

「だが、あの御方は人の身が同じ高みに至ることを許しはしなかった…。あの御方の怒りを買らい雷霆らいていに塔が砕かれたばかりか、人類が交わす言葉まで砕かれる。果てしなき罰、「バラルの呪詛」をかけられてしまったのだ…」

フィーネの表情が変わる。まるで親の仇の如く見つめるそれは月であつた。己の拳を月に向け握り締め怒りをあらわにするフィーネ。「月が何故古来より不和の象徴と伝えられてきたか…。それは、月こそが「バラルの呪詛」の源だからだ！人類の相互理解を妨げるこの呪いを！月を破壊することで解いてくれる！そして再び世界を1つに束ねる！」

フィーネの思惑、その目的が明かされた瞬間であつた。

「呪いを解く!？それはお前が世界を支配するって事なのか？安い、安さが爆発しすぎてる！」

「永遠を生きる私が余人に歩みを止められることなどあり得ない」

フィーネは己の目的のため全く引く気が無いことがはっきりと伝わる。

「…フィーネ、貴女は大きな勘違いをしている」

そこに先程から沈黙を保っていたセイバーが声を発した。

「勘違い？この私が一体何を勘違いしていると？」

「貴女にお聞きします。貴女の今までの行動は全て貴女の言うその殿方の側へ行くための布石であるか？」

「無論だとも。私の望みはただ一つ、あの御方の側に行く。この愛に
なんの矛盾もない！」

「であるのなら、その愛こそ貴女の勘違いです」

セイバーはキツパリとフィーネに宣言した。

「何だと…？」

「貴女はそれを一途な純愛と思っているのでしょう。しかしそれは依存と言う名の呪いです」

「呪いだと!? 余人ごときがこの私の愛を否定し「バラルの呪詛」と同質
と言うか！」

「この世界は今を生きる若者達のモノです。貴女の身勝手なエゴ^愛を押
し通す為に潰して良いはずがありません」

「黙れ黙れ黙れ!!」

フィーネの叫びがセイバーの言葉を遮る。

「貴様に何が分かる！私のあの御方への思いを、愛を、心を何を理解で
きると言うのだ！」

その台詞と共にカ・デインギルが輝き始める。

「どのみちカ・デインギルは既に起動状態！私の目的はほぼ達成も同
然！貴様に止められるものか！」

「止めてみせます。私が…いえ私達が！」

セイバーは響達を見る。響達もセイバーの視線に気づき各々頷く。

響達は覚悟を決め聖詠を歌う。

「Balwisyall nescell gungnir tro
n」

「Imyuteus amenohabakiritron」
「Killter ichhiival tron」

響達がシンフォギアを纏いセイバーと共にフィーネに挑む。

今世界の命運を別ける戦いが切って落とされた。

私達がフィーネとか言う女性に挑んでから大分時間がたった気がする。どちらも一歩も引いてない。と言うか四対一で全く引かないフィーネがとてつもなく強い。原因は分かっている。あの黄金の鎧ネフシユタンの鎧だ。アレに備わっている再生能力がこっちの攻撃を全て無効にされてしまう。

打開策が無いまま時間が過ぎていく内にフィーネの後ろにある巨大な塔の輝きが増しているのが分かる。「直感」スキルがアレの発射準備がもうすぐ整うのを伝えてくる。

もうこうなったら四の五の言ってられない！

「風王鉄槌」ストライク・エアでフィーネとか言う女性を吹き飛ばして「約束された勝利の剣」エックス・カバリの真名解放で砲撃を止めつつあの塔を破壊するしかn

「よお」

と私が色々考えていたところでクリスちゃんが私に声をかけてきた。

「お前もしかしてあの馬鹿デカイ塔の攻撃止めようって腹じゃねえか？」

へ、何でバレたの？

「凶星つて顔だな。別にお前が考えそうな事を読んでみただけだ。ピシヤリだったみたいだがな」

クリスちゃんがちよつとドヤ顔決めて言ってきた。考えを読まれるのはちよつと不愉快だけどそれなら話が早い隙は私が作るからクリスちゃん達はフィーネの足止めをおn

「悪わりーがソイツはアタシに譲れ」

は？いやいや何言って…

「知らなかったとはいえアレを作るのにアタシも加担しちまった。ならその責任は取らねえといけねえ」

クリスちゃんが神妙な面持ちであの塔を見ながらそんなことを言う。いやでも、君みたいな十代を利用したのはあのフィーネって女の人なんだしクリスちゃんが責任を感じることは…

「それにこれ以上お前に貸しを作りたくないんでね」

ニカツと歯を見せながら余裕そうな笑顔を私に見せてくるクリスちゃん。

「だけど目が違った。私はその目を知っている。」

あの青色の子：「風鳴 翼」って子が自爆^{絶唱}技をする前に私に向けた「覚悟のある」目だ。

「アタシのパパとママは歌で世界から戦争を無くして平和にするって夢があった。それはアタシの夢でもある。アタシの歌でア^{カン}レ^{ディン}ギ^ルの砲撃を止める。だから平和にするって夢はお前に預けていいか？」

真つ直ぐと私を見つめるクリスちゃん。駄目なのは分かっている。こんな青春真つ盛りな年頃の女の子をわざわざ死に追いやるなんて許容出来るわけがない。

でも、彼^{クリスちゃん}女の言葉と顔を見てしまったら…

「…分かりました。貴女の夢、確かに預かりました」

断れる訳がないじゃないか！

私は「魔力放出」で一氣に加速し、先程から響ちゃん達の相手をしているフィーネに強襲をかける。フィーネも私の動きに気付いて響ちゃん達を手を持った鞭と蹴りで二人を弾き飛ばして迎撃の体勢を取る。

「やあああ!!」

上段から縦一線に「約束^エされた勝利^リの剣^バ」をフィーネに叩き込む。もちろん事前に読まれてしまったので鞭で防がれ罅^ヒ迫り合いの状態になる。

「フッフッフ…。どうした、止めるのではなかったのか？カ・ディンギルは発射体制に入った最早止めることは不可能。所詮、貴様など私の前では余人の域を越えんのだ！」

勝ち誇った様子のフィーネは私にそう豪語する。

「また勘違いをしましたね」

「何？」

「言った筈です私ではなく私達で止めると！」

「…!?あの小娘^{クリス}はどこだ!?!」

今更になつてフィーネが気づく。けどもう遅い。お探^{クリスちゃん}しの子は

既にミサイルで遙か上空にいる。そして…

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a
l

E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z
i z z l」

クリスちゃん 絶唱
彼女カ・デインギルの歌が空高くから聞こえてきた。それと同時にあの塔からエネルギー弾が発射される。エネルギーは真っ直ぐ一直線に月に進む。

カ・デインギル
だがそれを防ぐ様に月の側からも一線の光が向かってくる。光は塔から放たれたエネルギー弾とぶつかってその進みを止めた。「一点集束！押し止めているだ?!」

フィーネが動揺している。私はその隙を逃さず鞭との鏢迫り合いを弾きフィーネの腹を「約束された勝利の剣」で横一線に斬り付ける。「ぐっ!」

フィーネの上半身と下半身が真っ二つ割れる。にも拘らず、空中に投げ出された上半身は吸い込まれる様に下半身に戻っていき、切断面はまるでビデオの巻き戻しみたいに再生していく。

やっぱりこれじゃ決定打にならないか。

もつと質量のある攻撃で再生出来ないようしないとダメだと私は確信する。

やがて月の側から放たれた光が押し負け始め、最後には消えてなくなった。カ・デインギル塔から放たれたエネルギー弾は月に当たったらしい。でもそれはフィーネの思っていた結果と違ったみたいだ。月を見続けているとの一部が砕けていくのが分かった。

「仕留め損ねた!?!僅に逸らされたのか!?!」

本命であった月の破壊は未遂になった。そして空からキラキラと光輝くモノが月から落ちてきた。

「あ…」

「ああ、ああ…」

響ちゃん達もそれを見る。それはとても見覚えのあるモノで同時に余りにも残酷な事実でもあった。

「クリス…」

そう、彼クリスちゃん女だ。全身ボロボロの彼女はそのまま森の中へと落ちていった。

私は拳を握り締める。あの時無理にでも彼女の要求を無視して強行していればこんな事には…。

いや、後悔はしちや駄目だ。彼クリスちゃん女はこの結末を分かっている。それを望んで私もそれを分かっている。その要求を呑んだ。ここで後悔したら彼クリスちゃん女の勇姿を否定することになる。

ならどうするべきか？そんなの決まっている。

彼クリスちゃん女に預けられた夢を叶えてやらなければならぬ。

「約束エされた勝利カの剣リ」を握る力を一層強くしつつ私はフィーネを睨み付けるのであった。

運命の夜明け

「そんな…。せっかく仲良くなれたのに…。こんなの嫌だよ…。嘘だよ…」

響ちゃんがその場に崩れる。無理もない。私だって本当なら今すぐにも大声を出して泣きたい。でも今はそれよりもやる必要がある。

「自分を殺して月への直撃を阻止したか。ハッ、無駄なことを。見た夢も叶えられんとは、とんだグズだな！」

目の前で彼クリスちゃん女をグズと罵って嗤ファイネつた者を倒すことだ。

「嗤つたのか…？命を燃やして大切なものを守り抜くことを！お前は無駄とせせら笑つたか!?!」

翼さんも同じ怒りを感じて刀の切っ先を彼女ファイネに向ける。闘志が燃え上がるのを感じながら私も「約束エックされた勝利カバリの剣」を構え直す。

だがここで…

「直感」スキルが新たな脅威を知らせてくる。

彼女ファイネではない。あの塔カ・デインギルでもない。

私達の隣からだ。

「…それがっ」

「立花…!?!」

「ヒビキ…!?!」

その場に座り込んでいた響ちゃんを見る。そこには以前と同じように全身真っ黒のアンリマユのようになった響ちゃんがいた。

「夢ごと命を、握りつぶした奴の言うことかああああ!!!」

響ちゃんの雄叫びが響く。それはもう人の声ではなく獣の叫びのようだ。

「融合した GANG ニールの欠片が暴走してるのだ。制御の出来ない力に…。やがて意識が塗り固められていく」

ファイネがそんな事を言う。正直今の私には何一つさっぱりで理解が出来ない。だけど目の前に起こっている事態は理解できる。アレは響ちゃんではなく響ちゃんの形をした別の何かだ。

度も撃たせるわけにはいかない。彼女クリスちゃんが守った物を無駄にしないためにも。だけど…

「■■■■■■■■■■!!」

こうして暴走している響ちゃんもほっぴり出す訳にはいかない。クソ、何だこの板挟み状態。どちらか片方を投げ出すなんて私には出来ない。だけどどちらか一方を諦めなければ事態は解決しない。

どうすれば、どうすればいい!?

響ちゃんの拳をいなしながら考えを巡らせる。ふと視線に入る翼さんの姿。

そうだどうして私一人で解決しようとしてたんだ。

「ツバサー!」

「!?!」

翼さんがこつちを見る。

「ヒビキを押さえていただけですか!?!私はその間にカ・デインギルあの塔を破壊しますー!」

「カ・デインギルを!?!どう言う事だセイバー!」

「あの塔の閃光は一度だけで終わるものではありません!再び光放つ前に私が破壊します!」

「?!?!セイバー貴様、やはり気付いていたか!!」

フィーネが体を再生しながら驚いている。どうやら再生中は動くことが出来ないみたいだ。なら好都合。今のうちにあの塔を破壊する。

「そうか…。ならば「カ・デインギル」の破壊は私が勤めよう」

…え、今何て言った?

「セイバー貴女は今、立花を押さえるのに精一杯のはず。なら今動ける私が行くのが当然の事」

私には分かる。翼さんはカ・デインギルあの塔と心中するつもりだと。クリスちゃんの次は翼さんなんて真つ平だ!

「しかしっ!」

「…私には友がいた。正に唯一無二の友とも言える存在が。彼女は命を賭してある者を救った。それが立花なんだ。ならば今度は私が救

う番だ」

「だからと言って早死にする理由にはならないはずです！」

「案ずるな。今日に折れて死んでも、明日に人として歌うために…、

「風鳴 翼」が歌うのは戦場いくさばばかりでない！」

翼さんはあの時と同じ「覚悟のある目」をしている。そしてやっぱり…

私はその目を見てしまったらそれを無下にすることは出来ない。気持ち自体は変わってない。でも彼女達の覚悟を無下にすることがどうしても出来ない。もしかしたらこの体の本来セイの持ち主バの意思がそうさせているのかもしれない。だけど今はそんな事を考えてる時間も余裕も無い。

「…貴女に武運を」

かたじけな「忝い…。立花を頼む」

翼さんはそう答え、「カ・デインギル」に向かって走る。そこに体の再生が終わったファイネが立ちはだかつていた。私は響ちゃんを蹴飛ばしてファイネの元に「魔力放出」を用いて急接近する。

「おのれ！むぎむぎと破壊させてなるもn」

「はあああ!!」

「っ!?!」

そしてそのままファイネの胸の中心に「約束された勝利の剣」を突き刺す。ファイネも翼さんに注意が逸れてたせいで私の接近に気付かなかつたらしく完全な奇襲の形になった。私は突き刺つた「約束された勝利の剣」に魔力を送り切つ先からの「魔力放出」の逆噴射でファイネを吹き飛ばす。

ファイネはそのままカ・デインギルと衝突し、衝撃で落ちてきた「カ・デインギル」の一部と共に瓦礫に埋もれる。

これでファイネの方はとりあえず保留。後は…

「■■■■■■■■■■!!」

響ちゃんが此方に迫ってくる。やろうと思えば以前の様に気絶させる事は出来るはずだ。でもそれは違うと思う。

響ちゃん彼女は苦しんでる。クリスちゃんの命懸けの行動を嗤ったファイ

ネに怒っているんじゃない。フィーネが何故啗う事ができるか哀しんでいるからだ。

なら私の取る行動は一つだ。

響ちゃんが右腕を突き出し突っ込んで来る。私はそれを…

バシユンツッ!

受け止めた。

「■■■■■■!?!?」

「ヒビキ…、貴女は言いましたね?この拳は誰かと手を繋ぐためだと。ならその様に扱ってはいけない」

私は響ちゃんを抱き締める。割れ物を扱うように優しく、それでいて離さないように強く。

「貴女がクリスを思っただけでそうなってしまったのは分かります。ですがそのあり方はクリスを…貴女自身を傷付けている」

左の脇腹が熱くなる。響ちゃんの拳を受け止めたからだと思う。多分血も出てる。だけどそんな事はどうでもいい。今響ちゃんをこうして止められているなら。私の思いが届いたのか響ちゃんは私の腕の中で大人しくなっている。

そして…

「立花ああああ!!」

私の背後から響ちゃんの名を叫ぶ翼さんの声が轟いた。

気づいた時、私はセイバーさんの腕の中にいた。どうしてそうなったのかは分からない。でも目の前で起こっていることは理解できた。

「翼さん…」

翼さんがあのカ・デインギル塔を壊してくれた…。クリスちゃんと同じく命を懸けて…。私はセイバーさんの腕をすり抜け、その場で座り込んでしまふ。

ドガジャンツッ!

どこかで何かが壊れた音がした。視線を向けるとそこには了フィーネさんがいた。

「何処までも忌々しい!月の破壊は「バラルの呪詛」を解くと同時に重

力崩壊を引き起こす。惑星規模の天変地異に人類は恐怖し、そして聖遺物の力を振るう私の元に帰順するはずであった！痛みだけが人の心を繋ぐ絆、たった一つの真実なのに！それを…それをお前は！お前達は!!」

了子さん^{ファイネ}が長々と何かを言っているかうまく聞き取れない。翼さんとクリスちゃんがいなくなったショックが大きくて何も考えられない。

足音を立てて了子さん^{ファイネ}がこっちに来る。だけどすぐに足音は止まった。

「彼女はやらせません…!」

セイバーさんが了子さん^{ファイネ}と私の間に割って入ってきたからだ。セイバーさんは右手の透明な何かを了子さん^{ファイネ}に向け、左手は脇腹を押さえてた。よく見ると脇腹辺りの所から血が出ているようだった。ドレスみたいな綺麗な青い服が血で赤く滲んでいた。

「セイバー…! 貴様が…貴様こそが私の計画における最もなイレギュラーだった! 突如として現れては私の思い描く筋書きを悉く邪魔し、挙げ句「カ・ディングル」の破壊すら許した! 貴様さえいなければ小娘どもなど取る足らんかったのに! 貴様があ!!」

了さんが鬼の形相でセイバーさんを睨んでいた。

「本来なら貴様を亡き者にしてから「カ・ディングル」を起動する手筈だった! だが米国の犬どもの邪魔が入り計画を前倒す羽目になり、そしてこのような結末となり果てた! こうなれば最早貴様の正体も使役している聖遺物もどうでもいい! 貴様とその小娘を殺しこの恨み晴らさせてもらう!!」

「させません…! 例えこの身砕けたとしても!」

セイバーさんと了子さん^{ファイネ}が戦う。セイバーさんが透明な何かを振るい、了子さん^{ファイネ}が鞭を持って応戦してる。お互いに一進一退の戦いとはならなかった。

「ぐうっ!」

端から見ている私でも分かった。明らかにセイバーさんが押されている。その原因はきつと私だ。

了子^{ファイネ}さんはセイバーさんと戦ってる最中でも私に鞭を振ってきた。それをセイバーさんは身を挺して防いでくれている。了子^{ファイネ}さんもそれが分かってくると積極的に私を標的にしてきた。セイバーさんは脇腹を押さえながら懸命に透明な何かで鞭を弾いたりして私を守ってくれたけどそれも長く続かなかった。

「フーン！」

「ふううっー！」

了子^{ファイネ}さんの鞭をセイバーさんの透明な何かで防ぐも衝撃を受け止めきれずに後ろに吹き飛ばされ私の目の前で制止する。

「ぐっ…ぐうう…！」

セイバーさんがフラついて膝を突きそうになるのを透明な何かを杖が代わりにして必死に耐えている。

「どうして…、どうしてまだ立ち上がれるんですか…？」

聴かずにはいられなかった。二年前、奏さんが私を守るために絶唱を歌った時と同じ背中がセイバーさんと重なったからだ。

「ハア…ハア…、夢と思いを…託されました…」

肩で息をしながらだけどはつきりとセイバーさんが言った。

「クリスからは夢を…ツバサからは思いを…託されました…。私は…それを…託された者としてそれ…に答える義務があるのです！」

ボロボロの体に入力して立ち上がるセイバーさん。

「ヒビキ…、本当に折れて…しまったのですか？本当に諦めて…しまったのですか？」

「だって、翼さんも…クリスちゃんも…学校も…皆居なくなつて…、私の戦う理由はもう…」

「本当にそうなのでしょうか…？」

「え…？」

「ハア…ハア…、貴女が思ってる以上に…貴女を支えてくれる人は傍にいますよ…。彼女^{ファイネ}の様な独占的なモノではなく、互いが互いに思いやることで…起こる奇跡…。思い出してください、貴女が想う人達を…貴女を想う人達を…！」

セイバーさんがそう私に言ってくれる。その間に了子^{ファイネ}さんがセイ

バーさんの目の前にまで近付いてきて鞭を振るった。セイバーさんはそれを透明な何かで防ぐ。

「クツフツフツフ、セイバー…貴様の言葉はまるで甘い毒の様だな？聞き触りの良い御託を並べてその小娘を奮起させるつもりだろうが無駄なことだ。小娘の希望は既に絶たれ心は折れた、最早立ち上がることは出来ない！」

了子^{ファイネ}さんはくつくつと嗤っていた。

それに対してセイバーさんは…

「…フツ」

セイバーさんもまた、笑っていた。

「…？貴様何故笑う？」

「いえ、…貴女があまりにも滑稽な事を言うのでつい頬が…緩んでしまった」

「滑稽だと…！この私を！」

「貴女は言いましたね？技術の転換期に立ち合ってきたと…。ならばその技術を産み出したモノ達に…貴女と同じ共通点がある事を貴女は知っているはずだ…」

「共通点？私と同じ…？何だそれは！」

「分かりませんか？貴女と同じ様に、

最後まで諦めなかった事です」

すると何か^が聞こえてきた。

「チツ、耳障りな…何処から聞こえる、この不快なうも…歌だと…！」

そう、歌が聞こえる。そして私はこの歌を…歌声を知っている。そうだ、セイバーさんの言う通りだった。私を想って支えてくれる人達がこんなにも近くに…傍に居てくれてたんだ。

「はああ!!」

「ぐっ!!」

セイバーさんが透明な何かで了子^{ファイネ}さんを弾き出す。了子^{ファイネ}さんは後ろに滑りながら防いでいた。

「ヒビキ」

不意にセイバーさんが私を呼ぶ。私は顔を上げてセイバーさんを

見る。セイバーさんも振り向いて私を見ていた。その時、朝日が昇っていたんだと思う。セイバーさんの背中を光が写し出して神様や仏様の様な後光が照らしていた。

私はそれを…その時のセイバーさんの姿を綺麗だと思った。

例えるなら

もしも地獄に落ちたとしても、

鮮明に思い返すことができる。

それくらいにセイバーさんは綺麗だった。

「問おう。まだ歌えますか？」

「まだ…歌えます」

私は拳を握る。

「まだ頑張れますか？」

「まだ…頑張れます」

私は足に力を入れる。

「まだ戦えますか？」

「戦えます!!」

私は立ち上がった。

バーンッ!

私の周りにシンフォギアを纏う時に現れるバリヤフィールドが現れる。

「まだ戦えるだど？」

「何を支えに立ち上がる？」

「何を握って力と変える？」

「鳴り渡る不快な歌の仕業か？」

「そうだ、お前が纏っている物は何だ？」

「心は確かに折り砕いたはず…？」

「なのに、何を纏っている？」

「それは私が作った物か？」

「お前が纏うそれは一体何だっ!？」

「何なのだっ!？」

「難しい事は私には分からない。でもこの体に纏うこれは分かる。」

「これは…
シ・ン・フォ・ギ・アアアアアアアアアアアア
!!!」

其は輝ける星の聖剣

天高く舞い上がる響達。身に纏うシンフォギアは純白に輝き翼を有していた。

「皆の歌声がくれたギアが私に負けない力を与えてくれる。クリスちゃんや翼さんに、もう一度戦う力を与えてくれる。歌は戦う力だけじゃない、命なんだ！」

「高レベルのフォニックゲイン…、こいつは二年前の意趣返し!？」

『んなことはどうでもいいんだよ!』

フィーネの疑問にクリスが念話をういて答え。

「念話までも…」

フィーネは「ソロモンの杖」で再びノイズを召喚する。

『いい加減芸が乏しいんだよ!』

『世界に尽きぬノイズの災厄も全てお前の仕業なのか!？』

『ノイズとは「バラルの呪詛」にて相互理解を無くした人類が同じ人類のみを殺戮^{さつりく}するために作り上げた自律兵器』

翼の疑問にフィーネもまた念話にて答える。

『人が人を殺すために?』

『「バビロニアの宝物庫」は扉が開け放たれたままだ。そこからまるびいづる十年に一度の偶然を私は必然と変える。純粹に力と使役して
るだけのこと』

『また訳の話からねえ事を!』

「ですが貴女がその力を駆使しているのはハッキリした。つまり貴女を倒せばこの事態を收拾することが出来ると言うことですね」

響達とフィーネの会話にセイバーが割って入る。するとフィーネは「ソロモンの杖」を天に掲げる。

「応ぜよー」

「ソロモンの杖」から緑色の眩しい光が放たれる。響達はあまりの眩しさに目を覆う。そして光が収まり辺りを見るとそこには地上を覆い尽くすの大量のノイズが所狭しと現れた。

「あつちこつちから…」

「オツシヤ！ドイツもコイツもまとめてブチのめしてやる！」

「よし、地上にいるセイバーと連携しノイズを一掃すr」

「待ってください」

響達がノイズの撃退に動こうとした際、セイバーがそれに待ったをかけた。この時セイバーは自身の足に「魔力放出」を行い跳躍した後、インビジュアル・エア「風王結界」の風を利用し空を滑空し、響達の隣に接していた。

「ヒビキ達は空中のノイズをお願いします。地上のノイズは私一人で相手をします」

セイバーは響達にそう提案した。

「はあ!?オマエあの数のノイズが見えねえのか!？」

「アレを一人で相手取るなど！多少は貴女の実力は知っているが危険すぎる！」

「セイバーさん！」

もちろん響達はその提案を拒否する。

「問題ありません。少々本気を出せばあの程度の数どうという事はありません。ですので任せてもらえませんか？」

だがセイバーは少し微笑みながらそう懇願こんがんしてきた。響達はその頼みに何処と無く心地好さを感じた。この時、セイバーは無意識にはあるが「カリスマ」スキルを発動させていた。

響達はお互いの顔を見合わせる。各々が頷き、意見の満場一致を確認する。

「分かりました。地上のノイズはセイバーさんにお任せします！」

「ありがとうございます。では空の方はお願いします」

響達はそうセイバーに言いノイズの迎撃に向かう。

セイバーは地上に着地し右手に持っていた「約束エされた勝利の剣」ゲート・オブ・キヤメロットを「騎士王の宝財」にしまい代わりに別の剣を取り出す。

それは蒼い装飾が施された剣だった。

セイバーはその剣を地面に突き刺した後、片膝を着きながら両手で剣グリップの柄を握り、詠唱とこなを唱える。

「午前の光よ、善き営みを守りたまえ」

すると剣から炎が渦を巻きながら迸り始める。

その剣の名は「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」。

それはかつてアーサー王に支えてた円卓の騎士の一人「ガウエイン」が持っていたとされる「エクスカリス・ガラティーン約束された勝利の剣」の姉妹剣である。そしてセイバーは「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を持ったことでガウエインの持つスキル「聖者の数字」を発動させた。

これによりセイバーは正午までの間、通常時の三倍の戦闘力を得ることとなった。

セイバーは「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を構え直し、「魔力放出」でおびただしい数のノイズのど真ん中に突っ込んで行く。

ノイズは体を引き延ばしセイバーに攻撃を仕掛ける。だが…

「はああ!!」

セイバーの周囲には「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」が炎の壁を形成し、触れるだけでノイズが灰にしていた。逆にセイバーが「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」をノイズに振ると炎の斬撃が飛び、ノイズをまとめて撃退していた。

その勢いは止まることを知らず、地上を覆い尽くしていたノイズは瞬く間に倒されていく。

「あれがセイバーさんの本気…」

「アタシとやった時は毛ほども実力出してなかったのかよ…。つうかアレもかしなくても「完全聖遺物」じゃねえか?」

「詮索は後だ!地上はセイバー一人で事足りることがハッキリした今、我々は空中のノイズを叩くぞ!」

響達もセイバーの実力に驚嘆するも、自分達もノイズを撃退するため空を舞う。

ノイズとの戦闘がしばらく続くとある異変が起きた。残存していたノイズが一斉にリヴィアンの方角へ飛んでいく。ノイズはある一点に集中し、一つに結合する。やがてそれは徐々に大きくなり超巨大なノイズとなった。

「来たれーデユランダール!」

超巨大ノイズからフィーネの声が響く。フィーネは「カ・デインギル」の残骸に残っていた「デユランダール」を取り込みエネルギー源を

得る。

超巨大ノイズは頭部の先端から一種のエネルギー弾を作りそれを町に向け射ち放つ。

町でノイズの迎撃をしていたセイバーはそれを…

「やああああ!!」

バシユウン!!

上空に向け弾き返した。

エネルギー弾はそのまま天へと上り宇宙空間の彼方へ永遠に進むのだった。

「ええいセイバーめ！貴様は何処までも私の邪魔をしおつて！」

フィーネはただただ苛立ちを募らせ、その八つ当たりとばかりに空中にいる響達にエネルギー弾を発車する。

響達は各々回避しつつ超巨大ノイズに攻撃を仕掛ける。だが「ネフシユタンの鎧」の効果によって直ぐに再生してしまう。

「いくら^{エクストライヴ}限定解除されたギアであっても、所詮は「聖遺物」の欠片から作られた玩具！「完全聖遺物」に対抗できるなどと思うてくれるな！」

フィーネのその言葉に翼とクリスが何かをひらめく。そして三人は数秒の相談の後、再び超巨大ノイズに攻撃を行う。

まず翼が「天羽々斬」の刀身を身の丈以上の大きさに変化させ縦一文字のエネルギー弾を超巨大ノイズに放った。

【蒼ノ一閃・滅破】

縦一文字のエネルギー弾は超巨大ノイズに接触すると同時に爆発、その表面に大きな穴を開ける。だがそれも直ぐに「ネフシユタンの鎧」によって再生されていく。だが再生途中の穴にクリスがそのまま単身突入、超巨大ノイズの内部に侵入した。

「何っ!?!」

予想外の行動に目を疑うフィーネ。クリスの侵入に驚くのもつかの間、クリスはあるだけのエネルギー弾を超巨大ノイズ内部で乱射する。

内部での爆発により爆煙が立ち込める。フィーネは爆煙を外に出すため自身を守っていた隔壁を解放する。

だがそこには剣つるぎを構えている翼の姿があった。

「はああああああ!!」

「ちいっ!!」

フィーネは自身の前にバリアを展開する。

ドガアン!!

再び超巨大ノイズ内で爆発が起こる。そして爆煙の中から飛び出してきたモノがあった。

「デュランダル」だ。

「それが切り札だ！勝機を逃すな、掴み取れ！」

翼が響に向け叫ぶ。「デュランダル」はそのまま響に向かって飛んでいく。クリスがハンドガン型のアームドギアで「デュランダル」を狙撃し響の元に飛ぶように誘導しているからだ。

響はそのまま「デュランダル」を掴み取る。

すると…

「■■■■■■■■■■!!!」

再び全身が真っ黒に染まり暴走状態となる響。自分の中の荒ぶる破壊衝動を必死に押さえつける。

「違います。そうではありません」

不意に響の隣から声が聞こえる。響は己の衝動に耐えながら首を向ける。そこにはセイバーが寄り添う様にいた。

「その剣は本来その様に心をかき乱す物ではありません。目を閉じ、耳を傾け、そしてもう一度思い出さない、貴女を支え、貴女を想い、貴女を大切にしている人を！」

響はセイバーに言われたまま目を閉じる。

すると…

「正念場だ！踏ん張りどころだろうが!!」

「強く自分を意識してください！」

「昨日までの自分を！」

「これからなりたい自分を！」

「あなたのお節介を！」

「あんたの人助けを！」

「今日は、私たちが！」

響の耳に自身を想う人達の声が響き渡る。

「屈するな立花！お前が構えた胸の覚悟、私に見せてくれ!!」

「お前を信じ、お前に全部賭けてんだ！お前が自分を信じなくてどうすんだよ!!」

翼とクリスも響の手を握り彼女を想う。そう、彼女はけして一人ではない。そしてその力は彼女だけのモノでもない。

何より…

「響いいいいいいー！！！！」

彼女の陽だまりが彼女を想ってくれていた。

「この衝動に…塗りつぶされてなるものかああ!!」

そして奇跡は起こった。響を染め上げていたモノは胸の中へと収まり、彼女達は黄金に輝く。

「その力、何を束ねた!?!」

「響き合う皆の歌声がくれた、シンフォギアだああああ!!」

響達が「デュランダル」を超巨大ノイズに振り下ろす。

【S y n c h r o g a z e r】

「デュランダル」は超巨大ノイズを頭上から真つ二つに切り裂いていく。

「どうした「ネフシユタン」！再生だ!!」

この身砕けてなるものかああああ!!」

フィーネの叫びも空しく、超巨大ノイズは大爆発と共にその姿を瓦解していくのであった。

戦いが終わり夕暮れが照らし出す中、響は超巨大ノイズの中に取り残されていたフィーネを助けだし、肩に担ぎながら歩いていた。

「このスクリューボールが」

クリスはそんな響に呆れながらも優しく見守り、翼と玄十郎を中心とした二課のメンバー、響の学校の友人達、そしてセイバーもまた同じように見守っていた。

「お前、バカな事を…」

「皆から言われます。親友からも変わった子だーって」

響はフィーネを瓦礫に座らせる。

「もう終わりにしましょう。了子さん」

「私はフィーネだ…」

「でも、了子さんは了子さんですから。きっと私達分かり合えます」

「ノイズを作り出したのは先史文明期の人間。統一言語を失った

我々は、手を繋ぐことよりも相手を殺す事を求めた…。そんな人間が

分かり合えるものか…」

おもむろにフィーネは立ち上がり数歩前に歩き出す。

「人がノイズを…」

「だから私はこの道しか選べなかったのだ…」

瞬間、セイバーの「直感」スキルが何かを感じ取った。

「っ！ヒビキー！」

セイバーの叫びと同時にフィーネは振り向き様に前方に向かって鞭を伸ばす。

響はそれを避ける。だがフィーネの狙いはそこではない。

「私の勝ちだ!!」

フィーネは伸ばした鞭をそのまま引つ張り、ナニかを引き寄せる。

「でやあああああ!!」

フィーネが断末魔をあげ、「ネフシユタンの鎧」がボロボロに砕けていく。だがそのナニかは完全に引つ張られた。

「月の欠片を落とす！」

フィーネがそう高らかに言い放った。各々が砕かれた月の破片を見る。そしてそれがゆっくりと此方へ迫ってくるのが誰しもの目にも明らかだった。

「私の悲願を邪魔する根源はここです。ここで叩いて砕く！この身はここで果てようとも魂までは絶えはしないのだからな！「聖遺物」の発する「アウフヴァツヘン波形」が有るかぎり私は何度だって世界に甦る!!

何処かの場所、何時かの時代、今度こそ世界を束ねるために!!

アツハハハハ！

私は永遠の刹那に存在し続ける巫女、フィーネなのだからな!!!」
トンっ…

フィーネの大いなる宣言はある一つの音によって静まった。それは響がフィーネの胸に軽く拳を当てた音だった。

「うん、そうですよね。」

何処かの場所、何時かの時代、甦る度に何度でも私の代わりに皆に伝えてください。

世界を1つにする為に力なんて必要ないって事を、言葉を越えて私達は繋がっていけるって事。

私達は未来にきつと繋いでいけるといいう事を私には伝えられないから、了子さんにしか出来ないから。

了子さんに未来を託すためにも、私が今を守ってみせますね」

響の言葉にフィーネが何を感じ取ったかは誰にも分からない。だが…

「…フツ、本当もう放って置けない子なんだから…。」

胸の歌を信じなさい」

彼女は響の胸に指差しながらそう告げ、塵へと還っていった。

「軌道計算出ました！直撃は避けられません…。」

「あんなモノがここに落ちてきたら…私達もう…。」

絶望が目に見える形で迫って来ている。

だがそんな状況でも響は一步前に踏み出す。

「何とかする。ちよーと行ってくるから。」

だから生きるのを諦めないで！」

そして響が飛び立とうとした時…

「ヒビキ」

その肩に手を置くものがいた。

「その役目…私が引き受けます」

ずっと考えていた事がある。私がこの体で目覚めてからずっと考えていた事だ。

どうしてこの世界にセイバーがいるのか？

この世界が fate シリーズの世界で無いことは少し調べたら分かった。だって冬木市も円蔵山も存在が無いんだから当たり前だ。

ならなぜ fate の世界でないのにセイバーが存在するのか？もちろん平平凡凡の元一般人の私に分かるわけないので当初は八方塞がりだった。

「フイーネだけど彼女の言葉がそれを変えた。

『歴史に記される偉人・英雄、世界中に散った私たちは「パラダイムシフト」と呼ばれる技術の大きな転換期にいつも立ち会ってきた』

その言葉を聴き、私はある仮説を立てた。

『もしこの世界のアーサー王も fate 世界と同じ道筋を辿っていたのなら？』

もちろん確固たる確証は無い。私の妄想を逸脱しない馬鹿な仮説だ。だけどそれを踏まえると色々辻褄が合ってしまうのだ。

この世界のアーサー王が女なのは？

fate 世界と同じ理由。

なぜこの時代にいる？

「パラダイムシフト」によって過去から甦った。

など色々だ。もちろん未だに分からない事もいっぱいある。それなんで人格が私になってるのか？とか、そもそもなんでサーヴァントの能力が使えるのか？とか、むしろ疑問の方が多くなった気がするけど：ともかく、私にとっては一番重要な事も分かった気がする。

なんでアーサー王はこの時代にやって来た？

「パラダイムシフト」で過去から甦ったのはともかくこの時代に来る理由が何よりも知りたかった。

月の欠片アレだ。

きつとこの世界のセイバーもプロトアーサーと同じで世界の危機を救うために現界したんだと思う。

これもただの私の妄想かもしれない。

でも、だとしても、目の前に起こっている世界の危機に彼女が逃げ
セイバーるなんて考えられない。そして今の彼女は私なのだから。

「オイ！なに一人でカッコ付けてんだよ！」

「そうだセイバー！アレだけのモノ、貴女一人でどうこうできる筈がない！」

クリスちゃんと翼さんが反論してくる。まあだろうね。実際今の私の状態だとちよつと厳しいかもしれない。

カ・デインギル
あの塔が破壊される前に響ちゃんが暴走して私がそれを止めた時に左の脇腹を負傷した。もう尋常じゃない位の血が出てきてファイネと戦ってる間、内心結構焦ってた。

その後、ノイズがうじやうじや出てきた時に「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を取り出したんだけど…、あの時ちよつとした荒療治をした。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を脇腹の傷に押し当てていた。いわゆるしょうしやくしけつほう焼灼止血法ってやつ。

マンガで知った知識だったから半信半疑だったけどやってみたら出血自体は止まったから結果的に良し。

マジでありがとうございます、漫画の神様と無免許医師さん。

でもそれをする前はかなり血は出てたからかなり頭はクラクラしてる。正直気を許すと今にも倒れそうだ。

でも…

「貴女達は覚悟を示しました。文字道理の命懸けの覚悟を。ならば次は私がそれを示す番だ」

響ちゃんも、翼さんも、クリスちゃんも皆命を懸けて戦ってた。年頃の女の子達だ。なら今度は私がそれを証明しないといけない。今の見た目はセイバーだけど元は大人な私だ。子供が体を張ったのに大人が縮こまつてるなんてカッコ悪くて堪らない。

「だけどよー！」

「それに預けられましたから。夢と思いを」

「っ！」

クリスちゃんの夢と、翼さんの思い。どっちも叶えるには月の欠片アレは乗り越えるべきハードルだ。

なら飛び越えないと。

私は肩に手を置いた響ちゃんを見る。

「…私を信じてくれますか？」

響ちゃんも私を見る。真っ直ぐ一直線に私の目を。

「信じます。だってセイバーさんだから」

うん。それだけで充分だ。

私は少し歩いて彼女達から距離を取る。月の欠片アレを排除するには方法は一つしかないからだ。

「騎士王の宝財」から剣を取り出す。

「聖剣、解放!!」

掛け声と共に「風王結界」が解除されてこの剣の姿が露になる。解除と同時に強風が起きて羽織っていた黄色いレインコートが空に投げ出されたけど別にどうでもいい。

私はそのまま頭に過る詠唱を唱える。

「過去・現在・未来、

戦場に散っていく全ての兵達よ、

今際の際に懐く悲しくも尊き夢、

『栄光』という名の祈りの結晶。

その意思を誇りと掲げ、その信義を貫けと糾し、
今、常勝の王は高らかに、
手に執る奇跡の真名を謳う。

我が人生、我が軌跡、我が王道は此処に。

束ねるは星の息吹、輝ける命の奔流を持つて、

その姿を昇華せよ！」

詠唱と共に大地から黄金の魔力が現れそれを剣が光に変換・集束・加速させていく。

「綺麗……」

誰かがそう呟いた。きっと美しいだろう。だってこれはこの星に生きる人達の『こうであって欲しい』願いで出来ているんだから。

魔力が十分に溜められたのを感じ取り、下段に構える。プロトアサーと同じ構えと言えば分かりやすいかな？対象は上から来る。なら上に撃ち放つのが当然だ。

そして……

「約束された——」

私はその名を叫んだ。
「勝利の剣!!!」

彼女の願い

空っぽの人生だったと言えた。

この世にごく普通の人として生を受けてここへ至るまでの軌跡をなぞって行くとその答えにたどり着いた。

親に愛されて無かった訳ではない。寧ろ両親は私を大切にしてくれていっぱい愛情を注いでくれた。

友達がいなかった訳でもない。少なからず心を許して話せる友達も親友もいた。

好きなモノが無かった訳でもない。趣味と呼べるモノは色々あった。

ただ、私には一人として欠けているモノがあった。

私には夢や目標が無かった。

小学生の時、「将来になりたいモノは何？」と聴かれた時、私は答えられなかった。それなら良くあることだと思うかもしれない。時間がたてば解決することだと思いかもしれない。

だけど、中学、高校、大学に進んでも私は夢を見つけれなかった。

漠然とした未来にただただ年を取っていくだけの人生。気付けば私は大人となつて、何処にでもある中小企業に就職。毎日をただ機械の様に同じ仕事を繰り返し、繰り返し、繰り返す行方。

それを私は…

「こんなものか」

と受け止めた。そこで気付いた。

私には生きることへの執着が無いことに。

きつと今この場で死んだとしても私は後悔もなく死ぬのだろう。

いや、訂正しよう。少なからず後悔はすると思う。だけどそれも結局、私にとっては小さいことではない。だから私は死でさえも簡単に受け止められてしまうのだろう。

そして私は今日も機械の様な毎日を繰り返す。

その日の帰り道。珍しく定時に帰ることができた私は自宅に向

かつて歩いてきた。帰路は体が覚えてくれているので私はただ車などが来たときの為に少し周りを注意していれば良い。

ああ、きつと私はこの同じ動作を死ぬまでつづけるんだらうな。

ふとそんなことを思った。別段それが嫌な訳ではない。ただ当然と受け入れられる未来を口にしたただけだ。特に悲しいとか辛いとかそう言った感情は湧かない。

単にそれが「普通」と思う程度だ。

そんな時、視線の隅でボールが転がっているのが見えた。よく子供が遊ぶ時に使うような物だ。それを追いかける小さい女の子。

そして女の子の真横から迫り来る車が見えた。

そこで私の意識は一度暗転した。

気づくと私は地面に倒れていた。

一体何が起きたのだらう？

体を起き上がらせる為に腕に力を入れる。が、上手くいかない。むしろ体に力そのものが出ない。状況を確認するため視線を頼りに周りを見る。

地面には真つ黒な跡と真つ赤な液体、壁に座り込み此方を驚愕の眼差して見つめる女の子、そして地面に倒れ動かさない私の体。

それだけで十分だった。

ああそうか…、私は轢かれたのか。

酷く冷静だった。普通ならもっと取り乱したり叫んだりするはずなのに私はそれをしなかった。轢かれたと自覚してから体中のあちこちに激痛が走る。特に頭は別格に痛い。とても熱いので血が出るんだらう。

ジリジリと死が迫っているのが感じられた。脳裏に私のこれまでの人生…二十数年の走馬灯が足早に流れる。

死ぬのかな…いや確実に死ぬんだな。

流れ終わった走馬灯を見て死を実感する。それを私は…

「…まあ、いつか」

受け止められてしまった。徐々に冷たくなる私の体。周りが騒がしくなる。散歩途中の老人や部活帰りの学生などが集まり私の安否

を必死に確認していた。顔も知らない人であれ最後に誰かに看取られて死ぬるのが嬉しい事を感じながら私は意識を手放そうとした時

…
女の子の母親と思われる女性が女の子を強く抱き締めているのが見えた。女の子は依然として私を見ている。

— そうだ、あの子の人生はどうなるんだろう？

— きつと私が死んだことを負い目に感じるのだろう。心に一生取り除けない傷を抱えて生きていくことになる。もしかしたらそれが原因で不幸な人生を送るかもしれない。

— それはきつとダメだ。私みたいに夢を持ってなかった人生なんて歩ませちゃいけない。だけど今の私にはどうすることも出来ない。意識が薄れていく。

— ならせめて願おう。神様でも仏様でも何だっでもいい。だからどうか…

— あの子の人生が幸せなモノになりますように。

— そして私の人生は終わった。

— うん、その願いはとても美しいと僕は思うよ。

— 夢を持つことのなかった「君」が最後に一人の少女の夢を願う、とても美しい光景だ。

— だけどそれはトゥルーエンドではあるけどハッピーエンドではない。

— 幸せに輪が存在するのならその輪に君自身が入らなければハッピーエンドには至らないんだ。

— だから僕は君に肩入れすることにした。

— 実は此処とは違う別の世界でちよつとした厄災が迫っていてね？ それもその世界の星がまるごと星としての機能を滅ぼすほどのね。

— 本来なら彼が彼女を行かせたかったんだけど生憎今はちよつと野暮用で居ないんだ。なので君に彼と彼女の代役をお願いしたい。

— まあ、ぶつちやけた話、件の問題が出てどうしようもなくて考えてる時にちよつと偶然君が此処に迷い混んだから押し付けようとして

痛っ!?

—こら、キヤスパリーグ!人が話してるときに鼻の先端を引つ搔くとは何事だい!?

—何?そんなんだつたら私が行けつて?

—H A H A H A、嫌だよめんどくs痛い痛い痛い痛い!

—止めないかキヤスパリーグ!その鼻の先端に当たるか当たらないか微妙な距離で引つ搔くの止めないか!地味に痛い!

—ん"ん"!とまあそんなわけで代役をよろしく頼むよ。

—ああもちろん。身一つでなんて行かせないよ?どうやら向こうの世界には面白い仕掛けがあるみたいだからね。

—僕がちよつといじつて割り込みをさせて貰うから安心して良い。

—世界そのものが違うのならサーヴァントの制限も大分緩くなるはずだからね。

—僕としても出来るだけいじりやすいモノを用意するつもりだから。

—さて、それじゃそろそろ行くと良い。文字道理の第二の人生をね。

—願わくは向こうの世界で君が幸せを掴めることを祈ってるよ。

—じゃ、いつてらっしやくい!

目が覚める。

なんだかとても大切な夢を見ていた気がする。だけど内容はほとんど覚えてない。所々に霧がかかかって思い出せない。

とりあえず周りを見渡し状況を確認する。

ベッドに横たわっている私。色々な計器が周りをひしめき合っている。点滴と思われるモノが私の腕に繋がれている。

それらを見渡した後、上を向いて一言。

「:知らない天井ですね」

「リディアン音楽院地下、特異災害対策機動部二課元本部、医務室」
にて私はそう呟いた。

絶唱しない小話集 無印編

《セイバーさんのお仕事》

ごきげんよう皆さん、セイバー（人格一般人の私）です。

今回はアレを処理してから色々あったからまずそれをお話ししたいと思うよ。

まず、月の欠片を処理するため「約束された勝利の剣」の真名解放をした私だけど、どうやらその後倒れたらしい。原因は出血大量によるショック状態と真名解放による魔力の大量消費（これは私の見解）、それから連戦による過労が重なったから。

私が倒れた後は響ちゃん達が所属している「特異災害対策機動部二課」つて所に保護されて治療を施された。なんでも割りと危険な状態だったらしい。聴いてちよつとゾツとした…。

治療を終えた私はなんと一週間も眠っていた。道理で起きた時お腹がペコペコな訳だ。

私が目覚めた後、色々な検査を受けようやく一段落と言うところであのガチムチの赤髪の人こと「風鳴 弦十郎」さんがやって来て現状を教えてくれた。

何でも月の欠片の落下は「ルナアタック」と呼称され、私が放った「約束された勝利の剣」は見事欠片を破壊せしめたとのことだ。

表向きは日本の最新兵器によって破壊された、政府関係者にはシンフォギア装者が破壊したと言う感じに処理されたい。流石に私の存在はイレギュラーなので極一部の人にしか伝えられてないらしい。

で、ここからが本題なんだけど。弦十郎さんに私の正体を喋った。いや厳密には色々違うかな？

私がアースー王って点でだけ喋った。まあ弦十郎さんもあらかた予想は付いてたらしいんだけど。そりゃそうだよねおもつきし「約束された勝利の剣」叫んじゃったし気付かない方がおかしいよね。

それからセイバーの身の上（なんで性別が女なのかとか）や経緯（なんでこの世界にいるのかとか）を話した。弦十郎さんは「にわかには信

じがたい」と言っていたけど最終的には全部信じてくれた。

それで今後の身の振り方についての話しになったんだけど、私は二課にほぼ強制的に協力することになった。あれだけの事月欠片処理をやっておいて普段道理に生活出来る筈もなく、なにより私がアーサー王だと世に知られれば要らぬもめ事にも繋がってしまうからだ。だから私の事は日本政府で秘匿するからその代わりにノイズの撃退に協力してくれとのことだ。

まあ仕方ないよね。そもそも「約束された勝利の剣」ブツパする時点で色々覚悟は出来てたから。

そんな訳で私は二課に所属のエージェントとなった。

バイトについては店長に直接辞める事告げた。メツチャ引き止められたけど。

「お願い！今ウチ筆竜ひがみさん目当てのお客さんで成り立ってる所あるから辞めないで！あと出番も無く無にやりそうだから!!」

て言われた。出番って何の話し？

その後、怪我が完治して初の二課での仕事内容だけど…

「クイズ番組ですか？」

「はい…」

翼さんのマネージャー見習いだ。弦十郎さん曰く…

「非常時に奏者と共に現場に向かうなら出来る限り近くにいる方が都合が良い。なにより君はこの仕事に向いてると俺の直感がそう言っている！」

とのことだ。直感って…、私セイバーじゃないんだから。

それでそのまま翼さんのマネージャー見習いとして勉強をしていた。先輩マネージャーの緒川さんはとても親切で分からないところはキツチリ的確に教えてくれるので覚えるのにも苦労は無かった。私としても生前のOL時代に培ったスケジュール管理と書類処理が大いに役に立った。弦十郎さんの直感って当たるんだな…。

で、今回緒川さんから仕事の上達具合を見るために出演番組を一つ取ってきて欲しいと言われたので早速実行して先ほどの会話に至る。「再来週分の放送のゲスト枠がまだ決まって無かったらしくそこにツ

バサを滑り込ませた次第ですが…」

いや何やってんだよ私！翼さんアーティスト一本でやって来てる人だよ！出るとしてもドキュメントとかがギリだろ！何思いつきバラエティーの番組取ってきてるんだよ！ほら緒川さんもさつきからなんか神妙な表情で「ふむ…」とかしか言っていないし！

「やはり歌姫であるツバサには似合いませんよね…。番組側には私から連絡を入れて無かったこと」

「良いかもしれませんね」

「…え？」

え？どゆこと？

「宣伝はさせてもらってますよね？」

「…あ、はい。番組内で一分間の新曲の宣伝時間を出演条件にしました」

「なら問題無いと思いますよ」

緒川さんは何時ものハンサムスマイルで答えてくれる。え、マジで大丈夫？

「今までの僕の主観では無かった着眼点ですし、これを期に翼さんの新しい部分が光かもしれませんしね。指令がセイバーさんをマネージャーにしたのは大穴かもですね」

緒川さん凄く嬉しそう。

その後、緒川さんの巧みな話術で出演をOKしてしまった翼さん。『常在戦場』って一般常識だっけ？

《セイバーさんの食事情》

私が二課で仕事を始めて数週間。ようやく仕事にも慣れてきている頃の帰り道。

「あ！セイバーさん！」

何やら呼び声が聴こえたので振り向いてみる。

響ちゃんとその友達の未来ちゃんが小走りにこっちに来ていた。

「ヒビキにミク、今帰りですか？」

「はい、そうです！」

「こんにちはセイバーさん」

元気の良い響ちゃんとおしとやかな未来ちゃん。うくんこの二人バランスが良い。

「実はこの後ご飯食べに行くつもりなんです！」

ああそう言えばこの二人学生寮で暮らしてるんだっけ？なら晩御飯とか外食の方が楽なのかな。

「もし良かったらなんですけど、セイバーさんも一緒にませんか？」

「あ！良いね未来！セイバーさん一緒行きましょう！」

「私が？しかし…」

「私は気にしませんし、響は一度言ったら聴きませんから」

何だろう…、未来ちゃんのなんか諦めた声からしてかなり苦労してそう。ここで断つたらなんか後味悪いし…。ちやうど私も今日のご飯どうしよつか考えてたしね。

「なら、ご一緒にさせて貰いましょう」

「やったー！実はオススメのお店がありましたね！」

そうして響ちゃん達に連れて『ふらわー』と言うお好み焼き屋に入った。流石は現役女子高生。オススメと言うだけあってなかなか美味しいお好み焼きを出してくれる。

そうしていつの間にか大玉十皿目を完食してた時、

「へいき…、へっちゃや」

ガチャン！

「響!?ちよつと響大丈夫!?!」

響ちゃんがカウンターに突っ伏した。なんか私の食べっぷりに対抗心を燃やしたのか私と同じペースで食べ続けてたら五皿目でこうなった。

「おやおや、あの響ちゃんが負けるなんてね。アンタ見かけによらずよく食べるね。その細い体の何処に入っていくんだか？」

「それも致し方ないことです。ここのお好み焼きがあまりにも美味しいので箸が止まることを知りません」

「おや、嬉しいお世辞だね」

実際美味しいからメツチャ食べてるんだよね。値段も学生に優し

く設定されてるし、響ちゃん達がオススメと言う訳だ。当の本人隣で気絶してるけど…。

「さて、では十一皿目と参りましょう。店主、小麦粉の貯蔵は十分か？」

「フツ…、思い上がったね…外国のお嬢ちゃん」

結局三十皿くらい私一人で食べた。

その翌日、店主のおばちゃんは筋肉痛で臨時休業した。

《セイバーさんの世話焼き》

ピンポーン

ある日の事、私はある人物の家の呼びベルを鳴らしていた。

「んだよ、また来たのか？」

「ええ来ました」

家の亭主はやや呆れ顔で玄関を開け私を招き入れる。でも何となく嫌って顔じゃないんだよね。

「別に合鍵持つてんだから勝手に上がって良いのによ」

「そうはいきません。親しき仲にも礼儀あります。貴女がいるのなら必ず呼びベルは鳴らしますよ」

「…そうかよ」

ちよつとぶつきらぼうに答える。でも良く見ると耳がほんのり赤くなってる。素直じゃないなく。

私はそのまま亭主の案内で台所まで案内される。

うくん、使った痕跡全然ないなく。また外食三昧だったのかな？

私は予め買っておいた食材を広げ始める。

「んで、今日は何作るんだよ？」

「それは出来てからのお楽しみと言うことで」

「んだよ勿体ぶりがあって」

「料理は待つのも楽しみの一つですよ」

今の会話で分かったと思うけど。私はこの亭主に料理を作りに来ている。それも割りと頻繁にだ。理由は単純、当人が全く料理をしないからだ。

ある日ふと聴いてみたら毎日三食外食と言ったのでそれじゃ栄養偏るだろってことで私がお節介を焼いているのだ。

最初は鬱陶うつとうしがってたけど段々味が自分好みのモノになっているのが分かったのか、今では内心楽しみの一つになっているようだ。フツフツフツ、これでも毎回調味料を調整して味の好みを調査していたのですよ。

そして本日の献立は野菜たっぷりオムライスだ。

「アム…アム…、まあ悪くねえんじやねえか」

「それは良かったです」

この子の「悪くない」は普通に美味しいの意味だ。その証拠にお皿の上のオムライスがみるみる無くなっている。うん嬉しいね、そんなに喜んで貰えるなんて作った甲斐があるよ。

ただ許せないこと一つがある。

「クリス、もう少し丁寧に食べられませんか？」

「なっ!?しやうがねえだろ！前にも言ったがチビの時から戦地に居たから礼儀作法なんて知らないんだよ！」

そうは言ってもなく。お皿周りご飯メツチャ飛んでるし。口の周リケチャップでベタベタだし。何よりスプーン持つって言うか握ってるよね。この体のせいもあるんだけど見るに耐えない。

とりあえず今後は礼儀作法も教えてあげよう。

と考えつつ私はナプキンでクリスちゃんの口を拭いてあげるのだった。

《セイバーさんのお給料》

本日は給料日。働く人誰しもが心踊る日だ。かく言う私もメツチャ心踊ってる。

で、通帳の中見てみると…

「…フア!?!」

えちよ、どゆこと!?!何この金額!?!

待て待て待て、落ち着け私。こんな時はプツ〇神父を見習って素数を数えろ。素数は一と自分の数でしか割れない孤独の数字。

一、三、五、七、九、十一…
いやいやそれは奇数だバカ!

ともかく現状確認だ。後ろから0の数を数えよう。何かの間違いかもしれないし。

一、二、三、四、五、六、七…

うん、間違いなくあるな…。

うへえ…マジか。嬉しいさよりも恐怖が沸いてくるよ。確かにノイズを倒すために命掛けの戦いに身を投じてるけどだからってこんなに貰えるの? 権力怖っ!

でもまあ貰えるモノなら素直に喜んで貰っておくべきなのかな?

あれ、なんかそんな風に考えると不思議と落ち着いてきた。

ふう、取りあえずコレをどうするかだな。食費はコレだけあれば一月持つだろうし、他の生活費に関しても二課から少し(一般的な少しじゃないけど)出して貰ってるから心配がないね。

となるとほとんど趣味に使えるのか。て言っても私この体になつてから趣味ってモノがほぼ皆無だからなく。かと言って使われないのも何か勿体ないしどうしよ?

あ、そう言えば前から欲しい物があつたわ。でも私一人だと良くわからないし詳しくそんな人に聞いてみるか。

「で、私の元に訪れたと」

「ええ。ツバサならバイクに詳しいと思ひまして」

そう。今私が欲しい物はバイクだ。二課に所属する前から何か移動手段が欲しいと考えていて真つ先に思い付いたのがバイクだった。まあセイバーもZeroで乗ってたしいけるだろうって感じで。

「今後、ノイズ退治で使う機会がある筈なので今のうちに取ろうと思ひまして」

「確かに。普段仕事で一緒にいるセイバーと足並みを揃えて現場に向かうなら良いかもしれないな。それでどんなバイクがいいんだ?」

「そうですね…。大きくても良いのでとにかくすぐに現場に迎えるだけのスピードの出るモノがいいですね」

「…それなら一台しかないわね。私が仕入れておくので、セイバーは

免許などの事を指令に相談してはどうか？」

「分かりました。ではバイクの方はお願いします」

その後、弦十郎さんに相談し二課内で免許が取れるように教習を設けてくれることになった。ついでだからバイクの他に普通免許の方も取れるようにしてもらった。教習って言ってもほとんど一般常識の問題だったからすぐ分かり、実地試験についても「騎乗」スキルのおかげでスイスイ行き、特に苦勞もなく免許は取れた。

で、バイクの方はなんだけど。

完全にZ e r oでセイバーが乗ってたアレだ^{VIMAX}った。しかもなか二課の技術スタッフが悪乗りしたらしくかなりの改造(ほぼZ e r oと同じ仕様)を施したらしい。

試しに乗ってみたら教習用のバイク何かとは比べ物にならないくらいメチャクチャ運転しづらかった。それでも乗ってたのは「騎乗」スキルのおかげだと思う。

ちなみに仕入れ主の翼さんはちよつと走らせた後転けてた。

G編

星が造りし聖剣と神が造りし神槍

「ルナアタック」から約三ヶ月くらい、私はとある場所にいた。

「はい、そちらの照明はその様をお願いします。」

ええ、こちらもその様におん『prrrrr、prrrrr』

失礼。はい、筆^{ひがみ}竜です。はい、その件でしたら以前FAXした内容で問題ありません。はい、では失礼します」

せわしなく動く私。今は猫の手も借りたいくらい本当に忙しい。

私がいるこの場所は翼さんと今海外で人気絶頂中の「マリア・カデントツアヴナ・イヴ」さんのコラボライブの会場だ。

今現在はそのライブの最終チェックで私を含めたスタッフ達があちこち走り回っている。私もさつきから営業用の携帯が鳴りっぱなしだ。

『prrrrr、prrrrr』

と思つた矢先にまた鳴つた。もう今度は何処の部署？て、あれ？私手に営業用の携帯持つてるのに鳴ってない。あ、そうか。仕事は仕事でもコツチの方が。

私はスーツの胸ポケットから通信機を取り出す。

「はい、セイバーです」

『俺だ。響君達の方で状況が変わつたので報告する』

通信機から弦十郎さんの声が聞こえる。何でも「ソロモンの杖」の護送任務についていた響ちゃん達は無事に目的地の軍事施設に護送を完了するもその軍事施設でノイズの襲撃に遭い、「ソロモンの杖」と研究者の「ジョン・ウエイン・ウエルキングトリクス（長いから皆ウエル博士って言ってる）」さんなどが行方不明になっているらしい。

『状況については以上だ。緒川には既に伝えてあるがこの件、今は翼には黙っていてくれ』

「今は、ですか？」

『ああ。ノイズの襲撃ともなれば今日のステージを放り出しかねんか

らな』

「了解しました」

でも翼さんのことだから何かの拍子で気づきそうだけどなく。

なんて事を考えながら私は通信機をしまい、残っているチェック項目にチェックをいれるのだった。

「ありがとう、皆ー!」

で、時間は過ぎて大歓声の中翼さんは皆に手を振っている。私は舞台裏でその様子を見ていた。

まだ一曲目なものにもすごい盛り上がり。やっぱトップアーティストって違うわ。そしてその一人を私見習いだけどマネジメントしてるんだよね。考えたらちよつと震えてきた。

「私は何時も皆からたくさんの勇気を分けてもらっている。だから今日は私の歌を聞いてくれる人達に少しでも勇気を分けてあげられたらと思ってる!」

翼さんらしいコメントだ。普段から一緒に仕事してる身として色々な翼さんを見てきたけどアレが一番素の翼さんなんじゃないかと私は思う。

「私の歌を全部世界中にくれてやる!振り返らない、全速力だ!ついてこれる奴だけついてこい!」

そしてコラボ相手のマリアさんもイメージ道理だね。本番前に楽屋で翼さんに挨拶（多分ほぼカチコミ）に来てた時と同じだ。

「今日のライブに参加できた事に感謝している。そしてこの大舞台に日本のトップアーティスト「風鳴翼」とユニットを組み、歌えた事を」「私も素晴らしいアーティストと巡り会えた事を光栄に思う」

「私たちは世界に伝えていかなきゃね。歌には力があるって事を」

「それは世界を変えていける力だ」

ステージ上で互いにガツチリと握手する二人。何となくだけど相性がいいのかな?

てかさつきも言ったけどまだ一曲目だからね?なんかもうフィナーレみたい空気になってるけど…。

「そして、もう一つ…」

ん、なんだ？私の「直感」スキルが何か警告を発している。

すると次の瞬間、ステージを多い尽くすほどのノイズが出現した。突然の出来事に観客もスタッフもパニックになっている。

だけど、

「うろたえるな!!」

マリアさんの叫声によってパニックが沈静化された会場。だが状況はかなり緊迫している。観客もスタッフも皆がステージ上の二人翼とマリアに注目している。

私はその隙をついて人気の無い場所まで移動する。

『Pr r r r r、p r r r r r』

移動してすぐに通信機で緒川さんに連絡を取る。二コール目で直ぐに繋がった。

『セイバーさん！今どちらにいますか？』

「ステージ裏の方です。今人気の無い所まで移動しました。そちらは？」

『観客席側です。ほぼセイバーさんと真反対の位置ですね。そちらから翼さんの状況は確認できますか？』

物陰に身を隠しながらステージを見る。どうやら翼さんはシンフォギアを纏おうとしているらしい。

だけどそれは難しい。シンフォギアは日本政府によって概要だけ公開しているけどその奏者については秘匿している。ここで翼さんがシンフォギア奏者とバレると後々の面倒事になるのは明らかだ。

でも翼さんの性格上、本当に追い込まれた状況になったら絶対に迷い無くシンフォギアを纏うだろうね。例えば観客がノイズに襲われ始めた時とか。

おっと、色々考えてたらどうやら状況に動きがあったみたいだ。

マリアさんが全世界に対して宣戦布告をした後、

「Gr a n z i z e l b i l f e n g u n g n i r z i z z
1」

なんとシンフォギア、しかも GANG ニールを纏った。

「私は…、私達はフィーネ！そう…終わりの名を持つものだ!!」
マリアさんが自らをフィーネと名乗った。

まさかもう甦ったの!?

でも何だろう…。何か違和感がある。私の勘違いかもしれないけど三ヶ月前に会ったフィーネと何か違う気がする。

そうこう考えている間にも状況は動き続ける。

「我ら武装組織フィーネは各国政府に対して要求する。そうだな…、差し当たっては国土の割譲かつじょうを求めようか？もしも二十四時間以内にこちらの要求が果たされない場合は、各国の首都機能がノイズによって風前となるだろう」

無茶な要求だ。国地の割譲なんてたった一日で可決出来る様なものじゃない。何の目的でそんなことを要求するか分からないけど何時までもむこうのペースで進ませたらダメだ。

まずは冷静に状況の優先度を考える為に自問自答しよう。

まず最も優先すべき事は？

この会場の観客の命だ。

その為には何をすべき？

ノイズの撃退。

その次にすべき事は？

翼さんの安全の確保。または戦闘に参加できる状況にすること。

それによる一番の障害は？

TV中継。

よし、まとまった。後は状況に応じて対応するだけだ。幸い今は私は一人じゃない。

「シンジ、そこから中継室までどれほどかかりますか？」

『そうかからない筈です』

「ではTV中継を止めてください。私はノイズ撃退後、観客とツバサの避難をさせます」

『大丈夫ですか？仮にもノイズが相手です。セイバーさんが相手ならともかく、それが観客の皆さんに回ったら…』

「問題ないと思います。人質を取ると言う事は何かしら叶えたい要

求、もしくは成し遂げたい目的があるはず。それをみすみす殺しては今後の交渉の妨げになります。実際マリア・カデンツァヴナ・イヴは、誰一人見せしめとして殺してない。有利に交渉を進めるために出来るだけ穏便に話を進めようとする意思を感じます」

『なるほど…、了解しました。中継の方は僕が何とかします。セイバーさんもお気をつけて』

そう言い残し緒川さんは通信機を切る。

さて、それじゃ私も動きますか。

私は周りに人がいないことを再度確認し第二霊基となり
ゲート・オブ・キヤメロット
「騎士王の宝財」から「ハイド・オブ・ギネヴィアの隠れ布」を取り出しステージ裏から「魔力放出」を使い勢い良く飛び出した。

ステージ上では二人の歌姫がにらみ合いを続けていた。

「どこまでが本気なのか…?」

「私が王道を敷き、私達が住まう為の楽土。素晴らしいと思わないか？」

一触即発の空気がその場を支配していた。

だが、その状況は一変する。

ザシユン!

突如として会場を囲んでいたノイズ達が次々と倒されていく。

「っ—」

「っ!?!何事—」

翼とマリアも突然の事態に驚きを隠せない。

「鎌鼬だ…」

観客の一人がそう呟いた。

「そうよ、鎌鼬よ!」

「鎌鼬が俺達を助けに来てくれたぞ!」

観客達が騒ぎ始める。

この約三ヶ月の間、都市伝説「かまいたち鎌鼬」は日本政府のシンフォギアについての情報開示と同時に二課による情報操作によって対ノイズ用兵器の実験運用で起きた偶発的な自然現象としてほのめかされてい

た。しかし未だに「鎌鼬」を信奉する者は多く、二課としても悩みの種として頭を抱えていた。

今回は偶々「鎌鼬」を信奉する者が会場内におり、それが感染症の様に人々に広がったと言える。

会場内のノイズを全て撃退した「鎌鼬」はステージ上にいる翼の真横に降り立つ。

「ツバサ」

「やはりセイバーか」

もちろんその正体はセイバーである。セイバーは以前と同じく「ギネヴィアの隠れ布」と「風王結界」を使い透明人間となり会場内のノイズを撃退していたにすぎない。

「今シンジが中継の停止に向かっています。もう少しの辛抱です。私が彼女の相手をしますのでツバサは観客の避難を誘発してください」「すまない、助かる！」

小声でのやり取りの後、セイバーは MARIA に肉薄する。MARIA は何かの接近を感じ、剣に見立てたマイクを前に突き出しガードの体勢になる。

ガキユン!!

「くっ!!」

前方から来た衝撃に顔を歪める MARIA。衝撃を受け止めきれずそのまま後ろに滑る。手にしていたマイクは中間から真っ二つに切れていた。

「今だ！鎌鼬がフィーネの相手をしている内に皆は逃げるんだ！」

翼が観客に向け叫ぶ。鎌鼬の勇姿に見とれていた観客は一斉に出口に走る。

「人質がつ!?!」

MARIA も人質が避難をしていることに気付くが構っている暇がない。なにしろ見えない何かが自分に襲い掛かって来ているのだから。「ぐっ!」一体何処にいる!?!」

MARIA は五感の全てを総動員して四方八方からくる何かの攻撃を凌ぐしかなかった。だが完璧には凌げず徐々にギアの一部を破壊さ

れていく。

やがて観客の避難が終わり、緒川によってTV中継が中断された。

「Imyuteus amenohabakiritron」

それを確認した翼はその隙にシンフォギアを纏う。

「はああ!!」

「ちいー!」

刀を持った翼は大きく飛び上がりマリアに斬りかかる。マリアはバックステップでそれを避け翼と距離を取る。

「セイバーすまない!遅れた!」

「いえ、頃合いです」

翼の隣に立つセイバーは「ギネヴィアの隠れ布」を脱ぎ捨て

「騎士王の宝財」の中へとしまう。

「シンフォギア装者が二人!」

「いえ、残念ながら私は装者ではありません。ですが貴女を倒す者ではありません」

驚愕するマリアにそう答えながら「約束された勝利の剣」を構え直すセイバー。

「…」つ訊きたいのだけど、貴女の手を持つその透明な得物…それは剣かしら?」

「さあどうかな? 戦斧かもしれぬし、槍かもしれぬ。いや、もしや弓と
言う事もあるかもしれぬぞ、槍使い」

「く、ぬかしなさい剣使い!!」

セイバーは軽く微笑みながら軽口を叩き、マリアはそれに焦慮する
のであった。

偽善と邪悪

マリアさんと一定の距離を置いて剣を構える私と翼さん。取りあえず観客に被害が出る事態と翼さんがシンフォギア装者であることがバレる事態はなんとか免れた。

「いざ、推して参る!!」

翼さんがマリアさんに仕掛ける。マリアさんは数回の斬撃をかわし、軽い跳躍と共に黒いマントで翼さんを攻撃してきた。

「はあああ!」

ガキーン!

私はそれを「約束された勝利の剣」で弾き返し、その反動を利用して右足で軸を取りながら右回転をし、半回転した所で左足でマリアさんのお腹目掛けて回し蹴りを繰り出す。

ドスツ!

「グッ!」

見事に蹴りが命中し顔を歪めるマリアさん。蹴られた衝撃を利用してこちらとの距離を取る。どうやらモロに入ったらしくお腹を押しさえながら少しフラついている。

「ツバサ、アレはもしや?」

「ああ、間違いない。嘘八百などでは無い、正真正銘本物の聖遺物「ガングニール」だ」

やっぱりか。ギアの一部とマントを弾き返した時に感じたけどアレはガングニールみたいだ。響ちゃんやんと訓練する時にギアと「約束された勝利の剣」がぶつかる時と同じ感覚があったからね。

「…フツ、ようやく御墨を付けてもらえたようね…。そう、これが私のガングニール!何者をも突き通す無双の一振り…!」

マリアさんがそう答える。ただあんまり無理しない方がいいと思うよ?一応後で捕まえる為に手加減はしたけどサーヴァントの蹴りなんて普通だったら悶絶ものだし。現に今のマリアさん冷や汗出して苦しそうだし相当痩せ我慢してるのがしみみ見て取れるし。

「だからとて、私が引き下がる道理などありはしない!」

うん、翼さん気づいてないのかな？うん、多分全然気づいてないね。マリアさんの痩せ我慢で騙されたのかな？でもまあ、一回気絶させた方が良くのかもね。響ちゃん達がヘリでこっちに来てくれてるけど、あんまりこの状況が長引くのもよろしくない。

仕方ない、悪く思わないでくださいねマリアさん。

私は翼さんに視線を送る。翼さんもそれに気づき私を見る。数秒の沈黙の後、翼さんが頷く。三ヶ月近く一緒に仕事をしていたんだ。目線で会話なんて雑作もない。

「約束された勝利の剣」を構え直した私は「魔力放出」で一気にマリアさんに接近し素早い斬撃を浴びせる。

マリアさんも黒いマントで防御してるけど先程までの俊敏さは感じられない、まだ私の蹴りのダメージが残っているからだろう。なら好都合だ、反撃も後退も出来ないようにとにかく間髪入れずに速い攻撃を続ける。

その隙に翼さんは二本の刀を取りだしそれらの柄頭を繋ぎ合わせ双刃刀の状態にし、それを回転させる。やがて刀から炎が上がり始め、それと同時に翼さんは足に付いているギアでホバー移動しながらこちらに接近してくる。

私はマリアさんの頭上を飛び越えるように飛び、タイミング良く翼さんの攻撃に繋がられるようにする。そしてそのまま私の攻撃で動けずにいたマリアさんに斬撃を与える。

【風輪火斬】

攻撃は確実に入ったものの、マリアさんは今だ健在。どうやら私の攻撃が激しすぎた為にマントを防御一点に集中させていたようだ。ただそこから翼さんの二撃目が迫ってくる。

「話はベッドで聞かせて貰う!!」

翼さんがマリアさんに接近している瞬間、私の「直感」スキルが何かを感じ取った。

この感じ…上か!

私は足の裏に「魔力放出」を施し一気に跳躍する。

上空には恐らくシンフォギアと思われるモノを身に纏っているピ

ピンク色と緑色の子がいた。ピンク色の子は頭に付いているツインテールみたいなギアを展開して何かしらの攻撃をしようとしていた。「えっ!?!」

突然私が跳んで来たのに動揺したのか。ピンク色の子の顔が困惑に染まっている。私はそのまま「約束された勝利の剣」の表面を使い、ピンクの子のお腹に峰打ちをする。

ドボウ!

「コホッ!?!」

「約束された勝利の剣」はピンク色の子のお腹に抉り込み、その子の体をくの字に曲げた。

「調っ!?!」

後ろにいた緑色の子に動揺が走っているのが見えた。私はすかさずピンク色の子を踏み台にして再び跳躍し緑色の子の頭上を取る。「約束された勝利の剣」を上段に構えそのまま落下の勢いを利用し振り下ろす。

「やあああー!」

「ぐう!?!」

緑色の子は動揺からか鎌っぽい武器を横に持ちガードの体勢を取った。だけどそれは悪手だ。

私が振り下ろした「約束された勝利の剣」は鎌っぽい武器に命中する。だけど衝撃の逃げ場が無い空中だったので緑色の子はそのまま猛スピードでステージ上に叩き付けられた。

ピンク色の子もさつき踏み台にした時におもいつきり踏み込んだから緑色の子と同じくステージ上に向かって叩き付けられている。

「調っ!?!」

マリアさんが二人向かって名前を叫んでいた。やっぱりこの二人は協力者だったか。

「私を相手に気を取られるとは!」

動揺しているマリアさんに翼さんが迫る。

ザシユン!

翼さんの攻撃がマリアさんに直撃し、その衝撃でステージ上に叩き

込まれた二人の元に吹き飛ばされるマリアさん。

で、ここでちよつと予想外の事が起きた。

「どしゃ降りの十億連発!!」

【BILLION MAIDEN】

「おおお!!」

ドガシャン!!

ヘリでこつちに急行していたクリスちゃん和響ちゃんがこのタイミングでやって来た。そしてクリスちゃんが両手のガトリングで三人に弾丸を浴びせる。マリアさんはマントを広げ、倒れている二人を調・切歌守る様に弾丸を防ぐ。だけどその隙に響ちゃんがステージに拳を叩き付け、腕のバンカーを起動させる。バンカーの衝撃で吹き飛ばされ、ステージの後ろにある大型モニターに体を叩き込まれるマリアさん達三人。

うん、なんか知らん間に合体攻撃みたいなの出来ちゃった…。

ここで第三者から見た光景を私なりに説明しよう。

まず響ちゃん達無傷シンフォギア装者と私を含めた四人。で、あつちちは全身ボロボロで満身創痍のマリアさん達シンフォギア装者三人。

…なんだろう。端から見たら私達の方が悪役じゃない？世界に宣戦布告したのあつちだよね？

「止めようこんな戦い。今日出会った私達が争う理由なんて無いよ！」

響がそうマリア達に告げる。だが「月読 調」はまるで親の敵の様な顔で響を睨む。

「そんな…綺麗事…をつー!」

「綺麗事で…戦うヤツの言う事なんか…信じられるもんか…デス!」

調と「暁 切歌」はセイバーから受けたダメージを歯を食い縛りながら耐え、響にそう言い放つ。

「そんな…。話せば分かり合えるよ。戦う必要なんk」

「偽善者…。この世界には…貴女の様な偽善者が…多過ぎる…!」

【α式 百輪廻】

調は頭部に付いているアームドギアを展開し小型の円盤状ノコギリを響に向け射出してくる。響に迫り来るノコギリを前に出た翼は刀を回転させる事で防ぐ。

「何をしている立花！」

翼が響に大渴する。その間にクリスは両手のガトリングでマリア達三人を射撃する。三人は散開することでそれを避け、跳躍することで回避した切歌はそのままクリスに接近し鎌で攻撃してくる。

「近すぎんだよ！」

クリスもまた跳躍することで鎌の攻撃を回避しアームドギアをガトリングからボウガンに変更し切歌に向け矢を放つ。切歌はそれを弾いて無効にするが、視線が上空のクリスに向いていたため「魔力放出」で懷まで急接近してきたセイバーに気付かなかった。

「やああー！」

「っ!？」

ガキユン!!

セイバーの接近に間一髪気付いた切歌は鎌で防御するも重すぎる一撃と衝撃に耐えられず再びステージ側に吹き飛ばされる。

「この…調子に乗るなデス!!」

【切・呪りeTTお】

吹き飛ばされながらも何とか体勢を立て直した切歌は三日月の刃をセイバーに向け飛ばす。

だが…

「フンッ！セイッ！」

セイバーは意図も容易くそれを碎き、再び「魔力放出」で切歌に肉薄する。技を碎かれた事による動揺から、すぐに行動が出来なかった切歌は棒立ち同然だった。そこに懷に入ったセイバーが切歌の首筋を狙い「約束された勝利の剣」の表面を叩き付けた。

バジャン！

「かはっ!？」

首に大きな衝撃を受けた切歌はそのまま倒れ伏す。

「どうやら其れなりの戦闘訓練は受けている様ですが、まだまだ未熟

ですね」

セイバーは「約束された勝利の剣」の切っ先を切歌に向けながらそう告げた。

一方響の方は…

「私は困っている人を助けたいだけで…、だから！」

「それこそが偽善！痛みを知らない貴女に、誰かのため何て言って欲しくない!!」

〔γ式 卍火車〕

調は大型の円盤状ノコギリを響に向け射出する。偽善と断言された響はショックで動けずにいた。

ガキユーン！バシユーン！

そこにセイバーが響の前に立ちはだかり二つのノコギリを「約束された勝利の剣」で叩き切る。

「ヒビキ！しっかりしなさい！今は戦闘に集中するのです!!」

「は、はい！」

セイバーが響を奮起させた後、「魔力放出」で調に肉薄する。

調は頭部に付いているアームドギアを変形させ大型の円盤状ノコギリを展開させセイバーに攻撃する。

「邪魔しないで！私はあの偽善者を！」

「なぜ貴女はヒビキを偽善者と断言出来るのですか？」

「そんなの決まってる！アイツは何も知らない！綺麗事を並べてるだけで何も背負ってないヤツに誰かを救うなんて言われたくない!!」

「では問いましょう、貴女はヒビキの何を知っていますのですか？」

「そんなの知らなくてもわk」

「知らなくても分かるなんてモノはありません！」

セイバーは調の頭部に付いているアームドギアの関節部分を破壊しノコギリを無力させる。

「貴女は言いましたね。痛みを知らない彼女は偽善者だと。では貴女は今までヒビキの辿った人生を見たことが…、いや知ろうとしましたか？」

「そ、それは…」

「知らないことは罪ではありません。しかし知ろうとしないことが罪なのです。ただ上っ面だけで人を判断しそれを偽善者と罵る貴女こそ偽善者以前の邪悪と知りなさい！」

「ぐうう!!」

調はセイバーの言葉を認めたくない思いからスカートをノコギリに変化させまるでバレエのスピンの様に接近しセイバーに攻撃を仕掛ける。

【△式・ 艶殺アクセル】

セイバーは「約束された勝利の剣」を下段に構え、迫り来るノコギリを待ち構える。やがて調がセイバーの懐にまで接近した瞬間…

「はあああー!」

ガキユン!

下段に構えた「約束された勝利の剣」を上振り上げた。スカートのノコギリと衝突したそれは調の体を宙に浮かせた。セイバーの筋力：Bのステータスであれば小柄な調の体を浮かせることなど造作もなかった。セイバーは宙に浮いた調の足を左手で掴み、そのまま右回転を一回行い勢いを付け、調を地面に叩き付ける。

「カハッ!」

背中からの衝撃に気絶しそうになる調。朦朧とする中、目の前には「約束された勝利の剣」を構えたセイバーが立っていた。

調はその姿に恐怖しながらもこの状況をどうするかを模索していた。

その時であった。

突如ステージの中央が光出し、そこから薄緑色の巨大ノイズが現れた。

「うわあ…何!?あのでっかいイボイボ…!」

「増殖分裂タイプ…」

「こんなの使うなんて…聞いてないデスよ!」

双方共に予想外の事だったため一時的に戦闘が停止していた。

「ママ?」

『三人共退きなさい。余りにも予想外が過ぎました。今貴女達を失う

訳にはいきません』

「分かったわ」

マリアは両腕のギアを連結させそれを槍に変化させる。そして槍の先端を大型ノイズ向けエネルギー弾を放つ。

【HORIZON↑SPEAR】

エネルギー弾は大型ノイズに命中し、爆散したノイズの破片が会場中に飛び散る。

その隙にマリアは調と切歌を担ぎ撤退する。

「ここで撤退だ?!」

「せっかく温まってきた所で尻尾を巻くのかよ!」

翼とクリスが悪態をつく。すぐに追跡したい所だが目の前の状況がさせてはくれなかった。

飛び散ったノイズの破片は一つに集まろうと動いていた。

翼がノイズを切り裂くも、むしろ増殖させ数を増やしていた。

「こいつの特性は増殖分裂!」

「ほうっておいたら際限ないってわけか。このままじゃここから溢れ出すぞ!」

冷静にノイズの特性を分析する翼とクリス。そこに緒川の通信が入る。

『皆さん聞こえますか?!会場のすぐ外には避難したばかりの観客たちが居ます!そのノイズをここから出すわけには…』

セイバーの活躍により会場の中から避難できた観客達であったが、外に出た後の避難誘導が今だ滞っており多くの観客が立ち往生の状態であった。

「迂闊な攻撃では増殖と分裂を促進するだけ…」

「どうすりゃいいんだよ!」

「絶唱…、絶唱です!」

方法を模索していた中、響がそう提案した。

「あのコンビネーションは未完成なんだぞ!」

「増殖力を上回る破壊力にて一気殲滅。立花らしいが理には適っている」

「おいおい本気かよ!」

クリスが不安要素に疑念を抱く中、増殖を続けるノイズ。すでに一刻の有余もない状況であった。

「では私の力も合わせましょう」

「セイバーさん?」

そこに沈黙を保っていたセイバーが声をかけた。

セイバーは「約束された勝利の剣」を「騎士王の宝財」にしまい、代わりに「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を取り出す。

「この剣の真名解放を行い周りの破片ノイズを撃退します。ヒビキは中央にいる大型のノイズを叩いて下さい。これならば大型ノイズアレを倒すだけの出力に絞れ、不完全であっても成功率は上がるはずです」

「今は一刻の有余も無い。それでゆこう!」

各々が顔を見合せ同意する。響達三人は手を繋ぎ始める。セイバーは彼女達の前に立ち「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を構える。

「行きます! S2CAトライバースト!」

響の掛け声と共にセイバーは構えていた「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を宙に投げる。

「Gatrandis babel ziggurat eden
al

Emustolronzen fine el baral
zizzl

Gatrandis babel ziggurat ed
enal

Emustolronzen fine el zizz
l」

「この剣は太陽の映し身!」

もう一振りの星の聖剣!」

響達が絶唱を歌い始めセイバーが詠唱を唱える。

「スパープソング!」

「コンビネーションアーツ!」

「セット!ハーモニクス!」

「あらゆる不浄を清める焔ほむらの陽炎！」

絶唱のエネルギーが響一人に集中し、「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」は円を描きながらセイバーの元へと落ち、それをセイバーはキャッチする。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣!!」

セイバーが「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を横に振る。すると炎の斬撃が会場内にいたノイズの破片を焼き尽くす。そして中央にいたノイズの身を剥がし骨となる。

「今だ！」

「ヒビキ！」

「レディ！」

響は腕のハンマーパーツを連結させ右腕にエネルギーを集中させる。

「ぶちかませ!!」

「これが私達の…！絶唱だああああ!!」

そしてそのまま右腕を大型ノイズに叩き付け、絶唱によって得られたエネルギーを全て解放する。解放されたエネルギーが虹色の竜巻となり天に上る。

大型ノイズの撃退後、各々がギアを解除していく中、響がギア解除後にその場に座り込んでしまう。

「無事か!?立花！」

「へいき…へっちゃらです…」

「へっちゃらなもんか！ 傷むのか!? まさか、絶唱の負荷を中和しきれなくて…?」

翼達が響に駆け寄る。しかし響が座り込んでいたのは絶唱の負荷によるモノではなかった。

「私のしてることって偽善なのかな…?胸が痛くなることだって知ってるのに…」

響は調の一言に心を痛め涙していた。

「ヒビキ」

そこにセイバーが膝を付き響と同じ目線になって優しく語りかけた。

「セイバーさん…?」

「貴女に問います。あのシラベと言う子は貴女を 偽善者と言いましたね?では貴女は今までの善行に何か野心はありましたか?」

「…無かったと思います。私はただ誰かを助けたくて…」

「では二度問いましよう。ヒビキ、貴女は彼女に偽善者シラベと言われて人助けを止めますか?」

「…止めません。きつと止めません」

「ならば突き進みなさい。例えそれが偽善であつてもそれを突き通す覚悟が必要です。ヒビキ、貴女はいざという時、覚悟の出来る者と私は知っています。ですからどうか迷わず突き進みなさい」

「…はいー」

セイバーの激励に少しだけ心を持ち直す響。

「そしてもう一つ」

セイバーは徐に響を抱き寄せる。

「え…あの、セイバーさん?」

「人間、本当に苦しい時は溜め込まず泣いていいのです。もし私のお節介でなければ私の胸で泣く事を許します」

そのセイバーの言葉に響は再び涙する。顔をセイバーの胸に押し付け声を押し殺して泣き続けた。それを翼とクリスは暖かい表情で見守るのであった。

絶唱しない小話集 G途中編

《セイバーさんの気晴らし》

「ふうう、これで取りあえず一段落だな」

二課仮説本部内、作戦指令室で弦十郎が深いため息を吐きながらそう述べた。

「お疲れ様です司令。暖かいモノどうぞ」

「ああ、暖かいモノどうも」

友里から渡された暖かいモノを受け取り一口付ける弦十郎。

今現在、弦十郎達を取りかかっているのは先日のコラボライブでの後処理である。フィーネを名乗る武装組織の調査、各メディアへの対応、人的被害こそ出なかつたものの観客を危険にさらした事による政府関係者並びに親族への謝罪など、事件で起きた裏方周りの仕事がつとつと押し寄せていた。

響達シンフォギア装者が心置きなく戦えるのはこうした後ろ楯がしっかりしているからである。

「司令、ちょっと休憩行ってきたらどうですか？その間は俺達がやっ」とくんで」

「そうね、ここの所ずっと椅子に座りっぱなしだし、ちよつと外の空気を吸いに行つてはどうですか？」

「うくん、そうだな。ちよいとレンタル屋でも覗いてくるかな」

弦十郎は椅子から立ち上がり指令室の出入口へと向かう。

プシュー

「ただいま戻りました」

そこでセイバーが指令室に現れる。

「おう、戻つたかセイバー。収穫はどうだった？」

「今だ途中経過ですね。今シンジが別経路で調べてくれているのですが…。所でゲンジウロウは何処かに行かれるのですか？」

「ああ、軽く小休止を入れようとな。あ、そうだ！セイバー、この後空いているか？」

「え…、まあ確かに空いてはいますね。今調査中の資料をまとめる為

に戻ってきたので別に後でも問題ありませんし…」

「おお、そうか！なら俺に少し付き合ってくれ！ちようどそう言う気分だったんだ！」

「あ…いやその…、…はい分かりました…」

何故かウキウキの弦十郎と何故かドンヨリとしたセイバーが指令室から出て行く。

「なあ司令ってセイバーさんと何しに行っただんだ？」

「さあ？」

藤堯と友里がそんな会話をしている時もう一人、指令室にやって来た人物がいた。

プシュー

「戻りました。あれ、司令いないんですか？」

「あ、緒川さん。司令ならさつきセイバーさんと一緒に休憩に行きましたよ」

「そうですか。入れ違いになりましたか」

「今暖かいモノ用意しますね」

「すみません、ありがとうございます」

「そうだ、緒川さん。司令がセイバーさんと一緒に休憩行きましたけど、何しに行っただか知ってます？」

藤堯は緒川にそんな疑問を聞いてみた。

「ああ、あの二人でしたら—」

どうも皆さんセイバーです。今私は風鳴家所有の山にいます。で、現在進行形でとてつもなくヤバイ状況にいます。

「うおおおおお!!!」

「はあああああ!!!」

今私は弦十郎さんと突きの速さ比べをしています。

いや、冗談とかじゃなくてマジで…。事の始まりは弦十郎さんが私と鍛練をしたいと言い出した時。なんでもアースー王と直で戦ってみたいらしい。まあ始めて会ったときは私戦う気無かったからね。なので軽〜い気持ちで了承したらあらビックリ。目の前には承〇郎

がいるではないですかコンチクショウ！

そして今では時間があればこうして弦十郎さんの鍛練に付き合うハメになっている。断ろうと何度も試みたが私の元OL時代の社畜精神が「上司の命令に逆らうな」と訴えてきてなかなか実行できないでいる。

「ふう！やるなあセイバー！本気では無いとはいえ俺の突きに対応してくるとは！流石はアーサー王だ！」

いやなにそのジョギングした後みたいなの清々しい感じ…。

「いえ、ゲンジウロウもなかなかのモノです。加減をしているとはいえ私に追いつくとは」

なんてちよつと余裕ある感じで言ってるけどこれ結構ギリギリだからね!?一応安全を考慮して私は竹刀でやってるけどそれを全部拳で返してくるこの人なんなの!?

「よーし！体も温まった事だし、連続一時間ぶっ続けでいくか!!」

もう勘弁して!!!

その後、一時間とは言わず三時間もぶっ続けた。

弦十郎さんはメチャクチャスッキリした顔で仮設本部に戻っていった。

私？半休貰った。

《セイバーさんの身体事情》

とある日。翼とクリスが横並びで仮設本部内を歩いていた時の事。

「…（知ってはいたが、意外とデカいんだよな）」

と、クリスは思っていた。

「…（気付いてはいたが、やっぱり大きいんだな）」

と、翼は思っていた。

そしてその遙か後方。壁からひっそりと二人の背中を覗いている人物がいた。

「…（チクショウ！どっちもデカイ!!）」

と、セイバーは思っていた。

《セイバーさん家の今日のごはん》

「では準備はいいですねツバサ」

「無論。我、常在戦場の心得あり」

いや、そんな今から戦に行くみたいなき感じ出さなくても…。

今私は自宅で翼さんと台所に立っている。理由は翼さんが料理番組に出るからだ。

以前私がクイズ番組の仕事を取っ手来た時、なんと翼さんは一時予選すら突破できずに敗退してしまった。これは流石にイメージダウンかなって思ってたけど、寧ろ翼さんの人気がうなぎ登りになった。

オアオンエア見せて貰ったけど翼さん中々な珍回答をしまくっていた。何で科学の問題で『紆余委蛇』うよいだって回答が出てくるんだ…。

そんなこんなで見事にそのキャラが芸能界に出てしまったのでアッチコッチからバラエティーのオフアアが殺到してしまった。で、その一つに料理番組があり翼さんが「やりたい」と言い出したのでOKをすることに。

ただ問題として翼さん本人が全く料理したことが無いと言う。なんで出たいとか言ったんですか？流石に料理番組なのに料理出来ないのは企画倒れモノなので事前に練習する事になり今に至る。

ただヤツパリ不安だ…。目に見えてやる気満々だけど本当に出来るのかな翼さん？。取りあえずやれるだけやってみよう。今日緒川さんはマリアさん達の調査で居ないことだし私がしっかりしなければ！

※ここからダイジェストでお送りします。

「…ツバサ、それは何ですか？」

「よくぞ聞いてくれた！これこそ我が風鳴家に伝わる家宝「護国挺身刀・群蜘蛛」！わざわざ実家から送って貰った！」

「そんな長い得物料理に必要ありません！送り返してください！」

「…ツバサ、何をしていますのですか？」

「言われた通り野菜を回しながら切っているのだが？」

「誰が野菜を空中で回しながら切れと言いましたか！まな板の上に乗せながら切りなさい！」

「…ツバサ、これは何ですか？」

「見ての通り持参した調味料だが？」

「これは？」

「赤まむし」

「これは？」

「コーレーグス」

「これは？」

「肝油」

「今日作る料理は？」

「肉じやが」

「いりません！戻してきなさい！」

その後、二時間かけてようやく食べられる肉じやがが完成した。想像以上に疲れた…。なんなの翼さん。なんでいちいちコツチの予想外の行動するの？

「うむ、これこそ我が努力の結晶！」

本人アレだけの事やって何故か満足げだし…。

「ありがとうセイバー。これで料理は習得したも同然！番組の放送を楽しみにしているといい！」

あ、はい。なんかもう返事するのもめんどくさいからどうでもいいです。

その後、翼さんが出演した料理番組がどうなったかは私はリアさん達の調査で忙がしかったので知りません（建前じゃないですよ？…ホントだよ？）。なので結末については皆さんの想像にお任せします。

ただその番組が放送後、過去最高視聴率を取ったことは報告します。

疑惑のフィーネ

コラボライブから一週間。世界に対し宣戦布告した武装組織「フィーネ」だが、全く音沙汰なしであった。

アレだけの大きく出たんだから何かしらアクションがあると思っただけどまるでそれ自体が陽動みたいでかなり騙された気分だ。まあお陰で二課の方で色々調べられる時間が出来たからよかつたんだけどね。

で、今私は何をしているのかと言うと…

「デメエ等ゴラァ！何処の組のモンだ！」

絶賛反社会組織…と言うか極道の人達に囲まれています。

…うん、分かるよ。どう言う状況だよって話だよね？でもしようがないじゃん。マリアさん達が使ったと思われる乗り捨てられたトレーラーを調べたらここにたどり着いちゃったんだから。

「これは中々のご歓迎ですね」

隣で緒川さんが笑顔でそう言う。いや、なんでこの状況で笑顔なんですか？まあ私も終始仏頂面のままだけどさ…。

「何のつもりか分からんがタダで帰れると思うなよ！馬鹿野郎！この野郎！」

「男は腹裂いて臓物^{モツ}を抜け！女は身ぐるみ剥がして売女送りだ！」

うわ…、マジギレだよ怖っ。でも実際どうしよう…。普通の人相手に手加減するの結構難しいんだよね…。下手したらむこうが内蔵えぐり出ちやうレベルだし。

「ここは僕がやりましょう。セイバーはそうですね…。あの額縁辺りを調べて貰っていいですか？」

緒川さんが指を指した方向にやたらデカイ額縁が飾ってあった。

え、メチャクチャ怪しまれない？余りにも怪しい過ぎて逆に疑わないよ。あ、それが狙いか。

額縁を外してみると緒川さんの予想通りダイアル式の金庫が出てきた。私はそれを腕力でカギごと扉を破壊して開けた。

うわスゴ、中に純金入ってる！いやいやいや、今は仕事だ私！そ

れにこの純金は色々と「汚い」純金の筈だ。貰っても嬉しくない。ちよつとした物欲に揺れたが私は怪しいそうなファイルや資料を片っ端から閲覧する。

「おうっ!？」

「コイツ忍法を使うぞ!？」

「貰ったあ！なに、変わり身!？」

なんか後ろで聞こえた気がするけど無視無視。

おっと、これ出納帳かな？なんか二ヶ月前くらいから医療機器や医薬品関係の物が大量に発注されてる。それも物が相当専門的なヤツだね。あるとしても都内にある大型総合病院でもない限り使わなさそうなヤツ。しかもこれダミー会社相手に商売してたみたい。これは当たりかな？

「目ぼしいモノはありましたか?？」

緒川さんが後ろから声をかけて来たので振り返る。そこには無傷の緒川さんが何時ものハンサムスマイルでいた。そしてその後ろにはさつきまで威勢良く吠えてたヤクザさん達が山みたいに積まれた。

大体二〜三分くらい調べてたと思うんだけど…。

「ええ、中々良さそうなモノを見つけました」

「それは重畳ですね」

さてと、もうここには用は無だね。

その後、私と緒川さんはその場を後にした。

因みに純金は全部換金して災害地域の募金にさせてもらった。汚いお金もこう言う形なら役立つよね。

で、調べてみた結果ビンゴだった。

送られていた場所は数年前に閉鎖された町外れの病院。ここに架空の企業を名乗って数ヶ月前から物質が搬入されていた事が分かった。ただ現段階で分かったのはそれだけでそれ以上情報を引き出せなかった。

「尻尾が出ないんならコツチから引きずり出してやるまでだ!」

やる気満々のクリスちゃん。響ちゃんと翼さんも口には出さないけどやる気が満ちているの伺える。

私も頑張らないとね。

意を決して私達四人は病院内に突入する。

「やっぱり元病院って言うのが雰囲気出してますよね…」

「なんだ、ビビってるのか？」

「そうじゃないけど…、何だか空気が重いような気がして…」

「確かに。ここには何かしらの邪気のようなモノを感じますね…」

「お前まで言うのかよ…」

実際「直感」スキルが何かを捉えてるんだよね。何だろうこの赤い霧が原因なのかな？

「意外に早い出迎えだぞ」

などと考えていると翼さんかそう私達に告げた。目の前にはノイズが狭い通路に所狭しと押し寄せている。

「Balwisyall nescell gungnir tron
n」

「Imyuteus amenohabakirir tron」

「Killter ichiival tron」

響ちゃん達がギアを纏う。私もそれに合わせて第二霊基となり
ゲート・オブ・キヤメロット
「騎士王の宝財」から「約束された勝利の剣」を取り出す。

「ちよっせえ!!」

【BILLION MAIDEN】

変身完了と同時にクリスちゃんが両手にガトリングを呼び出し、ノイズを掃討する。だけどその後ろから次々とノイズが増えていく。

「やっぱりこのノイズは…」

「ああ、間違いなく制御されている…」

確か前に響ちゃんとクリスちゃんが任務終了の直前で「ソロモンの杖」が行方不明になったんだっけ？このノイズの大量発生から見ても
ソロモンの杖
ここにそれがある可能性はたかそうだね。

ともかく今は目の前のノイズを倒さなければ。

私は陽動としてノイズの群れの中心に向かって突っ込みむ。注意

が私に集中したところをクリスちゃんやんがノイズの背中を撃ち抜き、取り巻きは響ちゃんやんと翼さんが各個撃破していく。

序盤は好調な滑り出しだった。だが…

「なんで…こんな手にこずるんだ…」

「ギアの出力が落ちてきている…？」

途中から響ちゃん達シンフォギア装者の攻撃がノイズに効かなくなっていた。

一体何が起きてるんだろう？ 私は特に問題なくノイズを倒せるのに…。

明らかに消耗してきている三人。仕方ない三人にはサポートに回って貰って私がノイズを…

と考えていた時、何かの接近を「直感」スキルが感じ取った。

私はそのまま「直感」スキルの示す方向に「約束された勝利の剣」を振り下ろす。

「フンッ！」

「■■■■■■！！！」

ナニかに命中した。だけど手応えが浅い。

「セイバーさん！」

「三人も警戒を！これはノイズと何か違う！」

私が三人に警告を発した直前、そのナニかは天井をつたい私達に襲いかかって来る。

「はああー！」

翼さんがナニかを迎撃する。しかしナニかは弾き飛ばささせただけで全くの健在だった。

「アームドギアで迎撃したんだぞ!？」

「なのに何故炭素と砕けない!？」

「まさか、ノイズじゃない…？」

響ちゃん達に憶測が飛ぶ。不味い、少し混乱してきている。謎のギアの出力低下に続いて謎の生命体の襲撃となれば無理もないけど、冷静にならなければ。

パチ、パチ、パチ

だけど状況は更に混乱になっていく。突然病院内で拍手が聞こえてきた。ナニかの後方に

誰かいる？ナニかはそのまま何者かの足元にあつたゲージの中へと入って行つた。

「ウエル博士!？」

クリスちゃんがそう呼んだ。ウエル博士つてたしか「ソロモンの杖」の護送で同行していた科学者で軍事施設の襲撃で行方不明になつてたはず…。

「意外に聡いじゃないですか」

「そんな!? 博士は岩国基地が襲われた時に…」

「つまり、ノイズの襲撃は全部…」

「明かしてしまえば単純な仕掛けです。あの時既にアタツシユケースに「ソロモンの杖」は無く。コートの内側にて隠し持っていたんですよ」

「ソロモンの杖を奪う為、自分で制御し自分を襲わせる芝居を打つたのか？」

「バビロニアの宝物庫よりノイズを呼び出し制御することを可能にするなど、この杖を置いて他にありません。そしてこの杖の所有者は、今やこの自分こそがふさわしい…、そう思いませんか？」

「思うかよー!」

【MEGA DEATH PARTY】

クリスちゃんが腰の付いているギアを展開して小型ミサイルをウエル博士に向け放つ。だが…

「っ?!うああああ!!」

突然クリスちゃんが悲鳴を上げて苦しみ始める。放たれたミサイルはあちこちに散弾し、病院内の壁を破壊していく。やがて爆発によって発生した土煙が晴れていく。何かしらのダメージによつてその場膝を付くクリスちゃんと無傷のウエル博士が見えた。

ウエル博士は恐らく「ソロモンの杖」から呼び出したノイズを盾代わりにしただろうね。

「あれは!？」

響ちゃんが何かに気付く。先ほどゲージの中に入って行ったナニかがノイズによって運び込まれていた。

アレはきつと今後脅威になるモノだ。ここで確保・あるいは撃退しておきたい。今動けるのダメーヅで動けなくなったクリスちゃんを除いた響ちゃんと翼さん、そして私の三人だ。

だけど翼さんはクリスちゃんを肩に担いでいるので除外。あとウエル博士の拘束の為に最低一人はこの場に残らなければならない。そしてナニかを運んでいるノイズは空中にいて、かなり速度がある。もう答えは出きっていた。

「ヒビキー・ウエル博士の確保を！私はあのノイズを追います！」

私は響ちゃん達の返事も待たず全身に「魔力放出」を施し一気に加速する。

『セイバーさん！飛行型ノイズはそのまま海上に進行中です！』

耳に付けたイヤホン型の通信機から友里さんの声が響く。恐らく追跡から逃れるためにわざと海上を通るルートで飛行しているんだろうね。だけどそうはいかない！

私は勢いのままに海上に飛び、そのまま海面を走る。

セイバーにはステータスに反映されていないけど「湖の精霊の加護」を受けている。これのお陰で私は水面を立つ事も走る事も出来る。

私は足に「魔力放出」を施し上空のノイズまで一瞬で跳躍して、ほぼ目の前にまで接近したノイズを「約束された勝利の剣」で両断した後、ナニかが入ったゲージに手を伸ばす。

が、ここで「直感」スキルが危険を感知する。

「っ!？」

私は「魔力放出」で無理矢理体を捻らせ「直感」スキルが感じ取った危険を回避して、そのまま海面に着地する。

回避したそれは槍だった。その槍はそのまま海面に浮く様に立ち、その石突部分に何者かが降り立つ。

「残念だったわね」

「マリア・カデンツァヴァナ・イヴ…」

そこにはマリアさんが立っていた。彼女の左手には先ほどのゲージが握られている。

『セイバー、聞こえるか?』

「ゲンジユウロウ?」

『どうやらお前の予感は的中したらしい…。マリア・カデンツァヴナ・イヴは「リンカーネーション」によつて甦つた了子君：フィーネだ』
「やっぱり私の早とちりじゃ無かったか。フィーネを名乗る以上、彼女が甦つたと考えるのは妥当だ。だけどコラボライブと同じだ、何か違和感がある。」

…少し鎌をかけてみるか。

「悪いけどこれは渡せないわ。私達にはこれが必要なの」

「その様な異質なモノを使つて何をしようと言うのですか!?!」

「正義で守れないモノを守るために!」

…やっぱりおかしい。もし三ヶ月前のフィーネだとしたら望むモノは彼女の思い人に会うことのはず…。正義でどうこう動く人ではないはずだ。それにアレだけの事をしたんだ、私に恨み言の一つ二つくらい言うだろうに。

そんな考えをしていたら、マリアさんがゲージを空高く投げ放ち、突如空に消えた。何、コツチの知らない新技術か何か!?

私が驚いてる間にマリアさんが襲いかかってくる。

「はあああ!」

「ちい!」

ガキーン!

私は「約束された勝利の剣」でマリアさんの槍を防ぎ、弾き飛ばす。マリアさんはマントを全身にくるみ海面を移動する。

足場の無い海面でよく動く!

私は跳躍しマリアさんの頭上から「約束された勝利の剣」を振り下ろす。マリアさんはそれを予測していたらしくマントの渦の目から槍を構えていた。

「直感」スキルで読んでいた。

マリアさんの突きを紙一重でかわす。

「ぐっ！」

振り下ろされた「約束エされた勝利スの剣カ」はマリアさんに当たるも手
応えが浅い。

『セイバーさん！響ちゃん達が！』

そこに友里さんの声が耳に聞こえる。

私は自分が海に飛び出した工事中の道路を見る。そこにはライブ
中に乱入して来た緑色切の子とピンク色歌の子の二人が響ちゃん達と
戦っていた。

しまった！マリアさんを相手にするのに気が向いて響ちゃん達に
気が付かなかった！今は三人のギアの出力が落ちてるのに！

「私を甘く見たな！」

顔を背けた私にマリアさんの突きが迫る。

「甘く見た事など一度と無い！」

マリアさんの突きを「約束エされた勝利スの剣カ」を使って上に弾くと同
時に左腕でアッパーカットを「魔力放出」によるブーストを乗せてマ
リアさんに叩き込む。

ドボウ！

「フグッ！」

アッパーカットで体が宙に浮くマリアさん。私は右足を軸にして
左足に再び「魔力放出」のブーストを乗せて右の脇腹に回し蹴りを追
い打ちする。

ボゴッ！

「ガッ！」

マリアさんはそのまま左方向に飛び、体を海面に叩き付けられる。
私はすぐにダッシュで響ちゃん達の元に向かう。だけど時既に遅
し。私が到着した時には響ちゃん達三人はボロボロの状態。切歌・調二人と
ウィル博士は突如空中に現れた大型のへりに収容されていた。

「ソロモンの杖」を返しやがれ！」

クリスちゃんが手にしていたギアをスナイパーライフルにして大
型へりを撃ち落とそうとする。

【RED HOT BLAZE】

だけど大型へりは再び透明になって、見えなくなる。

「ゲンジユウロウ」

『駄目だ、こちらでも反応が消えた』

仮説本部のレーダーで見つけられないなら追撃は不可能か…。

気付いた時、既に朝日が昇っていた。だけど私の気持ちは太陽の様に明るくはなかった。

忿怒（ふんぬ）の王

武装組織「ファイネ」のアジト潜入から数日後の事、仮設本部でノイズの反応を検知して、数分後に消失した現象が確認された。現場を調べてみたら、何者かが使用した痕跡と多数のノイズ被害者の遺体^灰が確認できた。十中八九、武装組織「ファイネ」のひいてはウイル博士の仕業だろうね。

しかもこの武装組織「ファイネ」、元を辿ると米国の聖遺物研究機関「F. I. S」て言う所の一部職員が暴走して結成された組織だった。ファイネを名乗っていたのはマリアさんの事だけじゃなく米国と繋がりがあった子^{ファイネ}さんを指しての事もあったらしい。

ただここで疑問が出てくる。さっきの話に出てきたノイズの出現があった現場、被害者の遺品や所持品がどう見ても米国：それも軍隊の物だった。つまり「F. I. S」は自国にも敵として見られているみたいなのだ。まだ詳しい事は分からないけど絶対厄介事に違いないだろうね。

その間、響ちゃん達は母校の「リディアン音楽院」で文化祭を満喫していた。人類の為、ノイズと戦うシンフォギア装者の響ちゃん達だけど彼女達は花の女子高生。

一度しかない青春を血生臭い日々にするなんて勿体ない。だから響ちゃん達にはこう言うイベント事を楽しんでほしいと私も弦十郎さん達もそう思ってる。

だけどその文化祭にあの緑と^切ピンクのシン^歌フォギア装者が潜入していたらしい。なんでも二人はシンフォギアのペンダントを賭けて決闘を申し込んできたとのことだ。

うーん、コッチの戦力を削ぐためにわざわざそんな回りくどい方法をするかな？しかも負けたら自分達のペンダントも渡さないとイケないリスクまで背負ってまで？リスクとリターンがまるで噛み合っていない。それなら闇討ちとかの方がまだ可能性があると思うけど…。

色々考えたけど結局は全員で行く事になった。

まあ、罨だとしても虎穴に入らずんば虎子を得ずって言うしね。

で、その決闘の指定先はなんと「旧リディアン音楽院」。またの名を「カ・ディングル跡地」だった。

「決闘を求めるにはおあつらえ向きの舞台と言う訳か」

確かに翼さんの言う通りかもしれないね。マリアさんが本当にフイーネなら前回の敗戦の地でリベンジなんてのも考えられるからね。

だけどそこにいたのは予想外の人物だった。

「フン」

「野郎！」

そこにウエル博士がいた。

響ちゃん達の話と違う…。決闘を求めたのはあのシンフォギア装者の二人じゃないの？

そうこうしている内にウエル博士は「ソロモンの杖」でノイズを呼び出す。

「Balwisyall Nescell gungnir tron
n」

「Imyuteus amenohabakiriron
Killter Ichaivaltron」

響ちゃん達が各々のシンフォギアを纏い始める。私もそれに合わせて第二霊騎へと姿を変えノイズを迎撃する。

「調ちゃんと切歌ちゃんは!？」

「あの子たちは謹慎中です。だからこうして私が出張って来ているのですよ。お友達感覚で計画遂行に支障をきたされては困りますので」「何を企てる、「F・I・S」!？」
「企てる…?人間きの悪い。我々が望むのは…人類の救済!月の落下にて損なわれる無垢の命を可能な限り救いだす事だ!」

月の落下!?!どう言う事!?!確か「ルナアタック」以降各国で月の観測がされているはず…。ウエル博士の言っている事が事実ならどうして政府は黙ってる!?!

「月の公転軌道は、各国機関が三ヶ月前から計測中!落下などと結果が出たら黙っているわけ…」

「黙っているに決まっているじゃないですか！対処方法の見つからない極大災厄など、さらなる混乱を招くだけです！不都合な真実を隠ぺいする理由など、いくらでもあるのですよ！」

「まさか！この事実を知る連中つてのは、自分達だけ助かるような算段を始めているわけじゃ!?!」

クリスちゃんの言葉にニヤリと嗤うウエル博士。

「だとしたらどうします？貴女達なら？対する私達の答えが…

「ネフィリム」!!」

「っ！クリス、下です!!」

「下あ!?!」

私は「直感」スキルでクリスちゃん足元から何かを感じ取った私はクリスちゃん向け叫ぶ。だけどクリスちゃんは直ぐに反応できず、地面から飛び出してきたナニか元い「ネフィリム」によつて吹き飛ばされる。

以前より大きくなってないアレ!?!

「クリスちゃん！」

「雪音！」

「クリス！」

クリスちゃんはそのまま地面に叩き付けられる。一番近くにいた翼さんがクリスちゃんを抱き上げ様とするけど細長いノイズから出てきた粘着液で動きを拘束された。

「くっ…このようなもので…!」

「人を束ね、組織を編み、国を建てて命を守護する！ネフィリムはその為の力！」

「■■■■■■!!」

そこに大口を空け迫ってくる「ネフィリム」。私はで「ネフィリム」の顔を「約束された勝利の剣」で叩き斬る。

「はあああ！」

ザシユン！

「■■■■■■!?!」

だけど思ったより皮膚が堅く、撃退に至らない。

「ヒビキ！ツバサとクリスをお願いします！私はアレを!!」

「セイバーさん!」

翼・クリス

私は響ちゃんに二人を任せ、「ネフィリム」に突っ込み斬りかかる。

「ネフィリム」も流石に警戒したのか距離を取って応戦してきた。

「驚きましたよ。まさか貴女のような方まで「フィーネ」と同じく過去から甦ったのですから」

ウエル博士が私に話しかけてくる。

過去から甦る？まさか、私の正体が!?

「だってそうでしょう？あのライブ会場で使用した完全聖遺物。アレを完璧に使いこなすなんてその使い方を知っているに他ならない!」

しまった!ライブのTV中継が無くなったと確信したらから

エクスカリバー・ガラティーン

「転輪する勝利の剣」の真名解放をしたのに!まさかあの時何処かで見られてた!

「そう!貴女こそこの現代に甦りし本物の英雄!円卓十三騎士の一人、太陽の騎士「ガウエイン」!!」

……………へ?

「まさか「ガウエイン」が女性だとは思いませんでしたよ。しかし!その武勇は英雄と言うにふさわしい。だからこそ、貴女の実在は邪魔だ!この世界に英雄は二人もいらぬ!貴女を殺し、僕が真の英雄となる!!」

なんか勝手にペチャクチャ喋ってるけど無視する。たぶん私がライプで「転輪する勝利の剣」を使ったから勘違いしたんだろうけど、修正する暇も必要性も今は無い。

とにかく今は目の前にいる「ネフィリム」を倒さなければ!

この時、私は功を焦っていた。「F・I・S」のアジトの潜入の時、私をもっとしつかりしていればウエル博士も「ソロモンの杖」も取り逃がす事なんて無かったと思えば良かった。だから今、いち早く「ネフィリム」を撃退しウエル博士を捕縛しようとして躍起になっていた。

だからだろう…、あんな事になってしまった。

戦闘中、「ネフィリム」が前足を使って私に砂をかけてきた。私は砂が目に入り視界を奪われてしまう。

「くっ！おのれ!!」

本能だけの獣かと思っただけど多少は知恵が回るみたいだ。たげど爪が甘い！私には「直感」スキルがある！例え視界が潰されても何処から来るか感じ取れる！

私は「ネフィリム」が襲いかかるのを待ち構える。

そして「直感」スキルがナニかを目の前に捉えた。

「っ…そこだ!!」

私は「約束された勝利の剣」でそれを叩き斬る。

だけど違った。明らかに手応えがさつきと違っていた。

この感じ…まるでノイズを斬った時の様な…

「セイバー、後ろだ!!」

「っ!？」

私に向け翼さんが叫ぶ。それと同時に「直感」スキルが背後から迫るナニかを感じ取った。

「しまって」

振り向いた時にはもう遅かった。「直感」スキルが避けられない事を伝えてくる。

クソツ！駄目か！

そう思った瞬間…

ドンツ！

ガブツ！

私は真横から来たナニかに押し出された。そこでようやく目の砂がとれ、前が見えるようになった。目の前の光景が写る。そこには左腕が無くなった響ちゃんとなニかを飲み込む「ネフィリム」の姿があった。

一瞬で何が起こったのか理解できた。

「ひゃほおおおおお!!」

私は後ろを振り返る。そこには歓喜極まったウエル博士がいた。

その姿を見た瞬間、私は…

プツツンした。

「いったああああ！パクついたあ！シンフォギアを！！これでえええ！！」

「ぐ…ぐう…」

「立花！立花あ！」

「バカ！しっかりしろオイ！」

ウエル博士が歓喜を全身で表している中、ノイズの拘束から解かれた翼とクリスは左腕が食い千切られた響に駆け寄る。

「完全聖遺物「ネフィリム」は、いわば自律稼働する増殖炉！他のエネルギー体を捕食し取りこむ事でさらなる出力を可能とする！本来ならガウエインの持つ完全聖遺物を取り込みたかつたがそれは結果オーライイ！さあ始まるぞ！聞こえるか？覚醒の鼓動！この力がフロンティアを浮上させるのだ！フハハ、ハハハハ、フヒh」

「……………に…笑…い…」

「ひえ？」

「ネフィリム」が聖遺物を取り込んだ事で大型化していく中、ウエル博士の耳に誰かの声が聞こえてきた。声のした方向を見るとそこにはセイバーがいた。

セイバーの顔は下を向いていてその表情は分からなかった。だがセイバーの纏う雰囲気は噴火寸前の火山の様であった。

そして…

「何がそんなに可笑しい！！」

セイバーの怒りが爆発する。それは百獣の獅子が威嚇するかのように咆哮する姿だった。恐らく無意識と思われる全身からの「魔力放出」によりセイバーの周囲の地面は盛り上がり、激しい突風を引き起こした。

「ツバサ、クリス！！ヒビキを頼みます！！」

「あ、ああ…」

「お、おお…」

セイバーの豹変に戸惑いながらも了承をする翼とクリス。

セイバーはその場からゆっくりと一步、また一步とウエル博士に向けて歩き始める。

対するウエル博士は突風により尻餅を付いていた。そしてセイバーの表情を恐る恐る見る。そこには明らかに殺意を持った目をした怒れる獅子が自分を標的しているように見えた。

「ネ、「ネフィリム」!!何をしている!ソイツを殺せええ!!」

怯えた声で「ネフィリム」に命令するウエル博士。「ネフィリム」は先程のセイバーの咆哮に怯みながらもセイバーに向けその大口を開き迫ってくる。

セイバーは「約束された勝利の剣」を「騎士王の宝財」にしまい、別の剣を取り出し、それを真つ正面から迫り来る「ネフィリム」に対して横に構える。

「ネフィリム」は迷うことなくその剣にかぶりつく。

ガブツ!

「や、やったあああ!!シンフォギアだけじゃなく完全聖遺物までも取り込んだぞ!!これで最早「ネフィリム」は完全なる進化をとg…あれ?」

ウエル博士が異変に気付く。

「■■■■!?!?■■■■!?!」

「どうした「ネフィリム」!何故聖遺物を補食出来ない!?!」

「ネフィリム」が悶える。かぶりついた剣に何度も歯を立て名一杯の力を入れても砕く事が出来ないからだ。

「どうした理性無き獣よ…、貴様の牙はその程度か…?」

セイバーが剣に魔力を送り始める。すると剣が徐々に青白い光を帯び始める。その光は輝きを増し、やがて臨界に至った瞬間…

バユウン!

「■■■■!?!?■■■■!?!」

「「ネフィリム」!?!」

ネフィリムが後方に吹き飛ばされる。口の中は血だらけで牙が数本折れていた。ウエル博士はセイバーを見る。セイバーの右手には金の装飾が施された刀身が白い剣が握られていた。

「そ、それは…ライブ会場で使った剣じゃない!?それは一体何だ!？」

驚愕に染まるウエル博士。その問いに答える様にセイバーはその剣を構え直し…

「無毀なる湖光」

と告げた。

「無毀なる湖光」

それはかつてアーサー王に支えてた円卓の騎士の一人「ランスロット」が持っていたとされる聖剣でありも魔剣もある剣。起源は「約束された勝利の剣」と同じく神造兵装。その特性は絶対に刃が毀れることが無い事である。

「ネフィリム」が聖遺物を補食して取り込む以上、口に含み噛み砕く必要がある事に目をつけたセイバーは絶対の強度を持つ「無毀なる湖光」を使用し補食できないように対抗してきたのであった。

「無毀なる湖光」…!?そ、それは円卓の騎士の中でも最強と謳われた「ランスロット」の剣!?何故貴女がその剣を!?その剣は貴女の兄弟を殺した剣の筈!？」

「貴様に答える義理は無い!!」

ウエル博士の問いを無下に「無毀なる湖光」を構え直すセイバー。「ネフィリム」は先程の「無毀なる湖光」から放たれた「魔力放出」による攻撃でセイバーに恐怖心を抱き、逃げようと背を向ける。

それを見たセイバーは足元にあった手のひらサイズの石を左手で拾う。

「貴様!聖遺物が欲しいのならこれを取るがいい!!」

セイバーは石がある物と思いつみながら魔力を送り込む。すると石に赤い「魔術回路」が巡り始める。セイバーはそれを明後日の方角に投げ込む。

「■■■■■!」

「な、何をしているネフィリム!敵は目の前のなんだぞお!!」

「ネフィリム」はまるで吸い寄せられるようにその投げ込まれた石に向かって走る。

ウエル博士が現実を受け止めきれず膝から崩れ落ちる。セイバーは「無毀なる湖光」を下方に向かって剣を払って血振りし、ウエル博士に振り返る。

「ひ、ひいいい!!」

ウエル博士は恐怖する。セイバーの顔がまるで「次はお前だ」とばかりに眼光を効かせていたからだ。ゆっくり一歩づつウエル博士に近づいていくセイバー。

「く、来るな！来るなああ!!」

ウエル博士は手にしていた「ソロモンの杖」でノイズを呼び出す。だが：

ザシユン！

セイバーは「無毀なる湖光」を横に振り、風圧だけでノイズを撃退する。

「い、いやあああ！ひいいいひいいい!!」

余りの光景にウエル博士は惨めな姿も顧みず四つん這いでその場から逃げようとする。だがそれは叶わなかった。

ザシユン！

「ひいいい!!」

ウエル博士の眼前に「無毀なる湖光」が突き刺さる。セイバーがウエル博士の逃げ道を無くすため投げ込んだのだ。もしあと数ミリ手前であったのならウエル博士の頭上にそれは無惨にも刺さっていただろう。

気付けば足音が聴こえなくなっていた。ウエル博士はまるで壊れた玩具の様に『ギギギ』と音を立てながら首を後ろに向け：られなかった。

セイバーがその前にウエル博士の胸ぐらを左手で掴み無理矢理起き上がらせる。

「貴様は大義名分を盾に子供を利用し、嘲り、何よりも傷付く姿を見てそれを嗤った！その所業は万死に値する!!」

「ほ、僕を殺せば人類は月の落下で死に絶えるぞお!？」

「それは貴様が決める事ではない!!」

セイバーは右腕にありつただけの魔力を送り込みそのすべてを「魔力放出」に変換する。

「痛みを知れ!!彼女の痛みを!!」

「いやあああ!!死にたくないいいいいいい!!」

ウエル博士の叫びも空しく、セイバーの右腕がウエル博士の顔面にえぐり込む…直前、

「セイバー!!!」

「っ!」

セイバーの右腕がウエル博士の顔面ギリギリで止まる。だが拳自体は止められたがそれによって発生した風圧は止められず、ウエル博士はそのまま突風で吹き飛ばされてしまう。

「あばあぐぎやああああああ!!!」

吹き飛ばされたウエル博士はそのまま瓦礫の中に転がり落ちた。

「ハア…ハア…ハア…」

セイバーは肩で息をしながらその場で放心状態となった。頭によぎるのは『もしあのまま殴っていればウエル博士を殺していた』という事実だった。もう数秒、翼とクリスがセイバーを呼び止めるのが遅ければ間違いなくそれは起こっていた。

セイバーはなんとか自身の心を落ち着かせ、翼とクリスの元へ歩み寄る。

「セイバー…」

「おい、大丈夫か…」

「…ハア…ハア、…何とか」

セイバーは引き絞る様な声でそう答える。ふと翼達の後で横たわっている響を見る。いつの間にか響はギアが解除され、食い千切られた筈の左腕は何事も無かったかの様にそこにあり、まるで眠る様に気絶していた。

セイバーは響を抱き上げる。

「…報告は後程、今はヒビキを本部に連れていきましよう…」

翼とクリスはそれに同意する。ゆっくり、ゆっくりと本部に帰還していくセイバー達。

その後ろ姿は戦いに勝利したとは思えないほど暗く重いモノだった。

蛮勇たる若者達

「罰則を与えて欲しい…だと?」

「はい」

決闘の日から翌日。仮設本部内指令室で私は弦十郎さんにそうお願いしていた。

「以前のアジト調査の失態、今回のウエル博士の逃亡の見逃しとヒビキの負傷。全て私の現場判断の軽率さによるものです」

「軽率…だがあの時君は…」

「例えどんな理由があろうとも結果と事実は変わりません。更に言えば私はあの時、捕縛対象であったウエル博士の殺人未遂も犯しています。ツバサとクリスが止めてくれなければ間違いなくそれは未遂では終わっていません」

あの子達響ちゃん達と違って私は大人だ。なら犯したミスの尻拭いは自分でしないといけない。でないと私自身が自分を許せないし、何より彼女達響ちゃん達に会わせる顔が無い。

「どうか、私に処罰を。愚かな私が猛省できるだけの罰を与えてください。お願いします」

「ふむ…」

弦十郎さんは座っている椅子に大きく体を預け、腕を組んで考え込んでいる。奥の席で友里さんと藤堯さん、緒川さんの三人が心配そうにこつちを見ている。

ああ…、今回の件で私は信用を失った。

取り戻すには相当苦勞するだろう。だけどこれは今後の為にも私が受けないといけない罰だ。

「…分かった。そこまで言うのならお前に処罰を下そう」

弦十郎さんは椅子から立ち上がって私の目の前にまで歩いてくる。私は手を後ろで組んで姿勢を正す。

「セイバー、二課の責任者たる俺からお前に対する罰則を言い渡す」

「はい」

果たしてどんな罰だろう…。良くて謹慎、悪くて二課を辞めさせら

れて警護と言う名の軟禁かな…？

「今度響君達とトレーニングする時にお前も一緒に参加する事だ」

……………へ？

「実は前々からお前の身体能力が気になってな！戦闘訓練はしているが純粋な運動力はどれ程のもんかと思つてな！いい機会だから測定も兼ねてやろう！ああもちろん、設備はこつちで揃えておくから」

「ま、待つてくださいいゲンジウロウ！」

ウキウキで喋る弦十郎さんに私は制止の声を上げた。

「ん？どうした、何か不満か？」

「不満もなにもありません！なんですかそれは！」

「何つて俺が今さつき考えたお前への罰だが？」

「それは罰ではありません！私は自分を諫める罰を与えて欲しいと言つたのです！」

「なら僕からも一ついいですか？」

私が弦十郎さんに抗議している間を緒川さんが割り込んできた。

「実は今度、翼さんの写真集を出す事になりました、その友人役のエキストラをセイバーさんにお願ひできますか？」

これまた罰とは程遠い提案が出てきた。

「あ！それなら私この前、新しいコーヒー豆を買つたので味見役をセイバーさんにお願ひします！」

「じゃあ俺はクリスちゃんのために作つてゐるって聴いた料理のレシピとか教えて欲しいです！」

今度は友里さんと藤堯さんまでもそんな提案が出てくる。

「み、皆さん…」

胸の奥がジーンとする。てつきり失態続きの私に失望したんじやないかと思つていたのにそれをいい意味で裏切られたからだ。

徐に弦十郎さんの手が私の肩の上に乗る。

「誰もお前の責任なんて思つちやないさ。むしろお前の活躍で「ネフィリム」の撃退に成功している。「F・I・S」が何を企んで月の落下から人類を救おうとしているかは未だに分からないが、子供を犠牲

にしてまで救った世界を俺は大手を振って歩きたいなんて思わん」

「はい。そうならない為にも調査部も今全力をもって調査中です」

「そうそう！それにここだけの話、セイバーさんがウエル博士をぶつ飛ばす所、あれ結構スカツとしたんですよね！」

「まあ、あんまり大人が言う事じゃないけどね」

ああ…、私はなんて恵まれてる人間なんだろう。こんなにも慕って、こんなにも信じてくれる人達がこんなにもいるなんて…。

「おっとセイバー！今言った内容は全部お前に対する罰則だからな！拒否権は無いと思え！」

「はい…！」

彼らの為にも私は頑張らないと！

私は一歩さがってから片膝を着いて俯いて忠誠を誓う姿勢を取る。たぶんこの体が自然とそう動いてくれたんだと思う。

「筆竜…いえ、アルトリア・ペンドラゴン、謹んでその罰お受けします」
そんな私の姿に弦十郎さん達は、少し苦笑しつつも暖かく見守ってくれた。

私が罰を宣告されてから更に翌日。私は新しい任務に就いていた。響ちゃんの監視だ。

別に響ちゃんが何か悪いことをしない為に監視してる訳じゃない。決闘の日、暴走した響ちゃんをメデイカルチェックした結果、響ちゃんの体内にある「ガングニール」の破片が響ちゃんを蝕んでいた事が分かった。それはシンフォギアを纏う度にその侵食速度を早めているらしい。このまま侵食が進めば少なからず響ちゃんは死ぬ事になる。だけど響ちゃんの性格上、一般市民が巻き込まれている現場を見たら一目散に戦う事を選ぶのは目に見えていた。

そこで私が近くで響ちゃんを監視して、もしもノイズが出た時は即座に避難させる事が出来るようにと弦十郎さんに任務として頼まれたのだ。

一緒に戦う仲間を監視するのは正直いい気分ではないけどこれも響ちゃんの為だと割りきって任務に就いている。

ただやつぱり響ちゃんも女子高生。放課後は友達と食べ歩きだったり寄り道だったりでお店の中に入ったりするので「ギネヴィアの隠れ布」ハイド・オブ・ギネヴィアだとちよつと不都合がある。

そこで今回は別の宝具を使っている。

「変身の指輪」

円卓の騎士の一人「ガレス」ちゃんが使ってた宝具の一つだ。姿を変える事が出来る指輪で、これのお陰で響ちゃん達にはただの通行人や旅行者として見えている。

さつき入っていった「お好み焼屋ふらわー」もランスロットの姿で入いたら全く疑われなかった。いきなりイケメンの外国人が入ってきて店主のおばちゃんがドギマギはしてたけど。

で、今響ちゃん達は「ふらわー」を出した後、少し寄り道をしながら仲良く帰路を歩いていた。私はその少し後ろをガレスちゃんの姿で見守っていた。

出来ればこのまま何事もなく一日が終わって欲しい…。これが本来あるべき響ちゃんの日常なんだから…。

だけど運命Fateは残酷だ。

響ちゃん達の前を黒塗りの車が横切る。その車が走り去った次の瞬間：
ドガーン！

突然の爆発。響ちゃん達は爆発が起きた現場に走る。私も響ちゃん達の後を追う。そしてその爆発現場には…

「誰が追いかけて来たってコイツを渡すわけには…！」

ウエル博士がいた。博士は布に包まれた小さい物を抱えながら「ソロモンの杖」で呼び出したノイズを使って黒塗りの車を破壊した様子だ。

私は「変身の指輪」を外し、第二霊基になりながら響ちゃん達の頭上を飛び越え、ウエル博士と響ちゃん達の間割って入った。

「ひいひい!? な、なんでお前がここに!?!」

ウエル博士が相当怯えてる。だけど今は無視する。

「ヒビキ、ミク達を連れて避難してください」

「セイバーさん！で、でもウエル博士が…」

「いいから行きなさい！」

「は、はい！」

「カリスマ」スキルを使って強引に言うことを聞かせて響ちゃん達を避難させる。響ちゃん達が真つ直ぐシエルターに向かつていくのを見届けた後、「約束された勝利の剣」を取り出して構える。

さてと、それじゃこの前の汚名返上と行きますか。

「何時も何時も！都合の良い所でこっちの都合をひっちゃかめっちゃかにしてくれる！お前はああ!!！」

ウエル博士が「ソロモンの杖」を使ってノイズを呼び出す。私は「約束された勝利の剣」を振るい呼び出されたノイズを斬り倒す。

「何時も！何時も！何時も！何時も！何時も！」

なんかもう錯乱したみたいにならぬウエル博士は「ソロモンの杖」を乱発してノイズを出し続ける。

不味いな…、この数のだと苦戦はしないけど相手するのがめんどくさい。ウエル博士は私が来てから大分動揺して、逃げるよりも私に近づかせないようにノイズを壁として呼んでるみたいだ。

ならチャンスだ。壁になってるノイズを突っ切ってウエル博士を確保しよう。

私は「魔力放出」で一気に加速し、ノイズの壁を真つ正面から突き抜けウエル博士に肉薄する。

「ひゃあああ！来るなあああ!!！」

再びウエル博士は「ソロモンの杖」でノイズ呼び出そうとする。だけどそうはさせない！

私は「ソロモンの杖」を狙って「約束された勝利の剣」を振るう。杖さえ無ければウエル博士はただの一般人と変わらない。抵抗力が無くなった所で額にデコピンでもして気絶させよう。

そう思っていた直前、

ガキユイン！

私の「約束された勝利の剣」が何かに阻まれた。

「っ！盾!？」

「なんとノコギリ！」

そこには切歌ちゃんと調ちゃんがいた。調ちゃんが頭に付いたアームドギアを変形させて大型のノコギリを出して私の「約束された勝利の剣」を、切歌ちゃんは調ちゃんの後ろから支えていた。

たぶんウエル博士を保護するために出向いたんだらうね。

「この身を鎧う「シウルシャガナ」はおつかない見た目よりもずっと汎用性に富んでいる。防御性能だつて不足なし！」

確かに本気ではないとは言え「約束された勝利の剣」を受け止めている所をみるとはったりとかじやないのが分かる。

だけど私も退く訳にはいかない！

私は調ちゃんのノコギリと鏢迫り合いの状態にある「約束された勝利の剣」の鞘に魔力を送り込む。

「風よ、荒れ狂え！「風王鉄槌」!!」

「っ!？」

バシユン!

「約束された勝利の剣」に纏っていた風を一気に解放する。突然起きた突風を至近距離で受けた 切歌ちゃん・調ちゃん・ウエル博士 三人はそのまま後ろに吹き飛ばされ、衝撃を受け止めきれずに地面に背中を叩き付けられる。ウエル博士は切歌ちゃんが下敷きになるように庇ったから無傷だけだ。

「ふ、二人掛りでも…止められないデスカ…」

「でも…ここで負ける訳には…」

ヨロヨロと立ち上がる切歌ちゃんと調ちゃん。

…正直見てられない。

人類の救済なんて大義名分をなんでこんな十代の女の子が背負わないといけないんだ。しかも協力しているのは目的のために子供を平気で犠牲に出来るヤツだ。

こんなの絶対間違ってる。

何とかウエル博士とあの子達 切歌ちゃんと調ちゃん を引き剥がせないだらうか？

あれこれ考えた私は少し強引な手に出ることにした。

徐に「約束された勝利の剣」の構えを解いて、地面に突き刺す。

「警告します。今すぐにギアを解除してウエル博士の身柄を此方に引き渡しなさい」

「な、何を言っているやがるデスか!？」

「私達を侮ってi」

「侮ってなどいけません。ですが、例え貴女達二人が同時に挑んだとしても私には敵わない。それは貴女達が一番良く分かっている筈です」
「つー!」

こんな事本当は言いたくない。でも二切歌ちゃんと調ちゃん人を傷付けずにウエル博士を確保するにはこれしかない。

「二度目の警告です。ギアを解除してウエル博士を引き渡しなさい」

二切歌ちゃんと調ちゃん人は苦い顔をする。お願いだ、そのままウエル博士を引き渡して欲しい。

「三度目です。シンフォギアを解除してウエル博士を此方に渡しなさい。これ以上は警告無視とみなして貴女達を制圧します…!」

私は「カリスマ」スキルを発動させながら強めに言う。流星にこの一言は大きかったみたいで二人ともどうするか迷ってる様に見えた。
「ただどそれに水を差す人物がいた。」

「迷えるお二人に僕からプレゼントですよ」

ウエル博士が懐から銃の形をした注射器を取り出して二人の首筋に当て、何かの薬品を流し込んだ。

「な、何しやがるデス!」

「LiNKER」!? だけど効果時間にはまだ余裕が…」

「だからこそその連続投与ですよ! あんな桁外れの力を持った化物を相手にするんです! 無理にでも適合係数を上げなければやられるのは貴女達なんですよ!」

「なんだか内々でもめてるみたいだけど、警告した以上容赦はもうしない!」

私は「約束された勝利の剣」を引き抜いて、「魔力放出」で一氣に加速。切歌ちゃんの懐に飛び込む。

「やあああ！」

「っ!? くっ！」

ガキユイン!

私の接近に間一髪の所で気付いた切歌ちゃんが鎌で防御する。両肩のアームドギアを地面に突き刺してアンカー代わりにした為吹き飛ばされずになんとかとどまったみたいだ。

「ウエル博士!二人に一体何を投与した!!」

「ひいいい!!き、さあやるんですよ!貴女達が来た理由なんてどうせあのオバハンの容態が急変したからなんでしょ!?!ここでもし僕が捕まる事になれば人類は救済できず、オバハンの治療も出来なくなるんですよ!?!」

ウエル博士は私の問いに答えず二人にそう指示を飛ばす。オバハンは…、誰の事だ?

なんて考えている所で調ちゃんが無数の小型のノコギリを私に飛ばしてくる。

【α式・百輪廻】

「ちいー!」

私はバク転でノコギリを避け、バックステップで距離を取る。

「切ちゃん…!」

「…やらいでかデエエス!!」

切歌ちゃんと調ちゃん

二 人が何か覚悟を決めた顔になった。何か仕掛けてくる?

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n

a l l—」

この歌…、まさか絶唱?!

「止めなさい!それは起死回生の一手でもなんでもない!無闇に自らの命を削るだけのただの自尽じじんと変わりない!!」

「E m u s t o l r o n z e n f i n e e l b a r a l z i z z l—」

私の制止を聴かず絶唱を歌い続ける二人。まずい、報告でマリアさんを含む「F・I・S」の装者三人の適合係数は「L i N K E R」つて言う特殊な薬を使って強引に引き上げてるって聞いている。「L i N

K E R」無しの絶唱で翼さんがあんなにボロボロになるんだ、
切歌ちゃんと調ちゃん

二人 人が絶唱なんてしたら…。

まさかさつきウエル博士が投与した薬って!?

「適合係数上がるほど絶唱のバックファイヤを軽減するのは実証済み!」「L i N K E R」をぶっこんだ直前の今なら絶唱歌い放題のやりたいほおだい!!正しくこの場での最適解!!」

やっぱりさつきの「L i N K E R」!くそ!ウエル博士、子供にばかり命を散らせて自分は逃げる算段か!?!どこまで腐れば気がすむ!!

そうしてる間にも二切歌ちゃん人は絶唱を歌い続けている。

こうなったらもう傷付けないなんて言ってられない!気絶させてでも絶唱を止める!

私が「約束エされた勝利スの剣カ」を構え直して突っ込む準備をしていざ飛び込もうとしたその瞬間だった。

「G a t r a n d i s b a b e l z i g g u r a t e d e n a
l —」

私の後ろから絶唱が聴こえてきた。

この歌声…まさか!?

私は後ろを振り向く。そこには…

「二人に絶唱は使わせない!!」

「ヒビキ!」

「ガングニール」を纏った響ちゃんがいた。

どうしてここに!?!さつき未来ちゃん達と一緒に避難したはず!まさか戻ってきた!?

混乱する私を置いて行きながら響ちゃんは絶唱を歌い切る。

「エネルギーが絶唱発動にまで高まらない!」

「減圧!アイツがエネルギーを奪い取ってるデスか!」

響ちゃんの絶唱でエネルギーを吸い取られた切歌ちゃんと調ちゃんは絶唱を発動させることが出来なくなったみたいだ。

「セット!ハーモニクス!!」

響ちゃんはそのまま腕のハンマーパーツを連結、右腕にエネルギー

を集中させ得られたエネルギーを全て空に向かって解放する。解放されたエネルギーがライブ会場の時と同じ様に虹色の竜巻となり天に上っていく。

エネルギーを解放し終えた後、響ちゃんはその場に膝を着いて動かなくなる。

「ヒビキ！ヒビ熱っ!？」

私が響ちゃんに駆け寄ろうとするも響ちゃんの体からとんでもない熱量が出てサーヴァントの体であるはずの私ですら触れることが出来ない。

「響!?響いいいいー!!」

そこに未来ちゃんが走ってくる。未来ちゃんは真っ直ぐに響ちゃんの元に行こうとしていた。私は未来ちゃんを抱き止める。

「いけませんミク!今のヒビキに触れては!!」

「離してください!響、響いい!!」

ダメだ完全にパニックになってる!

「オイ!こいつはどういう状況だよ!」

そこにクリスちゃんが来てくれた。

「クリス!ミクを押さえてください!」

「っ!おい、落ち着けて!」

「クリス!だって響が!!」

クリスちゃんが未来ちゃんを羽交い締めにして止めてくれる。

未来ちゃんのことにはクリスちゃんに任せるとして、響ちゃんをどうにかしないと!

私が解決策を考えてる最中…

「Imyuteus amenohabakiri tron」

翼さんが「天羽々斬」を纏いながらバイクでやって来た。翼さんはそのままバイクを跳躍させて雑貨ビルの屋上にあつた給水塔を切り裂く。

【騎刃ノ一閃】

給水塔に貯蔵されていた水が響ちゃんに降り注ぐ。やがて水が切れる頃には響ちゃんのギアは解除されてその場に倒れ込んだ。

「響ー響ー!!」

「ヒビキ、しつかりしてくださいヒビキ!!」

私と未来ちゃんの声も届かず響ちゃんは気絶していた。

その後、二課のスタッフがやって来て響ちゃんは緊急搬送されて行った。切歌ちゃんと調ちゃん、ウエル博士の三人はどさくさに紛れて退散していたようだ。

結局、私は守ろうとしたモノも守れず、捕らえようとしたモノすら掴めず、なんの成果も得られなかった。

そんな自分の無力感に私は苛まれるのだった。

掴み続けた手と離した手

あれから数日。私は以前として響ちゃんの監視任務に就いていた。今響ちゃんは未来ちゃんと一緒にスカイタワーを観光デイトしているところだ。

あの日、響ちゃんが二課に運び込まれて緊急手術を施された日。一命を取り留めた響ちゃんに弦十郎さんから体の事についての説明がされた。

「あはは、つまり胸の「 GANG ニール」が活性化される度に融合してしまふから…、今後はなるべくギアを纏わない様にしろと。あはは…」
なんと言うか…。何時もの響ちゃんの明るい笑顔とは真逆の空っぽで無理をしている笑顔だ。

「いい加減にしろ!!」

そんな響ちゃんに翼さんが怒鳴り付けた。

「なるべくだど!? 寝言を言うな! 今後一切の戦闘行為を禁止すると
言っているのだ!!」

「翼さん…」

「このままでは死ぬのだぞー立花!」

翼さんは目元に涙を溜めながらそう響ちゃんに叫ぶ。

以前、弦十郎さんから聞いた事がある。二年ほど前、翼さんの他にもう一人シンフォギア装者がいた。「天羽 奏」、響ちゃんの胸にある GANG ニールの元の持ち主だ。かつて彼女は翼さんと「ツヴァイウイング」と言うユニットを組み、歌手と装者の両立をしていたらしい。翼さんとはそれこそ無二の親友と言えるほど仲だった。けどとある大型のライブにてノイズの大量出現が発生、その撃退の為に彼女は絶唱を歌い、撃退には成功するものの絶唱のフィードバックにより死亡したとの事だ。

翼さんがこんなにも取り乱しているのはかつての奏さんの事があるからだろう。

「そんなくらいしときな。このバカだって分かってやってるんだ」

そんな翼さんをクリスちゃんが間に入って、仲裁する。翼さんはそ

のまま部屋を後にする。

「医療班だつて無能ではない。目下、了子君が残したデータを元に対策を進めている最中だ。治療法なんてすぐに見つかる。ほんの僅かな時間ゆつくりしてもバチが当たるもんか。だから今は休め」

「師匠…」

弦十郎さんに励ましの言葉を受ける響ちゃん。

その後、数日間の検査を終え再び日常生活に戻った響ちゃんだけど、 GANG ニールの侵食は未だ深刻レベルで進んでいる状況だ。医療班の人達も必死で治療法を探しているけど正直上手くいっていないらしい。

弦十郎さんは響ちゃんの今ある日常、特に未来ちゃんと一緒にいる時間が GANG ニールの侵食を抑制出来ると考えている様だ。私も何となくだけどそうだと思う。

そして今にいたる。響ちゃんは二課の医務室に運ばれた時とは違う心からの笑顔で未来ちゃんと観光デートをしている。私は少し離れた位置で響ちゃん達の様子を伺っている。

もちろん今回も「変身の指輪」で変装している。してるんだけど…、ここでちよつと問題が発生した。

響ちゃん達がいるこのスカイタワーは観光地として有名で外国人観光客も多く訪れる。その為、私が「変装の指輪」でガウエインやランスロットの姿になると道を訪ねてくる外国人や同郷の人間だと思われ声をかけるイギリス人やフランス人が多く現れた。さらに言っちゃうとベデイヴィエールの姿になったら逆ナンにもあった。これだから円卓の騎士は…。

なので今現在はある限り使わない人で変装している。その人物は円卓の騎士の一人でありガウエインの弟でありガレスちゃんの兄であるアツくんことアグラヴエイン卿だ。で、なんであんまり使わないのかと言うと…

「ママ…、あの人怖い…」

「しっ！そんな事言うんじゃないやありません！」

私の横を通り過ぎた親子の小声でのやり取り。これがあんまり使

わない理由だ。

この姿になるだけで道行く人がメツチャ怖がる。そりや当人の生前の人柄とか仕事の内容とか考えたとストレスであんな顔にもなっちゃやうとは思うんだけどさすがに周りがこんな露骨に嫌な顔されると使わなくなるのも必然だ。

ほらさつき横を通り過ぎた女の子、ちよつと涙目になってるし…。そんな私の愚痴を私自身で受け止めている中、響ちゃんと未来ちゃんとは地下の水族館からスカイタワーの特別展望台で町を上から見ている。今のところは問題無し。でも最近分かってきたけど、こう何か順調な時に限って何かしらアクシデントが起こるんだのね。

で、見事に的中してしまった。

「あれ、ノイズじゃないか!？」

「おい、逃げるぞー！」

展望台の窓には飛行型のノイズが我が物顔で飛んでいた。途端パニックになりエレベーターや非常階段に急ぐ一般の人達。私はその際に発生した人の波に吞まれてしまい響ちゃん達を見失ってしまう。何とか抜け出した後、響ちゃん達を探そうとするも、エレベーターと非常階段に殺到する人達が壁になり通れなくなっていた。

どうする…!?今すぐにも響ちゃん達を探しに行きたいけどこの人だからじゃ探すのも困難だ…。それに職員が少ないのか避難誘導も上手く進んでいないみたいだし…。

クソ、仕方がない！

「落ち着いてー！落ち着いてください!!」

「その職員」

私は避難誘導をしている職員に声をかける。

「何ですか!?!貴方も私達の誘導に従って避難をしなさい」

「私は「認定特異災害機動部」の者だ」

スーツの胸ポケットから二課の通信機を警察で言う所の警察手帳の様に見せる。ここで余談だけど、「変身の指輪」で変身している間は変身している人の姿だけじゃなく喋り口調まで変えられるらしい。なのでアツくんになっている今の私は男口調で喋っている。

「っ!?!政府機関の方ですか!?!」

「今この場での避難誘導を指揮している者は誰か?」

「あ、えーとその…。私達も突然の事態で困惑してまして…。非常用マニユアルに乗っ取って行動をしているだけで…」

「ならば私が臨時で君達の指揮を取る。正確な職員の数と今現在の配置位置を教えてください。分かり次第再配置をする。配置完了後、来場者を男と女・子供・老人に分け、男は室内非常階段に女・子供・老人はエレベーターに誘導する。急げ、時間との勝負だ!」

「は、はい!」

無線を使って私が指示した内容を伝える職員の人。響ちゃん達の事も重要だけど今は一般人の人命が最優先だ。もしかしたら既に避難し終えているか、避難誘導の途中で会えるかもしれない。

そんな希望的観測を願っている中、室内で爆発が起きる。

ドゴオン!

大きな振動が起きたと同時に落ち着きを取り戻しつつあった来場者が再びパニックになる。

不味い、これ以上避難を遅らせる訳には…!

「大丈夫ですか!?!」

すると私の前にさつき話をした職員が現れる。

「今スカイタワー内で避難誘導を行っている全職員と連絡がとれました! 詳細な配置位置をお教えします!」

私は職員からスカイタワーの地図を渡され、避難誘導をしている職員がいる位置をボールペンを使ってマーキングしていく。

よし、数と位置は分かった! 後はスムーズに避難誘導出来るように配置変えをするだけだ!

職員の人から通信機を借りスカイタワー内の職員に大まかな指示と移動場所を伝える。その時…

ドゴガアン!!

再び展望台で爆発が起きた。

ちいつ! アツチはやりた放題か!!

悪態をつきながらも私は職員と協力し、避難誘導を続ける。

その後、翼さん達シンフォギア装者が到着したことでスカイタワー周辺のノイズは撃退され事態は収束した。

だけど問題はそこからだった。

被害状況の確認の際に分かった事だけど、「F. I. S」と「米国政府」がスカイタワー内で接触し何らかの交渉が行われていた事が分かった。何の交渉がされていたかは分からなかったけど、交渉が行われている場でノイズが出現したとなれば結果は両者の意見は決裂したと見るのが明らかだ。

交渉はともかくスカイタワーにいた一般人まで巻き込むなんて…、大方は証拠隠滅かノイズ被害に偽装した逃走だろうけどやる事が無節操過ぎる。人類救済なんて掲げてるのにその過程で発生した被害は考えないって言うのか…？

私の中でフツフツと怒りが沸き上がってくる。だけど今は抑えないと。私はあネフィリムを撃退した日の殺時を思い出す事で自制する。あの日の様に感情を暴走させて要らぬことをしでかしては弦十郎さん達に罰を与えてもらった意味がない。

そして問題はもう一つ浮上していた。

未来ちゃんが行方不明になったのだ。弦十郎さんから話を聞くとスカイタワーの一部が崩れ落ちた際に響ちゃんが落下しそうなのを未来ちゃん手を掴み支えていたらしい。だけど未来ちゃんの力じや響ちゃんを持ち上げられないのは明白であり、響ちゃんはわざと落下しガングニールを纏う事で事なきを得た。だけどそれと同時にスカイタワー内で再び爆発が発生しそのまま未来ちゃんは行方不明となってしまうた。

「すみません。私が付いていながらみすみすこのような事態に…」

話を聴き終えた私は弦十郎さんに謝罪する。もちろん謝って済む問題ではないのは分かっているが、私が出れることは謝る事しか残されてない。

「いや、むしろお前は良くやってくれたぞセイバー。あの状況下で死者・負傷者が極めて少なく済んだのはスカイタワー内の職員の迅速な避難誘導とそれを指揮したお前のお陰だと言える」

そんな私に弦十郎さんは賞賛を送ってくれる。

「それに未来君の事もまだ死亡したと決まった訳ではない。今分かっている情報によるとスカイタワー内に未来君の遺体は発見されなかったらしい。まだ諦めるのは早い。セイバー、お前も緒川の指揮に入りスカイタワー周辺で未来君の捜索を始めてくれ」

「承知しました」

私は未来ちゃんの無事を祈りながら緒川さんの元に向け走り出した。

再会は唐突に残酷に

スカイタワーの襲撃から一日後。仮説本部内に私と響ちゃん達シンフォギア装者が集められていた。

「師匠、これは…?」

「スカイタワーから少し離れた地点より回収された未来君の通信機だ」

あれから私と緒川率いる調査部が周辺の調査をした結果、近くの水路でこれを通信機を発見したのだ。

「発信記録を追跡した結果、破損されるまでの数分間、ほぼ一定の速度で移動していた事が判明した。未来君は死んじやない。何者かによって連れ去られ、拉致されたと考えるのが妥当だろうが…」

「師匠!それってつまり!?!」

「こんなところで呆けてる場合じやないって事だろうよ!」

良かった。本当に良かった。十中八九何者かとは「F・I・S」で、拉致された事を考えると手放して喜べないのが残念だけど、それでも未来ちゃんが生きている事実があるだけで希望が見えてきた。

「さて、気分転換に身体でも動かすか!」

「はい!」

ん?ちよつと待って。何か嫌な予感がするんだけど…。

そして翌朝。

「♪」

私と響ちゃん達は走り込みをして、弦十郎さんが歌いながら走ってる。

…いや、ちよつと何言ってるか分かんないかもしれないけど現在進行形の事実をそのまま言ってるだけだからね?

しかも弦十郎さんが歌ってるのアレだ…、世界的に有名なカンフーアクション俳優主演のヤツだ。シンフォギア世界この世界にもあの人もいるんだね…。

「何でおっさんが歌ってんだよ!てか、そもそもこれ何の歌だ?大丈夫

夫か？」

まあ何て言うか：、弦十郎さんってどこか青春ドラマとかで出てくる教師っぽいからこのノリも分かってはいたけど：。むしろクリスちやんがこの歌知らないのにちよつとビツクリしてるよ。割と一般的にも知られてる歌だと思っただけけど？

「つーか、お前セイバーまでなんで走ってるんだよ？」

あ、やつぱり気になる？何となく自然に溶け込む感じで隣走ってたんだけど。まあ私の場合は前ネフィリム討伐回の罰で弦十郎さんから響ちやん達と一緒にトレーニングする事を言い渡させてやってるだけなんだけどね。

ちなみにだけど私も響ちやん達と同じでジャージを着てるんだけど何故かキャップとブルマ付きで、まあ簡単に言っちゃうとどう見ても謎のヒロインXの格好なんだよね。ご丁寧^{ひがみ}に体操着に「筆竜」つけてゼッケンまで付いてるし。用意してくれた弦十郎さん曰くなんか「似合いそうだったから」らしい。そりや似合うよ向サーヴァントユニバースこーうじゃこの格好なんだから。

「良いではないですか。友と共に汗を流し身心を鍛え合う。なかなかどうして気分が良い」

「んなもんかねえ？」

クリスちやんが呆れ顔をする。実際こうした運動する機会ってあんまり無かったしちよつといいかなくなって思ってる私もいる。

「〜♪」

ああ：なんか響ちやんもノってきて弦十郎さんと一緒に歌い始めたね。さすが師弟関係。

その後も特訓は続き、響ちやん達は普通の二重飛びなのに何故か私だけバク転しながらの二重飛びだったり、中腰の姿勢で耐える特訓で私だけ両手に水いっぱい**のバケツ持たされたり**、響ちやん達冷凍の肉殴つてたのに私だけマジ物の熊と戦わされたり、：とところで何で私だけちよつとハードル高めなの？

ちなみにだけど案の定生卵をジョッキで飲まされそうになったけどそこは怒っておいた。弦十郎さんだけがやるなら自己責任だけど

育ち盛りの響ちゃん達にそんな衛生上良くない事はさせられない。なので代わりに濃度高めのプロテインと私が作った卵料理で手を打った（使用した卵はジョッキの中に入れてたヤツ）。まったく弦十郎さんもいい大人なんだから映画の演出と現実をゴツチャにしないでもらいたいよ。

そんなこんなな事もありつつ特訓は終了した。

その数日後。

「F・I・S」の捜索中にトラブルが発生した。

「ノイズのパターンを検知！」

「米国所属艦艇より応援の要請！」

正面の大型モニターには米国の大型空母が写り、その甲板上に多くのノイズと十数人の米国兵が銃で応戦していた。だけどノイズは通常の兵器だと太刀打ちできない。あのままだと全滅する。

「この海域から遠くない！ 急行するぞ！」

「応援の準備に当たります！」

弦十郎さんが指示を飛ばして、翼さんが走って作戦指令室を飛び出す。

「翼さん！私m」

「死ぬ気かお前！」

響ちゃんが翼さんを追おうとするけどクリスちゃんがそれを止める。

「ここにいろって、な？お前はここから居なくなっちゃいけないんだからよ」

クリスちゃんの説得にどこか不満の顔をする響ちゃん。未来ちゃんが心配なのは分かるけど今の響ちゃんの状態で無理をさせる訳にはいかない。

「ビビキ」

「セイバーさん……」

私は振り返った響ちゃんの両手を包む様に手を繋ぐ。

「ビビキはミクを信じていますか？」

「…はい。未来ならきつと大丈夫だって信じてます」

「それは私達も一緒です。だからこそミクを信じる様に私達も信じてください。彼女を助きたい想いは皆同じなのですから」

「…分かりました。私、皆さんを信じます！」

そう答える響ちゃんに私は少し微笑んでからクリスちゃんと一緒に翼さんの後を追う。

だけど何だろう…、すごく嫌な予感がする。あの米軍艦隊にいるノイズからじゃない。もっと別の…、ドス黒い意思みたいなのを感じる…。

駄目だ怖じ気付いても仕方がない、今はノイズの撃退に専念しよう。

「あたし、あたしじゃ無くなってしまうかもしれないデス…。そうなる前に何かを残さなきゃ…。調に忘れられちゃうデス」

「切ちゃん…?」

「A c t i L i N K E R .」を打ち込まれた調は体の脱力感と共に切歌の語りを聞く。切歌の表情は何処か寂しく、儂く、何かに追い詰められているかの様に差し迫っていた。

「例えあたしが消えたとしても世界が残ればあたしと調の想い出は残るデス…。だからあたしはドクターのやり方で世界を守るデス…。もうそうするしk」

ザバアン!!

切歌の語りは突如して海から出現した物によって掻き消された。それはミサイルの様な形をした物であり、海面から数十メートル地点で上部ユニットが展開しブースターによる逆噴射によりゆっくりと自由落下を始める。さらにそこからミサイルの外装がパージされ中にいた翼・クリス・セイバーの三人の姿が露になる。

三人は同時に甲板に飛び出し、クリスは調の確保に翼とセイバーは切歌の確保に向かう。

「邪魔するなデス！」

切歌も翼とセイバーの迎撃に入るが2対1と言う数的不利と二人

の連携、なにより圧倒的な実力不足により早々に追い込まれ始める。
「おい、ウエルの野郎はここにはいないのか!？」

ソロモンの杖を使うあいつは何処にいやがる!」

クリスが調にそう問いただす。シンフォギアを纏っていないければ一般人と変わり無い調を取り押さえるのは余りにも容易だ。

「抵抗は無意味です。大人しくしなさい」

「うぐ…」

そしてそれは切歌も同様であった。容易に懐に潜り込まれた切歌はセイバーの「約束エクスされた勝利の剣カトリバー」を喉元に当てられ、更に背後から翼の「天羽あめのはばきり々斬」をうなじに当てられ完全に身動きが取れない状況になってしまった。

圧倒的優勢。まさにその言葉か似合う状況であった。

だがその天秤を覆す存在が空から降ってきた。

「Rei shen shou jing rei zizzl」

聖詠と共に降りてきたそれは空母に着地、煙を上げる。やがて煙が晴れていきその正体が露になる。

そこには…

「ミク…?」

紫色のシンフォギアを纏う小日向 未来の姿があった。

彼女は光の無い目でセイバー達を見定めた後、ギアから鈍器の様な武器を取り出す。

「うおおおああー!!!」

未来の雄叫びがまるで獣の様に響く。

「小日向が!？」

「何でそんな格好してんだよツ!？」

突然の事態に動揺を隠せない翼とクリス。

「あの装者は「LINKER」で無理やりに仕立て上げられた消耗品。私たち以上に急ごしらえな分、壊れやすい…」

クリスに拘束された調が静かにそう語る。

「ふざけやがって!」

「行方不明となっていた小日向 未来の無事を確認。ですが…」

「無事だ?!?アレを見て無事だと言うのか!?だったらアタシらは、あのバカに何て説明すればいいんだよ!」

クリスがそう叫ぶ中状況は動く。未来の目元にバイザーの様なパーツが起動しホバリングしながらセイバー達に接近する。

「っ!ツバサ、彼女切歌をお願いします!私はミクを!」

「セイバー!」

セイバーが切歌から離れ未来の迎撃に入る。未来は手にした武器からエネルギー弾を放ちながらなお接近してくる。

セイバーはそれを「直感」スキルと「魔力放出」スキルで回避しながら未来に接近する。

両者が間近まで接近したと同時に未来は手にした武器を上段から振り下ろし、セイバーは「約束された勝利の剣」を下段から振り上げる。

ガキゴン!

甲高い音と共に衝突する二つの武器、だがそれと同時に吹き飛ばされる未来。いくらシンフォギアを纏った事で強化されているとはいえ筋力：Bと「魔力放出」によるブーストがかけられた「約束された勝利の剣」を止めるには不十分であった。

吹き飛ばされた未来は空中で立て直し海上に着地、海面をホバリングで滑り出す。セイバーもまた「湖の精霊の加護」による恩恵を使用し海面を走りながら未来を追う。

未来は近接戦は不利と判断したのか手にした武器からのエネルギー弾による遠距離戦に戦い方を変えてくる。しかし未来予知にも匹敵するセイバーの「直感」スキルの前では命中などする筈も無く、容易に懐に入られてしまう。

ガキユンツ!ザツ!ガキユイン!

数度のつばぜり合い、飛び散る火花、荒れる海上、激しい戦闘が続く。

だがそれは明確に終わりに近づいていた。

打ち合いの中で徐々にギアの一部を破壊されていく未来、無傷のセイバー。誰の目から見ても差は歴然であった。純粹な力と戦闘経験

の豊富差が露骨に現れていた当然とも言える状況でもあった。

セイバーは再び「約束された勝利の剣」を下段に構えそれを未来の武器を狙い振り上げる。

ガキゴン！

二度体を空中に持つていかれた未来。さらにセイバーは跳躍し「約束された勝利の剣」を上段に構える

「すみませんミク！少しの辛抱です！」

セイバーは「約束された勝利の剣」の表面を未来に叩きつける。

ドゴンツ！

「約束された勝利の剣」を叩きつけられた未来はそのまま猛スピードで翼達のいる空母に激突する。

ドガシャン！

空母の破片が飛び散り、煙が上がる。セイバーが空母に降り立った時には未来は破片と共にうもれていた。

セイバーは未来に近づきシンフォギアの「マイクユニット」に手を伸ばす。

『女の子は優しく扱ってくださいね』

「っ!?!ウエル博士!?!」

突如未来のシンフォギアから無線越しのウエル博士の声が聞こえてくる。

『乱暴にギアを引き剥がせば、接続された端末が脳を傷つけかねませんよ』

「何!?!」

ウエル博士の言葉に動揺するセイバー。その瞬間、未来が起き上がり手にしていた武器を扇状に展開、円の形を形成した物を構える。

「避けるセイバー!」

翼の声に正気に戻ったセイバーは「直感」スキルの赴くままに距離を取る。すると円の形をした武器の鏡からエネルギー弾が散弾の様に飛んでくる。

【閃光】

セイバーはそれを辛うじて全て避ける。

だが未来の反撃はこれで終わらない。

エネルギー弾を撃ち終わると同時に手にしていた武器を収納し脚部のパーツから鏡が出現、自身を中心に円形に展開する。展開完了と同時に紫色の光を放ちながらエネルギーが溜められていく。

ここでセイバーは違和感を覚える。先程まで感じていた自分に対する敵意が無くなっていった。セイバーは未来が向けている目線の先を追う。そしてその狙いを突き止めた。

「クリス！」

「っ!?!狙いはこっちか！」

セイバーがクリスに向け声をかけた瞬間、未来がエネルギー弾を発射する。

【流星】

「だつたらリフレクターで!!」

クリスは腰部のパーツからリフレクターを展開する。エネルギー弾はリフレクターにより弾かれ四方に枝分かれしていき空母を破壊していく。

「調、今のうちに逃げるデス！消し去られる前に！」

「どう言うことだ!?!」

切歌の叫びを驚愕する翼。だが悠長に驚いている暇は無かった。

未来から放たれたエネルギー弾は衰えること無く放ち続けている。それをリフレクターで弾き続けているクリスではあったが…

「て、何で押されてんだよ!?!」

リフレクターで弾き続けている筈のエネルギー弾は徐々にクリスに迫っていた。

「無垢にして苛烈。魔を退ける輝く力の奔流…。これが、「神獣鏡」のシンフォギア」

調が静かにそう語る。

「リフレクターが分解されていく!?!」

やがてリフレクターがエネルギー弾によって弾けるように分解されていき、光がクリスを包む直前…

ヒュー…ガキーン！

クリスの眼前に身の丈を遥かに越えた剣が突き刺さる。刺さった衝撃でバランスを崩すクリス、それをセイバーが腰に左手を回し体を密着させることで固定したいわゆる横抱きの状態で受け止めた。

「セイバー!?!」

「呆けない!!」

セイバーの横で調を肩に担いだ翼がそう叫ぶ。セイバーと翼は共に大型の剣を背に走る。だがエネルギー弾は大型の剣を貫通しセイバー達に迫る。それを翼が先程と同じ様に大型の剣を盾にして防ぎまた貫通し剣で防ぐ。幾度もそれを繰り返していく。だがエネルギー弾は未だに衰える事を知らない。

「ツバサ!」

「っ!」

セイバーが翼を呼びその目を見る。翼もまたセイバーの目を見てその思考を読み取る。瞬間、翼は自分達の前方に大型の剣を出現させた。

「どん詰まり!?!」

「喋ると舌を噛みますよクリス!!」

セイバーは右手持っていた「約束された勝利の剣」を逆手に持ち直し、刀身が下になるようにする。

「しっかり掴まってください!」

セイバーの言葉にクリスは自分の両手をセイバーの首に回し更に密着する様にする。そして大型の剣が眼前にまで迫った瞬間…

「風よ、吠え上がれ!」ストライク・エア「風王鉄槌」!!」

「約束された勝利の剣」に纏われていた風を一気に解放、下方から圧力のかかった風が巻き起こる。それと同時にセイバーは全身に「魔力放出」を施し大型の剣の表面を垂直に駆け上がる。隣で平行していた翼も脚部のパーツによるホバリングとセイバーの起こした風によって同じように剣の表面を垂直に駆け上がっていた。

駆け上がった直前、エネルギー弾が大型の剣を貫通する。

セイバー達は間一髪エネルギー弾の回避に成功したのであった。

疾走するは現代の騎兵馬

破壊された箇所からもくもくと煙が上がる中、未来はエネルギー弾を放った場所に制止していた。

「やめるデスッ！調は仲間！あたしたちの大切なn」

『仲間と言いい切れますか？僕たちを裏切り、敵に利する彼女を、月読調を仲間と言いい切れるのですか？』

切歌の叫びはウエル博士の冷徹な反論に掻き消されてしまう。

「違う…、あたしが調にちゃんと打ち明けられなかったんデス…。あたしが調を裏切ってしまったんデス…！」

「切ちゃん！」

項垂れる切歌に翼の肩から降ろされた調が声をかける。

「ドクターのやり方では弱い人達を救えない！」

『そうかもしれない。何せ我々にかかる災厄に対してあまりに無力ですからね。シンフォギアと聖遺物に関する研究データはこちらだけの占有物ではありませんから。アドバンテージがあるとすれば…、せいぜいこの「ソロモンの杖」！』

すると再び艦隊内に無数のノイズが出現する。ウエル博士が「ソロモンの杖」を起動し、ノイズを呼び出したのだ。

「ノイズを放ったか！」

「クソつたれが！」

悪態を付きながらもクリスは跳躍し両手のガトリングと腰部のミサイルでノイズの迎撃に入った。

その隙に未来が円形の鏡を解除してその場を離れようとしていた。

「っミクー！」

「でええええええい!!」

セイバーが未来を追おうとすると切歌が急接近し鎌を風ぎ払おうとしていた。セイバーは迎撃の為「風王結界」が解除された「約束された勝利の剣」を構えるが…

ガキユン！

セイバーが迎撃する前に翼が切歌の鎌を止める。

「セイバー！小日向を追ってくれ！」

「ツバサ!?しかし…」

「案ずるな、この程度の窮地乗り越えずして防人を名乗れようか！」

「っ…」

「行け!!」

「分かりました。ここをお願いします！」

セイバーは踵を返し未来の後を追う。やがて駆逐艦の船橋の上に未来を見つけたセイバーは海面から跳躍し同じく船橋上に着地すると未来と相對する。

「ミク…」

「…」

二人の間に数秒の静寂が生まれる。すると未来が再び鈍器の様な武器を取り出しセイバーに向ける。セイバーもそれを見た瞬間「約束された勝利の剣」を構える。

「ミク、貴女を斬りたくはない。ギアを解除して帰りましょう。ヒビキ達のいる所へ」

「…帰れません。私にはやる事があるんです」

未来が目元バイザーを開き、光の無い目でセイバーを見る。

「やる事…、それは？」

「このシンフォギアを使って新しい世界を作るんです。その新しい世界には争いが無い、誰もが笑顔でいられる世界なんです。私は新しい世界を作って響が戦わなくてもいい世界を作るんです」

「ミク…、それはヒビキが望んでいる世界なのですか？」

「響が戦わない世界です。響だつてそれを…」

「それは傲慢ですミク。ヒビキが望んでいるのは貴女と共に歩む未来です。分からないのですか、ヒビキが今悲しんでいる事を!」

「悲しむ…、どうして…」

「貴女が戦っているからです」

「…っ」

セイバーの言葉に微弱ながらも戸惑う未来。

「ミク、ヒビキがどうして戦い続けていられるか知っていますか？他

人である誰かの為に傷付き、倒れ、挫けてもなお立ち続ける彼女の心情に貴女への思いがあるからです！貴女と言う居場所があるから彼女は戦い続けることができるんです！」

「でもそれじゃ響が傷付くだけです。私が響を戦いから解放します。例え私が死んでも」

「ミク!!」

「セイバーさん!!」

問答の中、背後から響のセイバーを呼ぶ声が聞こえた。セイバーは振り向き、いつの間にか浮上していた仮設本部の船橋の上に響がいることを確認する。

「ヒビキ!?何故そこに!」

「セイバーさん、未来の事私に任せて貰えませんか!」

「しかしヒビキ、貴女の体は!」

「私、セイバーさんを信じてます!!」

「っ……!」

響がセイバーに向けそう叫び、セイバーは押し黙る。響の顔はいつかの覚悟を決めた顔であった。

「翼さんも、クリスちゃんも、師匠も、二課のみんな信じてます!だから私が信じてる様にセイバーさんも私を信じて下さい!」

「ヒビキ……」

セイバーは一度、目を閉じてからゆっくりと開けた後、
「エ約束された勝利の剣」の構えを解く。

「分かりました。ミクの事、ヒビキにお任せします。ただし一つだけ約束してください」

「……」

「必ず二人で帰って来てください。これは王命です。破ったら極刑ですよ」

「はい!」

セイバーは響に向かって少し微笑むとすぐに仕切り直し、翼とクリスの支援に向かう。

その間、眩しい光と共に巨大な遺跡が海から浮上して来るの目撃す

る。

「一体アレは…」

セイバーが驚愕している中…

バンツ！ バンツ！

と、銃声が響いた。

既にノイズが全滅していることを確認していたセイバーはクリスのギアから響いた物と思い、銃声がした駆逐艦に向かう。

だがたどり着いたそこには…

「サヨナラだ…」

と言つて俯せの状態うつぶで倒れている翼にハンドガンを向けているクリスであった。さらにクリスは続けて翼の背中に向けて発砲しようとしていた。セイバーは「魔力放出」で一気に加速、引き金が引かれたと同時に翼に向かっていった銃弾を「約束された勝利の剣」で弾く。

ガキュ！

「どう事ですかクリス！ ツバサを背後から撃つなど！」

「どうもこうもねえよ。テメエらに嫌気が差したから乗り換えようつてハラなただけだ」

「クリス！」

「でりやあああ!!」

セイバーとクリスの問答の途中で切歌が背後から鎌を上段に構えセイバーの背中を狙う。

「ちい！」

セイバーは舌打ちをしながらも振り返り、鎌が振り下ろされる前にがら空きになった切歌の腹部めがけて「魔力放出」で加速した右片足を飛び蹴りを食らわせる。

ドボウツ

「ガハツ!?!」

切歌の体が見事にくの字に折れ、そのまま足を引き伸ばし切歌を駆逐艦の壁に叩き込むと同時に、切歌を踏み台に右足の裏に「魔力放出」を施すことで今度はクリスに向かって跳躍する。

「やあああ！」

ガキン！

「ぐうっ!!」

上段から振り下ろされた「約束された勝利の剣」を両手に持ったハンドガン×字に組むことで防ぐクリス。だが衝撃を受け止めきれず片膝を着いてしまう。

「何故ですクリス！何故！」

「今は退いてくれ……」

「っ！」

クリスがか細い、しかし確かに聞こえるようにそうセイバーに告げた。セイバーはその声を確かに書き留め、一旦バックステップで距離を取る。

「……」

「……」

互いの目を見合うセイバーとクリス。やがてセイバーは翼を肩に担ぎ、戦線を離脱するのだった。

時間は進み、二課仮設本部メデイカルルームにて救助された未来が無事に意識を取り戻したと言う連絡が一同に入る。

「未来!!」

部屋に入ると同時にベッドから上半身を起こしていた未来に抱きつく響。

「小日向の容態は？」

「LINKER」も洗浄。ギア強制装着の後遺症も見られないわ」

「良かった……、ホントに良かった〜！」

満面の笑みで喜ぶ響、その後ろで顔を見合わせ微笑む翼・友里・セイバーの三人。皆が未来の無事を心から喜んでいた。

「響、その怪我……、私のせいだよね……」

「うん。未来のおかげだよ」

「え？」

「ありがとう、未来」

感謝される事に困惑する未来に友里が響のレントゲン写真を見せ

る。そこには心臓に刺さっていた筈の GANG 二ールの破片が綺麗さっぱり消えていた。

「あのギア神獣鏡が放つ輝きには聖遺物由来の力を分解し、無力化する効果があったの。その結果二人のギアのみならず、響ちゃんの体を蝕んでいた GANG 二ールの欠片も除去されたのよ」

「小日向の強い想いが、死に向かつて疾走する立花を救ってくれたのだ」

「私が本当に困った時、やっぱり未来は私を助けてくれた。ありがとう」

「私が…響を…」

その事実に一瞬暗い顔をする未来。そこにセイバーが近寄る。

「ミク」

「セイバーさん…、ごめんなさい。私セイバーさんにも…」

「いいのですミク」

セイバーは未来を抱き寄せ頭を撫で始める。困惑する未来はセイバーの顔を見る。優しい表情をしたセイバーの顔が未来の目に写る。

「無事に帰ってきてくれた…、それだけでいいのです。お帰りなさい、ミク」

その言葉に未来は両手をセイバーの背中に回し涙を流す。

「ごめんなさい…、ごめんなさい…、ごめんなさい…」

何度も謝罪を繰り返しながらセイバーのスーツのシャツを涙で濡らしていく未来。セイバーはただ静に未来の頭を撫で続け、響達はそれを暖かな表情で見守るのであった。

「まだ安静にしてなきゃいけないじゃないか！」

「ごめんなさい。でも、居ても立ってもいられなくて…」

作戦指令室にやって来た未来ちゃんを怒る弦十郎さん。まあ病み上がりの体を押してきたからね。そりゃ怒るよ。

「クリスちゃんが居なくなつたと聞いたら、どうしてもって…」

「確かに、響君とクリス君が抜けたことは作戦遂行に大きく影を落としているのだが…」

「でも、翼さんに大事が無かったのが本当に良かった。セイバーさんが守ってくれたおかげです」

友里さんがそう称賛してくれるけどちよつと違うと思う。翼さんの検査結果を見せてもらったけど背中を撃たれた時の傷が明らかに急所から外れていた。あの距離で背後から翼に気付かれずに急所を外すなんてクリスちゃんの腕を考えたらまずあり得ない。

それにあの時の「今は退いてくれ…」って言葉…。きつとなにか事情、もしくはクリスちゃんなりの考えがあると私は睨んでいる。だから私はクリスちゃんを信じる事にした。いやたぶん二課の皆も裏切ったなんて考えて無いんだろうけどね。

そんなことを考えていると仮設本部が大きく揺れ始める。

「広範囲に渡って海底が隆起！ 我々の直下でも押し迫ってきます！」

倒れそうになった響ちゃんと未来ちゃんを支えてあげながら藤堯さんの報告を聞く。そのまま仮設本部は海上に出てきた遺跡「フロンティア」の地表に上げられた状態となった。

さらに月の軌道を計測した結果、どうやら月にアンカーを打ち込んだ事で「フロンティア」を浮き上がらせ、さらにそれによって月の落下も早まったらしい。ますます分からなくなる、「F・I・S」は人類の救済を目的にしているのにこれでは因果応報になっている。

ただ一つだけ分かることもある。これには恐らくウエル博士の独善が絡んでいる。もしかしたら「F・I・S」そのものがウエル博士に利用されているのかもしれない。だとしたら止めないといけない。それが出来るのは今、最も動いて近い私達なのだから。

そして弦十郎さん立案の作戦の元、翼が単機で先陣を切る事になった。まだ情報が不足している上に「F・I・S」がどう動くか分からない為、私は仮設本部で待機して温存する作戦だ。

「翼、行けるか？」

「無論です」

「翼さん！」

「案ずるな。一人でステージに立つ事には慣れた身だ」

翼さんがライダースーツに着替えて出撃して行く。翼さんもきつとクリスちゃんの事には疑問を持つてはらず。ならクリスちゃんの事は任せて大丈夫だ。

「Imyuteus amenohabakiritron」

【騎刃ノ一閃】

翼さんがバイクを駆りながらノイズをバツバツと切り裂いていく。

「さすが翼さん！」

「しかしこちらの戦力はセイバーさんを除いて装者一人。この先どう立ち回れば…」

「いえ、こちらの装者は一人じゃありません」

「ギアのない響君を戦わせるつもりはないからな」

「戦うのは私じゃありません」

そして指令室に連れて来たのはあのピンク色のシンフオギアの適合者「月読 調」ちゃん。先ほど私が尋問室から指令室に案内して、緒川さんが手錠を外してあげた。

「捕虜に出撃要請ってどこまで本気なの？」

「もちろん全部！」

響ちゃんが笑顔でそう言うけど調ちゃんは少し顔を背ける。まあいきなりじゃ信じられないよね。

「貴方のそういう所、好きじゃない。正しさを振りかざす偽善者の貴女は…」

「私、自分のやってる事が正しいなんて思っていないよ。以前大きな怪我をした時、家族が喜んでくれると思ってリハビリを頑張ったんだけどね…、私が家に帰ってから、お母さんもお祖母ちゃんもずっと暗い顔ばかりしてた…。それでも私は自分の気持ちだけは偽りたくない。偽ってしまったら、誰とも手を繋げなくなる」

これは多分、以前報告書で見た二年前の響ちゃんの事だと思う。内容は正直見ている気分の良いものではなかった。でもそれがあったからこそ今の響ちゃんがいたんだと思う。

「手を繋ぐ…、そんな事本気で…？」

「だから調ちゃんにもやりたい事をやり遂げて欲しい。もしもそれが私たちと同じ目的なら、少しだけ力を貸して欲しいんだ」

「私の、やりたい事…?」

「やりたい事は、暴走する仲間達を止めること。でしたよね?」

緒川の言葉に調ちゃんは少しだけ涙を見せて背中を向けた。だけど…

「皆を助けるためなら、手伝ってもいい」

そう言ってくれた。やっぱり敵わない響ちゃんには。何処までだつてとことん信じ抜くんだもん。すると調ちゃんが私に近付いてくる。

「貴女の言ってた事…、今なら少しだけ分かる気がする。何も知らないで…知ろうとしなくて決めつける事なんて出来ない。だから、ちゃんと知りたい。彼女の言う言葉が善意なのか偽善^善なのか知る為に」

そっか。なら私から言える事は一つだ。

「そう思う事が出来ただけで貴女は以前より大きく成長しました。どうかその思いを忘れないで下さい。そいっていずれ貴女と同じ待遇の者に今度は貴女が助言をしてください。同じ過ちを繰り返さないために」

「…ん」

ちよつと恥ずかしそうに頷いてくれる調ちゃん。

「だけど信じるの? 敵だったのよ?」

「敵とか味方とか言う前に、子供のやりたい事を支えてやれない大人なんて、かつこ悪くてかなわないんだよ」

そう言いながら弦十郎さんは調ちゃんにシウルシャガナのペンダントを渡す。

「コイツは可能性だ」

「相変わらずなのね…」

「甘いのは分かってる、性分だ。

「…ん?」

あれ、なんかさっきの会話に違和感ない? 調ちゃん、弦十郎さんと対面するの初めてだよね? なのに相変わらず? どゆこと?

なんて考えていると響ちゃんが調ちゃんの手を取って走り出す。

「ハッチまで案内してあげる！急ごう！」

手を引かれて付いて行く調ちゃん。

この時、私は響ちゃんの考えていそうな事を察していた。けどそれをあえてスルーした。

そして予想道理、調ちゃんがシンフォギアを纏って出撃して行く中その背中に響ちゃんを乗せていた。

「何をやっている!?響君を戦わせるつもりはないと言ったはずだ！」

『戦いじゃありません！人助けです！』

そのまま響ちゃんは調ちゃんと一緒に仮設本部から離れていく。

「これは困りましたねゲンジウロウ」

「セイバー？」

「出撃要請を出したとはいえ、捕虜と非戦闘員が戦闘中の現場に出てしまいました。捕虜の監視と非戦闘員の護衛が必要になるのでは？」

「お前…まさか分かっていて見逃したな？」

「さあどうでしょうか？」

私は少し頬を吊り上げ飄々と笑う。弦十郎さんには悪いけど今のこの状況で本部でゆっくり待機なんて出来ない。一刻も早く事態の終息に行きたい。でも響ちゃんみたいに勝手に出て行ったら後で面倒ごとになる。だからいい建前を作った。

すると弦十郎さんは右手を頭に抱えながら「はあ…」とため息をつく。

「意外と食えない所があるんだなセイバー」

「策を講じられなければ王などやってられませんから」

まあ中身はただの元一般人なだけどね…。

「まったく、」

セイバーお前に新たな任務を伝える。現場にて行動中の月読 調君の監視、ならびに非戦闘員である響君の護衛だ。すぐに向かえ！」

「承知しました。馬を使いますー！」

私は作戦指令室を飛び出し出撃ハッチまで走る。

ハッチに到着と同時に隅に置かれていた灰色のカバーで被われた

それに向かい、カバーを両手で持ってガバツと外す。
漆黒の色に所々メタリックな銀色が目立つ現代の鉄の馬が姿を現す。

私はそれに股がりポケットからキーを取り出して差し込み捻る。
馬の心臓が唸りを上げて鼓動する。

『セイバーさん、ハッチ前方にノイズ反応無し！何時でも行けます！』
「了解しました。ヒビキ達までのナビをお願いします！」

イヤホン型の通信機から藤堯さんの報告を聞きながらアクセルを
数回捻ってエンジンを空吹かしして一気全開、ハッチから飛び出す。

悪路を走るのは初めてだけど急がないと！

私は速度を上げて響ちやん達の元に向かうのだった。

その銘（な）は…

藤堯さんのナビにしたがってフロンティアを走り続ける私。

にしても走りづらい。このバイク^{VIMAX}ただでさえ真っ直ぐに走らせるのにも苦勞するのに舗装^{ほそう}されてない悪路を走るのがこんなにも難しいなんて。おかげで急ぎたいのに全然スピードも出せてない。

『セイバーさん！前方に響ちゃん達が！』

とかなんとか考えていると藤堯さんの声がイヤホン型の通信機から響く。

前を見てみるとギアを纏っている調ちゃんと制服姿の響ちゃん、そしてその正面の遺跡の上にギアを纏った切歌ちゃんがいた。

私はバイク^{VIMAX}を横にスライドさせ、右足を地面に押し込みながらブレーキをかける。壮大に砂利と土煙を上げながら響ちゃんの隣に丁度止まる。右足メチャ痛いけどこうでもしないと止まれないからね。

「ビビキ！」

「セイバーさん！」

「あら、丁度お迎えも来たみたいね」

あれ？何だろう調ちゃんから感じるこのどこか懐かしくて、モヤモヤする感じ…。

「貴女も私も色々と言いたい事はあるでしょうけど今は先に進みなさい。この星の未来がかかってるんでしょ？」

…うん、何となくだけどこの人が誰なのか分かった気がする。確かに急がないとイケない状況だ。だけど彼女^{彼女}だとしたら訊かないとイケないことが一つある。

「ならせめて一っだけ問います、貴女は何故そこにいるのですか？」

私の問いに彼女は「フツ…」と少しだけ頬を上げて答えた。

「千年以上も悪役やってきて今さら胸なんて張れないけど、一度くらいは守ってみたいじゃない世界ってものを。それに…この世界は今日を生きる彼女^{彼女}達のもの

なんでしょ？」

うん、そっか。それが訊けたのならきつと信じて大丈夫だ。

胸のモヤモヤが取れいくのを感じながら私はバイクのハンドルを握り直す。

「ヒビキ、乗ってくださいー！」

「はいー！」

響ちやんがバイクに股がって私のお腹に両腕を回し掴まる。それを確認した私はアクセルを全開に回す。後輪が砂利によって軽いスリップを起こしつつも走り出す。

「させるもんかデスー！」

切歌ちやんが私達の妨害をしようとする。けどそれを彼女…いや多分あれは調ちやんが阻止してくれる。

私はそれを横目で感謝しつつ中枢へと向かう。

「ただどこで問題が起きる。私にじゃない、バイクの方にだ。」

さつきからバイクから変な音が聴こえる。多分無理矢理に舗装されてない砂利道を強引にしかも全速力で走ってるから無理が来たんだろうと思う。もしかしたらさつきのブレーキでフレームも歪んできてるかも。このままだと中枢にたどり着く前にマシンがおじやんになりそうだ。

仕方がない、出来るかどうか分からないけどアレをやってみよう。

私はバイクに「魔力放出」を応用して魔力を送り込み、送り込んだ魔力をある形に変換する。

するとバイクに変化が現れる。

エンジンは蒼い炎を帯びて、車体はセイバーの鎧を彷彿させるような白銀のボディへと生まれ変わった。

ここまで言えば分かると思う。そう、私は／＼zeroでセイバーがライダーの「神威の車輪」に追い付くためにやったあの即席魔改造をやったのだ。

正直上手くいくか分からなくて今までやらずにいたけど本番一発で成功して良かった。

名前無いと不便だしとりあえず「疾走する白銀の装甲騎兵」とでも名付けておく。

「え、えええええ!? バイクが変わった!? 何これ!!」

後ろの響ちゃんが急にバイクの姿が変わってビクビクしてる。まあだろうね。だけど多分また驚くことになると思う。

私はダメ押しとばかりに自分の前方に向かって魔力を送り込む。

「風王結界」^{インビジブル・エア}ー！」

本来なら「約束された勝利の剣」^{エックス・カッパ}の真名を隠す為の宝具を応用して空気の壁を作って、バイクにかかっている空気抵抗を格段に減らした。これでバイクの速度を上げられる上にフレームの負担も軽減できる。

本当なら人間が呼吸出来るギリギリのレベルまで空気抵抗を減らしたかったんだけど今後ろに響ちゃんがいるからある程度は加減している状態だ。

で、その響ちゃんはと言うと…

「ふおおおおおお?!?!」

急激に加速が上がった状況に理解が追い付かず、困惑しまくった。とにかく跳ばされないようにする為に私のお腹に回した両腕を目一杯力を入れて掴まる。そしてそれによつて私のお腹が全力で締め上げられる。

ちよつと響ちゃん?!いくらサーヴァントの体でも割りとは本気で苦しいからもうちよつと何とかならない!?

てな事考えてたら中枢へと続くと思われる一番大きな遺跡が迫ってきた。遺跡には長く続く階段があり、内部に侵入するには階段を上る必要がある。

ここでちよつとしたバイク知識。

実はバイクで階段を上るのは難しい事だったりする。階段を昇る時タイヤの当たる面積が極端に少なくなつて摩擦が取れず、一段上がるときにガタガタと揺れてしまつてバランスが取りづらいからだ。その上、私の乗っているバイクは完全スポーツ車なので元々こう言つた砂利道なんかを走るように作られてない。

本当なら遺跡の前でバイクを降りて普通に上るのがいいんだけど如何せん時間が無い。

なのでもうちよつとバイクに無理をしてもらおう。

遺跡の階段が我前に迫って来たと同時に、右グリップに備え付けられた「NITRO」と書かれたボタンを勢いよく押す。

プシュー、バボンツ!

空気の抜ける様な音と共にマフラーから爆発音が轟く。それと同時に瞬間的に速度が上がっていく。さらに私は後輪部分から「魔力放出」を後ろから押し出す感じに放出して加速に拍車を掛ける。

狙い道り、バイクはまるでロケットの様に階段を上っていく。なんでロケットと例えたかと言うと現状バイクがほとんど浮いている状態だからだ。それを「魔力放出」で階段に車体を押さえつけて後ろの「魔力放出」で押し出す完全なゴリ押しで上っているからだ。

ちなみに響ちゃんは…

「んんんん!!」

私に離れるもんかと言わんばかりにしがみついている。もう完全に私の背中に顔を埋めている状態だ。そして私のお腹の締め上げもとんでもない事になっている。

ふんごおおお!?響ちゃんマジで勘弁して!それ以上のプレスは色々^魔と出ちやうからあ!具体的に言うとお撃前に食べたおにぎり^カ三十個^補くらいが出ちやうからあ!!

悶える私の気も知らず響ちゃんの締め上げは増すばかり。私は日頃の訓練で鍛えられた腹筋を張り何とか堪え忍ぶ。

やがて階段を上りきったバイクは頂上で二メートルほど飛び上がったから中枢へ続く道に着地する。着地の瞬間バランスを崩しそうになったけど「魔力放出」で何とかバランスを取ってそのまま道なりに走らせる。

この向こうにウエル博士が…

一抹の不安が私を過る。果たして私はウエル博士と再び対峙して平静を保っていられるのか…。またあの時の様に激昂してしまわないか…。

そんな不安を胸に私はアクセルを捻るのであった。

「そんなに遺跡を動かしたいのなら!アンタが月に行ってくればいい

だろ!!」

ウエル博士がフロンティアのコンソールを操作し、ナスターシャ教授のいる管理ブロックごと射出、月へ向け打ち上げられる。

「ママっ!」

「有史以来、数多の英雄が人類支配をなし得なかったのは、人の数がその手に余るからだ! だったら支配可能なまでに減らせばいい! ボクだからこそ気付いた必勝法! 英雄に憧れる僕が英雄を超えて見せる!!」

月に向かって飛び続ける管制室を眺めながらウエル博士はそう言い放ち高らかに笑う。

「よくもママを!!」

起き上がったマリアはガングニールのアームドギアである槍を呼び出しウエル博士に向け構える。

「手に掛けるのか!?! この僕を殺す事は、全人類を殺す事だぞ!」

切っ先を向けられたにも関わらず高慢な態度を崩さないウエル博士。だがその余裕はすぐに消え去る。

「殺す!!」

「っ?! うええええええ!」

マリアはそのまま槍を中腰に構えウエル博士に向け突撃する。自信かそれとも自惚れか、怯むと思われたマリアの反応がまるで真逆な事に動揺し悲鳴を上げるウエル博士。

そのまま一直線に槍がウエル博士に突き刺さろうとした…その時。

「ヴオオオオオオオオ!」

コンソールに続く階段から甲高いエンジン音と共に勢いよく飛び出してた白銀の馬が現れた。

その馬の背バイクに股バイクがバイクつバイクているのは黒いスーツを纏った金髪の女性と制服姿の少女。「疾走する白銀の装甲騎兵」に股バイクがバイクつバイクたセイバーと響であった。

セイバーは「魔力放出」を利用し前輪を先に着地させジャックナイフの状態となり、着地と同時に後輪の真横から更に「魔力放出」を行う。前輪を支点に「疾走する白銀の装甲騎兵」がその場でターンし、マ

リアの槍が後輪に付けられた魔力の鎧と衝突する。

ガキユン！

「ぐっ！」

「疾走する白銀の装甲騎兵」の重量と「魔力放出」による加速が合わさり大質量の塊と化したそれは正しく鈍器と言って差し支えなく、リアの槍を意図も容易く弾き返した。

そのまま「疾走する白銀の装甲騎兵」は270度ジャックナイフターンをし、リアに直面するように制止する。

「ちい、そこをどけ！融合症例第一号と予想外!!」

「違うー！」

響は「疾走する白銀の装甲騎兵」から降り、リアの前に立ちほだかる。

「私は立花 響、十六歳！融合症例なんかじゃない！ただの立花 響が、リアさんとお話ししたくてここにきてる!!」

「お前と話す必要はない！ママがこの男に殺されたのだ！ならば私もコイツを殺す！世界が守れないのなら、私も生きる意味は無い!!」

リアは再び槍を構えウエル博士に向け突貫を行う。

だがそれは途中で止められてしまう。響とセイバーの手が槍の先端部分を掴みその動きを止めた。

手のひらに刃が食い込みポタポタ血が滲み出る。

「お前達……」

「意味なんて、後から探せばいいじゃないですか」

「生きる意味が無いと貴女は言った。それは間違いです。貴女にはあらずだ。貴女を想い、貴女が想う大切な人達が！」

「だから、生きるのを諦めないで（ください）!!」

すると響の胸の内に歌詞が流れ込んでくる。響はそれを歌い上げる。

「Bal wis yall Nes cell gun gnir …」

「聖詠!?何のつもりだ!」

「トロオオオオオン!!」

その歌にリアのガングニールの槍が消滅する。いや、槍だけでは

ないマリアが纏っていたギアその物が解除され美しい金色の粒子へと変わる。粒子は室内全てを満たし、きらびやかな幻想を作り出す。

「何が起きているの…!」

こんな事ってありえない…!」

融合者は適合者ではないはず!」

これは貴女の歌、胸の歌がして見せた事!」

あなたの歌って何!」

なんなの!」

マリアは響に問い続ける。

「いってくださいいヒビキ! 貴女の心、全てで!!」

セイバーは響に激励する。

そして響はその声に答える様にその名を叫んだ。

「撃槍! ガングニールだあああああ!!!」

六つの音楽と星の光

「ガングニールに適合する…だと…!?!」

マリアのガングニールを身に纏った響をマリアが驚愕の眼差しで見ると、それは偶然が生み出した奇跡か、それとも必然か…。だが事実として現に響は再びシンフォギアを纏うことに成功した。

「うわあああー!」

そこにウエル博士が悲鳴をあげながらその場を逃亡しようとする。

「っ!?!ウエル博士!」

セイバーは「疾走する白銀の装甲騎兵」を降りウエル博士を捕らえようと手を伸ばす。既の所でウエル博士が階段を踏み外した事でセイバーの手はウエル博士を捕らえられず空を切る。

ウエル博士はそのまま転げ落ち、全身を地面に叩き付ける。

「こんなところでえ…!終わる…ものかあ!!」

ウエル博士は最早人の物とは思えないほど変化した左手を使い地面に穴を開け、そのまま下の区画に逃亡する。

この時、遺跡の中に突入していた弦十郎と緒川が到着するも間に合わず見逃してしまう。

「響さん!そのシンフォギアは!?!」

「マリアさんのガングニールが、私の歌に答えてくれたんです!」

緒川の疑問に響が答える。

すると突如フロンティアに地震が発生する。

『重力場の異常を計測!』

『フロンティア、上昇しつつ移動を開始!』

イヤホン型の通信機から藤堯と友里の声が響く。

「今のウエルは…、左腕をフロンティアとつなげる事で、意のままに制御できる…」

響の前で崩れ落ちていたマリアが現状を説明する。

「フロンティアのコアは、ネフィリムの心臓…!それを停止させれば、ウエルの暴挙も止められる…!お願い、戦う資格のない私に変わって…お願い…!」

その表情には先程までの気迫は無く、項垂れていた。親愛なるナスターシャ教授を殺され、戦う力であるガングニールも失ったとあれば無理もない状態であった。

それを聞き届けた響は…

「調ちゃんにも頼まれてるんだ、マリアさんを助けてって。だから、心配しないで！」

微笑みながらそうマリアに告げた。

すると階段の下から何かの破壊音が響く。響とセイバーは確認するため下を覗いてみると、弦十郎が地面に拳を打ち込み崩落させ人が余裕で入れるほどの亀裂を空けていた。

「師匠！」

「ウエル博士の追跡は、俺たちに任せろ！だから響君とセイバーはm」「ネフィリムの心臓を止めます！」

響が握り拳を胸の前で作り、セイバーは「約束された勝利の剣」をゲイト・オブ・キヤメロット「騎士王の宝財」から取り出し第二霊基になりながら答える。

その答えに少しだけ口角を上げた弦十郎は直ぐに引き締まった表情に戻る。

「行くぞ！」

「はい！」

踵を返した弦十郎は緒川と共に亀裂の中に飛び込む。

「ヒビキ、私達も」

「あ、ちよつと待ってくださいー！」

それを見送ったセイバーは響と共に行動を開始しようとするが、響はそこに待ったをかけ再びマリアに視線を合わせる。

「待ってて！ちよーつと行ってくるから！」

そう笑顔でマリアに告げた響はセイバーと共に遺跡の外へと駆け出す。

マリアはその二人の背中を神妙な面持ちで見つめるのであった。

浮遊する瓦礫を足場にしながら跳躍するセイバーと響は翼とクリスの二人と合流を果たす。クリスの手にはウエル博士が所持していた「ソロモンの杖」が握られていた。

「翼さん、クリスちゃん！」

「立花、セイバー！」

「すみません、ウエル博士の確保に失敗しました」

「なに気にするな。怪我の功名と言う訳ではないが立花が戦力として戻ってきてくれたのだからな」

「はい、もう遅れはとりません！だから…」

「ああ、一緒に戦うぞ！」

「はい！」

翼と響がそんな会話をしている中、セイバーはどこか気疎い表情のクリスと対面する。

「その…なんつーか、…悪かった。勝手にあんな事して…」

「ええ、とても心配しました。せめて一言相談をして欲しかったです」

「ああ…」

「結果的に「ソロモンの杖」は回収できましたが私を含めた戦友達を裏切ったのは事実です。ですので貴女クリスには罰を与えます。またこのよ
うな独断専行が無いように」

セイバーは渋面じょうめんでそうクリスに告げた。それを聴いた響は慌ててクリスを弁護する。

「ま、待ってください！セイバーさん！クリスちゃんは「ソロモンの杖」を取り返すために！」

「いいんだよ。実際アタシは仲間先輩を背中から撃ちこいたんだ。元から無罪放免なんて期待しちやいねえよ」

「立花、これははじめの問題だ。雪音がそれを望んでいる以上、我々は口出しできない」

「でも翼さん！クリスちゃんは…」

それでも弁護を続ける響。しかし当の本人であるクリスには聞き入れてもらえず、翼の言葉もありそのまま押し黙ってしまう。

「ではクリス、私から貴女に対する罰を言い渡します」

「ああ、煮るなり焼くなり好きにしな」

クリスは投げ遣りな言葉を発しながらもながらもその態度は真剣そのものであり、その瞳はセイバーに真っ直ぐに向けられていた。

「今度私と共に料理を作りましょう」

「……………は？」

予想外の罰の内容にクリスは破顔する。

「以前からクリスには自炊が必要だと考えていたのです。簡単なモノでも作れるようになれば自身の健康管理にも繋がりますし、何より料理が出来ない娘は殿方に好このまれます」

「お、おい、ちよつと待て！何だよそりやあー！」

力説を語るセイバーをクリスは動揺しながら止め、説明を要求してきました。

「何と言われましてもこれが私からクリスに与える罰ですが？」

「そのどことが罰だよ！なんでお前セイバーと料理しなけりやならねえんだ！」

クリスはまるで茹だつたタコのように顔を真っ赤にする。

セイバーは先程までの渋面じゅうめんとは打って変わって優しく微笑む。

「簡単な事です。私もヒビキ達と同じくクリスを信じていましたから。始めこそ動揺から疑ってしまいましたが、クリスの性格を考えればあの行動にも訳があると分かりました。貴女クリスは誰よりも優しく、責任感がありますが一人で抱え込み過ぎるのが欠点です。だから、また次があるのなら今度は私達に何か言ってください。必ず貴女の力になりますから」

セイバーはクリスの頭に手を乗せ優しく撫でる。クリスは少し恥ずかしそうにしながらも嫌がることはしなかった。かつて幼い自分の頭を同じように撫でていた母親の姿がセイバーと重なったからだ。「まあ本音を言ってしまうと、一度クリスと肩を並べて台所に立ちたかった想いがあったのも事実です」

「…そうかよ」

「はい。ああそれと、ヒビキにツバサ、二人はクリスに何か罰はありますか？」

唐突にセイバーが響と翼に話を振ってきた。

「ふむ、そうだな。ならば以前のファミレスでの会食、アレを受けようではないか。わだかまりも解けた事だしな」

「そうゆうのでいいなら今度、未来と一緒にデートしよクリスちゃん！ずっと前からクリスちゃんに合う服とか選んでみたかったんだよね！」

「はあ!?なんでお前らまでアタシに命令してんだ!つうーかなにしれつとその権利与えてんだお前!」セイバー

「二人も被害者ですし…。何よりツバサは背中から撃たれてる訳ですから当然の権利なのでは?」

「ぐぬぬぬ…!」

「後これはクリスに対する罰ですので 貴女自身クリスに否定権もありませんよ?」

「だああもういい!受けりやいんだろ受けりや!」

クリスはやけくそとばかりに怒鳴り付ける。その光景にセイバー達は少しだけほくそ笑むのであった。

『四人とも聴こえるか?』

そんな時、イヤホン型の通信機から弦十郎の声が響く。

『仮設本部の解析結果にて高質量のエネルギー反応地点を特定した!恐らくそこにフロンティアの炉心、心臓部があるに違いない!装者たちは、本部からの支援指示に従って急行せよ!』

手短ながらも要点を伝え終えた弦十郎は通信を切る。

「行くぞ!この場にガングニールイチャバル 槍と弓、そして天羽々斬 剣と聖 剣を携えているのは私達だけだ!」

翼の号令と同時に走り出すセイバー達。だがその行き先途中で突如地面が盛り上がり始める。

「な、何!?!」

「今さら何が来たって!」

やがて土は人に類似した形となる。それは以前セイバーが撃退した筈の「ネフィリム」、その進化態の姿であった。

「■■■■■■■■!」

ネフィリムは雄叫びと同時に肩部からミサイルらしき物をセイバー達に発射する。セイバー達は各々散開しそれを回避する。

「あの時の自立型完全聖遺物なのか!?!」

「にしては張り切りすぎだ!」

ネフィリムから放たれる炎の塊を避けつつ応戦するセイバー達。隙をみた響と翼が拳と剣をネフィリムに叩きつける。

ドゴツ! ガキユイン!

だがネフィリムの皮膚は固く傷一つつけられない。

「なら全部乗せだああ!!」

それを見たクリスは両手のガトリングと腰部の小型ミサイルを一斉発射する。瞬間的な火力がネフィリムの体を覆い尽くす。

だがそれを嘲笑うかの様にネフィリムは健在していた。それどころか反撃とばかりに炎の塊がクリスに向け放たれる。

「やあああ!」

だがセイバーが「約束された勝利の剣」を振るい、炎の塊を真つ二つに両断する。炎の塊はセイバーとクリスの両端を通り抜け遙か後方で弾着、爆炎が上がる。

セイバーは「魔力放出」で加速しネフィリムに肉薄、右の膝間接を狙い「約束された勝利の剣」を振り下ろす。

ジャキン!

狙い道理ネフィリムの右膝を切断、緑色の血液が吹き出る。そのままネフィリムが体勢を崩し倒れ：はしなかった。

「なっ!」

「再生しただど!?この短時間に!」

切断された筈の右足はモノの数秒で再生していた。ネフィリムは右腕をセイバーに向け振るい叩き潰そうとする。

「ちいっ!」

セイバーは舌打ちをしつつも跳躍することでそれを回避するが、今度は左腕を伸長しセイバーを捕らえようとするネフィリム。

「しっ!」

跳躍したことで空宙にいたセイバーは「魔力放出」で強引に体を捻り左腕を回避する。

捕縛に失敗したネフィリムは伸長した左腕を戻そうとする。だがその腕に緑色に淡く光る糸状の物が巻き付き、上空から半楕円形に反

らされた刃が落ちてくる。

「デース！」

独特の叫びと共に落とされた刃は見事にネフィリムの腕を切断する。それと同時に円盤形のノコギリがネフィリムの腹を裂く。緑色の血液を吹き出しながら悶えるネフィリム。そして響達の前に降り立つ人影が二つ…

「シユルシャガナと…」

「イガリマ、到着デース！」

調と切歌であった。

「来てくれたんだ！」

「とは言え…、コイツを相手にするのは結構骨が折れそうデースよ」

振り向いた響達の目の前には既に再生が終わり、五体満足のネフィリムが立っている。二人の援軍が来たからと言ってまだまだ楽観出来ない状況が続いていた。だが…

「だけど歌がある！」

声が響く。皆が振り向くとそこには MARIA が立っていた。その表情はセイバーと響が接していた時とは違い、凜とした顔つきになっていた。セイバー達は浮遊している岩を渡り、MARIA の元へ集まる。

「MARIA さん！」

「もう迷わない…！だって、ママが命がけで月の落下を阻止してくれている！」

MARIA が空を見上げる。月へと向かい天高く飛び去ったナスタールシャ教授がいる管理ブロックが MARIA の眼に写る。

感傷に浸っている瞬間、ネフィリムが炎の塊を MARIA 達のいる岩に放つ。

ドガアアアン！

派手な爆発によって広範囲に爆煙が広がる。一見すればセイバー達は爆発の直撃を受けたと思うに違いない

だが結果は真逆であった。

「Seilien coffin air get lamh tro
n」

歌声が鳴り響き、爆煙が晴れる。姿を表したそこにはシンフォギアを纏う際に発生するバリアフィールドによって守られているセイバー達がいた。

「調がいる……。」

切歌がいる……。

マムもセレナもついている。

皆が居るなら、これくらいの奇跡……、

安いもの!!」

一糸まとわぬ姿のマリア高らかにそう吼える。

その姿を見たネフィリムは再びマリア達に向け炎の塊を放つ。炎の塊は真つ直ぐ一直線にマリア達の元へと向かう。だが命中はしなかった。

何故なら……

ストライク・エア
「風王鉄槌」!!」

突然の暴風が炎の塊の真正面に現れる。風は炎の塊を押し返し、射出元であるネフィリムに命中させた。

ドガアアアン!

「■■■■■■■■!?!」

自身の放った攻撃をあらうことか自分で受けてしまい困惑と驚愕が入り交じった雄叫びをするネフィリム。

「彼女達の邪魔はさせません!」

バリアフィールドの先頭に立っているセイバーがネフィリムにそう告げる。

「ひかれあう音色に、理由なんていらぬ」

「……」

「アタシも付ける葉が無いな……」

「それはお互い様デスよ」

「調ちゃん、切歌ちゃん!」

翼が調と、クリスが切歌と、響が調と切歌の手を握る。

「貴女のやってる事、偽善でないと信じたい。だから近くで私に見せて。あなたの言う人助けを……、私達に……」

「うん！」

迷い無く頷く響。六人の歌が美しい音色を奏でながら調和していく。

だがそこにまたしてもネフィリムの邪魔が入る。ネフィリムは全身を怪しくそして禍々しく光らせ何かしらの攻撃体制を取った…

次の瞬間。

「約束された勝利の剣」!!!

ネフィリムの元に黄金に輝く一撃が炸裂する。それはネフィリムを文字道縦に真つ二つにしてみせた。

セイバーの放った「約束された勝利の剣」がその正体である。無詠唱で放った事で威力が半減し、撃破には至っていないものの、ネフィリムの攻撃を妨害する程度であれば十分過ぎる一撃であった。

「六人じゃない、私達が束ねたこの歌は…

七十億の絶唱おおおおお!!!」

折り重ねたフォニックゲインは奇跡を呼び、響達六人は限定解除状態へと至る。光輝く美しい両翼を背に天へと上るその姿は正しく人々の希望そのものであった。

「響き合うみんなの歌声がくれた！」

シンフォギアだああああああ!!!」

虹色に煌めく流星がネフィリムに向かって走る。

ネフィリムはセイバーによって真つ二つにされた体の再生が終わった直前であった為に身動きが取れずにいた。

そのままネフィリムは流星に貫かれ、虹色の竜巻と共に跡形もなく消滅するのだった。

響ちゃん達の放った、虹色の竜巻でネフィリムは再生出来なくらい粉々…、と言うか消えてなくなった。

とりあえずこれで心臓部に行くための障害を排除できた。っと思っただけど、どうやら厄介事はまだまだ続くみたいだ。

弦十郎さんからの通信をまとめると、

追い詰められて自暴自棄なったウェル博士がフロンティアとの接

続を断ち切ってネフィリムを暴走状態に陥らせたらしい。ネフィリムはフロンティアを取り込むことでエネルギーの最大温度を上げることができ、最終的に一兆度ぐらいになるとのこと。

あつの野郎：最後の最後まで他人に迷惑かけやがって…。せっかくマリアさん達と協力する事が出来たのに…。

はっ!?!いかんいかん!落ち着け私、冷静になれ!今はあのメガネのウエル博士事よりも目の前の事に集中しないと!

自分を落ち着かせつつ私は目の前に起こっている現象に目をやる。フロンティアを取り込んだネフィリムが禍々しい赤い光を放ちながら姿を変えていく。

ちなみにだけど今私は「痛哭の幻奏」フェイェルノートを使って空を飛んでいる。ネフィリムを足止めするために「約束された勝利の剣」エックスカバの真名解放をブツパしたわけだけど、その時の魔力消費がやっぱりバカ高くて「魔力放出」で飛ぶにはちよつと心許こころもとなかったので仕方なく「痛哭の幻奏」フェイェルノートを使っている。

まあ無詠唱でのブツパだったからある程度は消費を抑えられたし、セイバーの「竜の因子」のお陰である程度は魔力を生成出来るからまだまだ戦えなくはないんだけどね。

なんて反れた話をしてる間にネフィリムが人型の形になった。

「再生するネフィリムの心臓…!」

うん、何て言うかどっかで見たことあるな…。あんまり知らないけどウル○ラマンの怪獣であんなのいなかったっけ?!

「はあああああああ!」

「たあああああああ!」

【終Ω式 デイストピア】

【終虐・Ne破aア乱怒】

とかなんとか考えてたら調ちやんと切歌ちやんがネフィリムに突っ込んで行った。

てか調ちやん、それ完全にロボットだよね!?!そのギア前にノコギリって言ってなかった!?!

私が困惑してるなか二人はネフィリムの体を切り裂いたけどすぐ

に再生した。しかも：

「ああっ!!」

調ちゃんも切歌ちゃんが突如苦しみ出す。二人のからだからそれぞれピンクと緑のオーラみたいなのがネフィリムに吸収されていく。

「聖遺物どころか、そのエネルギーまで喰らっているのか!？」

「臨界に達したら地上は!？」

「蒸発しちゃう!」

だとしたら不味いな…。シンフォギアのエネルギーすら吸収出来るなら私の魔力も持っていられる可能性がある。迂闊に攻撃できない。

しかも私の使ってる武器は完全聖遺物、もし不手際でネフィリムに取り込まれでもしたら一気に臨界までいっちゃう。そんな事になれば一貫の終わりだ。何か対策を考えないと。

「バビロニア、フルオープンだああ!!」

その時、クリスちゃんが「ソロモンの杖」を使って宝物庫のゲートを出現させる。

「バビロニアの宝物庫!？」

「エクストライブ限定解除の出力で、「ソロモンの杖」を機能拡張したのか!？」

ゲートはどんどん大きくなっていく。だけど巨大なネフィリムの体が入るにはまだ少し大きさが足りない。

「ゲートの向こう、「バビロニアの宝物庫」にネフィリムを格納できれば!」

「人を殺すだけじゃないって!やってみせろよ!ソロモン!!」

開いたゲートに吸い込まれる様にゆっくりとだけと確実に「バビロニアの宝物庫」の中へと入っていく。

だけどネフィリムもそれに抵抗してくる。大きい図体に似合わず右腕を素早く振り、「ソロモンの杖」を持っているクリスちゃんに向け殴りかかってきた。

「避ける!雪音!」

「っ!?!がっ!!」

「クリス!!」

回避が間に合わなかったクリスちゃんはモロに命中してしまふ。私は「インレシフル・エア風王結界」を応用して風を足元に集中させ、「フェイェルノート痛哭の幻奏」を使って音の衝撃を発生させる事で空を滑空して、飛ばされたクリスちゃんを受け止める。

「大丈夫ですかクリス！」

「悪い！杖はどこだ!？」

クリスちゃんが手放した「ソロモンの杖」はマリアさんが取っていた。

「明日をおおおお!!」

マリアさんがゲートを更に大きくして、ネフィリムがすっぽり入る程の大きさになった。だけど抵抗を続けるネフィリムはマリアさんを捕らえようとする。マリアさんも必死で避けようとするけど指先から出てきた触手に捕まってしまふ。

「格納後、私が内部よりゲートを閉じる！ネフィリムは私が！」

「自分を犠牲にする気デスか!？」

「マリア!!」

「こんな事で、私の罪が償えるはずがない…。だけど、全ての命は私が守って見せる…」

どうやらマリアさんは心中の覚悟みたいだ。あれがきつとマリアさんなりのケジメの付け方なんだろうと思う。

「だけど…」

「それじゃ、

マリアさんの命は、私達が守って見せますね」

「っ!？」

そんな事、響ちゃんあの子が見過ごすわけがないんだよね。

私達はマリアさんの元に集う。

「貴女達…」

「マリア」

私はマリアさんに声をかける。

「貴女の覚悟、尊敬に値します。ですが死を覚悟する前に生きる希望

を捨ててはなりません。貴女には貴女を想い慕う大切な人達が居るのですから」

「…案外貴女もお人好しなのね」

「マリアさんが少しだけ微笑む。」

「英雄でない私に世界なんて守れやしない。でも、私達…。」

「私達は、一人じゃないんだ…。」

やがて私達はネフィリムと共に「バビロニアの宝物庫」の中へと入っていく。中はおびただしい数のノイズがそこらじゅうにウヨウヨしていた。

「うおおおおお!!」

先陣を切ったのは響ちゃん。響ちゃんは右腕を槍状にギアを変形させて腰のブースターでノイズの群れに突撃する。

「うおおおおお!!」

「うりやああああ!!」

それに続く様に翼さんが足に付いているギアを巨大化、回転させながら突っ込む。クリスちゃんはありったけのミサイルを辺り一面に発射する。

私も負けてられない。それに仕込みも今終わったところだ。

「フェイェルノート「痛哭の幻奏」を構えた私は詠唱を唱える。」

「痛みを歌い、な哭きを奏でよ!これこそ我が騎士の矢!痛哭の幻奏!!」

詠唱を終えると同時につま弾いた弦が真空の刃となり、辺りのノイズを一斉に撃破していく。響ちゃん達がノイズに突っ込んで行った時に、辺りに「フェイェルノート「痛哭の幻奏」の糸をあちこちに仕込ませ、それを一斉につま弾いただけなんだけどね。」

なんて宝具の解説をしていた隙に調ちゃんと切歌ちゃんがマリアさんを救出していた。

「二振りの杖ではこれだけの数を…、制御が追いつかない!」

「マリアさんはその杖ソロモンの杖でもう一度宝物庫を開くことに集中してください!」

「何!?!」

「外から開けられるのなら、中から開ける事だって出来るはずだ！」
「鍵なんだよ！ソロモンの杖そいつは！」

なるほど確かに。ネフィリムはもう「バビロニアの宝物庫」の中に入ってる。後はソロモンの杖鍵を掛ければ閉じ込める事が出来るって事か。

「セレナアアア！」

マリアさんがそう叫びながら「ソロモンの杖」を起動させ、地上に戻るためのゲートが開いた。

「脱出デス！」

「ネフィリムが飛び出す前に！」

「行くぞ雪音！」

「おう！」

皆がゲートに向かって急ぐ。だけどその前にネフィリムが立ち塞がって来た。

「迂回路はなさそうだ」

「ならば、行く道は一つ」

「手を繋ごう！」

響ちゃんが翼さんとクリスちゃんの手を、調ちゃんが切歌ちゃんがそれぞれ手を繋ぐ。

「マリア」

「マリアさん」

響ちゃんと調ちゃんがマリアさんに手を差し伸べる。マリアさんは胸元から白銀に輝く剣を取り出して、それを天へと投げる。

「この手、簡単には離さない！」

マリアさんそう宣言しながら二人の手を繋ぐ。それを見た私は響ちゃんとマリアさんの繋いだ手の上に自分の左手を被せるように繋ぐ。

「行きますよ、準備はいいですね!？」

「はい！」

「ええ！」

響ちゃんとマリアさん、そして私は繋いだ手を高らかに上げる。それと同時に私は右手に持っていた「フェイタルノート痛哭の幻奏」を「ゲート・オブ・キヤメロット騎士王の宝財」

に戻し、「約束された勝利の剣」を取り出す。

「「最速で！」

最短で！」

真っ直ぐに！」

マリアさんの投げた白銀の剣が光の粒子になって私達を包み込む。響ちゃんとマリアさんのギアの一部が外れ、それぞれ巨大な金と銀の腕になって今の私達と同じように手を繋ぐ。

「「二直線にいいいいいいいい！！！」

金と銀の両腕は私達を守る鎧の様に展開して、ネフィリムに突っ込む。ネフィリムも触手を出して私達を行かせまいとする。

私は右手に持った「約束された勝利の剣」を進行方向とは逆に構え詠唱を唱える。

「この灯りは星の希望！地を照らす命の証！聖剣よ、少女達に力を！」

「約束された勝利の剣！！！」

「約束された勝利の剣」を推進剤代わりにし、黄金の輝きを身に纏い私達は加速する。

「「「「「おおおおお！！！！！！」

【Vitalization】

両腕はそのままネフィリムの胴体を貫通しゲートに向かって真っ直ぐ一直線に向かう。ゲートをくぐり抜け地上に戻った私達はそのまま砂浜に激突する。

ズドオオン！

衝撃で散り散りになる私達。その近くに「ソロモンの杖」も突き刺さってた。

「杖が……！すぐにゲートを閉じなければ……まもなく、ネフィリムの爆発が……！」

「ただど皆さつきの技の負荷で動けない。私も二発目の「約束された勝利の剣」で魔力が底をついた影響で動けずにいた。

くそ……！やっぱり一日に二度も「約束された勝利の剣」を射つのは無理があつたか……！」

「まだだ……！」

「心強い仲間は、他にも…」

「仲間…？」

そうか…、そうだったね。私達にはまだ、仲間がいた。

「私の…親友目だまりだよ…」

そう…未来ちゃんだ。未来ちゃんは砂煙を全力疾走して「ソロモンの杖」に一直線だ。

やがて「ソロモンの杖」を手にすると同時にゲートに向かっておもいきり投げ入れる。

「お願い！閉じてええええええええええ!!」

投げられた「ソロモンの杖」は真っ直ぐゲートに向かって飛んでいく。

「もう響が…、誰も戦わなくていいような…、世界にいいいいいいいい!!!」

未来ちゃんの願いに答えるように「ソロモンの杖」が光だす。そしてネフィリムが爆発すると同時にゲートの中に「ソロモンの杖」が入り、ゲートが閉じていく。

まるで何事も無かったかの様な静けさを感じ、私達は戦いの終わりを実感した。

フロンティアでの戦いから数時間後。もう太陽も傾いて海岸線の向こうがオレンジ色に輝いている。

さてと、私も動ける位には回復したし弦十郎さん達と一緒に事後処理しないと。

と、踵を返すところで…

「アーサー王！アーサー王！アーサー王う!!」

何か聞きたくない声が聞こえてきた…。

振り向いたら両腕に手錠をかけられたウエル博士がこつちに走ってきていた。後ろには自衛隊の人達がウエル博士を捕まえようと追ってきている。

ウエル博士は私の足元にて両膝を着いて両手を重ねてまるで神様に祈るみたいな姿勢を取る。

「かつてブリタニアにて当時のローマ皇帝を討ち取りヨーロッパ全てを手中に治めた王の中の王！その冒険譚は現代においても今だ語り継がれる程に民に愛される存在！貴女こそ僕が憧れた英雄の姿そのもの！」

「どうか、この私めに裁きを！愚かな私めに罰をお与えください！！」

裁き：…ねえ。この際、私の正体が何でバレたかはどうでもいい。大方私達が戦ってる所を何処かで覗き見して勘づいたんだと思うから。だけど裁きとなると話は別だ。

「今までこの人がしてきた事を思い返すとかなり腹が立つ。実際、今すぐ切り殺してやりたいと思ってる自分がいるのも確かだ。」

だからこそ…

「…いいえ。私は貴方を裁きません」

ウエル博士
この人が最も望まない事をしてやろう。

「あ…」

呆けた顔になるウエル博士。まるで何を言っているのか分からないうって顔だ。私はそれを無視して続ける。

「私には貴方を裁く義務も、権利も、する気すらありません。」

貴方は変革を望んだ革命家でなく、世界を破滅しようとした破壊者でもなく、まして英雄としてでもなく、「人」として裁かれなさい。私から言える事はそれだけです」

私は踵を返してウエル博士に背を向け歩き始める。それと同時に追い付いた自衛隊の人達にウエル博士が拘束される。

「あ、あ、あ、あの男と同じ事をおおお！！」

殺せ！僕を殺せ！英雄にしてくれえええ！！」

後ろからそんな叫びが聞こえる。大方そんな事だろうと思った。自分が死んで誰かに英雄視されたかったんだろう。だから私は逆に生きる事を選ばせた。あれだけやっというて死んで全部チャラなんてさせない。無様に生き恥をさらして死ぬまで赤っ恥をかいてもらう。言っちゃえばこれは嫌がらせだ。ウエル博士が最も望まない嫌がらせ。

心の中で「ざまあみろ」と言い放ちながら私は砂浜で対話している響ちやん達を見る。皆とても晴れやかな顔をしている。

うん、あれこそ私が見たかったモノだ。

自然と私も頬が緩くなる。月の軌道についてもマリアさん達の協力者のナスターシャ教授の命懸けの行動で正常に戻りつつあるとの事だ。だけどその影響で月の「バラルの呪詛」が再起動、人類の相互理解が遠のいたらしい。

だけど私は大丈夫だと思っている。だって目の前に今、心が通じあつて和解した子達がいるんだもん。

彼女達の未来を守るために、私は戦い続けよう。

聖剣を握れなくなる、その時まで…。

私は強く心にそう誓った。

絶唱しない小話集 G 終了編

《セイバーさんと卵料理》

特訓が一段落して休憩中の時の事、セイバーは弦十郎が建物の奥に入って行くのを見て何やら不吉な予感を感じた。セイバーは後を追う弦十郎が入ったと思われる部屋のふすまを開けた。

ガラガラガラ

「ゲンジユウロウ、ここで何を？」

そこでセイバーが見たものは：

「フンフフン、フンフフン、フンフンフフフン♪」

コンコン、パカッ コンコン、パカッ

箆ザルの上に山の様に積まれた卵を鼻唄混じりに割りジョッキの中に入れてある弦十郎の姿であった。しかも器用に左右の手に卵を持って片手で割っている。

セイバーは頭を抱えた。生前の記憶からとある映画のあるシーンの再現を響達にさせようとしてるのが分かったからだ。セイバーは徐に弦十郎に近付きその肩に手を乗せた。

ガシッ

「うおっ！セイバーか、どうした？」

「ゲンジユウロウ、何をしているのですか…？」

「何って卵を割っている所だか？」

「まさかそ生卵入りジョッキれをヒビキ達に飲ませるつもりですか？」

「ああその通りd」

「ゲンジユウロウ、正座をしてください」

「え、いやでm」

「正座をしなさい…！」

「あ、はい…」

セイバーの「カリスマ」スキルを前に為す術無く正座させられる弦十郎であった。

その数分後…

ガラガラガラ

「師匠、ここですか？」

何時までたつても戻ってこない弦十郎が心配になり探しに来た響が件の部屋のふすまを開けたそこにあったのは…

「ゲンジウロウが自分でやるならまだしもそれをヒビキ達に強要させるとは何事ですか！」

「い、いや、でもこれは特訓に必要な要素の一つであって…」

「それは貴方の偏った映画で得た知識のモノでしょう！大体この卵は一体何処産の物かちゃんと把握してるんですか!？」

「家で育ててる鶏から取ってきた物だが…」

「ま、まさか自家製!? そんな衛生的に安全かどうか分からない得たいの知れない物を年頃の乙女達に飲ませようとしたのですか!?! 生で!!」

「だ、だが俺は飲んでも大丈夫だったし…」

「貴方が大丈夫でもヒビキ達が大丈夫な保証は無いでしょう!!」

正座で必死に弁解する弦十郎とそれを仁王立ちで説教するセイバーの姿だった。

それを見た響は…

「お、お母さん…?」

っと眩くのであった。

「ん、美味し〜い！」

「まあアレだな…、全然悪くないな」

「雪音、悪くないとはなんだ？間違はなく旨いではないか」

響達は机の上にズラリと並んだ卵料理を舌鼓したつづみしていた。これらは全て弦十郎が割ってジョッキに入れていた卵を使用して作ったセイバーの手料理である。

ちなみに、響が親子丼・クリスがオムカレー・翼が天津飯をそれぞれ食している。

「まだまだたくさんありますので、どうぞ心ゆくまで味わってください」

当のセイバーは謎のヒロインXジャージ&mp;フルマー&mp;キャツプの格好にエプロン姿というなん

ともマニアックな格好で次の料理を作っていた。

「はい！ありがとうございますございますセイバーさん！」

ただ…、料理は美味しいんですけど…」

響は視線を部屋の隅へとやる。そこには綺麗な姿勢で正座されられ、卵が積まれた箆ザルを膝の上に乗せている弦十郎の姿があった。

「ああ、アゲンジユウロウレはお気になさらずに」

「師匠をアレって…」

「まあ話聴く限りオツサンが悪そうだしいいんじゃない？」

「そうか？私が叔父様に鍛えてもらっていた時は何の疑問も持たなかったが？」

と言う会話を挟みながら響達は箸（クリスはフォークとスプーン）を進めていく。

そうこうしている内にセイバーが出来た料理を皿に盛り付け、お盆に乗せ弦十郎の元に運ぶ。

「ゲンジユウロウ、貴方にはこれです」

そうしてお盆を弦十郎の前に置く。そこにはピラミッド状に山盛りされた卵焼きと卵スープがあった。

響達が食べている料理に比べると余りにも質素である事が目に見えて分かる。

「あの…、セイブ」

「なにか不服でも？」

「…何でもない」

セイバーから発せられた圧プレッシャー力に屈する弦十郎。「さすがに今回は自分の趣味に走り過ぎた」と心の中で猛省しているのが効いたらしい。

弦十郎はお盆と一緒に運ばれてきた箸を持ち、一口サイズに切り分けられた卵焼きを一つ摘まみ、小皿に盛られた大根おろしを適当に乗せ、お盆の隅に添えられた醤油を一滴しして渋々ながら口に運ぶ。

「ん？旨い…」

一噛みした卵焼きは弦十郎の予想に反して美味であった。弦十郎は次に卵スープにも手を伸ばす。

「うん。旨い」

こちらも程よく塩分が効いていて飲みやすいモノであった。その後、弦十郎は卵焼きと卵スープを黙々と口に運んでいた。

その姿を横目で見ていたセイバーはほんの少しだけ口角を上げた後、次の卵料理を作るためフライパンを暖め直すのであった。

《セイバーさんの映画鑑賞》

特訓が終わった後、自宅に帰って来た時の事。

「セイバー、さっきの詫びと言う訳ではないがこれを受け取ってくれ。大丈夫、必ず役に立つ筈だ」

と弦十郎さんに言われて渡された物が今私の手元にある。

役に立つ物って何だろ？もしかしてお米券とか!?

袋を開けてみると中から映画のDVDが出てきた。

まあだろうね。弦十郎さんの事だからこう言うのだと思ったよ。しかし貰い物な以上、見ないのは失礼だ。役に立って言い方もちよつと気になるし。一回見てみよう。

私は仕事用に購入したノートパソコンにDVDの再生機材を取り付けて見ることにした。

はてさてどんなモノやら。

『〜♪』

おっ。

『〜!』

ほほお。

『〜!?!』

おおおお!

映画のタイトルは「トリ〇ルX〜再起動〜」

その後、私のバイクテクニックが飛躍的に上がった。

《セイバーさんと相乗り》

仮設本屋内、弦十郎の席の隣で未来がモニターに映る響達を見守る。

その途中でセイバーの腹に両腕を回して掴まりバイクに股がる響が映る。

「…」ジーン

無言ではあるがモニターに映る響を凝視する未来。

するとセイバーのバイクが変化し「疾走する白銀の装甲騎兵」となる。スピードが上がったことで響がセイバーの背中に張り付くように掴まる。

「…」ピクツ

その様子をモニター越しで見ていた未来は何故か目を細める。

やがてセイバーの「疾走する白銀の装甲騎兵」が遺跡の階段を猛スピードで駆け上がり、響はセイバーの背中に顔を埋め、絶対に離れるもんかとセイバーをホールドする。

「…」クワツ

その様子をモニター越しで見ていた未来はこれでもかと思われ見開く。

(おっかないから早く誰か戻ってきてえ!!)

その様子を横目で見ていた二人のオペレーターが恐怖を感じていた。

そして当の未来は…

(私もオートバイの免許取ろうかな…)

と、心の中で考えるのであった。

《セイバーさんとバイク》

とある日。マリアさん達の事情聴取と言う名のメンタルケア兼雑談の為に響ちゃん達と一緒にやって来た時の事。

「そういえばマリア。フロントティアで再会したとき何故あんな岩の上にあったの？」

翼さんがそんな疑問をマリアに投げた。ちなみに響ちゃんとクリスちゃんはきりしらコンビと談話してる。

「ああ、アレ？貴女達と合流するために外で探したら足元にあった地面が浮いたのよ。運良く貴女達に出会えたから良かったけどあの

時は肝を冷やしたわ」

「あの状況で良く素早く行動できましたね？」

「^{セイバー}貴女のバイク使わせて貰ったから。なかなか良いバイクだったわよ」

「なるほど…ちよつと待てマリア！セイバーのバイクに乗れたのか！？」

「ええ」

「何…だと…」

あつげらんにかんに言うマリアさんに翼さんメツチャ驚いてる。そういえば翼さん前に私のバイクで^{VIMAX}派手にスツ転んでたっけ…。

「でもアレちよつとピーキー過ぎない？アクセル少し捻るだけで前輪の感覚がまるで無いのよ。おかげでスピードあんまり出せなかつたし」

「そもそもマリアは何故あの^{VIMAX}じゃじゃ馬を乗りこなせたんだ…？」

「そんなの気合いと根性よ」

「な…なるほど…」

翼さんが顎に手を当てて何か考え込んでる。まあ大体想像つくけど。

「…セイバー、しばらくバイクを借り」

「ダメです」

「な、何故…！」

「ツバサ、年末には特番の収録が控えています。怪我でもして出演できなくなるなんてシンジに申し訳が立ちません」

「ぐっ…！しかし防人として馬の手綱を握りこなせなければ」

「ダメです。ダメと言ったらダメです」

その後も私は翼さんの駄々を諫め続けた。

幕間の物語：セイバーさんのお泊まり

つつかれたく…。

私は自宅に帰るやいなやシャワーも浴びずにベッドに倒れ混んだ。もおう最近メチャクチャ忙しい。翼さんのマネージメントもだけど二課の再編手続きがこんなに手間が掛かるなんてえく…。

フロントエリアでの戦いの後、国連からの要請で二課は国連直轄下の機動組織に再編する事が決まったみたいだ。これで国連連合安全保障理事会、長いから略して安保理で決められた規約内で海外での活動が出来るようになった。

て、言うのは建前で本当の目的は異端技術シンフォキアを独占してる日本を国連下に置いて管理したいって言う周りの国の考えが大きいらしい。

私はそんな国家だとか政治だとかあんまり詳しくないからよく分からないけど、今はいないノイズの対抗手段を日本だけが持つてるのはズルいって話なんだと思う。まあ恐らく私が考えてるよりももっと深くドス黒い考えなんだと思うけど私に分かるのはそれくらいだ。

あとなんか国連入りが決定してから英国政府がやたら不審な動きがあるらしい。まあ多分私セイバー関連だと思うけど、その調査で緒川さんはずっと不在のまままだ。

なので翼さん関連の仕事はすべて私に任されている。唯ただでさえ再編の為の書類仕事があるのに翼さんのマネージメントもしないとイケないから日中ずっと動き回りっぱなしだ。サーヴァントの体だから何とかもってるけど生前なら三日で倒れる自信がある。

さてと、明日も仕事だ。とつととシャワー浴びてご飯作って寝よう。

私はベッドに沈んでいた体を起こすため腕に力をいれ…：られなかった。

あ…、これヤバイ奴だ。疲れがピークの時に体が強制的に休ませようとするアレだ。

自覚が生まれた事で目蓋まぶたが急激に重くなる。

ふおおお、待ってちよつと待て！まだシャワーも浴びてないし、ご飯も食べてないんだ！明日の朝、大変な…事…に…：…な…：…r
……。

抵抗むなしく私の意識は目蓋の裏側に消えていった。

ああ…、やつちやつたあ…。

恐らく数時間くらい意識が無くなって、再び意識が戻ってから私はそう愚痴った。

いくら忙しいからってシャワーも浴び無いなんで女性としてどうよ？普段から響ちゃん達に規則正しい生活をする様に言ってくせに自分がこれじゃあなにも言えない…。

私の中で私を全力で罵倒する。

とは言えやつちやつた事は仕方ない。さつさと時間確認して余裕あるならパツとシャワー済ませて、ご飯作っちゃおう。

そうして私は目蓋を上にあげて見慣れた天井を…：…見れなかった。

私の目の前に広がる光景は何処までも続く青い空と漂う薄い雲。

あれ…、どゆこと？

寝そべっていた体を起こしてみる。美しい森林が生い茂っている。

あの…、えくと…。待って待って、ちよつと待って。とりあえず落ち着け。こんな時はプッ○神父を見習って素数を数えよう。素数は一と自分の数でしか割れない孤独の数字。

三、六、九、十二、十五、十八…

いやいやそれは三の倍数だバカ！

ともかくちよつとここに至るまでの記憶を思いだそう。

えくと、仕事から帰ってきてそのままベッドにダイブして寝落ちして気付いたらここにいて…。

…なるほど理解した。

これ夢だ。

そりやそうだよね。こんなの寝落ち以外に考えられないよね。うわあ…、働きすぎかな…？こんな夢見ちゃうなんて…。

まあいいや。とりあえずどうしよう？このままジツとしてるのもアレだし、少し探索でもするかな。こんな綺麗な森林見るの初めてだし何だか歩きたい気分だし。

何だかよく分からない冒険心が私を駆り立てきたので、私は軽率にもその場から動くことを決めた。

スツと立ち上がりちよつとルンルン気分です足を進め始める。

それにしても何か妙に体が軽いな？まあ夢だしいつか。

向かい風が私を通り抜ける。まるで暖かい陽射しに照らされ火照った私の体を冷ましてくれるかのように。

ん、気持ちいいねえ。この暑すぎず寒すぎずの温度。例えるなら冬と春の間、もしくは夏と秋の間みたいな感じ。まあ季節感的にはどうなんだよってはなしなんだけどね。現実じゃ年末の真冬だったのに…。

ま、夢だしいつか！

そんな樂觀な考えの元、私は一步一步ゆつくりと歩いていく。

探検して分かったけどここはどうやら山の中みたいだ。木々の並びは綺麗だけどなんか人の手が加えられた形跡がまるでなかった。だって木の下とかにキノコや山菜とかがメチャクチャ生えてたし、しかも野生の動物みたいなのもいくつかチラツと見つけたし。

私、夢の癖にリアリティーに凝りすぎだろ。完全に大自然の中に遭難した人じゃん。いや別にいいんだけどね。

まあそんなわけで周りの自然の美しいさを堪能しながら探索を続けていた時、ふと空に白い煙が上がっているのが見えた。

気になった私はその煙の出ている元へと向かった。道なき道を進み、時に大きい岩や小さい川などを乗り越え、ついに煙が出ている所にたどり着いた。

そこには…

ナニコレ…

建物があつた。

いやまあ建物ではあるんだけど…。問題はその形状。まるで元々

建っていた家の上に新しい家を建てて、ジエンガみたいにな上にな上にと伸ばし続けたみたいなの形状をしている。

うーん、これあれかな生前見た神隠しのアレかな……。だとしても想像力無すぎすぎる私！さっきまでの森林の描写とか凝ってた癖に家これかよ！

なんて私が悶えていると：

「おや、お客ちゃまでちゅ？」

後ろからそんな舌つ足らずの声が聞こえた。

振り返ってみると私よりも一回りほど小さい赤い髪をした愛らしい女の子がいた。そして何故か小脇におひつとしゃもじを持ってる。外なのに。

「歩いて森を抜けて来たでちか？それはずいぶんとご足労でちたn：ちゅちゅん？」

とたん女の子は私を見て小首を傾ける。ジーっと私を下から上に眺め、私の周りを三周ほどグルリと歩く。

え、なに？私の身なりおかしい所ある？

「むく、何やら複雑な事情がお有りのようぢね。でちゅがここに来たからにはお客ちゃまに変わりはありまぢえん」

女の子は私に背を向けて建物の方に数歩歩いた後、バツと振り返り姿勢を正す。

「ようこちよ「閻魔亭」へ！アチキは女将のお紅でち！」

綺麗なお辞儀と共にそう言い放った。その姿に私が一番始めに思ったことは…

小学生が女将ってアリかも…。

と言うなんともアホは感想であった。

「ではぐゆるりとしてくだちやい」

座札をしたお紅ちゃんはそのまま襖を閉める。私は部屋の中央にある高級感溢れる座椅子に凭もたれながらフくと息をつく。

結局あの後、流される形でこの「閻魔亭」に泊まる事になった。それもこれもあのお紅ちゃんのおもてなしの丁寧さが凄まじ過ぎるか

らだ。

マジでスゲーよ、だつて後光出てたし。

「閻魔亭」に案内された後、部屋に案内される途中で見たんだけどなんか従業員が全員妙にまん丸な雀すずめなんだよね。

「チュ〜〜ン！お客様チュン！」

「随分珍しいお客様チュン！」

「どつても細いチュン！ちゃんとご飯食べてるチュン？」

なんて会話が聴こえたけどあえて無視した。

部屋に到着したら浴衣が用意されてお紅ちゃんに着付けを手伝ってもらい今に至る。

そう言えばこんな風にゆつくりするの初めてかも。普段は仕事で忙しいし、今でこそノイズの被害が無くなったけど前は出てくる度に戦つてたし。稀の休みも特にすること無くつて部屋の掃除と食材の買い出しくらいだし。

…あれ、考えたら私かなり拗らせた社畜なのでは？

ま、まあ今ぐらいは仕事の事考えるのを止めよう…。夢とは言え折角こんな高級そうな旅館に泊まれてるんだから。

私は頭を横に振りつつ机の脇に添えられた湯飲みと急須を使ってお茶を用意する。

ともかく泊まつてる間は羽を伸ばそう！まずはお紅ちゃんにオススメしてもらった温泉！その後、宿の探検でもしよう！

私は湯飲み入ったお茶を飲みつつそう考えた。

あ、茶柱立った。

その後、私はお宿を満喫した。

温泉は広々とした露天風呂ですごく気持ちよかった。

「絶対に嫌だ！美男美女と混浴するまで私は絶対にお風呂から上がるもんか!!」

なんかやられた美人なお姉さんが大声でそんな事言ってたけど関わりたくないから遠くで入ってた。

それからお料理も旬な食材を使つてとても美味しかった。

そして何やかんやで一日くらい過ぎた。

身支度を整えた私は宿の出入口で出迎えをしてきているお紅ちゃんと雀達すずめに挨拶をする。

「またご縁がありまちらせびご利用くだちやいまちえ！」

「チュンチュン、また来るチュン」

「何時でも来るチュン」

うん、いつかまた来見れたらたらきます。

私はお紅ちゃん達にそう言ってから宿の出入口を潜る。眩しい朝日が私をつつんでいく。何となくだけど夢から覚める予感がある。でもそれでいい。私にはやらないといけない事がある。いつまでも覚めない夢に居続ける大人なんて恥ずかしくてあの子達に会わせる顔がない。

私は一步一步確実に前に進んでいく。あの子達が待つ現未実来に向かつて。

「いいチュン行かせて？」

「あの人もう死んでるチュン。本当なら大王大様の所に行ってる人チュン」

「なのはまだ生きているチュン。摩訶不思議な人チュン」

「たちかにあの魂は既に落とされたモノでち。おちよろしく洗い落とすちよくしえん直前に何かしらの干渉かんしやうかそれともあの魂が未練を残っていたか…。何にちえよアチキはそれ以上の詮索せんさくはしまちえん。ここに来たモノ全て平等にお客ちやまでち。お前達もそれ以上はお客ちやまの失礼にあたるでちよ」

「チュンチュン、女将がそう言うなら文句はないチュン」

「チュン、仕事に戻るチュン」

パタパタパタ

「…お前ちやまの数奇な運命、それがどうなるかアチキの与り知らぬ所でちが。お前ちやまが向こうで幸福でいられる事をここから祈ってるでちよ。だって雀のアチキですら素敵な御縁がありまちたから。」

お前ちやまの様な良い人が幸せになれないなんてそれこそ閻魔が許ちまちえんから」

「こ、こんなもんでいいのか？」

「はい、多少大きさはバラバラですがそれで大丈夫です。それをボウルにいれて水気を切りながら塩と一緒に揉み混ぜてください」

「お、おう」

ぎこちない手つきだけど一生懸命に作ってるクリスマスちゃんを見て私は少しだけ微笑ましくなる。

今私は自宅でお正月にマリアさん達に振る舞うおせち料理を作っている。何故だかは分からないが数日前から料理の腕が飛躍的に上がっていた。時期的にあの寝落ちをした翌日辺りからだ。せいぜい一人暮らしで困らない位の料理の腕が今ではおせち料理もバッチコイと言えるほどだ。夢の中で料理教室でも受けてたのかな？なくんてこと無いか。

「セイバーさん、黒豆のアクってどれだけ取ればいいんですか？」

と、未来ちゃんそう私に言ってきた。本当は響ちゃんも誘ったんだけどなんか期末テストで中々にヤバイ点数を叩き出したらしく今現在学校で補習を受けているらしい。まあこう言っちゃ何だけど普段からあんまり頭は良くなさそうだからねえ…。

「アク抜きは出なくなるまで続けてください。出なくなりましたらクシャクシャにしたアルミホイルを落とし蓋にして鍋蓋をしてから弱火で五〜八時間ほど煮めば手で簡単に潰れるほど柔らかくなるはずですよ」

「分かりました。それにしてもセイバーさんて日本料理に詳しいですよね」

「だよなあ、元がイギリスの王様なんて考えられねえよ。実は皮だけイギリス人ってオチじゃねえよなあ？」

割りとその推理当たってたりするんだよねクリスマスちゃん…。

「…まあ別にいいんだけどよ。お前は^{セイバー}お前^{セイバー}なんだしよ」

「あれ、もしかしてクリスマス照れてる？」

「てて、照れてなんてねえし！」

「そう言つて貰えるだけで私は嬉しいですよクリス」

「…うっせえよ、てか揉んだ後どうすりゃいいんだよこれ！」

クリスちゃんが照れ隠しになますの作り方を急かす。可愛いなあ。

「揉み終わったら酢と砂糖をいれて混ぜ合わせてください。それから冷蔵庫に入れて味を染み込ませれば完成です」

こうして私達は他愛ない話をしながらおせち料理を作るのだった。

絶唱しない小話集 GXのちよつと前（まえ）編

《ナマモノの屋台》

話は切歌と調がリディアンに潜入した頃まで戻る。

「調く、もうちよつとだけデスからく」

「ダメ。私達の目的は食べ歩きじゃないよ切ちゃん」

切歌の駄々を否定しながらツカツカと歩いて行く調。この二人の目的はリディアンにいる響達のシンフオギアを奪うことであった。

だからディアンでは音楽祭が開催され、学内の生徒が出店などの出し物を出しており、切歌はそれにつられて食べ歩きをしていた。

「ならせめて後一個！一個だけ買ったらちゃんとするデス！だからお願いデス、調く」

「…はあく、しようがないなあ切ちゃんは」

「やったーデス!!」

切歌のおねだりに折れた調はどこか嬉しそうな顔をする。

「さくてどのお店に…およ？何だか良さげなのを見つけたデスよ調！」

すると切歌がある出店を見つけ指を指す。調は切歌が指差した出店を見る。

そこには…

「いいかお前ら！セイバーさんがバイトを辞めたことによりウチの集客率は6割減、売り上げは5割も切り、本編での出番は絶望的にやつたにや！まさに火の「羅刹を穿つ不滅」！このままだとウチが潰れるのは避けられにやい Fate！よってここで出店を開いて少しでも売り上げに貢献するのにや!!そしてあわよくば本編での出番を「妄想心音」するにや!!」

出店のカウンターで仁王立ちをして高らかにそう告げていた二足歩行する謎の生命体^{ネコ}がいた。

「フツ、絶頂とは深淵のカウントダウンだ。だが人は目の前の栄光に常に飛び付き、足元の瓦解には眼を向けない。それこそ人の愚かしさの証。そしていざ崩れ落ちた際に必ずこう叫ぶのだ、『どうしてこう

なっただ』と」

その謎の生命体を前にタバコを口に加えながら意味深な事を語る黒い謎の生命体と、

「いくつになっても昔の恋は引きずるモノよ。新しい恋の影に必ずその人の影を重ねてちゃうから。だから貴方の事は愛せないの私がある人を忘れられないから」

その隣にこれまた意味深な事を語るピンク色の謎の生命体と、
「うんうんうんっ！」

その隣に激しく首を縦に振る謎の生命体と、
「りり、リアルJKがいる学校で屋台とか、は、犯罪臭だ、だだ漏れなんだな」

その隣に挙動不審にそんな事を語る謎の生命体があった。
「…」

調は絶句した。名状しがたい二足歩行するネコを見て、「何だアレ…」と思っただからだ。

「あそこに決めたデス！」

「切ちゃん、何だか怪しいお店だよ。よく分からない…人？ぼいのが開いてるみたいだし」

「え、でも…」

切歌が再び駄々を捏ねる。すると調の視線の先に翼が歩いているのが見えた。

「切ちゃん、あれ」

「およう？ああー！作戦も心の準備も小腹満たしもできてないのに鴨もネギもないデスよ！」

「とにかく追うよ切ちゃん！」

「そう言いつつ二人は翼の後を追った。」

そして時間は進み、響達に決闘を申し込んだ後の事。

「し、調！帰る前に食べ損ねたあのお店のお店の食べ物を食べたいのデス！」

「切ちゃん、今は早く戻らないとだよ」

「でもお祭りは今日までなのデス！だからお願いデス！調ええ」

涙目で訴えてくる切歌。その表情に「うっ」と来た調はガツクリと肩を落とす。

「…はあく、しょうがないなあ。最後のお店だけだよ?」

「やったーデス! そんな調が大好きデス!」

喜びを全身を使って表現する切歌に調は苦笑を漏らす。そしてそのまま出店があつた場所まで移動する。だがそこには…

「君たち許可取つてないよね? 何で出店開いてるの?」

「違うんですにや。これには冥界より深あくい事情があつて…」

「事情云々よりも許可がいるよね? ここ学校の敷地内だからね? 普通に犯罪だからね?」

恐らく学校の先生と思われる職員に正座で怒られている謎の生命体達ネがいた。

「とりあえず君たち警察に引き取つてもらおうから」

「いや〜それだけは勘弁を…と、油断させて!」

「体はネコI am the bone of my catで出来ている!」

謎の生命体ネが詠唱を唱えた瞬間、謎の生命体ネの足がロケット噴射口となり遙か空へと飛んでいく。

「にや〜はっはっはっ! さらばにや!!」

「フツ、切り札とは切れてこそその意味を果たす。故に切る頃合いを見据え過ぎてはいけない。切り札を切つた瞬間、それは切り札では無くなってしまうのだから」

「女はね、常に武器を隠し持っているのよ。それがどんな物かはその人のセンス次第だけど、必ずそして確実に落とそうとしてくるわ。まあ落ちるかどうかはその日次第だけどね」

「うんうんうんっ!」

「か、かか隠し武器とかロマンの、か塊なんだな」

「どうでもいいけど君ら見捨てられたの分かつてる?」

「「「んっ?」」」」

置いてかれた謎の生命体達ネが空を見る。先ほど飛び立った謎の生命体ネはそのまま何処かに逃げていった。

そこから先は謎の生命体達ネの阿鼻叫喚がその場を支配していた。

「…行こうか切ちゃん」

「…そうデスね」

その光景を目にし、調と切歌はその場を後にした。

「て言う事があつたのデス！」

「ふくん、そうだったの。それにしてもその謎の生命体^ネって何だったのかしらね？」

「結局分らず終いだった」

と、収容所でそんな話をしているマリア達。盛り上がり欠けたのか話はすぐに次の話題に切り替わる。

そんな会話を扉越し聴いていた人物が一人。

(明日にしよ…)

その日、事情聴取と言う建前のメンタルケア兼雑談を明日に見送ったセイバーなのであった。

《セイバーさんと引き抜き》

とある日。

「ぐぬぬぬううう…」

「…」

私の目の前で翼さんが唸り声を上げてる。うん、分かるよ。どんな状況だよって話だよね。

事の発端は数分くらい前。新設した仮設本部の中で訓練をしていた時の事。

「セイバー、少し頼みがあるのだが」

翼さんから私にそう言ってきた。翼さんから頼み事をされるなんて珍しいからちよつと驚いた。

「頼みですか？私で出来ることなら構いませんが」

「すまない。実は「約束された勝利の剣」を握らせてほしいのだ」

「約束された勝利の剣」を？」

これまた唐突に突拍子のないお願いだなあ…。取りあえず何でか理由を聞いてみる。

「うむ、数多くあるアーサー王物語の武勇に必ず登場するその銘。防人であり、歌姫うためであり、なにより剣つるぎである私にとっては心踊らない訳がないのだ！」

「はあ…」

分かる様な分からない様な…。たまに出てくるこの翼さんの変なテンションは何なんだろうね？

「以前から頼みたいとは思っていたがなかなか機会がなくてな。今日ようやく果たすことが出来た！」

翼さんがちよつと目をキラキラさせながら私を見てくる。

そんなに握りたかったの…？ああそういえば二課に入りたての頃、ノイズと戦ってる時にこっちをジーと見てた翼さんがいたっけ。信用されてないのかなあ〜って思ってたけど、アレって「約束された勝利の剣」を見てたのか。

「まあそれくらいでしたら構いませんが」

「本当か!!」

グイツと迫る翼さん。近い近い近いから。

とりあえず私は「騎士王の宝財ゲート・オブ・キヤメロット」から「約束された勝利の剣」を取り出して、先端を床に突き刺した。

「どうぞ」

「う、うむ」

恐る恐る「約束された勝利の剣」の握りを掴む翼さん。

てか翼さんニヤけるのメツチャ我慢してる。新しい玩具買って貰った子供じゃないんだから。

「では、いざー！」

翼さんが床に刺さった「約束された勝利の剣」を引き…抜けなかった。

「ん？ふん…ふんぬ！ぬうううう!!」

全身全霊の力を使って引き抜こうとしてるけど「約束された勝利の剣」は抜ける気配がない。

あれ？おつかしいなそんなに深く刺してない筈だけど？

「ハア…ハア…な、何故だ…」

翼さんも息切れしながら疑問に思ってる。

「…ハッ！フツフツフツ…なるほどそう言う事か。人が悪いなセイバー…！」

へ…、急にどうしたの翼さん？

「これは私が聖剣^{エクスカリバー}を握る資格があるかどうかを選定する試練と言う訳だな！」

あ…？

「伝承における「約束された勝利の剣」は王としての才有る者しか抜くぬ選定の剣^{つるぎ}。こうして敢えて床に刺して渡したのは私がこの剣^{エクスカリバー}を振るうに値するかを図るためだったのだな！」

※諸説ありますが「約束された勝利の剣」と

「勝利すべき黄金の剣」は同一の物として扱われていたりします。

…いや、…あの、ドヤ顔で名推理みたいな事言ってるけど…、単に私が無意識にそうやっちゃっただけで特に意味は無いんです…。

「この風鳴翼、一人の剣使い^{つるぎ}として甘んじてその試練受けようではないか!!」

ヤバイ…。完全に防人スイツチ入っちゃってる…。こうなると基本何言っても止まらないんだよなあ翼さん…。

「ゆくぞ「約束された勝利の剣」！防人の生きざまと覚悟を篤と見るがいい!!」

で、そう意気込んでから数分後…

「ハア…ハア…フン！…だはあ！ハア…ハア…フン！くっ…ぐぬぬううう…！だあ！ハア…ハア…」

全身汗だくで悶えてる翼さんの姿があつた。何度も引き抜こうと踏ん張ってるけど「約束された勝利の剣」は全く微動だにしない。私^私が引き抜いて手渡そうと提案しても何か意固地になつて断るし、後半に至っては足に付いてるギアのブースターまで使つて抜こうとしてもうなりふり構つていられないレベルまで来てるし。

プシュー

「おくす、遅れて悪いん…何やってんだ先輩？」

「え、クリスちゃんこんな先つちよしか刺さってない剣も抜けないの〜?」

なんか響ちゃんニヤニヤしながらクリスちゃんを煽ってる…。

「ハア!?んじやテメエは抜けるって言いてえのかよ!」

「まっかせなさい!これでも師匠に鍛えられてそこいらの子より力はあるからね!」

「ほお、それは是非とも見てみたいものだな」

なんかもう趣旨変わってない?元々翼さんが

「エクスされた勝利の剣」握りたいって言ったから始めたのいつの間にか力比べになってない?

んで翼さんは何でまた得意げなの?

「よし、それじゃあ見ててね!」

と、意気揚々とギアを纏いながら「エクスされた勝利の剣」の前に立つ響ちゃん。

そのまま足を肩幅に開いてちよつと前のめりになりながら握りを両手で掴む響ちゃん。

ちよつと待って、何か猛烈に嫌な予感がする。

「待っててくださいいヒビキ。その姿勢はいけん」

「いつきまーす!せーの!」

私の制止も聞かず「エクスされた勝利の剣」を引き抜こうとする響ちゃん。

そのまま思いつきり体を仰け反り…

ゴギツ

「「あつ…」」

その後、響ちゃんは一週間ベッドで寝たきり状態となった。原因はぎっくり腰との事。

私は貴重な装者を負傷させた責任を取って、響ちゃんの介護を未来ちゃんと一緒に付きつきりですることになった。

響ちゃんが完治後、私は心に誓った。

(今後は頼まれても宝具の貸し出しとかしない様にしよう…)

と。

幕間の物語：セイバーさんとクリスとカレー

言っちゃまえばアイツとの出会いは最悪の一言だった。

あの時、フィーネからバカと一緒に拉致するよう指示されて、実際遭遇してみたらアイツにロクな反撃も出来ずにボロ雑巾にされちまった。先輩の絶唱もだがあの時「ネフシユタンの鎧」が無かったらと思うとゾツとする。

それ以降はアイツに会う度にアタシは助けられた。バカが「デュランダル」を持って暴走した時、フィーネに捨てられて逃げてた時、追っ手のノイズが迫ってきた時、バカと一緒にノイズを片付けていた時…。

思い返す度にアタシは迷惑をかけているのを思い出す。

だからだろうアイツが月の破片を迎撃してぶっ倒れた時は心底落ち着かなかった。

「あれだけ恩売つといて簡単にくたばるんじゃねえ」

と、特機部二に保護されてからの一週間はそう思うばかりだった。アイツが目を覚ましたとオツサンから聞いた時は一番に駆け込んだ。

押し入った病室のベッドに上半身を起こしたアイツがパチクリしながらアタシを見ていたのを今でも覚えている。アタシも勢いで来ちまっただけになんて話せば良いのか分からずその場で固まっちゃまった。

「心配を掛けてしまったようですね、すみません。ですが真っ先に来てくれた事、とても嬉しく思います」

微笑みながらそう言ってきたアイツにアタシは途端恥ずかしくなり「うるせえ…」とそっぽを向いて突っぱねた。後から来たバカにその事をからかわれ怒鳴り散らし、先輩がそれを見て「やれやれ」と呆れていた。

それからオツサン達のおかげでいわゆる普通の生活つてのが出来て学校にも行けて、正直今が現実かどうか怪しく思えるほど充実していた。

そんなある時、アイツが普段のメシは どうしてるか聞いてきた。「三食外食だ」と伝えると血相を変えて育ち盛りがどうこう言い始めたが軽く聞き流した。

特機部二からの小遣い使い余してるんだしどう使おうが勝手だろ。てなことを話した翌日の夕飯時、特に訓練もなく学校終わってから家に戻ってメシをどうすつか悩んでいる時、家のインターホンが鳴った。

玄関を開けて確認してみるとアイツが立ってた。何でもメシを作りに来たらしい。

断ろうとしたが…

「作らせなさい…！」

と、迫力のある言い方をしていたので渋々家の中に入れた。

たまに出てくるアイツの従わなきやイケねえ圧力みたいなのは何なんだ？王様特有のカリスマってヤツか？

家上がったアイツは真っ先にキッチンに向かった。全く使った跡が無いシンクやコンロを見て顔にシワが寄っていた。次に備え付けの冷蔵庫の中を見た。中は飲み物と小腹が空いた時用の菓子ぐらい。それを見て今度は頭を抱えていた。

なんだよ別に良いじゃねえか！メシ何て作らねえんだしよ！

なんてアタシの言い訳を無視して手に持っていたレジ袋から何かの材料を広げ始める。見ているだけなのも嫌だからなんか手伝おうとしたら…

「包丁使えますか？」

と言われて黙って待つことにした。チクシヨウ。

アイツは自前のエプロンを着けてテキパキと手を動かす。それをジツとみるアタシ。ふと頭に過るのはチビの時に見たママの姿。ママもあーしてキッチンでメシを作って。パパとアタシは何ができるかよく予想してウキウキしながら待っていた。

後ろを向く。フローリングの部屋には不釣り合いなでかい仏壇。この間オツサンに頼んで運んでもらったパパとママのだ。

チビの時には出来なかった唯一の親孝行、それをしたくて。何時で

も見守ってるって思いたくて。なんて取り繕っても結局は寂しい気持ちを少しでも和らげたくて置いてるんだと思う。

そんな黄昏てた私の鼻に香しい匂いがやってきた。アイツがお玉杓子たまじやくしを使って鍋の中をグルグルと回す姿が見えた。

これって…カレーか？

その予想は当たって大皿に盛られたライスにお玉杓子たまじやくしですくったカレーが上から降り注ぐ。

「どうぞ」

目の前出されたそれは黒寄りの赤色のルーに色とりどりの野菜が散りばめられて鮮やかな色合いをして目を楽しませてくれる。対照的にライスは一粒一粒が輝いててきらびやかだ。そしてなにより白い湯気と一緒に漂ってくる香辛料が効いた香りがアタシの腹ん中の虫を暴れさせる。

「いただきます…」

作ってくれた者に対する最低限のマナーを言いつつスプーンを握握持つ。スプーンの上にルーとライスを半分づつすくいそのまま口に運ぶ。

ピリツとした辛みの後、野菜の旨味や甘味と言ったものが溶け合い混ざり合った味が口いっぱいに広がる。

「悪くねえんじやねえか…」

ハッキリ言っただけだった。だが素直に称賛するのはなんとなく恥ずかしかつたから言葉を濁した。

「そうですか。ありがとうございます」

なのにアイツは嬉しそうに微笑んだ。その顔がなんだか見透かされてるみたいでなにより微笑みが綺麗だと不意に思ってしまった事がアタシの羞恥心を掻き立てる。誤魔化す為に大皿を持ち上げスプーンでカレーをかきこむ。

「…クリス、食べ方が汚いですよ。貴女も女性なら食事のマナーと作法はしっかりするべきです」

「モグモグ…ゴクン。るっせーよ、大体アタシはチビの時から戦地で生きてたから礼儀作法なんて知らねーし」

なんて言い訳をするとアイツはどこか悲しそうな顔をする。多分アタシの生い立ちについては知ってるはずだからな、色々察したんだろ。だけどそれで失言だったなんて思われるのも癪だ。

アタシは持ってた大皿をアイツに差し出す。

「ん。おかあり」

「…はい！」

一瞬戸惑った顔になったが直ぐに何時もの微笑み顔で答えてくれた。

うん、暖かいな。

鍋の中に入ってたカレーはその日の内に完食した。

「ス——リス?…クリス?」

ふと、物思いにふけてた意識がアイツの声で戻ってきた。

「どうかしましたかクリス?」

「あ…、わりいちよつと考え事してた」

「包丁ではないとは言え刃物を片手に考え事とは感心しませんよ?」

「ああ…」

アタシの生返事を聴いた後、アイツは野菜を切るのを再開する。

アタシは手に握られてる裸になりきってないじゃがいもにピールを押し当てて皮剥きを再開する。

フロンティアの戦いの後、アタシは大晦日の手前辺りから料理の手伝いをしてる。最初こそ勝手をやった報いと思ってやっていたが、こなしていく内に楽しくなっていた自分がいて、気付いた時にはアイツと一緒に献立を考える事が多くなって、バカやバカの親友に振る舞った時に「美味しい」と言ってもらえる事が嬉しくなってる…

ああ…、恵まれてるなアタシ。

隣で切った野菜を鍋の中に流し込んでるアイツを見る。

アタシがこうして恵まれてるのもオッサンやコイツのお陰なんだよな。

いつかコイツにちゃんとお礼を言いたい。助けてくれた事、夢を預

かつてくれた事、信じてくれた事、そして何よりこの暖かい温もりを
思い出させてくれた事に感謝したい。

今はまだ無理でも、いつかもう少し心が強くなったら目一杯言っ
てやろう。

そんな事を考えてるとアイツと目が合った。

「また考え事ですかクリス？」

「へ、オメーの優等生ヅラ見て平和ボケを嘆いてただけだ」

「そうですか。私はクリスの愛らしい顔が見れて嬉しいですよ」

「ん？なっ!?!／／／」

た、たく！なんでコイツはバカと一緒でそんな小っ恥ずかしいセリ
フを平気で言えるんだ!?!まったく！本当にまったく!!

熱くなる顔を誤魔化す為にじゃがいもの皮剥きをちよっぱやで終
わらせて、適当に切り分けてから鍋に突っ込む。

一連の動きを見てアイツがニツコリ顔になってるが気にしない。
気にしてたら進まねえ。

今に見てろよ！いつかオメーの顔を真っ赤なりんごみてえいにし
てやつかな！

そんな野心を抱きつつアタシは次の手順の準備に取りかかった。

その日作ったカレーは胸焼けするくらい甘く感じられた。

G X編

月より帰還する救世主

「F・I・S」が引き起こした「フロンティア事変」と呼ばれる出来事から数ヶ月。とある宇宙シャトルが地球に戻るため大気圏へと突入をしていた。

彼らは「フロンティア事変」において月の遺跡を起動し、月の地球落下を未然に防いだ知られざる英雄、ナスターシャ教授の遺体とその異端技術を回収することであった。

しかし大気圏突入と同時にシステムトラブルが発生。本来の落下コースから逸脱し、ブースターから火の手が上がっている。

「現在の墜落予想地点、ウランバートル周辺。人口密集地です！」

「安保理からの回答はまだか!？」

「外務省、内閣府を通じて再三打診していますが、未だありません！」

「まさか見捨てるつもりでは!？」

刻一刻と迫る状況に焦り始める作戦指令室。

だがその時であった。

「承認降りました！安保理の規定範囲で我々の国外活動、行けます！」

「よしっ！お役所仕事に見せてやれ、藤堯！」

「軌道計算なんてとつくにですよ！」

玄十郎の号令と共に藤堯が手元のキーボードを操作し潜水艦のミサイル発射口から垂直ミサイルが発射される。

「システムの再チェック！軌道を修正し、せめて人の居ない所に！」

「そんなの分かっていますよ！」

シャトルの副操縦士は声を荒げながらも指示に従う。だが火の手が上がった箇所が大気圏突入時の熱で爆発し、姿勢制御が更に難しくなる。

そこに追い討ちをかけるようにシャトルのレーダーが何かを捉えた。

「ミサイル!?俺達を撃墜するために!？」

「致し方無しか…」

操縦士達の表情が絶望に染まる。だか…

『へいき、へつちやらです！』

シャトルの無線から女の子の声が響く。

『だから、生きるのを諦めないで！』

するとシャトルに向かっていたミサイルの加速が止まり、外装がパージされる。そこにはシンフォギアを纏った三人の少女と蒼い衣の上に白銀の鎧を身に纏った少女がいた。三人は彼方まで続く漆黒の空に歌を響かせる。

クリスは大型ミサイルを三発出現させ、その上に響・翼・セイバーが飛び乗ったと同時に発射される。

「まるで雪音のようなじゃじゃ馬っぷり！」

「だったら乗りこなしてくださいよ。先輩？」

翼の言葉にやや挑発的に返すクリス。大型ミサイルでシャトルの間近まで接近したセイバー達は大型ミサイルを乗り捨てシャトルに飛び乗る。

「ヒビキ、ツバサ！」

「はいー！」

「ああー！」

シャトルに取り付くと同時に響と翼は腰のブースターを使い減速を試みる。

『装者取り付きました！減速を確認！』

『墜落地点再計測！依然、カラコルム山溪への激突コースにあります！』

オペレーター達の声をイヤホン型の通信機で聞き取りながら彼女達はシャトルを更に減速させるために手段を講じる。クリスは腰部のギアから大型のミサイル四発出現させブースター代わりに、響は脚部のギアの固定用アンカーをシャトルに打ち込み体を固定し両腕部のギアを変形させバンカーにしたそれをブースター代わりに、翼は二本の剣を支えに脚部のギアを大型化し内蔵されているブースターを起動、セイバーは「魔力放出」で体を支え「約束された勝利の剣」を

後ろに向け「風王結界」インビブルエアの風を制御し向かい風の突風を起こしている。

地球の大気圏を突破し確実に減速しているシャトル。しかし…
『シャトルの減速間に合いません！カラコラム山溪さんけいを回避することは不可能です！』

セイバー達の奮闘虚しくK2を避けるコースには入れなかった。
『なんとか船内に飛び込んで、操縦士達だけでも！』

作戦指令室で状況をモニタリングしていた緒川がセイバー達にそう具申する。

だが…

「そいつは聞けない相談だ」

「人命と等しく、人の尊厳は守らなければならないモノ」

「ナスターシャ教授が世界を守ってくれたんですよ？なのに、帰ってこれないなんておかしいです！」

「教授もまたこの星地球で生まれ落ちた命。ならばこの星地球の大地に還すが道理と言うモノです」

彼女達は諦めなかった。

たった二人の生存者と一人の遺体。それを守るため命を燃やす四人。彼女達の覚悟を聞き届けた緒川はそれ以上の抗議をしなかった。そしてその様子を収容施設のモニター越しで見ていたマリア達は歓喜に震え目尻に涙を流した。

「燃え尽きそうな空に歌が響いているんだ、諦めるな…！」

そしてそれはシャトルの操縦士達にも響いた。諦めかけていた副操縦士の震える手を操縦士が上から重ねる。その顔は先程まで絶望に染まっていたモノではなく最後まで諦めない覚悟のある顔であった。

『K2への激突コース、避けられません！』

『直撃まで一キロを切りました！』

しかし依然としてK2への激突コースに入っているシャトル。

「お任せください！」

するとセイバーが動く。セイバーはシャトルの先端部分に立つと

「約束された勝利の剣」を構え魔力を送る。「風王結界」が解除され刀身が頭になった「約束された勝利の剣」は徐々に黄金の光を放ち始める。やがて臨界まで辿り着いた光は膨張しセイバーの身の丈を遥かに越えるほど巨大化する。

セイバーは「約束された勝利の剣」を右肩に担ぐ様に振りかぶり：「やあああ!!」

そのまま横に振り下ろす。黄金に輝く斬撃がK2に向かって真っ直ぐ飛び、K2の表面を貫通すると同時に：

ドゴオオオン!!!

横一線に大爆発が発生する。そうセイバーはK2を文字道理真っ二つにしてみせたのだ。

「ビビキ、お願いします!」

「ええええ!ここで私ですかあ!」

突如声をかけられた響は動揺しつつも刻一刻と迫るK2に向かって拳を構える。

「くつ!?どりやあああああ!!」

バシユン!!

雄叫びと共に放たれた響の拳と腕のバンカーはK2に命中し、セイバーが切り分けた山の表面を削り一瞬だけ山頂部分がフワツと宙に浮かぶ。その空いた空間を高速のシャトルが通り抜け、見事カラコラム山溪の激突を回避した。

だがその代償として：

『K2の標高、世界第三位に下方修正!』

K2の標高が著しく減ることになった。

余談ではあるがこの事態に安保理からの苦情が殺到したが：

「人命優先だった為。何より定められた規定にK2を削ってはならないとは書いて無い」

となんとも子供っぽい屁理屈をゴリ押して、なんとお咎めなしをもぎ取った。

なおその後、安保理の規定がかなりマニアックな部分で厳しくなったのは完全にどうでもいい話である。

『シャトル、不時着を強行します!』

場面は戻って現在。K2を避けたシャトルはそのまま山の斜面を滑りながら下る。衝撃で飛ばされそうになったクリスをセイバーが背中から支える。

だが一難去ってまた一難、シャトルの前方には緑が生い茂る森林群が現れる。

それを確認した翼はシャトルの先端部分に立ち、つるぎ 剣を霞の構えで持ち刀身を変化させる。みるみる巨大化した刀身はシャトルの速度と相まって森林をバツバツサと切り裂いていき無事に森林群を抜けていく。

だがまだまだ苦難は続く。森林群を抜けた先には岩山が立ち並ぶ溪谷であった。

「ぶつちぎいいい!!」

翼と交代するようにシャトルの先端部分に立った響は岩山を殴り、強引にシャトルの進路を変更する。

「次は左だ!立花!」

翼の指示を聞き取りながら再び岩山を殴る響。その後も目の前の障害を時には拳ガングニール、時にはミサイルイチイバル、時には剣天羽々斬、時には聖エクスカリバー 剣を使い道なき道を切り開いていく。

「この調子でふもと 禁まで行ければ!」

響が作戦の順調具合を見てそう呟く。だが…

「っ!?ヤバい!!」

「あ?」

「村だ!」

クリスの指差す方角には小規模ながらも村が立ち並んでいた。それを見た瞬間の響とセイバーの行動は早かった。響とセイバーはシャトルを飛び降りる。

「バカ!!セイバー!!」

「何を!?!」

驚愕するクリスと翼を置いて、シャトルを押し返して止めようとする二人。

「くぬううううう!!」

「くおおおおお!!」

しかしシンフォギアで強化された身体能力とサーヴァントのステータスをもつてもシャトルは止められない。

シャトルはそのまま村の大通りに突入し、村人達が慌てて逃げ出す。家や車を押し退けながらもその速度が落ちないシャトル。だが響とセイバーは諦めずにシャトルを押し返し止めようとする。

「立花!!セイバー!!」

『南無三!!』

目まぐるしい状況の中、翼と弦十郎が叫ぶ。

更にここでアクシデントが発生する。シャトルの進行方向の先にT字路がありその真正面に大型の建物があった。中には恐らくまだ人がいる。このままではシャトルが建物に衝突してしまう。

それを確認した二人は意を決つする。響は脚部の固定用アンカーを地面に打ち込み、セイバーは「魔力放出」で足を地面にめり込ませる。お互いが体を強引に固定させた後…

「光あれええええ!!」

響・セイバー

二人はシャトルごと体を思いっきり仰け反らせる。それによって投げ飛ばさせたシャトルは空中で半回転しながら建物の屋根を飛び越えるが僅かに飛距離が足りず建物の屋根の先端に船体がめり込み始める。

だがここで副操縦士の機転が冴える。投げ飛ばされたにも関わらず状況を理解していた副操縦士はシャトルのジェット噴射を数分だけ行う。推力を得たシャトルはそのまま屋根の先端を支点にゆっくりと重力に従って落ちていく。やがてシャトルは建物の真後ろで直立、完全に静止した。

「だはあゝ…」

「任務完了しました」

翼の報告に作戦指令室のメンバーはホッと肩の荷を下ろす。収容施設のマリア達も作戦の成功を静かに喜んでいた。

翼達はシャトルを降り、地面に大の字で寝そべっている響とその場

に座り込んでいるセイバーに駆け寄る。

「無事か、立花？セイバー？」

「ええ、私の方は問題ありません」

翼の問いに微笑みながら答えるセイバー。

「へへへ、あははは！」

すると不意に響が笑い始めた。

「可笑しな所でもぶつけたか？」

「私、シンフォギアを纏える奇跡が嬉しいんです！」

響の答えに翼達は多少呆れた、けれど何処か充実した顔で互いを見合わせる。

「お前、本当のバカだな」

クリスがそう呟く。そして全員が目の前の光景を見る。そこには自分達が切り開いてきた道筋と山頂部分が極端に削れ不恰な形の山となった元K2の姿があった。

絶唱しない小話集 シヤトル救出から数週間後（ご）
編

《セイバーさんとマリアの癖》

どうも皆さん、いかがお過ごしでしょうか？セイバー（中身一般人の私）です。

今回はシヤトルを救出した後の事を色々と話すよ。

まずは私の所属していた二課なんだけどシヤトルを救出する時に国連からの許可を得て国外にも活動ができる超常災害対策機動部々スクフォース「S. O. N. G.」へと再編されて、私達の主だった仕事は災害地域の救助活動がメインになった。ノイズがいなくなったんだしこういった仕事が出来ようになるのは嬉しい限りだ。

次に私の事。フロンティアの戦いから数ヶ月ぐらい後に英国政府から二課と日本政府に要請があった。

内容は簡単に言うとこんな感じ：

・二課に所属しているアーサー王

（以下「甲」と呼称）の身柄の要求

・甲の保有する完全聖遺物の即時英国への返還

・甲に関する二課並びに日本政府が知り得る

情報の開示

てな感じだった。他にも細々とあったけどよく覚えてないから割愛する。

どうして英国がこんな要求をしてきたか？それほウエル博士が原因だった。ウエル博士はあの後国連の事情聴取で私がアーサー王であることを暴露したらしい。しかもフロンティアで録ったと思われる戦闘データと一緒にだ。米国とか他の国は壮大な馬鹿話として扱ってケラケラ笑ってたけど、英国政府だけマジに捉えちゃったらしい。

まあそうだよな。思っつきし「約束された勝利の剣」ブツパしちやつた映像とか観たし。英国からすれば国民的に支持されてる人が現代

に甦ったとなったら絶対に国に帰ってきてほしいよね。

ただ分かんないのが私が持つてる聖遺物の返還って所なんだよね。「約束された勝利の剣」を含めて私の聖遺物は全部「騎士王の宝財」から取り出した物だから元々が英国の物って証拠が無いのに返せって言ってきたらよね。

その事を含めて緒川さんに調べて貰ったら、英国首相とかは純粹に私を迎え入れたいって気持ちらしいんだけど、副首相と一部の大臣が「約束された勝利の剣」とかの聖遺物を使って異端技術の研究をするのが目的らしい。さらに副首相は私を取り込んで国民の支持を得てあわよくば自分が首相にのし上がるための人柱にする画策をしていたことが分かった。

まあ世の中良い人間と悪い人間がいるからね、仕方ないっちゃ仕方ない。

で、その事を弦十郎さん報告してどうするかを聞いてみたら…

「こういう事に関して俺が一番信頼できる人物に頼んどく」と言われた。

それから数週間後、英国からの要求は取り消しとなった。

理由はこんな感じ…

・ 英国政府がアーサー王（以下「甲」と呼称）

と呼称する者は元二課所属のエイジェント

筆竈（以下「乙」と呼称）であり

戸籍上においても甲などではない。

ウエル博士の証言は精神的に不安定で

確証性がなく、証拠としては不十分である。

また乙を甲とするならば何故性別が女性で

あるかの説明を英国政府側に要求する。

・ 甲が所持しているのは完全聖遺物ではなく

アンチノイズプロテクター「RN式回天特機装束」に

装備されている聖遺物の欠片である。

また甲の使用する「RN式回天特機装束」に

搭載されている聖遺物の返還を

要求するのであればその聖遺物を英国政府が
保有していた際の記録を即時日本政府に
提示する事を要求する。

・甲に関する情報は日本政府が国連に提示した物が
全てであり、乙に関する情報も同様である。
てな感じ。

まあなんて言うか嘘半分真実半分って所だよね…。特に聖遺物に
関してはほとんど作り話だし。資料でしか見たことないよ「RN式回
天特機装束」なんて…。

あ、「RN式回天特機装束」っていうのは簡単に言うと、歌の代わり
に精神力気合いで聖遺物を起動させるって物。フィーネこと櫻井了子さん
が開発したけど研究段階で聖遺物を起動出来るだけの精神力を持つ
者がいないって理由で実用性が無いって凍結されたらしいんだけど、
試験役をやった弦十郎さんはピンピンしてたらしい。どこまで化け
物なんだあの人…。

おつと話が逸れちゃったね。ともかく日本政府は英国政府に上記
の要求をしたけど英国政府は何一つ証明出来なかったみたい。

まあ当然と言えば当然だよね…。

アーサー王私が女の子の理由なんて検討つかないし、「エックス約束されたカリバー勝利の剣」
は伝承通りなら泉の乙女に返還してこの世に現存しないはずだから。
因にだけど「RN式回天特機装束」に搭載されている聖遺物は
「カ勝利すべきバ黄金の剣」って事になってる。これに関しても英国政府
が所有してた記録が無いことが緒川さんの調べで分かっているので英
国政府に返す理由が無い。

てな訳で私の問題はなんとか解決した。今回の事に助力してくれ
た人はなんでも弦十郎さんのお兄さんらしい。今度会ってお礼が言
いたい。

さて最後にマリアさん達についてだ。

マリアさん達は国連に連行された後、米国政府に死刑を言い渡され
ただけど日本政府がフロンティア事件の経緯を全て国連に報告し
た事で、米国は公式的にマリアさん達を死刑にするために「F. I.

「S.」で行っていた非人道的な人体実験の経緯も説明しなくちゃいけない立場になった。なので米国は「F. I. S.」の存在そのものを無かった事にして、マリアさんの行動自体は…

『実は彼女は国連のエージェントで武装組織「フィーネ」にスパイとして潜入捜査を行っていた』

て言う筋書きが作られた事でマリアさん達は国連指導の特別保護観察の建前で監視下に置かれる事になった。

ただ国連エージェントと言う肩書きは言っちゃえば自由の無い立場だと言える。国連は司法取引で共犯者の切歌ちゃんと調ちゃん、ガングニールを渡した響ちやんの将来を盾にしたらしくて、マリアさんは国連のプロパガンダとしてアイドル活動をしなくちゃいけない。今は世界各地を点々としてチャリティーライブをしている。てのがシャトルの救出した後起こった事の全てだ。

で、それを踏まえた上で今私が何をしているのかと言うと。マリアさんのマネージャーだ。

もちろんこれにも裏がある。

弁明状国連所属になったマリアさんだけど、それをよく思っていない人達も国連の中にはいる（特に米国）。

なのでそういったのからマリアさんを守るために元二課のエージェントである私がマネージャー兼護衛として側にいることになっている。

ちなみに国連の人達には難癖つけられたけど武装組織「フィーネ」の行動が日本国内で起こった事を理由にマリアさんには日本側の監視も必要なのだとしてそれっぽい言い訳をした。それでも米国は国連の護衛だけで十分だとか言ってきたので、奥の手として武装組織「フィーネ」が決起してから証拠隠滅の為に日本に無許可で武器による武力制圧の実行とその失敗、「フィーネ」との秘密会談によって発生したスカイタワーでの特異災害^{ノイズ}による一般人への被害、「フィーネ」捜索の為に米国所属哨戒艦艇を二課が救助した事など、その他もろもろの責任追求をしたらあつさり引いてくれた。

あの時の米国は「F. I. S.」の機密を守るために躍起になってた

らしくてだいぶバタバタしてそうだったとのこと。まあ内容が内容だからね。いくら米国でも国連加盟国に良い顔はできるモンじゃない。

よし、一通りの説明は終わったかな？

ともかく色々な厄介事を何とか片付けて、今日も世界の為に身を粉にして私は働いているのだった。

で、さつき説明したマリアさんのマネージャーの件だけど、別段翼さんのマネージャーをやった時としてることはあんまり変わってない。チャリティーライブの企画を考えたりTVの取材を受けたりでちよつと翼さんより忙しいかなってぐらい。

あ、でもちよつと違う所もあった。この仕事してると業界の偉い人とかと会食に行ったりするんだけど、マリアさんの場合だと規模が違った。

スゲエーよ…、最高級ホテルの最上階貸し切って、ドレスコードで来てる人皆高級そうなドレス着て、見るからにセレブって人ばかりだ。出されてる料理も一流の物がケータリング式で並んでる。やっぱスゴいんだなマリアさん。伊達に全米チャートでトップに出るだけの事はあるよ。なんか私スゴく場違いな気がする。

「これはこれはMissマリア、今日は一段と美しい」
「あら、ありがとう」

向こうの方ではマリアさんが色んな有名人や業界の偉い人とお話をしてる。やっぱ世界が違うってやつなのかなあ…。

…おっと、私の「直感」スキルが何かを感じ取った。私は「直感」スキルが指し示す方角を見る。上品そうなスーツを身に纏った男の人がマリアさんに近づこうとしていた。私は自然な感じでその人の前に立って通せんぼをする。

「…なんだね君？邪魔だよ」

「失礼。マリア・カデンツァヴァ・イヴのマネージャーをしている者です。申し訳ありませんが彼女との会談をお求めならお引き取りを」

「なに？たかがマネージャーが誰に物を言っている。私以外にも話し

ている人物がいるじゃないか。ならば」

「お引き取りを…!」

「っ!?ちっ…!」

舌打ちをしながら離れていく男の人。間違いなくマリアさんの事をよく思っていない人がまわした刺客だね。さっきのが私がこんな場違いな所にいる理由だ。私の「直感」スキルで件の相手を炙り出して「カリスマ」スキルで追い返す。マリアさんを守る為だからね、場違いな空気ぐらいは我慢しないと。

さて、そろそろお開きの時間だ。アツチも動く頃かな?

私はある人物に目を向ける。その人はさつきから挙動不審にキョロキョロと周りを見渡して人の目が無いことを確認している。私はその人物に気付かれない様にゆつくりと近づく。そしてその人物が懐に手を入れた瞬間:

スツ:

ガシツ

「マリア、何をしているのですか?」

「セ、セイバー…これは違うのよ」

「何がどう違うのか一から十まで説明を要求します」

そう、その人物とはマリアさんの事だ。マリアさんは懐から取り出したタッパーと箸で料理を積みようとしていた。しかもこれが初犯じゃなくてケータリング式の会食の時に必ずやっているらしい。調ちゃんとか歌ちゃんから話聞いててよかった。

「ほ、ほら…育ち盛りの調と切歌に栄養のあるものを食べてもらおうと…」

「すでに二人にはS・O・N・Gから生活に支障がない様、給金が出されています。あの二人なら無駄な浪費をする事もしないでしょう。料理も出来ますしその心配は無用かと」

「で、でも…方が一な事も…」

「定期的にS・O・N・G内で検診を受けています。方が一な事があれば直ぐにでも対応出来ますし、私が日本に戻った時には料理を作りにも行っています」

「…あ！今日のお酒のおつまみ」

「私が作ります…！」

マリアさんの言い訳を悉く論破してしていく。なんでそこまでしてやりたがるの？

「ともかくこタツパー・菜箸れは私が預かります」

「ああ…！」

私がタツパーと菜箸を奪い取るとマリアさんが残念そうな声を上げる。全く、マリアさん今の自分の立場分かってる？今は国連のエンジニアトつて肩書きなんだからそれ相応の振る舞いをしないとんだからこんな貧乏人みたいな事しないでよ。

なおこれを境に会食の毎に私とマリアさんでこんなやり取りが繰り返される事をこの時の私は知る由も無かった。

え、それで結局料理はどうしたかって？私が責任持って食べたよ、全部。

《セイバーさんと小さな一歩》

ある日の事、私は諸事情で日本に戻って来ていた。まあ理由はもちろんS・O・N・G・関連の事なんだけど説明がめんどくさいから割愛する。

で、仕事が終わってから私はある人物達の所に来ていた。

「キリカ、野菜は切り終わりましたか？」

「終わったデース！」

「ではその野菜をこちらのボールに入れてください」

「合点承知之助デース！」

切歌ちゃんが元気良く答えてくれる。そう、今私は調ちゃんとお切歌ちゃんの自宅に来てる。マリアさんを含めて二人とも「フィーネ」にいた頃は中々食生活で苦勞していたらしい。なので二人の健康管理の為に日本に来た時はこうして二人のために料理を作りに来てる。

あ、ちなみにだけどクリスちゃんは最近自炊が出来る様になったから料理しに行く事はちよつと減ったけどしなくなった訳じゃないから。私としてもクリスちゃんと肩を並べて料理するの楽しいし。こ

の間もハンバーグの作り方を教えて欲しいって言われて凄いい嬉しかったな。

おっと話が逸れた。

まあぶつちやけちやうとまた私がお節介を焼いてるって話ってだけなんだよね。ああ、あともう一つ目的がある。

「あの…セイバーさん、肉じゃがのお肉は牛肉でいいんですか？」

「いえ、肉じゃがの肉に指定はありません。豚肉でも牛肉でも、なんなら鶏肉でも問題ありません。今日は牛肉が安かったのでそれを使用するだけです」

「そう…なんですか…」

「はい。シラベはそのまま牛肉を色が変わるまで炒めてからキリカが切った野菜を入れてください」

「分かりました…」

ぎこちなく答える調ちゃん。私のもう一つの目的は調ちゃんと仲良くなる事だ。切歌ちゃんとはすぐに打ち解けたんだけど調ちゃんとはなんかまだ壁がある感じなんだよね。このギクシヤクしたのを何とかしたくてこうして会う機会を作ってるんだけど中々上手くいかないんだよなあ…。まあこればかりは時間を掛けないと何とも出来ないからね。諦めずに根気よくいこう。

「およう？セイバーさん、このバターはなんデスカ？」

「これですか？これは肉じゃがの煮崩れ対策のモノです。一緒に煮込むとバターに含まれるペクチンと言う成分が煮崩れを防止してくれるのです」

「でも、味が濃くなったりしないデスカ？」

「醤油とお酒の量を調整すれば問題ありません。むしろじゃがバターのような風味になって食べやすくなりますよ」

「ほく、セイバーさんは物知りデース！」

切ちゃんとセイバーさんが楽しそうにそんな会話をしている。フロンティアの戦いの後、死刑判決を受けていた私達を助けてくれた日本政府や二課(現S・O・N・G.)の人達のお掛けでF・I・S.に

いた頃には考えられないほど充実した毎日を送れている。正直感謝してもしきれないほどだ。そしてそれはセイバーさんに対してもだ。こうして私達を気遣ってお料理をしに来てくれていている事も凄く感謝している。

でも、私はそれを口に出来ないでいる。

フロンティアの事を含めて色々な面で迷惑をかけた後ろめたさが邪魔をして素直な気持ちを伝えられない。特に響さんに関しては『偽善者』と言ったことを謝りたい。後から響さんの身の上を色々知って私は自分が恥ずかしくなったと同時にセイバーさんに言われた事が心の中でこだまする。

上っ面だけで人を判断してそれを偽善者と罵る私こそ偽善者以前の邪悪、全くその通りだ。今からでもあの時に戻って自分自身を殴り飛ばしてやりたいと思うほどだ。

セイバーさんと会話する時、そんな幼稚な羞恥心の所為でどうしても壁が出来てしまう。どうにかできないモノかと悶える一方だ。

「べ？聞——ま—か、シラベ？」

「へ…？」

ふとセイバーさんが私を呼んでいた。一瞬だけ反応が遅れてしまふ私。

「もう牛肉の色が変わっているので野菜を投入してください」

セイバーさんに言われ持っていた鍋を見してみる。全体の色が黒く変わった牛肉がそこにはあった。私は少し慌てて切ちゃんが切ってくれた野菜の入ったボールを取り、鍋の中に入れる。

「どうかしましたか？」

「あ…えっと、すみません…」

理由を言える筈もなく謝ってしまう。同時に自己嫌悪が私を襲う。するとセイバーさんが私の後ろに回り、右手を鍋を持っている私の右手に重ねた。客観的に見て後ろから抱き締められている様な体勢になっている。

「始めの内は皆戸惑うものです。無理ありません」

きつとセイバーさんは私が始めて作る肉じやがに戸惑ったのだと

思われたんだろう。『違う』と言えれば良かったがその言葉が喉から出てこない。

「少しずつ、自分のペースで良いのです。一步一步確実に踏み出せていれば何時かは向かうべき場所に辿り着けるのですから」

セイバーさんの言葉が心に刺さる。きつと本質は違うのだろうか。

自分のペースで確実に…。

そうすれば何時かは行けるのかな？私が向かうべき場所に。

なら…

「あの…、セイバーさん」

「何ですかシラベ？」

「その…、もし…もし良かったら何ですけど、今後も私が知らない料理をしに来てくれる時に色々教えてもらえませんか？」

最初の一步。ほんの少し…例え半歩でもいいから進みたい私の気持ちから出た、小さな一步だ。

少しうつ向きながらも横目でセイバーさんの顔を見る。目が少し見開かれ驚いてる様に見える。だけど直ぐに優しく微笑む。

「ええ、シラベが良ければ是非」

その一言を聞き、私の少しだけ心が穏やかになる。この一步はきつとちゃんと前に進んでるモノだと分かったからだ。

「であればシラベは私の弟子二号になりますね」

「二号？」

「ええ、一号はクリスマスですので」

「そうなんだ…」

クリスマス先輩も料理をするんだ…。なら話が合うかもしれない。

そんなことを考えていると…

「とーうー！」

ドンッ

不意に切ちゃんやんがセイバーさんの背中に飛び付いた。少しだけビックリする。

「キリカ？」

「えへへへ、何やらセイバーさんが調に抱き付いてるのでアタシはセイバーさんに抱きついたのデース！」

「調理中の鍋を持った相手に後ろから抱き付くのはどうかと思いますよ？」

「ごめんなさいデース！」

悪びれの無い切ちゃんの謝罪に「やれやれ」と呆れながらも微笑むセイバーさん。

何時か私も切ちゃんみたいになれると良いな。

そう思いつつ今はこの一歩を大切にしようと思つた。

その日始めて作った肉じゃがは、思っていた味とはぜんぜん違っていたけどとても美味しく出来た。

平穩の崩落と戦いの狼煙

シャトル救出から数ヶ月後、セイバーは英国首都ロンドンにいた。国連の画策によりアイドルを続ける事となったマリアと翼のコラボライブの為である。すでにステージでは二人の歌姫が水面を滑り抜けながら美しい歌声を響かせている。夕日とタワーブリッジを背景に踊る姿はこの世のモノとは思えない幻想的なシルエツトである。瞬く間にライブは終わり、溢れんばかりの歓声がライブ会場を轟かせる。ステージから戻ったマリアを出迎えたのは黒いスーツ姿の男達であった。

「任務ご苦労様です」

「アイドルの監視ほどではないわ」

「監視ではなく護衛です。世界を守った英雄を狙う輩も少なくないのです」

マリアの皮肉にそう答えるエージェント。

「ほお、貴殿方の言う護衛とはずいぶんと高邁こうまいなモノですね」

すると後ろから声がかけられる。奥へと続く通路から『カツカツカツ』と上等な革靴を鳴らしながら近付いてくる人物がそこにいた。

「エージェント筆竜ひがみ…」

その人物とはセイバーの事である。セイバーはエージェントの前に立つと握り拳の右手をエージェントに突き出しゆっくりと開く。ポトポトと何かが落ちる。黒い長方形をした小型の機械の様であった。

「マリアに宛がわれた控え室にありました。既にそちらが安全確認クリアリングをしたと報告を受けてましたが念のため私の方で改めて調べてみたところ、このような物を複数発見しました。貴殿方が言う護衛とはこの様な杜撰ずさんな管理の事を指すのですか？」

「それは我々国連に対する不信を言っているのですか？」

「分からないのであればご想像にお任せします」

セイバーはエージェント達を無視しマリアに振り向く。

「お疲れ様です、マリア」

「ええありがとうございますセイバー。今日のステージの演出、中々に良かったわよ」

「いえ私は特になにも。元々お美しいツバサとマリアのお二人に花を添えた程度です」

「謙虚なのは良いけど、過ぎるのはどうかと思うわよ？自分の仕事にはプライドを持ちなさい」

「それはもちろんです。私はマリアを美しく魅せることに誇りを持っていきますから」

「そう。ならそう言うことにしておくわ」

先程とは違ってかわって穏やかに話すセイバーとマリア。一通りの会話が終わると国連のエージェントと共に移動を開始する。

移動途中、ステージ衣装を着たマネキンの保管庫を通り抜けるセイバー達。不意にセイバーの「直感」スキルが何かを捉える。

（何？敵意…にしては何か違和感がある…。まるで何か…空っぽ…って言うか、生気が感じられない…）

曖昧で不確かな感覚に教われるセイバーは周囲の警戒を強める。そこにそよ風が舞い込む。

「風…誰かいるの？」

「司法取引と情報操作によって仕立て上げられたフロンティア事変の汚れた英雄、マリア・カデンツァヴァナ・イヴ…」

「何者だ！」

マリアと共に国連のエージェントもまた周囲を警戒する。するとセイバーの「直感」スキルが再び警告を発する。

「っ?!上か!」

セイバーが「直感」スキルの指し示す方角を見る。瞬間、マネキン達の中に紛れていたグリーン系のフラメンコドレスの様な服装をした女性が国連エージェントの一人を拘束、強引に口付けする。すると国連エージェントの体と髪が徐々に白く変色し、最後には糸の切れた操り人形のように力無く崩れ落ちる。

敵性分子と認識したもう一人の国連エージェントは懐から拳銃を

取り出し迷い無くマネキンに発砲。女性はフラメンコスカートを翻すと突風が巻き起こる。エージェントとが放った銃弾は風に弾かれエージェントに向かって返ってくる。だが…

ガキユ！ガキユ！ガキユ！

それをセイバーが呼び出した「約束された勝利の剣」で防ぐ。女性がステップを踏むと同時にセイバーを見る。セイバーもまた「約束された勝利の剣」を構え直しつつ女性を見る。

「なるほど。マスターが重要警戒人物として名を上げるわけですね」
女性がセイバーに向け薄ら笑いをする。セイバーはその表情にどこか違和感を覚えつつ後ろにいるエージェントに声をかける。

「怪我はありませんね？」

「あ、ああ…」

「マリアを連れて退避しなさい」

「しかし…」

「今この場で貴方にいられても足手まといです。自分の仕事を全うしなさい！」

エージェントは顔をしかめつつもマリアを先導して退避する。

「貴様は何者だ？」

「自動人形」

「何が目的だ？」

「歌姫の旋律を聞き届けに」

すると女性の周囲から竜巻が発生する。何かの攻撃かと思いき身構えるセイバー。だが次の瞬間、その場に女性の姿は無くなる。それと同時にセイバーの「直感」スキルがある方角を示す。

「っ!?マリア!」

セイバーがエージェントと共に退避しているマリアに向け叫ぶ。

瞬間、マリアの前方から突風が起こりその足を止めてしまう。

「ぐっ!?!」

不意に両腕を顔の前に出し視界不良になるマリア。その前方には先程の女性が竜巻と共に再び現れ剣の様な武器を構え、そのままマリアに突っ込む。セイバーは「魔力放出」を用いてマリアの元まで走る

が、女性の突きの方が圧倒的に速い。マリアも顔の前に出していた腕を退け、マネキンが接近していることに気付くが回避は間に合わない。

そしてその剣がマリアに突き刺さるかに思えた瞬間…

ドンッ！

マリアの隣にいた国連エージェントがマリアを押し退ける。そして…

ザシユ！

女性の剣がエージェントの心臓を貫く。

「ふうん…」

女性はどこかつまらなげな顔を見るとエージェントの腹に蹴りを入れ、強引に剣を胴体から引き離す。蹴りを入れられたエージェントとはとても人間の力とは思えない程の威力で後ろに飛ぶ。セイバーは飛んできたエージェントを全身を使って受け止める。

「しっかりとさない！ここで死ぬるほど安い命ではないでしょう！」

「あつ……がつ……がつ……」

セイバーが受け止めたエージェントにそう激励するが、エージェントとは一言も返すこと無くセイバーの腕の中で事切れた。その事実
にセイバーは唇を噛みしめた後、エージェントをその場に寝かせ瞳孔が開いた瞳の目蓋をゆつくりと閉じた。

「セイバー！」

そこにギア天羽々斬を纏った翼が現れる。

「待ち焦がれましたわ」

「あれは…？」

「自動人形オートスコアラー」と名乗りました。敵だと思われず。既に国連側のエージェントが彼女に」

「貴女の歌を聞きに来ましたのよ」

女性が剣を構えセイバーと翼に突っ込んでくる。セイバーと翼はお互いの得物を使い迎撃に入る。剣と剣が激しくぶつかり合い火花が飛ぶ。女性は右手に剣を持ち左手でスカートを上げ、まるでフラメンコを踊るように戦う。見る人が見ればまるで美しく舞っているよ

うな様である。

さりとて優勢に立っていたのはセイバーと翼であった。数的優勢もあるが二人の息の合った連結によって確実に女性を追い込んだ。た。

だが女性には何故か余裕のある表情が浮かぶ。その表情に触発されてか、翼が大技を繰り出すため一旦後ろに下がる。セイバーもそのいとを理解し「約束された勝利の剣」を霞の構えに持ち変えると同時に詠唱を唱える。

「風よ、荒れ狂え！」「風王鉄槌」!!」

「約束された勝利の剣」に纏われていた風を女性に向け一気に解放する。先程のマリアと同じように風によって身動きが取れなくなる女性。それと同時に後ろに下がっていた翼が二本の刀を取り出しこれらの柄頭を繋ぎ合わせ双刃刀の状態にし、それを回転させる。やがて刀から炎が上がり始め、それと同時に翼は足に付いているギアでホバー移動しながら速力をかける。

「風鳴る刃…和を結び…寡欲を持って斬り荒ぶ…」

回転する双刃刀の炎は蒼く染まり更に威力を増す。

それと同時にセイバーも「風王鉄槌」によって発生した突風に体を乗せ、「魔力放出」で更に加速をかける事で女性に急接近する。

「月よ煌めけ!!」

【風輪火斬・月煌】

翼とセイバーが女性をすれ違い様に斬る。女性は衝撃でライブ用の資材が入ったボックスに勢いよく突っ込む。

「二人ともやりすぎだ！人を相手に…!」

マリアが余りにも過剰な攻撃をするセイバーと翼にそう言う。だが…

「やり過ぎなものか…!」

「ええ、剣を交えて良く分かりました…」

二人は振り返り再び得物を構える。何故なら…

「アレはどうしようもなく…」

「二化物だ（です）!!」

ドゴオオオン！

まだ敵が健在だからだ。

「聞いてたよりずっとシヨボい歌ね。確かにこんなおじや、やられて上げる訳にはいきませんわ」

女性はボックスを風で吹き飛ばし再び姿を表す。先程の翼達の攻撃などまるで効果無いと言いたげに無傷で立っていた。

その姿を確認した直後、セイバーが動く。

「はあああ!!」

霞の構えから繰り出される「約束された勝利の剣」の突き。女性もまた自らの剣を構え、突きを繰り出す。剣の切っ先同士がぶつかり、その場で両者が制止する。

「ツバサ！」

セイバーが翼に叫ぶ。翼はセイバーの目を見てその意図を理解し、手にしていた刀を投げる。回転しながら宙を舞う刀は女性の頭上まで到達すると同時に巨大化する。

「っ!？」

女性が動揺した瞬間、セイバーは「魔力放出」で瞬時に後退。女性は剣で巨大化した刀を防ごうとするも重量に耐えきれなくなった床が抜け、そのまま下に落下する。

「やった！」

「この程度では下に叩き落とすに過ぎない！」

「足止めにしてもほんの僅か程度のものでしよう……」

ふとセイバーは手にしている「約束された勝利の剣」を見る。

（それにしてもさつきあの人の剣を止めた時、何か嫌な感じがした…。気のせいかもしれないけど、アレ以上あの剣を「約束された勝利の剣」で受け止めちゃ駄目な気がする…）

そこまで考えてセイバーは頭を降った。

（いや、今はそんな事よりもこれからどうするかだ！あの女の人はまた直ぐ襲ってくる。だけどここじゃ人的被害が出るかもしれない。出来るだけ離れないと！そしてあの人の目的は恐らく…）

セイバーは思考を一旦止めマリアを見る。

「マリア！ツバサを！」

「っ！分かったわ！」

ほとんど説明も無い会話であるにも関わらず、マリアはセイバーの考えを理解し翼の腕を引き走り始める。それを見送ったセイバーは懐から通信機を取り出す。

「本部応答願います。こちらセイバー。現在——」

S. O. N. G. 本部に現状を報告するセイバー。それが終わると同時にマリア達の後を追って走り始める。

やがてエントランスから外に出た所で緒川と鉢合わせる。

「セイバーさん！」

「シンジ！マリア達は!？」

「先ほど車を使い会場から離れました！しかし、この状況は一体!？」

「私も正確に把握しているわけではありませんが、ともかく敵襲と言う事は間違いありません！私はマリア達を追います！シンジはライブ会場
こちらの対処をお願いします！」

「分かりました！翼さん達の事をよろしくお願いします！」

そう言い残し緒川はライブ会場へと戻っていく。セイバーもまたライブ会場近辺にある関係者用駐車場に向かい走り。そこに置いていた自身の愛車に跨がる。イグニッションキーを回し甲高いエンジン音が轟ろくのを感じつつ、セイバーは魔力を送り込みバイクを「疾走する白銀の装甲騎兵」に変化させる。変化と同時にアクセルを全開にし、軽いウイリーと共に走り始める。

瞬く間に時速約400km/hに到達する暴れ馬を無理やり操り、マリア達との合流を目指すセイバー。やがて海上のライブ会場と町を繋ぐ橋の上で信じられないモノを目撃する。

「あれは…ノイズ!？」

そこにはフロンティアの戦いで消滅した筈のノイズ達の姿が。そしてセイバーはその向こう側にも目をやる。

「っ!？」

一糸纏わぬ姿で倒れ込む翼とそれを抱きかかえるマリアの姿が見える。セイバーは迷い無くグリップに備え付けられたニトロブース

トの起動ボタンを押し更に加速する。

プシュー、バボンッ!

爆発的な加速を続け前に進み続けるセイバーの「疾走する白銀の装甲騎兵」。その進行を止めようとライブ会場にて襲撃をした女性が立ちほだかる。

「まるで闘牛の様な突撃ですこと」

女性は手にした剣を構えセイバーを向かい打つ。セイバーは臆すること無く猪突猛進の如く進むのみ。瞬きの間に二人の距離は縮み、目前まで迫ると同時に女性が突きを繰り出す。それに対しセイバーは……

「フンッ!!」

「疾走する白銀の装甲騎兵」を力の限り持ち上げた。持ち上がった「疾走する白銀の装甲騎兵」はその場で宙返りし、後輪が女性の剣を天高らかに弾き飛ばす。

「なっ!?!」

予想外の行動に驚きを隠せない女性。宙返りを終え、着地した「疾走する白銀の装甲騎兵」は再び前進する。女性は体を翻しそれを回避する。そのままセイバーはノイズの隙間を縫い翼達の前で停車する。

「マリア! ツバサは無事ですか!?!」

「大丈夫、怪我は無い。たけどギアが……!」

セイバーは翼の胸元を見る。シンフォギアのネックレスが破損しているのが確認できた。セイバーはスーツの上着を翼に投げ渡しつつ、「疾走する白銀の装甲騎兵」から降り第二霊基になる。

「貴様等! これだけの所業、無傷で帰れるなどとは思わないことだ!」怒りの表情のまま「約束された勝利の剣」を構えるセイバー。

「生憎と既にこちらの目的は達せられています。マスターからの帰還命令も出ておりますゆえ」

するとノイズの足元から何かの陣の様なものが見れそこに落ちて行くように消えていく。女性もまた手元に液体状の何かが入ったカプセルを取り出しそれを足元に投げ捨てる。

「っ！待て!!」

「それではまたお会いする日までごきげんよう」

セイバーの制止を無視し女性はスカートを上げ優雅にお辞儀をする。そして足元に陣の様なものが見れ女性の姿が消える。

「くっ！」

残されたセイバーはぶつけ所の無い悔しさに苛まれた。

それから数時間後。

「完全敗北…いえ、状況はもつと悪いかもしれませんが」

翼が通信機を使って本部の弦十郎に現状の報告をしていた。ちなみに今の翼の服装はマリアのステージ衣装の飾りを使って最低限の部分隠しその上にセイバーのスーツの上着を肩にかけている状態である。

「ギアの解除に伴って身に着けていた衣服が元に戻っていないのは、コンバーターの損壊による機能不全であるとみて間違いないでしょう」

「まさか、翼のシンフォギアは…？」

「絶刀・天羽々斬」が手折られたと言う事だ…」

さらに通信では日本にいるクリスの「イチイバル」も破壊された事も確認されている。シンフォギア装者が揃って二人も戦闘不能となれば完全敗北以上と言えた。

すると通信途中の翼達の前に複数の車が止まる。中から出てきたスーツの男達は拳銃を取り出し、全員がマリアに銃口を合わせる。

「状況報告は聞いている。だがマリア・カデンツァヴァ・イヴ、君の行動制限は解除されていない」

保護プログラムによって指定された制約を大きく逸脱する行動に対するマリアの捕獲が目的であった。だがマリアは特に慌てる様子もなく翼から通信機を借り受ける。

「風鳴司令、S.O.N.G.への転属を希望します」

「マリア…」

「ギアを持たない私ですが、この状況に偶像アイドルのままではいられません」

マリアは再び戦いに身を投じる覚悟を示す。
そしてセイバーまた感じていた。新たなる戦いの幕開けを。

逡巡（しゅんじゅん）の拳

「シンフォギア装者勢ぞろい…とは、言い難いのかもかもしれないな…」
私を含めた響ちゃん達シンフォギア装者を前に弦十郎さんが苦い声でそう言う。

英国から日本に帰国した私達は響ちゃん達と合流して、今はS・O・N・Gの潜水艦の中にいる。モニターに映るのは英国での戦闘で破損した翼さんのギア天羽々斬と日本での戦闘で同じく破損したクリスちゃんのギアイチャイバルだ。

「コアとなる聖遺物の欠片は無事なのですが…」
「エネルギーをプロテクターとして固着させる機能が、損なわれている状態です…」

「セレナのギアアガートラムと同じ…」

マリアさんがポケットから半分ほど欠けたシンフォギアのペンダントを取り出す。アレが報告に合ったマリアさんの妹さんのギアか。
「もちろん治るんだよね？」

「櫻井理論が開示された事で各国の異端技術は飛躍的に振興してるわ」

「それでも了子さんでなければ、シンフォギアシステムの修復は望めな…」

その言葉に皆が影を落とす。こっちの戦力が半分も使用不可になったんだから無理もないけど…。

「現状、動けるこちらの戦闘は響君とセイバーの二人のみ…」

まあそうなるよね。何故かって…

「そんな事ないデスよ！」

「私達はだって！」

「駄目だ」

「どうしてデスカ!？」

「[LINKER]で適合値の不足値を補わないシンフォギアの運用がどれほど体の負担になっているのか…」

「君たちに合わせて調整した[LINKER]が無い以上、無理を強い

ることは出来ないよ…」

そう、調ちやんと切歌ちゃんの二人はギアを持っているけどその使用には適合値を底上げしてくれる「LiNKER」が必要不可欠で、現状それが無い状況。S・O・N・G・内でも「LiNKER」の開発・研究が進んでるけどあんまり芳かんばしくないってのが今だ。

「何処までも私達は、役に立たないお子様なのね…」

「メデイカルチェックの結果が思った以上に良くないのは知っているデスよ…。それでも…!」

切歌ちゃん達が悔しそうにそう呟く。

「キリカ、シラベ」

その表情に耐えられず私は二人の前に立って、肩に手を置く。

「二人の気持ちは察します。ですが今は耐えてください。S・O・N・G・でも「LiNKER」の研究は行われています。近い内に完成するはずですよ。むしろ二人が無理をしてもしもの事態に陥ってしまう方がとてもつらい」

「セイバーの言う通りだ。こんなことで仲間を失うのは二度と御免だからな」

私の言葉に翼さんが同調してくれる。それでも二人はどこか納得のいかない顔だった。

その後、本部の一室に移動した私達。理由は日本で保護されたある人物と話をするためだ。

「僕はキャロルに命じられるまま、巨大装置の建造に携わっていました」

彼女の名前は「エルフナイン」。翼さんやクリスちゃんが戦ったオートスコアラマスターの主で響ちゃんが出会った今回の事件の首謀者「キャロル・マールス・デインハイム」の協力者らしい。

「ある時、アクセスしたデータベースよりこの装置が世界をバラバラに解剖するものだと知ってしまい、目論見を阻止する為に逃げ出してきたのです」

「世界をバラバラにたあ穏やかじゃないな…」

「それを可能とするのが錬金術です。ノイズのレシピを元に作られた「アルカノイズ」を見れば分かる様にシンフォギアを始めとする万物を分解する力は既にあり、その力を世界規模に拡大するのが建造途中の巨大装置、「チフオージユ・シャトー」になります」

「チフオージユ・シャトー」…。私の生前の Fate 知識が正確ならたしか／Zeroの時のキャスター、青髭こと「シル・ド・レエ」がジャンヌが処刑された後に錬金術の研究って建前で男の子を拉致さらつて大量虐殺したって所だよね？

「チフオージユ・シャトー装 置の建造に携わっていたと言う事は、君もまた錬金術師なのか？」

「はい。ですがキャロルの様に全ての知識や能力を統括しているので無く、限定した目的の為に作らされたに過ぎません…」

「作られた？」

響ちゃんがそう疑問を投げる。

『何だか機械みたいな言い方だな…』と私も思う。

「チフオージユ・シャトー装 置の建造に必要な最低限の錬金知識をインストールされただけなのです」

「インストールと言ったわね？」

「必要な情報を知識として脳に転送・複写する事です」

なるほど確かにインストールって言い方が正しい。錬金術って言うのはPCで言う所のコピペパソコンみたいなのを記憶とかでも出来るのか…。

「残念ながら僕にインストールされた知識に計画の詳細はありません…。ですが世界解剖の装置、「チフオージユ・シャトー」が完成間近だという事は分かります！お願いです！力を貸してください！そのために僕は、「ドヴェルグ・ダイン」の遺産を持ってここまで来たのです！」

「ドヴェル・グダイン」の遺産？」

するとエルフラインちゃんは膝の上に置いていた古めかしい箱の中から何かの破片みたいな物を取り出した。

「アルカ・ノイズ」に…錬金術師キャロルの力に対抗しうる聖遺物…。

魔剣「ダインスレイフ」の欠片です…！」

「ダインスレイフ」の欠片を片手にそう言い放つエルフナインちゃん。この聖遺物がこの戦いの勝敗を分ける物だと感じた。

それと同時に、「ダインスレイフ」を見た私は言い知れぬ悪寒を感じた。それが「直感」スキルによるモノなのか、それとも私の危機感知によるモノなのかは分からないが、何か不吉な事が起こる…そんな予感が頭に過った。

私はそれをただの杞憂だと流した。

話を終えた後、念のためエルフナインちゃんの体をメデイカルチェック身体検査したところ…

「念のために彼女の…、ええ彼女のメデイカルチェック身体検査を行った所…」

「身体機能や健康面に異常はなく、また、インプラントや高催眠と言った、怪しい所は見られなかったのですが…」

「ですが？」

藤 莞 さん・友 里 さん
オペレーターの二人の顔が歪む。なんて言うか説明に困るって顔だね。

「彼女…、エルフナインちゃんに性別はなく、本人曰く『自分はただのホームクルスであり、決して怪しくは無い』と…」

と説明してくれた。それを聴いた私と響ちゃん達は…

「…」「あ、怪し過ぎる（テース）…」「…」

そう声が揃った。

いやそもそもただのホームクルスって何だよって話だよ…。

一通りの報告が終わったので響ちゃん達はとりあえず帰宅させる事になった。状況が状況だけど、翼さんとマリアさんを覗いたメンバーはまだ学生だ。明日も学校がある。一度しかない青春を戦いながら潰されるなんて許さないからね。特に弦十郎さんはその事を重々思ってる筈だ。

「ゲンジユウロウ」

響ちゃん達が帰った後、私は弦十郎さん呼び止めた。

「ん？どうしたセイバー？」

「実は一つ、検討していただきたい事がありました」

その後、私と弦十郎さんの話は夜が更けるまで続いた。

そして翌日。

ビー！ビー！ビー！

けたたましいアラート音が本部内に響き渡る。昨日から本部に泊まり込みだった私は急ぎ司令室に向かう。

「アルカノイズ」の出現を検知！座標絞り込みます！」

「エルフナインちゃんからの情報で、捕捉精度が格段に上がっている！」

前面のモニターに映像が写る。

下校中の響ちゃん達がアルカノイズに囲まれていた。

やっぱりか…。昨日の時点で予想してたけど首謀者のキャロルつて子の狙いはシンフォギアだ。恐らくこっちの戦力を削って自分達の計画を円滑に進める為に差し向けたんだろう。今響ちゃんのギアガングニールが破壊されたらS・O・N・Gの戦力は事実上私だけ。何とかしないと！

「急ぎ装者たちに対応w…あっ!?!」

「調ちゃんとか切歌ちゃんのコンディションで戦闘行為は無謀です！使用可能なギアが無い以上、翼さん、クリスちゃん、マリアさんだっ出させません！」

「まともにギアを運用できるのは、響君ただ一人…！」

未だにS・O・N・G内で「LINKER」が無い上、切歌ちゃん達は昨日のメイカルチェックの結果から検査入院している状態
で出撃せず、翼さん達はギアが無い。そして響ちゃんは…

『聖詠が…胸に浮かばない…。ガングニールが応えてくれないんだ…！』

「歌わないのではなく…」

「歌えないの…？」

ガングニール
ギアを纏うことが出来なくなっていた。

「セイバー！昨日の件は!?!」

「既に手配済みです！」

「よし！緒川！」

「心得ています！セイバーさんも！」

「向かいます！」

私と緒川さんは現場に向かう為、司令室の扉に走る。

プシュー

「っ！一体何が!?!」

扉が開いた瞬間マリアさんと鉢合わせる。

危うくぶつかる所だった。

「響さんの援護に向かいます！」

「マリアは司令室ここに！」

「いえ、私も行くわ！」

そう言って私達を後ろを追いかけるマリアさん。ギアが無いとはいえマリアさんも訓練を受けてる人間だ。今は人手が欲しいし付いて来ても問題ないだろう。実際、緒川さんも何も言わないしこのまま一緒に来てもらう。

大丈夫、間に合う。その為に昨日弦十郎さんと対策を練ったんだ。彼なら私達が来るまで響ちゃん達をきつと守ってくれる。

「何で…聖詠が浮かばないんだ…」

ギアのペンダントを握り締めながら響が項垂れる。人助けの力を誰かの傷つけるために使いたくない、だがそれは傲慢だと言われ迷い、響は決断を鈍らせた。だからだろうかギングニールが答ええなくなっただのは…。

(ギアを纏って無いコイツと戦ったところで意味は無い…。ここは響試しに仲良しこよしを粉と挽いてみせるべきか?)

だがそんな事を悠長と考えてる時間が無いのも事実であった。響達を襲ったオートスコアラ「ガリイ」はマスターであるキャロルの命の元、響の持つギングニールを纏った状態で破壊する策として響の友人達にアルカノイズをけしかけようと指示を出す…その刹那、

「ワンッ！」

緊迫したこの状況に不釣り合いな鳴き声が響く。

「ああ？」

自身の後ろから聞こえたその鳴き声を確認するため後ろに首を回すガリイ。響達もまたその声の主に目を向ける。

ガリイと響達の目線の先に手入れの行き渡った白くモフモフとした毛を持った中型犬がそこにはいた。

「わんこお〜？」

疑問に思うガリイ。だがその表情は直ぐに愠笑びんしょうへと変わる。

(哀れなわんこが目の前で砂になれば少しは歌う気になるか?)

その思考は残虐そのものであった。

ガリイは一体のアルカノイズに指示を出し、中型犬の元へと向かわせる。

「っ?!ダメだ!ワンちゃん逃げて!」

響が犬に向け叫ぶ。だが中型犬はアルカノイズに向け吠え、威嚇をしている。向かおうにも自分達はアルカノイズに囲まれている状態であるため助けに行けない。響は再び聖詠を唱えようとする。だがやはり出ない。

やがてアルカノイズは中型犬の前に立つ。中型犬は威嚇を続けている。アルカノイズは右腕を上げ、丸め込んだ攻撃部位を展開する。そしてそれを振り下ろし攻撃部位の分解機能を持って中型犬を灰にする。

その場にいる誰もがそう考えた。

だが:

サシユツ!

「なっ!?!」

「えっ!?!」

ガリイと響が驚きの声を上げる。無理もないだろう何故なら:

目の前の中型犬がアルカノイズの頭部を食い千切り撃退して見せたのだから。

アルカノイズを撃退した中型犬はそのままガリイに向かって走る。

「ちい！」

ガリイは即座に響達を包囲していたアルカノイズの一部を中型犬の迎撃に回す。攻撃部位を振り回し中型犬に攻撃するアルカノイズ。だがその攻撃は全て躲かわされ懐に入り込まれた瞬間、鋭利な牙と爪でその身を消滅させられてる。

「何なんだこのわんこは?！」

目の前で起こっている出来事に困惑するガリイ。その隙が更なる失態を招く。

「今の内にー！」

「ほら、早く行くよー！」

響の友人の一人「安藤創世」が未来の手を引き、包囲の穴を突きそのまま走り出す。それに続き響達も走る。

「つーたく、ドイツもコイツも空気読めないったらありやしない！」

ガリイは手元から小石程度の大きさの結晶を取り出し、それを地面に投げる。地面に落ちた結晶は砕け、そこから陣が形成されアルカノイズの増援が現れる。ガリイは新たに呼んだアルカノイズ達を使い響達を追撃させる。

オレンジ色の人型アルカノイズが攻撃部位を展開し、地面を削りながら響達を追う。伸ばされた腕を振るい、街灯やベンチなどを破壊しながら響達との距離を詰めてくる。

「アニメじゃないんだからー！」

響の友人の一人「板場弓美」がそう文句を飛ばしつつ走り続ける。すると一体のアルカノイズの振るった腕が響の足を掠める。

「うわっ!？」

幸い靴底が分解されただけで響自身に負傷は無い。だが突然の衝撃でバランスを崩しその場で前転、背中を地面に滑らせながら転んでしまう。その時、手にしていたシンフオギアガンゲニールのペンダントを空に放つてしまう。

「ギアが!！」

空中で円を描く様に飛んでいくペンダント。そこに黒塗りの車が歩道をスピンしながら現れた。本部から駆けつけた緒川とマリアで

ある。その後ろには「疾走する白銀の装甲騎兵」に跨がったセイバーの姿もあつた。

車が静止すると助手席から勢いよく飛び出すマリア。

「おおおおおー！」

叫びと共に大きく跳躍し、宙を舞っていたペンダントをキャッチするマリア。それと同時に：

「Granzizel bilfen gungnir zizz
l」

聖詠を唱えた。

かつて「フロンティア事変」にて自身が纏っていた漆黒のガングニールを纏うマリア。着地と同時に両腕のガントレットを連結し槍を出現させる。槍を手にしそれをアルカノイズに向けると先端からエネルギー弾が発射される。

【HORIZON†SPEAR】

エネルギー弾は地面に着弾と同時に爆発、爆風がアルカノイズを撃退していく。

(戦える！この力さえあれば！)

「黒いガングニール…」

ガングニールを纏い戦意が向上するマリア。そこに第二霊基になったセイバーが隣に立つ。

「マリア！」

「セイバー！」

「合ませます！前衛はお願いします！」

「ええ！背中は任せるわ！」

『セイバー、マリア君！発光する攻撃部位こそが解剖器官！気を付けて立ち回れ！』

短いやり取りを終え、弦十郎の通信を聴きながらアルカノイズに突っ込んでいくマリア。彼女は今前しか見ておらず、目の前のアルカノイズを手にした槍で貫き通すのみである。もちろんアルカノイズも抵抗をする。マリアのから空きとなった背中に攻撃部位を伸ばすが、それはセイバーの「約束された勝利の剣」によって阻まれる。マリ

アがアルカノイズを倒し、マリアの身をセイバーが守る。そしてセイバーがアルカノイズを倒す時、マリアがセイバーの身を守る。二人の強い信頼関係があつてこそこの連携は成り立つのだ。

「想定外に次ぐ想定外…。捨てて置いたポンコツが意外なくらいにやってくれる」

ガリイがそう呟く。

「私のガングニールで…、マリアさんが戦っている…」

響もまた呟く。だがその囁きはマリア達の戦闘音でかき消され誰の耳にも届かない。

やがてアルカノイズは全滅し、残るはオートスコアラのガリイのみ。セイバーは響達の安全を確保する為、一度戦線を抜ける。逆にマリアは大きく跳躍すると、落下の速力を得つつ槍をガリイに突き出す。

ガキユイン！

「なっ!?!」

だがそれはガリイの錬金術である氷の障壁によつて防がれる。

「それでも!」

マリアは槍の外装を切り離しをする。切り離された外装は左右に割れ、両手で氷の障壁を作っていたガリイの胴体はむき出しの状態となる。マリアはそのまま一回り小振りとなった槍を再びガリイの胴体に突き出す。

だが…

ガキユイン！

それは胴体に突き刺さる直前に氷の障壁によつて防がれた。ガリイは邪悪な笑みを浮かべる。

「頭でも冷やせやあ!」

氷の障壁が大きく広がると同時に圧縮された水が障壁から吹き出す。水に体を押し出され吹き飛ぶマリア。空中で体勢を整えなんとか着地する。

「マリア!」

そこに響達を退避させ、緒川に預けきたセイバーがマリアに駆け寄

る。

「マリア、まだ行けますか？」

「問題ない！…とやりたい所だけどそろそろ限界かしらね…」

マリアの纏うガングニールは所々スパークが出ていた。適合係数不足による負荷バックファイヤが現れている証拠である。

「決めた。ガリイの相手はアンタよ」

マリアに対して不適な笑みを浮かべつつ深くお辞儀をするガリイ。
「いったただきまあす！」

するとガリイは錬金術で地面を凍らせつつ、鋭角に蛇行しながら高速で迫る。右腕を氷で覆い鋭利な手刀を作ったガリイはマリアの纏うガングニールのペンダントを狙う。

ガキーン！

だがその間にセイバーが割り込み。ガリイの手刀を「約束された勝利の剣」で弾く。

「ちよつと邪魔しないで貰えますう？」

「マリアに手出しはさせません！」

そのまま「約束された勝利の剣」をガリイに振るうセイバー。ガリイはバックステップでそれをかわし再び突撃の体勢を取り、セイバーもまた「約束された勝利の剣」を構え直す。

だが…

バリーーン！

「カハッ！」

「っ！マリア!？」

とうとう負荷に耐えきれなくなり、砕け散るガングニール。マリアは目と口から血を流し四つん這いに倒れる。セイバーはマリアの背中に手を当て寄り添う。

「それでもこの程度…？なによこれえ、まともに歌える奴が一人もないなんて！聞いてないんだけどお？」

ガリイは心底つまらなさそうに言う、転移用の結晶を取りだし足元に投げる。

「ちっ！クツソ面白くない！」

ガリイの足元に陣が形成されそのまま姿を消す。

静まり返るその場。セイバーは戦闘の終わりを確認し「約束された勝利の剣」を「騎士王の宝財」にしまい、第二霊基からスーツ姿に戻る。

「マリア、立てますか？」

「なんとか…。手を借りていい？」

マリアはセイバーの手を借りながら立ち上がり、徐に手に握っていたギアのペンダントを見る。

（もし私が…、ガングニールを手放していなければ…。いや、それは未練だな…）

マリアはそのまままふらつきながらも緒川に保護された響達の元へと歩く。セイバーもまたその後を追おうとするが…

「ワンツ」

後ろから聞こえたその鳴き声に足を止めた。先程までアルカノイズと戦っていた中型犬が尻尾をブンブン振りながらセイバーに近づいていた。

セイバーは腰を落とし中型犬と同じ視線になると…

「よくやりましたね。「従順たる魔猪を狩りし猟犬」

と中型犬の首元を撫でながらそう言った。

「従順たる魔猪を狩りし猟犬」

それはアーサー王が所持していたとされる猟犬。魔猪の王「トゥルフ・トゥルウイス」や「エスキスエルウィン」を狩るために集められた猟犬の一匹であり、その有能さはアーサー王が集めた猟犬の中でも最も気に入り、『誰にも渡したくない』と呟くほど。

セイバーは昨日、オートスコアラアの狙いがシンフォギア装者であることを鑑みて響に護衛を付ける事を弦十郎に提案していた。だがあからさまに護衛を配置すると返って警戒される恐れがあった。そのためセイバーは宝具の一つである「従順たる魔猪を狩りし猟犬」を響達の護衛として置く事で相手の警戒を回避したのだ。

弦十郎はこの提案に多少良い顔はしなかったものの、護衛を付けることには賛同し、今朝から響達の護衛として影でついていた。

響には放課後に本部にて報告する予定ではあったがその前にガリーの襲撃にあつてしまい、仕方なく「従順たる魔猪を狩りし獵犬」は響達を守るためガリーの放ったアルカノイズと交戦。実際に響達を一時的にだが危機的状況から回避させる切っ掛けを作り、セイバー達が到着するまでの時間稼ぎに成功した。

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」はセイバーに撫でられ気持ち良さそうに目を細める。

「私の GANG ニールです!!」

ふとそんな叫び声がセイバーの耳に入る。振り向くと響がマリアから手渡そうとしたギアのペンダントを強引に奪う様にと取つていた。

「これは誰かを助ける為に使う力！私がもらった、私の GANG ニールなんです!!」

そう言い放った後、響はハッと何かに気づきうっむく。響の目の前にいるマリアの表情はどこか寂しさや悲しさを感じるものだった。

「ごめんなさい…」

小さな声で謝罪する響。咄嗟に放った言葉が体をボロボロにしてまで守ってくれた人物に対してのモノでは無い事に気づいたからだ。だがその表情にはどこか思うところがあるようにも感じる。

「そうだ、GANG ニールはお前の力だ！だから、目を背けるな！」

「目を…背けるな…」

マリアはそんな煮え切らない響に渴を入れる。だがその意思とは裏腹に響はマリアから目を逸らす。

それをセイバーは遠くから見つめていた。

「クウー…」

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」が不安気な顔でセイバーを見る。

「大丈夫です。彼女ならきつと自分自身で答えを見つけれられます。私はそう信じています」

セイバーはそう言いつつ「従順たる魔猪を狩りし獵犬」の頭に手を乗せる。一抹の不安を感じつつも響を信じる事を明かしたセイバーの目は真っ直ぐに「従順たる魔猪を狩りし獵犬」に向けられていた。

※ここから先は本編でのシリアス感を台無しにする要素があります。苦手な方は飛ばしてください。

オマケ

CMのアレ

翼「解きはくなくてすくべくてくをく♪」

創世「まさかそんな！ビツキーが歌えない

なんて！」

弓美「じゃあない！あたしが歌うよ！」

志織「私だって歌えます！」

創世「ちよ、私だって！」

弦十郎「いいや、ここは俺に歌わせて

貰おうか!!」

セイバー「いいえ、ここは私に歌わせて

貰いましょうか!!」

三人「ええー！？」

再起そして破砕

ガリイって名前のオートスコアラーの襲撃から翌日。

マリアさん達がナスターシヤ教授の墓参りをしたいと申し出があったので護衛として私も付いて行くことになった。

「ごめんねママ。遅くなっちゃった」

そう言いつつナスターシヤ教授の墓に花束を供えるマリアさん。国連エージェントになってからあっちこっち世界を回っていたので仕方ない。

「ママの大好きな日本の味ですー！」

「私は反対したんだけど…、常識人の切ちゃんはどうしてもって…」

切歌ちゃんがナスターシヤ教授の墓に醤油を供える。

いや本当なんで？

普通お饅頭とか大福とかじゃないのそれ？ だけど切歌ちゃんには何かこだわりがあったらしくて助言した私も押しきられてしまった。

「ママと一緒に帰ってきたフロンティアの一部や月遺跡に関するデータは、各国が調査している最中だった」

「みんなで一緒に研究して、みんなの為に役立てようとしてるですー！」

「ゆつくりだけど、ちよつとづつ世界は変わろうとしてるみたい」

マリアさん達がナスターシヤ教授の墓にそう告げる。

「私も変わりたい…。本当の意味で強くなりたい」

「それはマリアだけじゃないよ…」

「アタシ達だって同じです…」

マリアさんの呟きに調ちゃん達が続けてそう呟く。その言葉は私にも突き刺さる。

強く…。確かに今の私には力がある。でもそれは本来彼女が持っていたモノを私が使っているに過ぎない。

マリアさんが言う本当の意味での強さ、それはきつと心の強さのことだ。私の心は強いんだろうか？

確かに精神的な事を言えば私は大人だ。だけど心の成長がそれに見合っていないんじゃないかと思っっている私もいる。実際それが原因

で幾度か失態を犯しているのも事実だ。私は彼女達の為に剣を握る事を誓った。でも胸を張って守れているとは到底思っていない。

そもそもなぜ彼女の体アルトリアに私の精神が入っているのか、今でも考える。もちろん明確な答えが浮かぶ訳がない。一つだけ分かるとすれば体に私を入れた誰かが確実にいることぐらい。ただ、その誰かが分からない。なんとなく姿は分かるけど名前が思い出せない様なそんな歯がゆい感じが続いている。なぜ私なのか？人として生きてるとはお世辞にも言えなかった私に彼女の体アルトリアを使って何をさせたいのか検討もつかない。出口のない袋小路にいつまでも迷っている。

気づけば雨が降っていた。私は懐から折り畳みの傘を二本取り出し一本を切歌ちゃんと調ちゃんに、もう一本を私とマリアさんとう。使

「昔の様に叱ってくれないのね…。大丈夫よママ、答えは自分で探すわ」

「ここはママが遺してくれた世界デス…」

「答えは全部あるはずだもの…」

三人がナスターシャ教授の墓の前でそう誓い合う。

私も答えを見つけられるだろうか…。

マリアさん達三人とは違い、心の不安を残したまま雨は一掃強くなるばかりだ。

「先日響さんを強襲したガリイと、クリスさんと対決したレイア。これに、翼さんとロンドンでまみえたファラと、未だ姿を見せないミカがキャロルの率いるオートスコアラーになります」

S・O・N・G本部内作戦指令室。エルフナインからもたらされた首謀者キャロルとオートスコアラーの情報が整理され装者でたる翼とクリスがエルフナインから直接説明を受けていた。

「人形遊びに付き合わされてこの体たらくかよ…！」

「その機械人形は、お姫様キャロルを取り巻く護衛の騎士、と言った所でしようか？」

「スペックを始めとする詳細な情報は僕に記録されていません。です

が…」

「シンフォギアをも凌駕する戦闘力から見ても、間違いないだろう」

先日のガリイとの戦闘ですでに実証されているように現状のシンフォギアの性能では全く歯が立たないのが明白であった。

「超常脅威への対抗こそ俺たちの使命。この現状を打開するため、エルフナイン君より計画の立案があった」

「「?!」」

翼達が驚愕すると同時に前面の大型モニターにその計画名が表示された。

「Project IGNITEだ」

モニターに表示された計画の概要をエルフナインは細々と説明していく。現状、戦力として期待できるのはセイバーのみである以上、自分達も戦える力が欲しいと望む翼とクリスはエルフナインの説明を一言一句逃さず聞く。

「イグナイトモジュール」…。こんな事が、本当に可能なのですか?」

「錬金術を応用する事で理論上不可能ではありません。リスクを背負うことで対価を勝ち取る…、その為の魔剣「ダインスレイフ」です…！」

エルフナインがそう宣した次の瞬間…

ビー! ビー! ビー!

指令室内をアラート音が響き渡る。

「アルカ・ノイズの反応を検知!」

「位置特定! モニターに出します!」

藤堯と友里の二人がすぐさま対応する。モニターに映されたのは何かから逃げる響と未来。そして真っ赤な髪を大きなりボンでツインテールにし、人のモノとは明らかに違う鋭利な両腕を持ったオートスコアラー「ミカ」の姿であった。

「ついに、ミカまでも…」

翼とクリスが驚愕の声を上げるなかエルフナインは静にそう呟いた。

「…はい、…はい、分かりましたすぐに向かいます！」

ナスターシャ教授の墓参りを終え、S・O・N・G本部に向かうとした矢先、セイバーの元に通信が入る。内容はもちろん響と未来がオートスコアラアの襲撃を受けた事である。

「行くのね？」

通信を切るとマリアがセイバーにそう問う。通信の詳細な内容は分からないものの何かしらの緊急事態であることを察しての確認であった。

「はい。すぐにヒビキ達の所に向かわねばなりません。私はこのまま現場に急行します。マリアはキリカとシラベと共に急ぎ本部に向かってください」

「わかったわ」

「響さんと未来さんをよろしくデス！」

「頑張つて」

切歌と調の激励を受け力強く頷くセイバー。そのまま路肩に停めてあつた自身のバイクVIMAXに跨がりエンジンを起動、全速力で響達の元に向かう。

(響ちゃん、未来ちゃん、私が行くまでどうか無事で…！)

降りしきる雨の中を颯爽と走るバイクの上でセイバーは心から強くそう願つた。

「逃げないで歌って欲しいゾ？」

雨の中を走る響と未来。その後ろをオートスコアラアのミカとアルカノイズが追う。

「あ、それとも歌いやすい所に誘つてるのか？」

ミカの目的は飽くまでも響が歌を歌ってくれることであるため何故逃げているのかミカなりに考えその結論にいたつた。

「うくん、オオウ！それならそうと言って欲しいゾ！」

自己完結したミカは鋭利な両腕を合わせ一人納得する。

「それ〜！」

ミカの号令と共に取り巻きのアルカノイズが一斉に響と未来に接

近する。

だがそれを良しとしないモノがいた。

ザシユツ!

アルカノイズの一体が頭から食いちぎられそのまま消滅する。響と未来は立ち止まり後ろを振り返ってその正体を目にする。

「カヴァス君!」

「ワンツ!」

その正体は「従順たる魔猪を狩りし獵犬」であつた。「従順たる魔猪を狩りし獵犬」は今日もセイバーの指示により響達の護衛として側で待機していたのだ。

「お〜!お前がガリイの言つてた邪魔くそなわんこか?」

「グウウウツ…!」

ミカはどこか嬉しそうな顔で「従順たる魔猪を狩りし獵犬」を見るが、当の「従順たる魔猪を狩りし獵犬」はミカに唸り声を上げ威嚇する。

「アタシの邪魔をするならお前も解剖だゾ!」

ミカは追加の召喚石を懐から取り出しアルカノイズの増援を呼ぶ。流石に数が多く対処が出来ないと判断した「従順たる魔猪を狩りし獵犬」は攻撃してくるアルカノイズの足元を縦横無尽にすり抜け響達と合流、ミカとアルカノイズから退却し出来るだけ時間を稼ぐ考えに移行した。

「ワンツワンツ!」

「付いてこいって言ってるの?」

響の疑問に強く頷き、肯定を示す「従順たる魔猪を狩りし獵犬」。響と未来はそれを信じ先へと進む「従順たる魔猪を狩りし獵犬」の後ろを追う。そしてミカもそれを追いかける。

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」は時に狭い路地裏の道や人気の無い入り組んだ街路などを利用し、ミカ達の追跡をまこうとする。だがミカ達もそう易々と逃げ果せまいとアルカノイズを先回りや解剖器官による攻撃で道を塞いだりなど妨害行為をしてくる。

やがて逃げ道を寸断された「従順たる魔猪を狩りし獵犬」達は工事

中のビルの中へと入っていく。元陸上部と言うこともあり響より多少走る速度が速い未来は「従順たる魔猪を狩りし猟犬」のほぼ真後ろに付き、響は少々遅れていた。「従順たる魔猪を狩りし猟犬」が上の階に続く階段を上り未来もそれに続く。響また階段を上ろうとした瞬間……

バシヨン！

「うわっ!？」

「響!？」

アルカノイズの一体が解剖器官を伸ばし階段を分解。上り途中だった響はそのまま下の階に落ち落下防止用の柵に激突。だが工事中と言うこともあり設置が甘く簡単に外れてしまい響の体は柵ごと更の下へと落ち、一階の地面まで叩きつけられてしまう。

「ぐ……未来……!」

日頃訓練をしている成果か軽傷で済んだものの背中から落ちた衝撃で軽く脳震盪を起こした響の視線はボヤけていた。

「いい加減戦ってくれないと、君の大切なモノを解剖しちゃうゾ？」

その視線の端にミカが写る。

「友達バラバラでも戦わなければ、この町の人間をイヌをネコをみんないんな解剖だゾ? キヤハハハ!」

残忍な事を口走りながらまるで子供の様に笑うミカ。響はすぐさま体を起き上がらせスカートポケットからシンフオギアのペンダントを取り出す。そして聖詠を歌おうとする。だが……

「あ……が……くっ……!」

まるで喉に何か詰まったかの様に歌を口にする事が出来ずそのせいで呼吸が苦しくなる一方。

「ん? 本気にしてくれないなら……」

それを相手にされてないと考えたミカは上の階にいる未来に視線を向け眼を細目ながらほくそ笑む。

「グウウウツ……!」

上の階では「従順たる魔猪を狩りし猟犬」が未来の前に出て一つ下の階で解剖器官を動かしながら今か今かと待ち構えるアルカノイズ

に威嚇をしていた。

「あのね、響！響の歌は誰かを傷つける歌じゃないよ！」

「っ!？」

その時、未来の声が響く。未来は押し潰されそうな死への恐怖を抑え込み響に自分の思いを伝える。

「伸ばしたその手も誰かを傷つける手じゃないって私は知ってる！私だから知ってる！だって私は響と戦って、救われたんだよ！私だけじゃないよ！響の歌に救われて今日に繋がってる人はたくさんいるよ?!だから怖がらないで！」

いつも隣で見えてきたからこそ分かる親友響の歌。それが誰かを助けたい・救いたいと言う純粹な想いである事を未来は知っていた。だから断言出来るのだ、その歌は間違ってる。その手は恐れるモノではないと。

だが無情にも時は待つてはくれない。

「バイナラ〜！」

ミカの指示によってアルカノイズが一斉に未来に襲い掛かる。辛うじて攻撃は回避出来たもののアルカノイズの解剖器官によって足場が解剖され崩れていく。空中に身を投げ出されてしまう未来と「従順カたる魔猪ヴァを狩りし獵犬ス」。未来は咄嗟に「従順カたる魔猪ヴァを狩りし獵犬ス」を抱き締める。

「ああああああああっ!!!」

響が絶叫しながら未来に手を伸ばす。届くはずもない事を分かっているも伸ばさずにはいられなかった。自分の迷いと覚悟が無かった所為で大切な親友が命を散らそうとしている。そんな事、彼女響自身が許せるはずがなかった。

だからだろう…

「B a l w i s y a l l N e s c e l l g u n g n i r …ト
ロオオオオオオン!!!」

その胸に聖詠が宿った。

「私の大好きな響の歌を…誰の為に歌って…」

死を覚悟した未来は心からの願いを口にする。そしてせめて

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」だけは救おうと背中を地面に向け、
「従順たる魔猪を狩りし獵犬」に来る衝撃を緩和しようとする。

だがそれは杞憂に終わる。

ドゴオン！

未来は何者かに抱き止められた事で救われる。着地の衝撃で地面は抉れ、アルカノイズの攻撃によつて崩れた足場からは貯められていた雨水が未来達の後ろで滝の様に流れ落ちる。

未来はゆっくりと眼を開ける。そこにはシンフオギアを纏った大好きな親友の姿があつた。

「ゴメン…。私この力と責任から逃げ出してた…。…だけでももう迷わない。だから聞いて、私の歌を！」

そこには先程までの迷いや苦悩が無くなり晴れやかな顔つきとなつた響が雲の隙間から漏れでた太陽の光で照らされていた。

「行ってくる」

「待ってる」

未来を下ろした後、一言だけの会話を済ませる二人。響は未来に抱かれたままの「従順たる魔猪を狩りし獵犬」に眼をやる。

「未来の事、お願いね？」

「ワンツ！」

力強く吠える「従順たる魔猪を狩りし獵犬」に笑顔を向けた後、ミカの方に振り返り走り出す響。

「そおらー！」

ミカは接近してくる響に対処するため追加のアルカノイズを呼び出す。だが響は己の拳を使いアルカノイズを瞬く間に倒していく。迷いの晴れた響の前ではアルカノイズ程度、屁でもなかったのだ。

瞬く間にアルカノイズを撃退した響は腰のブースターで加速しながらミカに突っ込み拳を突き出す。ミカは手の平から高圧縮カーボンロッドを一本射出し響の拳を受け止める。

カギユン！

拳とカーボンロッドがぶつかり火花を散らす。ミカは響の拳を受け止める事は出来たが勢いを殺す事が出来ずそのまま後ろに滑り続

け、響は逆に押し続ける。

「ゴイツへし折り甲斐があるゾ！」

劣勢に見える状況で笑顔を見せるミカは、自身の髪の毛に内蔵されているブースターを使い響を押し返す。押し返された響は一度空中で宙返りをしながら後退し、地面スレスレで脚部の固定用アンカーの反動を利用しミカに急接近、同時に遠心力による回転を加え威力を増した左肘をミカの腹に打ち込む。

ドボンッ！

「あ、が、が!？」

ガードも取れずまともに入れられた一撃に顔を歪めるミカはそのまま後方にぶっ飛んで行く。だが響は追撃の構えであり再び脚部の固定用アンカーの反動で急加速し左のストレートを叩き込む。

筈だった。

バシャン！

「なっ!？」

響が拳を叩き込んだ瞬間、ミカの体が水になり弾け飛んで行く。水滴が宙を舞う仲、響の視線のすみにある人物を捉える。

「ぎょんねえん。それは水に移った幻……」

そこには昨日、響を襲撃したガリイの姿があった。そう先ほどの水はガリイの錬金術によるダミー。では、本物のミカはどこに行ったのか？答えは響の真下にあった。

「アハハハハハハ！」

響の真下には手の平を自分に向けているミカがおり、ミカはそのまま響に向けカーボンロッドを打ち込む。

ガキユイ！

カーボンロッドが GANG ニールのペンダントに直撃する。

「があああああ！」

勢いそのままにビルの屋上まで飛ばされる響。それと同時に碎け散るシンフォギア。

その時であった。

ヴオオオオオオオオ！キキイイイ！

V
M
A
X
バイクのスキル音と共にセイバーが現場に到着した。

「なっ!？」

だが時すでに遅し。セイバーが見たのは体を空中に投げ出され、砕け散り分解されていくシンフォギアと共に落ちてくる響の姿だった。

「ビビキイイイー!!!」

廃墟のビルの中、セイバーの叫び声だけが虚しく響いた。

剣舞い銃踊る懺悔の時

「終わりましたか、エルフナイン？」

響がミカとガリイの襲撃を受けてから翌日、S・O・N・G本部内
のとある一室。何時もの黒いスーツ姿のセイバーが椅子に座り、PC
のモニターを凝視しているエルフナインにそう疑問を投げかけた。

シンフォギアの破壊に成功したオートスコアラアの二人はセイ
バーが現場に到着すると同時に転移結晶を使用し撤退。セイバーは
倒れた響と泣きじやくる未来をバイクに乗せS・O・N・G本部に
帰還し、弦十郎の指示により事前に待機していた医療班によって搬
送・緊急手術が行われた。

この出来事を切っ掛けに対オートスコアラア用の対抗策
「Project IGNITE」が本格的に始動。キャロルの野望
を阻止するため動き始めた。そんな矢先の事、エルフナインがセイ
バーを呼びつけたのが冒頭のきっかけであった。

「はい、取りあえず終わりました。すみませんセイバーさん、急なお願い
だったのに…」

「構いません。ヒビキ達の助けになるなら安いものです」

エルフナインはセイバーに申し訳なさそうな顔をする。

「それでどうだったのですか？」「約束された勝利の剣」の解析は？」
セイバーのその疑問にエルフナインは少々苦い顔をする。

そう、セイバーがエルフナインに頼まれたお願いとは
「約束された勝利の剣」の解析であった。「Project
IGNITE」の発足にあたって、破損した各シンフォギアのコン
バーター修復だけでなく出力増加とアルカノイズの解剖機関による
分解を減衰させるためバリアフィールドの調整を同時進行で行わな
ければならなかった。

その際、各シンフォギアのデータとアルカノイズとの戦闘で取れた
解剖器官の戦闘データが必要になった。シンフォギアのデータは旧
二課が保有していたモノで済んだが、問題は解剖器官との戦闘データ
であった。

戦闘をしたシンフォギアは全て破損してしまった為、データをサルベージする事は困難であった。そこでエルフナインはセイバーの「約束された勝利の剣」に目をつけた。

幾度かの戦闘で「約束された勝利の剣」は何度もアルカノイズの解析器官を斬り裂いているのを確認したエルフナインは『完全聖遺物である「約束された勝利の剣」には解剖器官の影響を受けない何かしらの機能が備わっているのでは?』と仮説を立てセイバーに「約束された勝利の剣」の解析を急遽依頼した。

このエルフナインの頼みにセイバーは最初は渋い顔をしたものの、「Project IGNITE」の遂行の為、そしてなにより翼や響を守れなかった責任感と自己嫌悪からセイバーはこの件を了承。「約束された勝利の剣」をエルフナインに預け解析してもらっていた。

「解析自体は出来ました…。結果を総称してまとめると:『分からない』』と言う事が解析結果です」

エルフナインは申し訳なきように言い、セイバーはその答えに眉を歪める。

「分からないとは?」

「セイバーさんの「約束された勝利の剣」には確かに解剖器官から聖遺物とセイバーさんを守るバリアの様なモノが構築されている事は分かりました。ですがそのバリアが何なのかが分からないんです」

エルフナインは淡々と解析結果を説明する。

「これは僕の憶測なのですが、恐らくセイバーさんの言っていた魔力と称されるエネルギー体によって聖遺物とセイバーさんをコーティングする事によって解剖機関へのバリアフィールドして機能していると考えられます。またこの魔力は聖遺物で確認されているフォニックゲインととても類似しています。ですがこれがどういったモノなのか具体的な解析が出来ていないんです」

「では「約束された勝利の剣」の解析はヒビキ達の役にはたたないモノだと?」

エルフナインの説明を聞いたセイバーはそう疑問を投げかけた。

「いえむしろこの解析によって解剖機関へのバリアコーティングの目安がハッキリしたので無駄骨にはなりません。錬金術の原理原則は解析からの再構築、セイバーさんの「約束された勝利の剣」で得られたデータを元に各シンフォギアのバリアコーティングの調整が行えます」

その言葉を聞き、セイバーはほんの少し頬を緩める。だがエルフナインの話はまだ終わっていないかった。

「それと解析したことで別の可能性も見ることが出来ました」

「別の可能性？」

エルフナインは頷くとPCのキーボードを操作しモニターに「約束された勝利の剣」の解析結果を表示する。

「解析した結果、「約束された勝利の剣」のうち把握することが出来たのは全体の2%以下です。殆どがブラックボックスと化していて今の現代技術・錬金術ではほぼ解明出来ません。ですがほんの一握り、砂漠の中の一程度程度のモノですが、こんな発見がありました」

モニターには「約束された勝利の剣」を中心に何かしらのエネルギーの様なモノが微かに集まっているのが表示されていた。

「これは？」

「約束された勝利の剣」の魔力とその周囲にあるフォニックゲインを視覚化したモノです。見てもらえれば分かりますが響きさん達が歌う事で空中に漂っているフォニックゲインが僅かながら「約束された勝利の剣」に吸収・変換・集束しています。これを簡単に説明しますと、「約束された勝利の剣」には響きさん達の歌によって発生するフォニックゲインを取り込み、魔力として蓄える機能が備わっている事が判明しました。これは恐らく聖遺物が歌によって発生したフォニックゲインで起動するメカニズムが関わっているのだと考えられます」

その言葉にセイバーは目元を鋭くする。

「では…？」

「はい。もしかしたらシンフォギアの改修だけでなくセイバーの戦力強化も可能かもしれません。この機能のメカニズムを解析し僕の錬

金術で擬似的に解放することができれば……。[Project IGNAITE]と並行するのでかなり困難ではありますが、キャロルに対抗する手札は一つでも多い方がいいと僕も考えます」

「この事をゲンジウロウには？」

「すでに報告して許可を貰っています」

「では頼めますか？」

「はい！」

こうして「Project IGNAITE」と並行して「約束された勝利の剣」の能力アップ案が進められる事になった。

だがこれが後に悲劇となることをこの時のセイバー達は知るよしもなかった。

それから一週間の時間が流れた。

「響……」

放課後の時間、未来はトボトボと重い足取りでS・O・N・G本部に向かう。あの日以来、未来は一日も欠かすことなく響の見舞いに訪れている。しかし親友は未だに目覚めずただただ時間だけが過ぎていく日々未来は不安を募らせる。

「クウ……」

未来の暗い表情を見て、足元で並走していた「従順たる魔猪を狩りし猟犬」が悲しげな声を漏らす。

「あ……、ごめんねカヴァス君。私は大丈夫だよ」

「従順たる魔猪を狩りし猟犬」の声にハツとなり笑顔を作る未来。だがその笑顔は誰から見ても無理をして作っているモノであった。

「従順たる魔猪を狩りし猟犬」は未来を元気づける為、自身の頭を未来の足に擦り付ける。

「もくすぐったいよカヴァス君。でもありがとう」
「ワンツ」

「従順たる魔猪を狩りし猟犬」の行動で気が紛れたのか先程よりも少しだけ自然な笑顔になった未来はその場でしゃがみ「従順たる魔猪を狩りし猟犬」の頭を撫でる。

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」に元気を貰い気を取り直した未来は
S. O. N. G本部がある港へと再び足を進めた。

一方、そのS. O. N. G本部では「Project
IGNITE」の現状報告がなされていた。

「Project IGNITE」。現在の進捗は89%。旧二課が
保有していた第一号天羽々斬及び第二号イチイバル聖遺物のデータ、セイバーさんの
「約束された勝利の剣」から得られたアルカノイズとの戦闘データ
とエルフナインちゃんの頑張りのおかげで予定よりずっと早い進行
です」

「各動力部のメンテナンスと重なって、一時はどうなることかと思
いましたが、作業や本部機能の維持に必要なエネルギーは外部から供給
できたのが幸いでした」

現在、S. O. N. G本部が寄港している港は自衛隊が所持してい
るとある基地のソーラー発電施設であった。動力部のメンテナンス
となると各機関を停止させなければならぬ為、必然的に本部内の電
力は低下する。そうなった場合、目下最優先とされる
「Project IGNITE」に大幅な遅れが生じる。それを危
機した弦十郎は日本政府の協力のもとソーラー発電施設から電力を
間借りし作業の遅れを未然に防いだのであった。

「それにしても、シンフォギアの改修となれば機密の中核に触れると
いう事なのに…」

「状況が状況だからな…。それに、八紘兄貴の口利きもあつた」
「八紘兄貴って誰だ？」

弦十郎から口から出た見知らぬ名前に疑問を浮かべるクリス。

「限りなく非合法に近い実行力を持って、安全保障を陰から支える政
府要人の一人。超法規措置による対応のねじ込みなど彼にとっては
茶飯事であらう」

「とどの詰まりが何なんだ？」

「つらつらと並べられたその人物の摘要を語る翼に要約を求めるク
リス。」

「内閣情報官、「風鳴八紘」。司令の兄上であり、翼さんの御父上です」
そんなクリスの要望に緒川が答える。

「だったら初めからそう言えよな！蒟蒻こんやく問答が過ぎるんだよ」

「私のS・O・N・G・編入を後押ししてくれたのも確かその人物なのだけど…。なるほど、やはり親族だったのね」

「私が英国に身柄要求をされた際も彼の尽力により難を逃れました。出来うるなら一度お会いして感謝を述べたいのですが…」

「…」

「どうした？」

実の父親の話をし初めてから翼の顔か暗くなる。そんな翼を弦十郎はただ頭を搔いた。

プシユー

そんな時、指令室のドアが開き未来と「従順たる魔猪を狩りし獵犬」が入室してくる。

「響の様子を見てきました」

「響さんは生命維持装置に繋がれたままですが、大きな外傷もありませんし心配ありませんよ」

「ありがとうございます」

未来と緒川がそんな会話をしている中、
「従順たる魔猪を狩りし獵犬」はセイバーの元へと向かう。

「ワンツ」

「ご苦労様です「従順たる魔猪を狩りし獵犬」。道中異常はありませんでしたか？」

「ワンツワンツ」

「そうですか。では引き続きミクの事を頼みましたよ？」

「ワンツ！」

「従順たる魔猪を狩りし獵犬」から異常無しの報告を受けるセイバーは「従順たる魔猪を狩りし獵犬」の首を撫でながらそう答える。

それから数十分後であった。

ビー！ビー！ビー！

突如アラート音が本部内に響き渡る。

「アルカノイズの反応を検知！」

「座標絞り込みます！っ!？」

藤堯と友里が状況確認をする中、本部内が揺れる。メインモニターにはS・O・N・G本部が寄港しているソーラー発電施設がアルカノイズによって攻撃を受けている様子が映し出される。

「まさか、敵の狙いは我々が補給を受けているこの基地の発電施設：!？」

「何が起きてるデスカ！」

緒川が敵の目的を思議している中、本部内で待機していた切歌と調が指令室に駆け込む。

「アルカノイズにこのドックの発電所が襲われてるの！」

「ここだけではありません！都内複数個所にて同様の被害を確認！各地の電力供給率、大幅に低下しています！」

切歌達の疑問に友里が答え、そのの説明に藤堯の補足が入る。メインモニターが切り替わり日本各地にある火力・水力・風力・原子力などの発電施設がアルカノイズに攻撃されている映像が流れる。

「今、本部への電力供給が断たれるとギアの改修への影響は免れない！」

「内蔵電源も、そう長くは持ちませからね…！」

「それじゃあメデイカルルームも!？」

現在、S・O・N・G本部は外部からの電力で運用している。もしここで電力供給が断たれば「Project IGNITE」によるシンフォギアの改修は遅れ、響が治療を受けているメデイカルルームにも影響を及ぼしかねなかった。

「迎撃に向かいます！」

「頼むぞセイバー！基地の防衛隊と協力して発電施設を死守してくれ！」

「はい！」

セイバーは指令室を飛び出し施設内で破壊工作を行っているアルカノイズの迎撃に向かった。この時、セイバー以外にも密かに指令室から抜け出した人物達がいたことに弦十郎達は気付かなかった。

「新型ノイズの位相差障壁は従来ほどではないとの事だ！解剖器官を避けて集中集射！」

基地内の防衛隊が陣形を作り、自動小銃と無反動砲を使用してアルカノイズを迎撃していた。

「やあああ!!」

ザシユ！

その最前線でセイバーがアルカノイズに「エ約束されたカ勝利のバ剣」を振るう。

「くっ！数が多い！」

だが基地施設全体にアルカノイズが広がっているため「エ約束されたカ勝利のバ剣」で一体ずつ倒すのはかなり非効率だった。かと言って「エ転輪するバ勝利のバ剣」の様な広範囲を攻撃出来る宝具では施設の被害を上げてしまう可能性があった為使えずにいた。

セイバーはその事実には歯噛みながらも「エ約束されたカ勝利のバ剣」でアルカノイズを倒していく。

Various shulshaganatron

Zeiou igallimaraizenatron

その最中、二つの歌声が響く。

「やあああ！」

「デエエエス！」

【α式 百輪廻】

【切・呪りeTTお】

叫び声と共に無数の小型の円盤状ノコギリと三日月の刃がセイバーの周囲にいたアルカノイズを蹴散らしていく。セイバーは後ろを振り向く。そこにはギアを纏った調と切歌がいた。

「シラベにキリカ!?何故ここに!?!」

「私達も戦います！」

「強化型シンフォギアの完成まで持ちこたえるデスよ！」

「しかし貴女達はっ！」

現状「S.O.N.G」内で「LINKER」が製造出来ない以上、

長時間の戦闘が出来ない調と切歌。そんな二人をセイバーは止めようとする。

「わかってます!」

「でも今は一人でも多い方がいい筈です!」

調と切歌はセイバーの制止を振り切り、アルカノイズの群れへと向かう。セイバーは二人を止められなかった悔恨と主張の正当性から顔を歪めるも不承不承ながらそれを認めざるを得なかった。実際、手が足りないのは確かであるし基地施設内のアルカノイズを迅速に処理するには基地内の防衛隊だけでは不足であり逆に解剖されてしまう危険性もあった。さらに二人が参戦した事のメリットはセイバーにもあった。エルフナインが発案した「約束された勝利の剣」の強化案、装者達の歌よって得られるフォニックゲインを魔力に変換しセイバーの力とする。実際に切歌達の歌によつてセイバーは魔力の上昇を感じていた。

「はあああ!!」

セイバーはアルカノイズを「約束された勝利の剣」で切り裂く。それはまるで不甲斐ない自分を払拭するかの様に荒々しく凄烈であった。

(今はとにかくアルカノイズを倒さないと!)

しかしそれでもセイバーの頭は冷静であった。自身の鬱憤をアルカノイズに叩きつけるも目的である基地施設の防衛はしっかりと遂行している。

だが流れと言うのはほんの少しの弾みでも変わってしまうものがある。

調と切歌が戦闘に参加して数分…

「そおりゃー!」

切歌の背後から高圧縮カーボンロッドを右手に持ったミカが上空から襲いかかる。切歌は咄嗟に手にしていた鎌を上へ構え防御の姿勢を取る。

ガキーン!

鎌とカーボンロッドがぶつかり合い火花が飛び散る。出力差で負

け膝をつく切歌。だがそんなことお構い無しにミカは左手にもカーボンロッドを射出し、薙ぎ払うかの様に振るう。

ドゴン!

「きやあー!」

上から押さえつけられ膝をついた切歌は身動きが取れずまともに喰らい吹き飛ばされてしまう。

「切ちゃん、きやつー!」

さらに切歌の援護に入ろうとした調も共に巻き込み、施設の外壁に叩きつけられる。

「シラベ、キリカ!」

アルカノイズの戦闘に集中していたセイバーは切歌達のフオーロウに入れなかつた。セイバーは直ぐに標的をミカへと切替、
「約束されたの勝利の剣」を構える。

「おっ? また会ったな蒼いの。でも今回はお前の相手をしている暇はサラサラ無いんだゾ」

何時もながら不適な笑み浮かべるミカは小脇から何かを取り出す。

「っ!」

セイバーは驚愕する。ミカの手には負傷した自衛隊員が頭を驚掴みにされていたからだ。

「さつきじやリン子共を襲うついでに拾ってきたゾ」

「人質とは卑怯な!」

「何とでも言えだゾ」

ミカは自衛隊員を軽くスイングしてから明後日の方角に天高く投げ捨てる。

「なっ!」

セイバーは一瞬動揺するも「魔力放出」で一気に跳躍し自衛隊員を空中で受け止めから着地する。

「ついでにオマケだゾ!」

だが着地点の周囲にミカが召喚石を投げ入れ、セイバーはアルカノイズに囲まれてしまう。

「くっ!」

襲い来るアルカノイズを「約束された勝利の剣」で迎撃するセイバー。だが内心では焦りが出ていた。切歌と調の二人だけでは一体でも脅威であるオートスコアラの相手をするには無理があり直ぐにでも加勢に向かいたいが、自身はアルカノイズに囲まれ負傷した自衛隊員までいる。セイバー一人であるなら中央突破で強引に向かう事も出来たが自衛隊員を抱えたままでは難しかった。そのためセイバーは不本意ながらも向かってくるアルカノイズを一体ずつ倒していくしかなかった。

やがて周囲のアルカノイズを全滅させたセイバーは負傷した自衛隊員を抱え味方の部隊に預けに向かう途中……

ドガーン!

施設内に複数あるソーラーパネルユニットの一つから大爆発が起きる。セイバーは急ぎ自衛隊員を衛生兵へと届けると直ぐに爆発したソーラーパネルユニット付近まで急行する。

そこには……

「バイナラ〜!」

ミカによってイガリマのペンダントを打ち砕かれる切歌の姿があった。

「切ちゃん!!」

「キリカ!!」

調とセイバーが叫ぶ。調は切歌の元に向かおうとするもミカのカーボンロッドによって妨害されてしまう。

「よそ見していると後ろから狙い撃ちだゾー!」

「邪魔しないで!」

「仲良しこよしでお前のギアも壊してやるゾー!」

するとミカは懐から両手一杯の召喚石を取り出す。それを見たセイバーは「魔力放出」で加速し、ミカに接近するも間に合わず召喚石をバラ撒かれてしまう。セイバーはそのままミカに「約束された勝利の剣」を上段から振り下ろす。ミカもカーボンロッドを射出し防御を取る。

ガキーン!

セイバーの「魔力放出」によって得られた速力が勝り鏢迫り合いのままミカを後方に押し退ける。

「シラベ、キリカの元へ！ここは私が押さええます！」

「はい！」

セイバーに後押しされ切歌の元へ走る調。

「思ったより早い到着だゾ」

「これ以上やらせはしない！」

「出来るかどうか見ものだゾ！」

鏢迫り合いのまま無邪気な笑顔を見せるミカは髪の毛に内蔵されているブースターを起動しセイバーは「魔力放出」で対抗する。

「アハハハ！」

「ぐううう！」

両者共一步も引かず鏢迫り合いの火花が過激さを増す。その最中であつた…

「ああつ！」

「っ!?シラベ！」

切歌を守るためアルカノイズを迎撃していた調のペンダントに解剖器官が当たりギシコルシヤガナアが砕かれてしまう。一糸纏わぬ姿で倒れ伏す調にアルカノイズが迫る。セイバーは調の援護に向かおうとする。だが…

「アタシをすっぱかすとは胆が座つてるゾ！」

「ぐう！邪魔をっ！」

ミカが更にブースターの出力を上げてパワーを強める。鏢迫り合いで押し込んでいる性質上セイバーも同様に「魔力放出」の出力を上げなくてはならず身動きが取れない。

「さあお友達のバラバラ解体シヨーだゾ！」

「逃げてくださいシラベ！シラベエエエ!!」

セイバーの必死の叫びが響く。だが無情にもアルカノイズは解剖器官を一斉に構える。

「誰か…助けて欲しいデス…。アタシの友達…大好きな調を…。誰か調を…」

切歌は届く筈のない手を伸ばす。親友の救いを求め涙ながらに懇願する。

「誰かああー!!!」

切歌の無念の叫び声と共にアルカノイズの解剖器官が一斉に調に伸びる。恐怖から目を強く閉じる調と切歌。

だがここで二人に違和感が訪れる。

切歌は調の悲鳴が聞こえなかった事に、調は自分が炭素化されていない事に。二人が怖怖と目をゆつくりと開く。そこには…

「誰かだなんて、連れねえ事言ってくれるなよ?」

声が響く。それは右も左も分からなかった自分達を導いてくれた学校の先輩の声。

「剣…?」

「ああ、振り抜けば風が鳴る剣だ!」

声が響く。それは己の夢の為世界へと旅立だった人生の先輩の声。

風が鳴き、アルカノイズが散る。赤い砂が空へと飛び声の主が姿を表す。

青い剣天羽々斬と赤い銃イチイバル。正反対の二つのシンフォギアが並び立つ。

切歌と調が涙を流す。そう、彼女達の戦いが無駄でなかった証明が目の前にあるのだから。

抜剣 そして――

強化型シンフォギアが完成し翼とクリスが現着したことで状況が一変する基地施設。

「おっ！新しいお仲間力？」

セイバーと鏑迫り合いを続けているミカの注意が翼達に向く。

「はあああ!!」

その隙を突きセイバーが「魔力放出」を一気に吹かす。不意打ちをくらいカーボンロッドが碎けるミカは衝撃で後方へと吹き飛ばされ施設の外壁に叩き込まれる。

「畳み掛けるぞー！」

「おうー！」

それに乗じ、翼とクリスがミカに追撃をかける。

【蒼刃罰光斬】

【MEGA DEATH FUGA】

居合い術から放たれた斬撃と大型ミサイル二発による集中攻撃。それらは間違はなくミカに向かって直撃した。爆破地点から黒煙があがりミカの姿が一時的に見えなくなる。翼とクリスはセイバーの隣へと降り立つ。

「ツバサ、クリス」

「待たせたなセイバー。ここからは防人が助太刀する」

「つても今終わっちゃったかもだけだよ」

余裕そうなクリスが広角を上にする。だが油断も隙もない。警戒は続けていた。実際アルカノイズに対して揚げ足を取られたのはそれが原因なのだから。

やがて爆煙が晴れる。そこには翼とクリスの一撃により倒れ伏すミカの姿…ではなく、錬金術による障壁によって無傷のミカと…

「面目ないゾ」

「いや、手ずから凄いで分かった…。オレの出番だ」

その主であるキャロルであつた。

「アレがキャロル・マールス・ディーンハイム…」

「ラスボスのお出ましとはな」

「だが、決着を望むのはこちらも同じ事！」

キャロルの姿を目視した三人は己の武器を構え直し改めて臨戦態勢を取る。

「全てに優先されるのは計画の遂行。ここはオレに任せてお前は戻れ」

「分かったゾー！」

キャロルの命令を受けミカはその場で跳躍、懐から転移用のテレポートジェムが入れられた結晶を手元で割り瞬時に離脱する。

「とんずらする気かよ!？」

「案ずるな、この身一つでお前等三人を相手するぐらい、造作もない事」

「その風体でぬけぬけと吠える」

『自分一人で事足りる』と明らかかな挑発をするキャロル。逆に翼はキャロルの幼い容姿を盾に挑発し返す。

「なるほど。なりを理由に本気が出せなかつたなどと言いつつ、諷刺にはいかないな」

その挑発をキャロルはあえて受けた。キャロルは左手を真横に掲げ魔方阵を展開する。

「ならば刮目せよー！」

陣から現れたのはハーブラしき紫の弦鳴楽器。キャロルはそれを手に持ちまるで自然体の様に楽器の弦を掻き鳴らす。戦闘中には似つかわしくない弦から鳴り響く美しい音色がこだまする。するとキャロルを中心に眩し光が溢れだし、その姿を一瞬だけ隠す。そして光が収まると、そこには成人女性ほど成長したキャロルが「ファウストローブ」と呼ばれるプロテクター、「ダウルダブラ」を纏った状態で立っていた。

「これくらいあれば不足はなからう？」

自身の急成長した胸部を揉みしだきながら挑発するキャロル。さらに続けて…

「精々楽しませろよ？あの出来損ないの小娘共の様に簡単に散られて

は面白くない」

プツツン

そう告げてきた。

「テメエ……！」

「言うに事欠いて月読達を出来損ないと罵るか……！」

あからさまの挑発であつたが調達を馬鹿にされ怒りを覚える翼とクリス。だが翼達より強い怒りを覚えている人物が一人いた。

「やあああああ!!」

「ツ!?セイバー!?!」

セイバーが唐突に「魔力放出」で急加速、キャロルに一気に肉薄し「約束された勝利の剣」を上段から振り下ろす。キャロルも両手の指先から弦鳴楽器の弦を伸ばし「約束された勝利の剣」を受け止める。

ガキュイ!

ぶつかり合った聖剣と弦は激しい火花を飛ばす。

「まずは貴様からか!面白い!」

「約束された勝利の剣」と「ダウルダブラ」の弦が弾け合いセイバーとキャロルとの間に一旦距離ができる。キャロルは陣を形成し錬金術による攻撃を仕掛けようとする。逆にセイバーは手にしていた「約束された勝利の剣」を「騎士王の宝財」に戻し代わりに別の剣を呼び出す。だがセイバーがその剣を手にする瞬間を狙ってかキャロルの展開した陣から錬金術によって構成された火と水が渦を巻きながらセイバーに向かって放たれる。

ドゴーン!

激しい爆発と共に黒煙が上がりセイバーの姿が見えなくなる。だが次の瞬間……

「ハアアア!」

黒煙の中からセイバーが飛び出しキャロルに一直線に突っ込んでくる。

「チイッ!」

キャロルは舌打ちをしながらも再び「ダウルダブラ」の弦で防御の

体制に入る。

ガキユイ!

二度ぶつかり合う剣と弦。だがこの一撃は違っていた。

「なっ!?」「ダウルダブラ」の弦が燃えている!」

そう。キャロルが防御の為両指から展開した弦がセイバーの剣とぶつかり合った瞬間燃え始めたのだ。

キャロルはセイバーの持つ剣を見る。セイバーの手には「約束された勝利の剣」ではなく、出し渋っていた「転輪する勝利の剣」が握られていた。

そしてその剣は炎が渦を巻きながら迸っていた。

セイバーはキャロルの攻撃を受ける直前、「騎士王の宝財」から「転輪する勝利の剣」を取り出し「聖者の数字」を発動させていたのだ。

これによりセイバーは通常時の三倍の戦闘力を獲得、さらに「転輪する勝利の剣」から放たれる灼熱の炎による攻撃が追加された。

キャロルの両指から伸びている弦が焼き切れ、「転輪する勝利の剣」はキャロルめがけ振り下ろされる。

「ぐっ!」

キャロルは思い出を焼却し錬金術で強度を高めた「ダウルダブラ」の弦を両指から新たに精製し防御する。

ガキユイ!

三度ぶつかり合う剣と弦。強度を高めた事で弦は焼ききれず「約束された勝利の剣」を受け止めている。だが…

「ウオオオオ!!」

セイバーは一撃でダメならと二撃・三撃と続けて斬撃を与え続ける。キャロルも反撃に移りたがセイバーの斬撃による応酬が激しく、防御を怠れば間違いなく致命傷になりうる一撃を弦で防御する他なかった。やがて「転輪する勝利の剣」を受け止め続けていた弦は消耗し燃え始める。

(オレの思い出を焼却して強化した「ダウルダブラ」の弦が押される!?!これが完全聖遺物のスペック…いや、その性能をフルに使いこなすコイツのポテンシャルも凄まじい…!)

内心セイバーを称賛すると同時に恐怖するキャロル。そして当のセイバーは…

(どうして…どうして私は何時も守れないんだ…！)
己の所業を悔いていた。

(何時だってそうだ…。手を伸ばせば届くはずの所にいるのに…。なのに…何時も壊れてしまう…！守りたいと…救いたいと…助けたいと思っっているのに…！)

セイバーの脳裏に過ぎるのは己の不甲斐なさによって傷を負う響達の姿。

時に響がミカによってギアを砕かれる姿。

時に翼がギアを砕かれ倒れ伏す姿。

時にマリアが「ガングニール」を纏い、血みどろとなる姿。

そして調と切歌がミカによってギアを砕かれる姿。

セイバーにとってはどれ一つとっても己の失態の結果と認識していた。

(どうしてだ…！)

どうして！どうして!!どうして!!!)

「ウオオオオオオオ!!」

己の怒りと悲しみを「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」に乗せ、キャロルにぶつける。それがあまりにも自分勝手に愚かしい事だとはセイバー自身がよく分かっている。

だがぶつけずにはいられなかった。

セイバーの中にある責任感が自分自身を律しなければならぬと突き動かす。

剣を振るうには理由が必要だ。

ならば己の怒りと悲しみに据え置きしよう。

今のセイバーにあるのは『この事態を引き起こした主犯であるキャロルを倒さなければならぬ』強迫観念と言う想いのみであった。

セイバーの猛攻は果てしなく続き、ついにその時がきた。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を弦で受け止め続けていたが、ついに弦が斬撃と炎に負け焼き切れる。切れた瞬間両手が広がり無防備な胴体がさ

らけ出されるキャロル。その隙を逃さずセイバーは「魔力放出」で一気にキャロルの懐に入り込む。

(しまつて)

(獲った！)

懐に入り確実に「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」の一撃を入れられる所でセイバーは確信する。キャロルは新たに弦を精製しようと試みる。だがすでに遅い。間違いなく弦を精製する前にセイバーの「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」の方が速くキャロルの体に一撃入れられる。それも致命的な一撃をだ。

そしてそのまま「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」がキャロルの胴体めがけて振り下ろされる。

その瞬間であった。

シユウウ：

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」の刀身から炎が消えた。

「なっ!？」

突然の事態に動揺が走るセイバー。

「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」の炎が消えた原因、それは「聖者の数字」にあった。セイバーは今、「聖者の数字」によってその戦闘力を三倍にまでに底上げしていた。だが「聖者の数字」には弱点がある。

効力が発動する条件は9時から12時、15時から18時の区間のみであること。

発電施設が襲撃された時刻がおよそ15時半過ぎごろ、そして戦闘が始まって既に二時間以上が経過し、現時刻は18時丁度。「聖者の数字」の効力がまさにその瞬間切れたのだ。

そしてその好機をキャロルは見逃さない。自身に向け振り落とし、自身に「エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣」を片手の指先から弦を伸ばし、ぶつける。

ガキユイ！

打ち勝ったのはキャロルの弦である。

動揺に加え、「聖者の数字」の効力が切れた事で戦闘力が落ちたセイバーでは「ダウルダブラ」の弦を押し返す事は出来なかった。ガラティーン 剣を両手で持っていたセイバーは弾かれた事で強制的に上に上げられ、無

防備な胴体がむき出しとなる。

形勢逆転。キャロルは透かさず伸ばした弦を螺旋状に回転させドリルの形状にし、錬金術で形成された風を纏わせセイバーの胴中に突き刺す。

ドスンッ！

「ガハッ!？」

直撃。防御も出来ずまともに受けた一撃によりセイバーの体は後方に吹っ飛ばされ、施設の外壁に突っ込む。

さらにキャロルはだめ押しとばかりに錬金術で形成した四大元素アリストテレスによる攻撃がセイバーに向かって放たれる。

ドガーン！

「グアアアアアア!!」

「セイバーッ!!」

セイバーの悲鳴に翼とクリスの叫びが響く。翼達は先ほどまでのセイバーの猛追に圧倒されその様子を観戦するしかなかったが、セイバーがキャロルの反撃を受けた事で思考が戻ったのだ。

やがて外壁から上がった土煙が晴れる。そこには蒼い衣第と白銀の鎧基が土や砂で汚れボロボロの姿となったセイバーがうつ伏せで倒れていた。

「ぐっ…ぐぬう…」

だがまだ意識はあったらしく「騎士王の宝財」ゲート・オブ・キャメロットから「約束された勝利の剣」を取り出し、それを杖代わりに起き上がろうとする。

「まだ…だ…私は…まだ…。わた…し…は…」

だが奮闘虚しくセイバーは再び倒れ、そのまま意識を失ってしまふ。戦う意思の現れだろうか、「約束された勝利の剣」は握られたままである。

「ハア…ハア…ハア…」

セイバーが倒れた事を確認しキャロルは肩で息をしながらも一時の安堵を得る。

(想定を遥かに越える量の思い出を焼却した…！向こうセイバーに何かしらの

アクションがあつたらしいが、それがなければ間違いなく殺^ヤられていた…!)

自身が幸運を拾った事を冷静に分析しながら息を整えたキャロルは、視線を翼達に向ける。

「次は貴様等だ」

「おのれ…、よくもセイバーを…!」

「アイツの分もたつぷりと利子付けてやらねえとな…!」

翼とクリスはお互いを見合い頷くと己のギアのマイクユニットに手を伸ばす。

「フン! 弾丸^{たま}を隠しているなら見せてみる。俺はお前等の全ての希望をブチ砕いてやる!」

「付き合つてくれるよな?」

「無論! 一人で行かせるものか!」

覚悟を決めた二人は左右に枝分かれした形になつたマイクユニットの両端を押し込む。

「イグナイトモジュール! 抜剣!!」

「私ね将来はお花屋さんになりたいの!」

私の目の前にいる少女がそう私に答える。その表情は満面の笑みを浮かべている。きっと彼女は将来、花屋になれる事を信じているのだろう。未来に疑いがなどないのだろう。

「貴女は何になりたいの?」

彼女が私に問う。私は…

答えない。

いや、答えることが出来ない。なぜなら私には未来を創造が出来ないからだ。これと言つた夢や目標が思い付かず、ただ今を生きているだけの存在だ。

私は彼女に微笑みその問いを誤魔化した。彼女は私が見ただ笑つた事に疑問を持ちながらもすぐにそれを忘れ、別の話題に変えていく。

きっと私にだってその内、彼女の様に夢を持つことが出来る筈だ。根拠の無い保身で自分を立てた私は後になつてそれを後悔した。

歳を重ねる。無知な子供だった皆が大人に近づいていく。そして皆が考える。自分の将来を。明日未来への不安と期待を胸に自分の道筋を各々が色んな形で悩んでいた。そんな中で私は…

ただ孤独に座っているだけだった。
分らない。

どうして私は皆とは違うんだ…。どうして私は夢を抱けないんだ…。どうして私は何もないんだ…。

どうして——、どうして——、どうして——

『まったく…見ておれんな』

声がする。暗く、重く、鋭く、荒く…何より深い悲しみを感じる声だ。

「だ、誰…」

『私が誰か、お前が問うか…？お前が一番良く知っていると云うのに…。フツ…まあ良い。小娘どものおかげで私も出やすくなった。頃合いか』

体の力が抜ける。

いや、どちらかと言うと私が体から抜けていく様な感じがする。

『か換われ。それは私が貰う。貴様の役目は終わったのだ。さあ、もう目を閉ざすがいい。せめて私の中で優しい夢を見て眠れ』

「ま……て………」

過ぎ去っていく背中に届くはずの無い手を伸ばす。背中はやがて影に消え、私の意識は闇へと落ちた。

「信じよう！胸の歌を！シンフォギアを!!」

「へッ！この馬鹿響に乗せられたみたいでカッコつかないが…」

「もう一度行くぞ！」

「イグナイトモジュール！」

「二抜剣!!」

響達三人が己のギアのマイクユニットペに手を伸ばし、両端を押し込

む。マイクユニツトは空中で変形し鋭利な針の様になる。針は響達の胸中に向かって一直線に落ち、そのまま響達を貫く。

「グアアアアア!!」

「ダイスレイフ」により心の闇が増幅され、暴走状態となる。禍々しい漆黒のオーラが響達を包み、想像を絶する苦しみが身体中を蝕む。(未来が教えてくれたんだ…！力の意味を…！背負う覚悟を…！だから、この衝動に塗りつぶされて…)

しかし響達の意味は強く、呪いに抗い続ける。

そして…

(…なるものかああ!!)

響達は呪いを撥ね除け、己の力に換えてみせた。各々のシンフォギアが漆黒に染まり鋭利な突起が身体中に張り巡らされる。モジュールの起動と同時にトリオ曲が施設内に響き渡る。

『モジュール稼働！セーフティダウンまでのカウント、開始します！』
「ニグレド」、「アルベド」、「ルベド」からなる三段階のセイフティーが起動し999カウントの制限時間が始動する。

だが！

『待ってください！モジュールは起動しましたが各装者のギア出力、想定のお五分ほどしか出ていません！』

『何だっ!?』

友里の報告に驚愕する弦十郎。そしてそれはイグナイトを成功させた響達装者も同じである。

「一体何が起きている!?!」

「まさかあの野郎、アタシ達をハメるつもりで!?!」

「そんな事ないよ！エルフナインちゃんは私達の為に!」

イグナイトモジュールの責任者であるエルフナインを疑うクリスを響は弁護する。

『出力尚も低下中！それと同時に未確認のエネルギーが上昇中！場所は…』

装者の真後ろです!!』

藤堯の報告に装者達がすぐさま振り向く。

そこには…

禍々しい漆黒のオーラを身体に纏うセイバーがそこに立っていた。

「セイバー…さん…?」

響がセイバーの名を恐る恐る口にすする。だがセイバーに反応は無く、俯いているためその表情は見えない。

すると突如…

ドゴオオオン!

セイバーから漆黒の魔力が溢れだし、セイバーを包み込む。やがて漆黒の魔力から繭まゆの様なモノが現れ、膨張し始める。やがて膨張し続けた繭まゆは弾け中にいたであろうセイバーが再び姿を表す。

だがそこには響達の知るセイバーではなかった。セイバーの特徴とも言えた美しいブロンドと白人特有の透き通る様な白い肌は更に白さを増し、まるで血の気の無い死人色になり。蒼第い衣二と白銀靈の鎧基は魔力と同じ漆黒に染まり、鎧にはまるで血管が張り巡らされたかの様な深紅の模様が施されている。そして何よりも目立ったのがセイバーの目元を覆うように付けられた鎧同様の色と模様のバイザーと右手に握られている漆黒の「約束エされたクの勝利カの剣リ」であった。

真逆。何もかもが真逆で禍々しいセイバーの姿に響達は恐怖した。

「…」

そんな響達を余所に漆黒に染まったセイバーは仁王立ちをするキヤロルを見据える。

漆黒の緋王（ひおう）

不気味な静寂が場を支配する。先程まで起きていた発電施設の戦闘がまるで嘘の様にも思えるほどだ。

「い、一体何が起きているんだ…!」

最初に静寂に異議を唱えたのは弦十郎であった。指令室のメインモニターに写し出される誰しもが疑問を浮かべるそれに答えを求めた。

「これは僕の推測ですが…」

それに答えたのはエルフナインであった。彼女の顔も驚愕と混乱に染まり切っていた。

「セイバーさんはイグナイトのフォニックゲインを吸収したのでは無いかと思われま…」

「フォニックゲインを吸収…だと…!」

「例の「約束された勝利の剣」の強化案として実装された追加機能の事ですか？」

弦十郎の喫驚の言葉に続く様に緒川がエルフナインに問う。

「はい。ですが「約束された勝利の剣」に強化を施す際、イグナイトの心の闇の増幅を抑制するフィルター機能も共に実装したはずなのに…」

「だが、実際にセイバーはイグナイトのフォニックゲインを吸収し、能力が暴走している様に見える…」

指令室のメンバーが再びメインモニターを見る。漆黒に染まったセイバーが画面いっぱいに写り込む。

「どうしたのカヴァス君!？」

不意に未来の声が指令室に響く。一同が振り向くと「従順たる魔猪を狩りし獵犬」がどこか苦しそうに床に伏せ、未来が膝をついてその身を案じている姿があった。

「クウ…クウ…」

「苦しいの?どこか痛いの?」

「これは…」

「恐らくですが今のセイバーさんの状態が大きく関わっているものと考えられます」

エルフナインの言葉に弦十郎達は納得するほかなかった。

だが現状、一同に出来ることはただモニター越しに状況を見守ることだけであった。

「フンツ、オレと同じく姿なりを変えたか。大袈裟な再登場だったが昼寝は充分に取れたのか？」

静まり返った発電施設。装者達を挟む形で一定の距離まで離れているキャロルは漆黒に染まったセイバーにあからさまな挑発をする。

「…」

だがセイバーはただキャロルを見据えるのみでまったく反応しない。

「愛想の無さも健在と見える」

そのセイバーの反応にキャロルはつまらなさそうな顔をする。

すると徐にセイバーが歩き出す。一步、また一步と身に付けた漆黒の鎧を軋ませながらキャロルに向かってゆつくりとその足を動かす。

「あ…あの、セイb」

セイバーが装者達の間横に迫った際、響がセイバーに声をかける。だがセイバーは見向きもせず響達を横切る。まるで視界にすら写っていないかの様に。

ゆつくりと進行してくるセイバーにキャロルは思い出を焼却し陣を展開、錬金術で形成され火をセイバーに向け撃ち込む。火は渦を巻きながら一直線にセイバーに向かい…

バシユウウウン！

弾たまかれた。

「何ッ？」

キャロルは顔には出さないものの驚愕する。自身の思い出を焼却した錬金術がものの簡単に弾かれたのだから。弾かれた火の錬金術は明後日の方向に飛んでいき爆発を起こす。

ドゴオオオン！

爆発の威力を見る限り錬金術その物に問題があるわけでない事を再認識するキャロル。攻撃を受けながらもまるで意に返さず歩みを止めないセイバー。ならばとキャロルは水・風・土と連続して錬金術の攻撃をセイバーに撃ち込む。

バシユウウン！

しかしいずれの攻撃も全て弾かれてしまう。だがその攻撃でキャロルはある事に気づく。セイバーに攻撃が当たる瞬間、セイバーの周囲を黒い霧の様な物が覆い攻撃が反らされている事に。

（あれはフォニツクゲイン^{魔カ}の塊？高濃度・高密度のフォニツクゲイン^{魔カ}を自分の周囲に散布し、攻撃が当たる直前に纏う事でオレの攻撃を反らしているのか？）

キャロルが思考も巡らせているその間も歩みを止めず進んでくるセイバー。

（ならば思い出であの黒い霧と同じ濃度・密度にすれば！）

打開策を直ぐに考案し、実行に写すためキャロルは「ダウルダブラ」の弦を強化しようとする。

だがここでセイバーが動く。セイバーは一度立ち止まり右手に持つ漆黒に染まった「約束された勝利の剣^{カバ}」を両手で持ち上段の構えを取る。するとセイバーの周囲に散布されていた黒い霧が「約束された勝利の剣^{カバ}」に取り込まれ始める。「約束された勝利の剣^{カバ}」は徐々に禍々しく輝き始めそれが臨界まで達すると同時にセイバーはそれを振り下ろす。

禍々しい漆黒の斬撃がキャロルに向かい襲い掛かる。キャロルは両手の指先から「ダウルダブラ」の弦を伸ばし斬撃を防御する。

ガキユイ！

斬撃と弦がぶつかり合うと同時に弦が一本ずつ千切れ始める。

（抜かれるッ!?!）

防御は無理と判断したキャロルは直ぐに体を翻し斬撃を回避する。間一髪避ける事が出来た斬撃はそのままキャロルの後方にて爆発する。

ドゴオオオン！

その威力は先程のキャロルの錬金術によって生み出された攻撃による爆発よりも数段も強力であり、黒煙が天高く舞い上がる。キャロルはその威力を目の当たりにし啞然とする。

(フオニツクゲインを刀身に纏う事で遠距離攻撃までも行いこの威力!?こちらの攻撃はあの黒い霧で阻まれる以上長距離戦は不利か!)

そこまで思考していたキャロルの全身を寒気が襲う。それは生き物なら誰しもが持ち合わせる生命への危険信号であった。キャロルは首をセイバーのいた方角に向ける。そこには低い体制から「約束された勝利の剣」を振り上げようと構えているセイバーが目前まで迫っていた。

キャロルは咄嗟に左足を軸に右足を後ろに回すことで体を逸らす。刹那、セイバーの「約束された勝利の剣」が振り上げられキャロルの前髪をほんの数本切り落とす。間髪避けられたのも束の間、セイバーは「約束された勝利の剣」の刀身から「魔力放出」による逆噴射を行いそのまま素早く振り下ろす。間髪いれずに振り下ろされた「約束された勝利の剣」を本能的に避けられないのを悟ったキャロルは両腕に「ダウルダブラ」の弦を何重にも巻きつける事で即興のプロテクターを作り出し、頭上で×字に組み防御の姿勢を取る。

ガゴンッ!

「ダウルダブラ」の弦で作られたプロテクターと「約束された勝利の剣」がぶつかり合う。その威力は凄まじく、キャロルの足元を中心に地面がひび割れ、数十メートルはあるクレーターが衝撃によって作られる。

(お、重いッ!!)

「約束された勝利の剣」を受け止めることは出来たものの、その右腕一本から振り下ろされたとは到底思えない程の威力に耐えながらキャロルは苦い顔する。更にセイバーはキャロルを追いつめるが如く刀身からの「魔力放出」を持続的に行い、上からの重圧をキャロルにかけて続ける。キャロルは歯を食い縛り堪え続けるが如何せん体勢が悪く力が入りづらい。やがて右足の膝が地面につき重圧によってめり込み始める。それはまるで民が許しを獲る為、膝を折り王に慈悲

を請う民の様であった。

「ぐうッ！ぐおおお!!」

このままでは押し込まれると悟ったキャロルは雄叫びを上げながら右腕をセイバーに向け伸ばし錬金術の陣を展開、その場に圧縮した水と超高温度の火を出現させ接触させる。

バゴオオオン！

キャロルとセイバーの間に水蒸気爆発が起き砂煙が上がる。爆発の衝撃で両者は強制的に距離を取らされ、セイバーは「約束された勝利の剣」を地面に刺し込みブレーキ代わりにし、さほど地面を滑る事もなく制止する。対してキャロルは膝をついた状態で衝撃を受け、数メートル程体が飛ばされた後地面に背中を強打。そのまま瓦礫を押し退けながら地面を滑りようやく制止する。

「ゴホッ、ガハッ！ハア…ハア…」

軽く咳き込みながらもその場から立ち上がるキャロル。身に纏っている「ダウルダブラ」は砂や墨で汚れきっている。キャロルは目線を距離の離れたセイバーに向ける。セイバーは地面に刺し込んだ「約束された勝利の剣」を引き抜き、まるで何事も無かったかの様に再びキャロルに向かってゆっくりと足を進めている。

（何てヤツだ！威力は高が知れているとはいえゼロ距離の水蒸気爆発を受けてまったく動じていないだもツ!）

咄嗟で実行した打開策であっても自身の思い出を焼却した錬金術は並みではないと自負するキャロルは迫り来るセイバーの姿に驚愕する。

（だが…）

だがどうじに何かに確信する。すると…

ペギツ…

セイバーの目元を覆っていたバイザーの一部にひび割れが起こる。当のセイバーは気にする素振りすら見せないがキャロルにとっては大きな収穫であった。

（やはり近距離で同じ濃度と密度の思い出ならばヤツにダメージを与

えられる！ならばッ！)

キャロルは両手に「ダウルダブラ」の弦を螺旋状に回転させドリル状に形成、風の錬金術を纏わせ回転速度を上げる。

(近接戦で隙を作り、ゼロ距離で四大元素をブチ込む！)

キャロルは自身に風の錬金術による突風を纏わせセイバーに突進してくる。

「ハアアア！」

突進の勢いのまま右手のドリルをセイバーに向け突く。

バシユウン！

セイバーに突き刺さる直前、件の黒い霧によってキャロルの攻撃が阻害される。火花が上がる中その場で制止する二人。だが…

バギイイーン！

キャロルのドリルがセイバーの黒い霧を突き破る。セイバーはそれに一切の動揺もなく右手の「約束された勝利の剣」で迎撃する。

ガギンツ！

思い出の焼却によって強化されドリル状となった弦と聖剣が激しくぶつかり合う。キャロルは左手のドリルをセイバーに向け振り下ろす。セイバーはそれを避けつつ「約束された勝利の剣」を「魔力放出」を用いて切り返しキャロルの胴体に向け振るう。そしてキャロルもまたそれを手にしたドリルで防ぐ。

激しい攻防の撃ち合いがセイバーとキャロルの間に巻き起こる。衝撃で彼女達の周囲にあった瓦礫は砕け、大地は割け始める。

だがそれも長くは続かない。

撃ち合いの最中、キャロルは錬金術で形成した雫程度の水をセイバーの目の前で破裂させる。

「ッ…」

ほんの瞬き程ではあったがセイバーの動きが止まる。その一瞬を逃さないキャロル。左手のドリルを体を捻りつつ振り上げセイバーの「約束された勝利の剣」を撃ち上げる。「約束された勝利の剣」はそのまま上に上げられセイバーの無傷の胴体がさらけ出される。キャロルはすかさず右手のドリルを解除し、手のひらに四大元素の陣

を展開、セイバーの胴体に向け発射準備を整える。

(もらった!!)

勝利を確信したキャロルは口元を緩ませる。

だがその瞬間、

ドゴンツ!

キャロルの視線が強制的に空へと向く。

(なに…が…)

突然の事で理解が出来ないキャロルは目線を下に向ける。そこには左腕が振り上げられているセイバーの姿があつた。

それを見たキャロルは理解した。自分がセイバーに顎を殴られた事を。
アッパーカーットされた

殴られた事でキャロルの思考は一時的に停止し、体はそのまま軽く宙に浮く。その隙をセイバーが見逃す筈はなかつた。振り上げられた左腕をそのまま「約束された勝利の剣」の握りまで運び、両手持ちにするセイバー。同時に「約束された勝利の剣」に膨大な魔力が注がれ、変換・集束・加速させていく。やがて「約束された勝利の剣」はセイバーの身の丈を遥かに越えた魔力の大剣へと変貌する。

「約束された——」

セイバーが真名を解放する直前、キャロルは悟った「これは避けられない」と。

自身の体は未だ宙を浮き、今から錬金術を錬成したとしても「約束された勝利の剣」に注がれたフォニックゲイン魔カと同じ濃度にするには圧倒的に時間が無い。

そして…

「勝利の剣!!」

漆黒に染まった極光の暴力がキャロルを貫く。それは逆らえぬ激流の如くキャロルを飲み込み、肉体は底知れぬ闇の中で蒸発していった。

戦慄。

響達の体験したことを一言で表せばそれに尽きるだろう。

「約束された勝利の剣」の真名解放による衝撃を響達は一ヶ所に固まりやり過ぎした。吹き飛ばされそうな体を互いが互いを支えることで何とか持ちこたえ、衝撃が止んだのを感じながら自分達の無事を確認する。幸い怪我と言えるものは無い。誰一人として欠けても無い。咄嗟の判断で指示を飛ばしてきた翼に感謝しつつ、響は下を向いていた視線を上げる。

「え……………」

響の思考が止まる。それもそうだろう、何故なら目の前には漆黒の塔がそこには立てられ辺りは焼け野原と化していたのだから。その正体がセイバーの放った「約束された勝利の剣」の一撃だと気づくのに響は数分要する。

「あ……………あ……………」

余りの光景に声が出ない響。翼とクリスも同様にただ目の前の光景に恐怖するだけであった。

スタツ

不意に響達の真横に何者かが降り立つ。響はその正体を確かめべく首を回すが…

チャキツ

同時に喉元に鋭利で冷たい感触を覚える。視線を上にと上げるとそこには漆黒のセイバーが自身の喉元に「約束された勝利の剣」の切っ先を突き立てていた。

「セ…セイバー…さん？」

恐る恐るセイバーの名を問う。だがセイバーに反応はみられない。ペキツ

すると、セイバーの目元を覆っていたバイザーのヒビが広がり始め…

パキンツ

割れたバイザーはセイバーの目元から外れ地面に落ちる。

響はセイバーと目を合わせる。だがそこには響が知るライトグリーンらしい瞳はなかった。まるで百獣の獅子を思わせるような猛々しく、同時に悍ましい程に圧迫感を感じる程の黄金の瞳が響を貫

いていた。

「問おう」

セイバーが口を開く。その声も響が知るセイバーからは程遠い。まるで赤の他人が接してきた様に響達は感じる。

「貴様達は我が王政に従い服従を誓う者か？」

それとも反逆を企て我が王道を踏みこじめる者か？」

余りにも冷たく、余りにも横暴なその言葉に響達は返答できず、ただセイバーの瞳を見つめ返す事しか出来なかった。

水面下の自分

響と漆黒に染まったセイバーが互いの眼を交差させる。セイバーは高圧的ながらも何かを試すように。響は戸惑いと恐怖を抱いて。「……っ……っ」

響は声を出そうとするも喉から息が詰まり発することが出来ない。それは蛇に睨まれた蛙の如く、その眼から発せられる威圧に圧倒され、ただ何も出来ぬままそこに金縛りになっているしかなかった。

響が答えを出せぬまま数秒が経つ。未だセイバーは響の問いを待つ。だが……

バキユン！ シユツ

それは一発の銃声で制止させられる。銃声と同時に首を傾け弾丸を回避するセイバー。銃撃がした方角に視線を合わせるとクリスが片膝を付いた姿勢でハンドガンをセイバーに向け構えていた。セイバーはすぐさまクリスに反撃するため動こうとする。

「……ッ？」

だが今度はセイバーが金縛りとなる。セイバーは視線を下に向ける。そこには自身の影に一本の短刀が刺さっているのが見えた。

【影縫い】

「立花！」

身動きが取れない響の元に翼が駆け寄る。響の腰に手を回した翼はそのまま大きくバツクステップし、セイバーから距離を取る。それと同時にクリスもまた大きい後ろに飛び翼達と合流する。

「無事か立花？」

「は、はい……何とか……」

「とりあえずバカは助けられたが……アッチの方はどうすんだ先輩……？」

クリスの問いに難しい顔すると同時にセイバーを見据える翼。

当のセイバーは「影縫い」で身動きが取れない全身から「魔力放出」を行い自身の周囲に衝撃波を発生させる。

ドゴオオオオオオオオオオ！

地面がえぐり返り、瓦礫と砂煙が激しく上がる。それと同時にセイバーの影に刺さった小刀が外れ、体の自由を取り戻す。自身の手を閉じ開きさせ、「影縫い」による拘束が無くなった事を確認したセイバーは鋭い眼光を響達に向ける。

「それがお前達の答えか？いいだろう…」

セイバーは右手に持つ「約束された勝利の剣」の切っ先を響達に向ける。

「喜べ、一時戯れてやる」

ゾツとおぞましい何かが装者達の心を襲う。それと同時に翼はギアから刀を引き抜き、臨戦態勢を取る。

「つ、翼さん!？」

「構えろ二人共、今のセイバーの眼を見て確信した。セイバーは私達を敵として認知している…!」

「だ、だけど先輩! 相手はセイバーなんだぞ!」

覚悟が定まらない響とクリスは翼に抗議を続ける。

「それにセイバーのあの状態…、もし私達がイグナイトを起動させた事に原因があるなら我々で止めねばならぬだろう…!」

その言葉に響とクリスはうつ向いてしまう。しかしクリスはすぐに持ち直し翼と同じく構えを取る。

「クリスちゃん!？」

「お前も覚悟を決めろ。責任の話されちゃったら、アタシ等でやるしかねえ…! それにアイツには貸しを作りっぱなしなんだよ。ここいらで2〜3個清算してえ!」

軽口混じりだがその表情は真剣なクリスを見て響は己の拳を握り絞めると、覚悟を決め構えを取る。響が翼とクリスに目配せし、互いが頷くと同時に大きく息を吸い込む。

「♪♪♪」

三人が歌い始める。「イグナイト」は単なる瞬間的な出力ブーストだけにとどまらず、ギア間にて共通に共振・共鳴する媒介である「ダインスレイフ」を駆使する事で、ユニゾンの難易度が格段に低くなる。
RADIANT FORCE
三人のトリオ曲によってイグナイトは更に出力が上昇していく。

歌詞の出だしを歌い終わると同時に散開する装者達。最初に先陣を切ったのは翼であった。翼は足に付いているパーツでホバー移動を行いながら滑空し、セイバーに肉薄する。顔前まで迫った翼は軽く跳躍し、手にした刀を上段から振り下ろす。常人であれば必中の動き、さらにイグナイトで強化された事でその一撃は間違いなく必殺のものであった。

バシユウン！

「何ッ!?!」

しかしそれはセイバーには届かなかった。翼の刀はセイバーの左の首筋に当たりはしたものの、セイバーが身に纏っていた黒い霧がその身を守っていた事で肌には届いていなかった。

「浅い…!」

その一言と同時に翼の顔面に向け左の裏拳をくり出す。翼は咄嗟に左腕でガードの体勢を取る。

バゴンツ！

しかしその威力は凄まじく、威力を殺しきれなかった翼は軽々と殴り飛ばされてしまう。

パシツ

翼を吹き飛ばした瞬間、セイバーは右のこめかみに迫っていた物を左手で捉える。手の中に収まった物を一瞬グツと力を加えるセイバー。

ペキツ

手の中で何かが折れる音が響き、ゆっくりと握っていた拳を広げる。パラパラと赤い色をした結晶の様な物が地面に落ちる。

「ンナツ!?!」

それに驚愕するのは膝立ちの姿勢でスナイパーライフルを構えるクリスであった。セイバーが握り潰したそれはクリスが放ったライフルの弾丸であった。

「脆い…!」

セイバーは「約束された勝利の剣」に黒い霧を取り込ませ、漆黒の斬撃をクリスに向け放つ。

ドゴオオオン！

「ウオツ!？」

間一髪避けることが出来たクリスであったが、斬撃が着弾した爆発によつて吹き飛ばされる。

「オオオオオ!!」

間髪入れずに今度は響が右腕のハンマーパーツを変形させたバンカーをセイバーに向け一直線に突っ込んで来る。

セイバーは響の拳を悠揚ゆうように左手で受け流すと同時にその手首を掴む。

「何より…軽い!」

掴んだ手首をそのまま回し、響を地面に叩き付ける。

ドゴンツ!

「ガハツ!」

イグナイトで強化されている体にも関わらず、響は叩き付けられた衝撃で一瞬意識が朦朧もうろうとする。

再起動した響が次に目視したのは「約束された勝利の剣」を突き構えを取り今にも自分に向け放とうとするセイバーの姿であった。響はすぐさま横に回転し緊急回避を行う。同時に…

ドスンツ!

セイバーの「約束された勝利の剣」が地面に深く突き刺さる。

それを目の当たりにし響は恐怖を感じながらもそのままセイバーから距離を取る。それを許さないセイバーは追撃をかけようと両足に魔力を集中し、「魔力放出」の準備に入る。

「…っ」

だがそれを中断し全身からの「魔力放出」に切り替え、放出するセイバー。

ドゴオオオオオオ!

漆黒の魔力がセイバーを包み込む中、エネルギー状の小刀とミサイルと銃弾が迫り来る。

【千ノ落涙】

【MEGA DEATH INFINITY】

小刀とミサイルと銃弾が魔力の障壁によって全て弾かれていく。攻撃が収まった事を確認し、セイバーは「魔力放出」を解除する。それと同時に…

「ヤアアアア！」

「ハアアアア！」

響と翼がセイバーを中心に挟撃をする。前から迫る翼と後ろから迫る響にセイバーは冷静に対処する。顔前の翼が振り下ろす刀を「約束された勝利の剣」で受け止め鏢迫り合いに持ち込み、後ろから拳を構えて迫る響に左手を伸ばし手のひらから高密度の「魔力放出」を行う。

ドゴオオオオ！

「ウワツ!?」

予想だにしていなかった反撃に響は対処できずそのまま魔力に押し流され飛ばされていく。それと同時に鏢迫り合いになっている翼の刀と「約束された勝利の剣」の打ち合いが始まる。

ガキユイ！ガキユイ！ガキユイ！

しかし、圧倒的なまでの力と技量を前にたつた三度の打ち合いで翼の刀は天高く舞い上がる。動揺の隙すら与えずセイバーは翼の顔面を鷲掴み響が飛ばされていた方角へ投げ飛ばす。

「翼さん！」

迫る翼の体を空中で体を立て直し受け止める響。

「フンツ…」

それを見たセイバーは右手に持つ「約束された勝利の剣」を左手に投げ渡し、下段の構えを取りつつ魔力を送る。やがて「約束された勝利の剣」は魔力の大剣へと変わり、地面を抉りながら響と翼に向け振り上げられる。

「クツ!?」

空中で響に受け止められている状態の翼は咄嗟の判断で迫る魔力の大剣を避ける事が出来ないことを直感し、天から巨大化した刀を出現させ盾の代わりにする。

ドギヤアアアン！

魔力の大剣と巨大化した刀が衝突し、刀が意図も簡単に切り裂かれ、切断部は高熱で溶解するほどであった。しかしその一撃自体は響達に当たることにはなかった。

だがセイバーはこれでは終わらんとばかりに右足を軸にその場で右回転、再び「約束された勝利の剣」に魔力を送り大剣状にする。

二撃目が来ることを察する事が出来た翼であったが再び天から巨大化した刀を出現させるには時間が足りなかった。

「コンチキシヨオオオ！」

そこに割って入ったのはクリスであった。クリスは跳躍し翼達の前に出ると腰のパーツからエネルギーリフレクターを展開し防御の姿勢を取る。

ドギヤアアアン！

二撃目の大剣とエネルギーリフレクターが接触する。たったの一撃で全てのリフレクターが消滅したものの翼達を守ること成功したクリス。

だがセイバーは二度右足を軸に右回転を行い魔力の大剣を再度出現させる。

「三点バースト!？」

クリスだけでなく翼と響の顔も驚愕に染まる。あれだけ強力な攻撃を三発連続で打ち込む事が可能だと知ったのだから無理もない。

「風よ…吼え上がれ!!」

【卑王鉄槌】

三度目の大剣による攻撃。最早回避も防御も取れない響達はその一撃をまともに受けてしまう。

ドサツ

地面に無造作に叩き落とされる装者達。最早全員が満身創痍の状態であった。

「くツ…ぐう……」

「チツ…キシヨ……」

「何故だ…出力が落ちているとはいえ…、イグナイトに私達のユニゾンが加がった連携が…こうもあっさり……」

響とクリスが痛みを耐えながら再び立ち上がろうとするなか翼は疑念を持ち始めた。

「簡単な事だ」

それに答える者がいた。装者達は顔を上げる。そこにはセイバーが先程と変わらぬ冷酷な目付きで響達を見下ろしていた。

「お前達が歌う事で力を得ている様に私もお前達の歌で力を得ているからだ」

セイバーから告白されたそれに目を見開く装者達。

「私の聖エクスカリバー 剣はお前達から発せられる歌を魔力に変え力にする。お前達がより高く濃密な歌を歌えば歌う程その力は私にも付与される」

「私達の歌が…」

「逆に私達の首を締めているだと…！」

「んなのありかよ…！」

驚愕の事実にも動揺を隠せない装者達。それが命取りとなった。

セイバーは「約束された勝利の剣」を翼に向け下段から振り上げる。地面を削りながら放たれた一撃を翼は為す術無く受けてしまう。

ドゴオン！

「ガッ!？」

「先p」

クリスが翼に気を取られた瞬間、セイバーは「約束された勝利の剣」をクリスに向け水平に撫で切ろうとする。

クリスは両腕を前に出し防御姿勢を取る。

ガキユイ！

腕のアーマーが直撃を避けてはくれたが威力を抑えきれず、クリスはそのまま後方に吹っ飛び瓦礫とかした外壁に衝突する。

「翼さん！クリスちゃん！」

チャキツ

響が翼とクリスの安否を心配する中、セイバーは「約束された勝利の剣」の切っ先を響に向ける。

「選べ。ここで聖エクスカリバー 剣にかかるか、私に反撃し死以上の死を与えられるか。どちらを取るかは貴様次第だ」

暗に「死に方を選ばせてやる」と口にするセイバー。響は拳を握り絞めると両腕のハンマーパーツを起動させ、地面に向けバンカーを打ち込む。

バゴンツ！

両腕の反動により上半身が起き上がった響は腰のブースターを起動させセイバーに肉薄する。

「だと…してもオオオ!!」

右腕を伸ばしセイバーの顔面に向かいストレートを繰り出す。

バシンツ！

しかしその一撃はセイバーに届かなかった。響の拳は直前でセイバーの左手で受け止められしまった。そのままセイバーは右膝を響の腹に打ち込む。

ドゴツ！

「ガツ!？」

膝蹴りを食らった響の体はくの字に曲がる。同時に「約束された勝利の剣」の柄頭が響の首筋に向かい振り下ろされる。

バシンツ！

ドサツ

上から下に与えられた衝撃で再び地面に伏す響。痛み之苦痛の表情になるも腕に力を入れ二度立ち上がろうとする。

だが…

ドンツ！

「ガハツ!？」

セイバーの右足が響の背中に踏みつけ地面に押し込められてしまう。

「それ…でも…!」

踏みつけられながらも諦めず立ち上がろうとする響。しかし満身創痍でボロボロの体ではセイバーの足を押し退ける事は出来ない。そんな響を差し置き右手の「約束された勝利の剣」を高らかに振り上げるセイバー。

「祈れ。少しは楽になろう」

それは響への死刑宣告であった。

「立花アアアアア!!」

「止めろセイバーアアア!!」

翼とクリスの悲痛な叫びがこだまする。しかしセイバーの耳にはまったく届かずついに「約束された勝利の剣」を響に振り下ろす。それを見た響は恐怖から目を固く閉じ、これから来るであろう痛みに耐えるため歯を食い縛る。

しかし一向に痛みは来ない。その上、先程までであった背中から押さえつけられる感覚もなくなっている。響は意を決して 固く閉じた瞳をゆつくりと開く。

そこには…

「ぐっ…ぐぬう…!?!」

左手で左目を押さえ後ずさりながら何かに苦しむセイバーの姿であった。「一体何があったのだろうか」と響は困惑と疑問を抱き、翼とクリスも同様の感情を持ちながらセイバーを見る。

「き…貴様…! 主導権を奪われてまだそんな力が!?!」

セイバーが体をよじりながら苦しむ。左目を押さえた左手が力を増し顔にめり込む。その時響は見た。左目を押さえた左手の指の間からライトグリーンの美しい瞳があった事を。

「ぐううー抑えきれない…!ぬあアア!!」

断末魔の様な叫びを上げながら漆黒のセイバーの体が黄金に輝く。すると漆黒のセイバーの体から何かが飛び出す。

ドサツ

鈍い音を立てながら地面に落ちた黄金に光輝くそれはゴロゴロと転がりやがて制止する。

響達が光を見る。光は人の形をしているのが分かった。やがて光が徐々に収まり始めその正体が現れる。

「ハア…ハア…、これ以上の狼藉は…させない…!」

「セイバーさん!」

「セイバーが…二人…!?!」

「マジかよ…!」

それは美しい蒼いドレスに白銀の甲冑を身に纏った騎士^{セイバー}。光の正体がセイバーだと知り響達は驚愕する。

「フツ…フフフツ…」

すると先程まで苦しんでいた漆黒のセイバーが沸々と笑う。膝を付き顔を伏せているがその表情は不適は笑みを浮かべている。

「…なるほど。つまり私は、まだ自らの中の甘えを捨てきれていなかったという訳か」

「黙りなさい！ 貴女は道を違えた私の虚像…、この手で消し去らなければ…！」

「条理をねじ曲げてまで姿を現しておきながら、何を言い出すかと思えば…。その後はどうする？ 後に残った貴様には、この手で小娘共に刃を向けたと言う事実を受け止められるのか？」

「言うなアツ!!」

「消え去るべきはオマエだ、遠い日の理想よ…。さあ、今度こそ永遠の絶望に身を委ねるがいい…！」

二人のセイバーは起き上がり正面に対峙する。己の得物である「約束された勝利の剣^{エクスカリバー}」を構える姿はまるで水面に反射する鏡写しの様であった。

「私の虚像は私自らの手で打ち倒す！」

「笑わせる。偽っているのは貴様の方だ…！」